漱石全集

第七卷

彼岸過迄

大正元年十月撮影

目次

彼岸過迄

四五、一、二——四五、四、二九

彼岸過迄に就いて

事實を讀者の前に告白すると、去年の八月頃既に自分の小說を紙上に連載すべき筈だつたのである。ところが餘り暑い盛りに大患後の身體を打通しに使ふのは何んなものだらうといふ親切な心配をして吳れる人が出て來たので、それを好い機會に、尙二箇月の暇を貪ることに取極めて貰つたのが原で、とう〳〵其二箇月が過ぎ去つた十月にも筆を執らず、十一十二もつい紙上へは杳たる有樣で暮らして仕舞つた。自分の當然遣るべき仕事が、斯ういふ風に、崩れた波の崩れながら傳はつて行くやうな具合で、只だらしなく延びるのは決して心持の好いものではない。

歲の改まる元日から愈書き始める緒口を開くやうに事が極まつた時は、長い間抑へられたものが伸びる時の樂みよりは、背中に背負はされた義務を片附ける時機が來たといふ意味で先づ何よりも嬉しかつた。けれども長い間抛り出して置いた此義務を、何うしたら例よりも手際よく遣つて退けられるだらうかと考へると、又新しい苦痛を感ぜずには居られない。

久し振だから成るべく面白いものを書かなければ濟まないといふ氣がいくらかある。それに自分の健康狀態やら其他の事情に對して寬容の精神に充ちた取り扱ひ方をして吳れた社友の好意だの、又自分の書く

ものを毎日日課のやうにして讀んで呉れる讀者の好意だのに、酬いなくては濟まないといふ心持が大分附け加はつて來る。で、何うかして旨いものが出來るやうにと念じてゐる。けれどもたゞ念力丈では作物の出來榮えを左右する譯には何うしたつて行きつこない、いくら佳いものをと思つても、思ふやうになるかならないか自分にさへ豫言の出來かねるのが述作の常であるから、今度こそは長い間休んだ埋合せをする積りであると公言する勇氣が出ない。そこに一種の苦痛が潛んでゐるのである。

此作を公にするに方つて、自分はたゞ以上の事丈を言つて置きたい氣がする。作の性質だの、作物に對する自己の見識だの主張だのは今述べる必要を認めてゐない。實をいふと自分は自然派の作家でもなければ象徴派の作家でもない。近頃しば／＼耳にするネオ浪漫派の作家では猶更ない。自分は是等の主義を高く標榜して路傍の人の注意を惹く程に、自分の作物が固定した色に染め附けられてゐるといふ自信を持ち得ぬものである。又そんな自信を不必要とするものである。たゞ自分は自分であるといふ信念を持つてゐる。さうして自分が自分である以上は、自然派でなからうが、象徴派でなからうが、乃至ネオの附く浪漫派でなからうが全く構はない積りである。

自分は又自分の作物を新しい新しいと吹聽する事も好まない。今の世に無暗に新しがつてゐるものは三越呉服店とヤンキーと夫から文壇に於ける一部の作家と評家だらうと自分はとうから考へてゐる。

自分は凡て文壇に濫用される空疎な流行語を藉りて自分の作物の商標としたくない。たゞ自分らしいも

のが書きたい丈である。手腕が足りなくて自分以下のものが出來たり、衒氣があつて自分以上を裝ふ樣なものが出來たりして、讀者に濟まない結果を齎すのを恐れる丈である。

東京大阪を通じて計算すると、吾朝日新聞の購讀者は實に何十萬といふ多數に上つてゐる。其內で自分の作物を讀んでくれる人は何人あるか知らないが、其何人かの大部分は恐らく文壇の裏通も露路も覗いた經驗はあるまい。全くたゞの人間として大自然の空氣を眞率に呼吸しつゝ穩當に生息してゐる丈だらうと思ふ。自分は是等の敎育ある且尋常なる士人の前にわが作物を公にし得る自分を幸福と信じてゐる。

「彼岸過迄」といふのは元日から始めて、彼岸過迄書く豫定だから單にさう名づけた迄に過ぎない實は空しい標題である。かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、其個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小說として存外面白く讀まれはしないだらうかといふ意見を持してゐた。が、つい夫を試みる機會もなくて今日迄過ぎたのであるから、もし自分の手際が許すならば此「彼岸過迄」をかねての思はく通りに作り上げたいと考へてゐる。けれども小說は建築家の圖面と違つて、いくら下手でも活動と發展を含まない譯に行かないので、たとひ自分が作るとは云ひながら、自分の計畫通りに進行しかねる場合がよく起つて來るのは、普通の實世間に於て吾々の企てが意外の障害を受けて豫期の如くに纏まらないのと一般である。從つて是はずつと書き進んで見ないと一寸分らない全く未來に屬する問題かも知れない。けれどもよし旨く行かなくつても、離れるとも卽くとも片の附かない短篇が續く丈の事だらう

風呂の後

一

敬太郎は夫程驗の見えない此間からの運動と奔走に少し厭氣が注して來た。元々頑丈に出來た身體だから單に馳け歩くといふ勞力だけなら大して苦にもなるまいとは自分でも承知してゐるが、思ふ事が引つ懸かつたなり居据わつて動かなかつたり、又は引つ懸からうとして手を出す途端にすぽりと外れたりする反間が度重なるに連れて、身體よりも頭の方が段々云ふ事を聞かなくなつて來た。で、今夜は少し癪も手傳つて、飲みたくもない麥酒をわざとポン／＼拔いて、出來るだけ快豁な氣分を自分と誘つて見た。けれども何時迄經つても、殊更に借り着をして陽氣がらうとする自覺が退かないので、仕舞に下女を呼んで、其所いらを片附けさした。下女は敬太郎の顏を見て「まあ田川さん」と云つたが、其後から又「本當にまあ」と附け足した。敬太郎は自分の顏を撫でながら「赤いだらう。こんな好い色を何時迄も電燈に照らして置くのは勿體ないから、もう寐るんだ。序に床を取つて呉れ」と云つて、下女がまだ何か遣り返さうと

するのをわざと外して廊下へ出た。さうして便所から歸つて夜具の中に潛り込む時、まあ當分休養する事にするんだと口の内で呟いた。

敬太郎は夜中に二返眼を覺ました。一度は咽喉が渇いたため、一度は夢を見たためであつた。三度目に眼が開いた時は、もう明るくなつてゐた。世の中が動き出してゐるなと氣が附くや否や敬太郎は、休養休養と云つて又眼を眠つて仕舞つた。其次には氣の利かないボン〳〵時計の大きな音が無遠慮に耳に響いた。夫から後はいくら苦心しても寐附かれなかつた。已むを得ず横になつた儘卷煙草を一本吸つてゐると、半分程に燃えて來た敷島の先が崩れて、白い枕が灰だらけになつた。それでも彼は凝としてゐる積りであつたが、仕舞に東窓から射し込む強い日脚に打たれた氣味で、少し頭痛がし出したので、漸く我を折つて起き上がつたなり、楊枝を銜へた儘、手拭をぶら下げて湯に行つた。

湯屋の時計はもう十時少し廻つてゐたが、流しの方はからりと片附いて、小桶一つ出てゐなかつた。浴槽の中に一人横向きになつて、硝子越しに射し込んでくる日光を眺めながら、呑氣さうにぢやぶ〳〵遣つてゐるものがある。それが敬太郎と同じ下宿にゐる森本といふ男だつたので、敬太郎はやあ御早うと聲を掛けた。すると、向うでも、やあ御早うと挨拶をしたが、

「何です今頃楊枝なぞを銜へ込んで、元顏ぢやない。さう云やあ昨夕貴方の部屋に電氣が點いて居ない樣でしたね」と云つた。

「電氣は宵の口から煌々と點いてゐたさ。僕は貴方と違つて品行方正だから、夜遊びなんか滅多にした事はありませんよ」

「全くだ。貴方は堅いからね。羨ましい位堅いんだから」

敬太郎は少し羞痒たいやうな氣がした。相手を見ると依然として横隔膜から下を湯に浸けた儘、まだ飽きずにぢやぶ〳〵遣つてゐる。さうして比較的眞面目な顏をしてゐる。敬太郎は此氣樂さうな男の口髭がだらしなく濡れて一本々々下向きに垂れた處を眺めながら、

「僕の事は何うでも好いが、貴方は何うしたんです。役所は」と聞いた。すると森本は倦怠さうに浴槽の側に兩肱を置いて其上に額を載せながら俯伏しになつた儘、

「役所は御休みです」と頭痛でもする人のやうに答へた。

「何で」

「何でもないが、僕の方で御休みです」

敬太郎は思はず自分の同類を一人發見したやうな氣がした。夫でつい「矢つ張り休養ですか」と云ふと、相手も「えゝ休養です」と答へたなり元の通り湯槽の側に突伏してゐた。

敬太郎が湯槽の前へ腰を卸ろして、三助に垢擦りを掛けさせてゐる時分になつて、森本はやつと湯の出るやうな赤い身體を漸く湯の中から露出した。さうして、あゝ好い心持だといふ顔付で、流しの上へぺたりと胡坐をかいたと思ふと、

「貴方は好い體格だね」と云つて敬太郎の肉附きを賞め出した。

「是で近頃は大分惡くなつた方です」

「どうして／＼夫で惡かつた日にや僕なんざあ」

森本は自分で自分の腹をぽん／＼叩いて見せた。其腹は凹んで背中の方へ引つ附けられてる樣であつた。

「何しろ商賣が商賣だから身體は毀す一方です。尤も不養生も大分遣りましたがね」と云つた後で、急に思ひ出したやうにアハヽヽと笑つた。敬太郎は夫に調子を合はせる氣味で、

「今日は僕も閑だから、久し振で貴方の昔話でも伺ひませうか」と云つた。すると森本は、

「えゝ話しませう」とすぐ乘り氣な返事をしたが、活潑なのはたゞ返事丈で、擧動の方は緩漫といふよりも、凡ての筋肉が湯に煠でられた結果、當分作用を中止してゐる姿であつた。

敬太郎が石鹸を塗けた頭をごし／＼いはしたり、堅い足の裏や指の股を擦つたりする間、森本は依然として胡坐をかいた儘、何處一つ洗ふ氣色は見えなかつた。最後に痩せた一塊の肉團をどぶりと湯の中に抛り込むやうに浸けて、敬太郎と略同時に身體を拭きながら上がつて來た。さうして、

「たまに朝湯へ來ると綺麗で好い心持ですね」と云つた。
「えゝ。貴方のは洗ふんでなくつて、本當に湯に這入るんだから殊にさうだらう。實用の爲の入湯でなくつて、快感を貪る爲の入浴なんだから」
「さう六づかしい這入り方でもないんでせうが、何うも斯んな時に身體なんか洗ふな億劫でね。つい盆鎗浸かつて盆鎗出ちまひますよ。其所へ行くと、貴方は三層倍も勤勉だ。頭から足から何處から何處迄實によく手落ちなく洗ひますね。御負けに楊枝迄使つて。あの綿密な事には僕も殆ど感心しちまつた」
二人は連れ立つて湯屋の門口を出た。森本が一寸通迄行つて卷紙を買ふからといふので、敬太郎も附き合ふ氣になつて、横丁を東へ切れると、道が急に惡くなつた。昨夕の雨が土を潤かし抜いた處へ、今朝からの馬や車や人通りで、踏み返したり蹴上げたりした泥の痕を、二人は厭ふやうな輕蔑するやうな樣子で歩いた。日は高く上つてゐるが、地面から吸ひ上げられる水蒸氣はいまだに微かな波動を地平線の上に描いてゐるらしい感じがした。
「今朝の景色は寐坊の貴方に見せたい樣だつた。何しろ日がかん／＼當たつてる癖に霧が一杯なんでせう。電車を此方から透かして見ると、乘客が丸で障子に映る影畫の樣に、はつきり一人一人見分けられるんです。それでゐて御天道樣が向う側にあるんだから其一人々々が何れも是もみんな灰色の化物に見えるんで、頗る奇觀でしたよ」

森本は斯んな話しをしながら、紙屋へ這入つて巻紙と状袋で膨らました懐を一寸抑へながら出て来た。其に待つて居た敬太郎はすぐ今来た道の方へ足を向け直した。二人は其儘一所に下宿へ帰つた。上靴の踵を鳴らして階段を二つ上り切つた時、敬太郎は自分の部屋の障子を手早く開けて、

「まあ何うぞ」と森本を誘つた。森本は、

「もう直き午飯でせう」と云つたが、躊躇すると思ひの外、恰も自分の部屋へでも這入るやうな無雑作な態度で、敬太郎の後に跟いて来た。さうして、

「貴方の室から見た景色は何時見ても好いね」と自分で窓の障子を開けながら、手摺附きの縁板の上へ濡手拭を置いた。

三

敬太郎は北郁せながら大した病氣にも罹らないで、毎日新橋の停車場へ行く男について、平生から一種の好奇心を有つてゐた。彼はもう三十以上である。夫でいまだに一人で下宿住居をして停車場へ通勤してゐる。然し停車場で何の係りをして、何んな事務を取扱つてゐるのか、ついぞ當人に聞いた事もなければ、又向うから話した試しもないので、敬太郎には一切が不明である。たまたま人を送つて停車場へ行く場合もあるが、そんな時にはつい混雑に取り紛れて、停車場と森本とを一所に考へる程の餘裕も出ず、さうかと

云つて、森本の方から自己の存在を思ひ起させる樣に、敬太郎の眼につくべき所へ顏を出す機會も起らなかつた。たゞ長い間同じ下宿に立て籠もつてゐるといふ縁故だか同情だかが本で、いつの間にか挨拶をしたり世間話をする仲になつた迄である。

　だから敬太郎の森本に對する好奇心といふのは、現在の彼にあると云ふよりも、寧ろ過去の彼にあると云つた方が適當かも知れない。敬太郎はいつか森本の口から、彼が歴乎とした一家の主人公であつた時分の話を聞いた。彼の女房の話も聞いた。二人の間に出來た子供の死んだ話も聞いた。「餓鬼が死んで呉れたんで、まあ助かつたやうなもんでさあ。山神の祟には實際恐れを作してゐたんですからね」と云つた彼の言葉を、敬太郎は未だに覺えてゐる。其時しかも山神が分らなくつて、何だと聞き返したら、山の神の漢語ぢやありませんかと教へられた可笑しさ迄まだ記憶に殘つてゐる。夫等を思ひ出しても、敬太郎から見ると、凡て森本の過去には一種ロマンスの臭が、箒星の尻尾の樣にぼうつと掩被さつて怪しい光を放つてゐる。

　女に就いて出來たとか切れたとかいふ逸話以外に、彼は又樣々な冒險譚の主人公であつた。まだ海豹島へ行つて膃肭臍は打つて居ない樣であるが、北海道の何處かで鮭を漁つて儲けた事は慥かであるらしい。夫から四國邊の或山から安質莫尼が出ると觸れて歩いて、決して出なかつた事も、當人がさう自白する位だから事實に違ひない。然し最も奇拔なのは呑口會社の計畫で、是は酒樽の呑口を作る職人が東京に極少

ないといふ所から思ひ附いたのださうだが、折角大阪から呼び寄せた職人と衝突した爲に成立しなかつたと云つて彼は未だに殘念がつてゐる。

鐵道を離れた普通の浮世話になると、彼は又非常に豐富な材料の所有者であるといふ事を容易に證據立てる。筑摩川の上流の何とかいふ所から河を隔てて向うの山を見ると、巖の上に熊がごろ／＼晝寐をしてゐるなどは未だ尋常の方なので、それが一層色づいて來ると、信州戸隱山の奥の院といふのは普通の人の登れつこない難所だのに、夫を盲目が天邊迄登つたから驚いたなどといふ。其所へ御參りをするには、どんなに闇の晩でも途中で一晩明かさなければならないので、森本も仕方なしに五合目あたりで焚火をして夜の寒さを凌いでゐると、下から鈴の響が聞こえて來たから、不思議に思つてゐるうちに、其鈴の音が段々近くなつて、仕舞に座頭が上つて來たんだと云ふ。しかも其座頭が森本に今晩はと挨拶をして又すた／＼上つて行つたと云ふんだから、餘り妙だと思つて能く聞いて見ると、實は案内者が一人附いてゐたのださうである。其案内者の腰に鈴を着けて、後から來る盲目が其鈴の音を頼りに上る事が出來るやうにしてあつたのだと說明されて、稍納得も出來たが、それにしても敬太郎には隨分意外な話である。が、話がもう少し高じると、殆ど妖怪談に近い妙なものとなつて、だらしのない彼の口髭の下から最も嚴肅に物語られる。彼が耶馬溪を通つた序に、羅漢寺へ上つて、日暮に一本道を急いで、杉並木の間を下りて來ると、突然一人の女と擦れ違つた。其女は臙脂を塗つて白粉をつけて、婚禮に行く時の髮を結つて、

縞模様の振袖に厚い帶を締めて、草履穿きの儘たつた一人すた〳〵羅漢寺の方へ上つて行つた。寺に用のある筈はなし、又寺の門はもう締まつてゐるのに、女は盛裝した儘暗い所をたつた一人で上つて行つたんださうである。――敬太郎はこんな話を聞く度にへえーと云つて、信じられ得ない意味の微笑を洩らすに拘らず、矢つ張り相當の興味と緊張を以て森本の辯口を迎へるのが例であつた。

四

此日も例によつて例の樣な話が出るだらうといふ下心から、わざと廻り路迄して一所に風呂から歸つたのである。年こそ夫程取つてゐないが、森本のやうに、大抵な世間の關門を潛つて來たとしか思はれない男の經歷談は、此夏學校を出た許りの敬太郎に取つては、多大の興味があるのみではない、聞き樣次第で隨分利益も受けられた。

其上敬太郎は遺傳的に平凡を忌む浪漫趣味の靑年であつた。かつて東京の朝日新聞に兒玉音松とかいふ人の冒險談が連載された時、彼は丸で丁年未滿の中學生のやうな熱心を以て每日それを迎へ讀んでゐた。其中でも音松君が洞穴の中から躍り出す大蛸と戰つた記事を大變面白がつて、同じ科の學生に、君、蛸の大頭を目懸けて短銃をポン〳〵打つたんだが、つる〳〵滑つて少しも手應へがないといふぢやないか。其内大將の後からぞろ〳〵出て來た小蛸がぐるりと環を作つて彼を取り卷いたから何をするのかと思ふと、

につちり習つた肝心な見物、ゐるんださうだからねと大いに乗り氣で話した事がある。すると其友達が冒險の半分に、君の様な割合ものは到底文官試験などを受けて地道に世の中を渡つて行く氣になるまい、卒業したら、一層の事思ひ切つて南洋へでも出掛けて、好きな蛸狩でもしたら何うだと云つたので、夫以來「田川の蛸狩」といふ言葉が友達間に大分流行り出した。此間卒業して以來足を擂木の様にして世の中への出口を探して歩いてゐる敬太郎に會ふたびに、彼等はどうだね蛸狩は成功したかいと聞くのが常になつてゐた位である。

南洋の蛸狩はいかな敬太郎にもちと奇抜過ぎるので、眞面目に思ひ立つ勇氣も出なかつたが、新嘉坡の護謨林栽培などは學生のうち既に目論んで見た事がある。當時敬太郎は、果てしのない廣野を埋め盡くす勢ひで何百萬本といふ護謨の樹が茂つてゐる眞中に、一階建のバンガローを拵へて、其中に栽培監督者としての自分が朝夕起臥する樣を想像して已まなかつた。彼はバンガローの床をわざと裸にして、其上に大きな虎の皮を敷く積りであつた。壁には水牛の角を彫り込んで、夫に鐵砲を懸け、猶其下に錦の袋に入れた儘の日本刀を置く積にした。さうして自分は眞白なターバンをぐる〳〵頭へ巻き附けて、廣いヹランダに据ゑてある籐椅子の上に寐そべりながら、強い香のハヷナをぷかり〳〵と鷹揚に吹かす氣でゐた。夫のみか、彼の足の下には、スマトラ産の黒猫が、――天鵞絨の様な毛並と黄金其儘の眼と、それから身の丈よりも餘程長い、尻尾を持つた怪しい猫が、背中を山の如く高くして蹲踞つてゐる譯になつてゐた。彼は

あらゆる想像の光景を斷く自分に滿足の行くやうに豫め整へた後で、愈實際の算盤に取り掛かつたのである。所が案外なもので、まづ護謨を植ゑる爲の地面を借り受けるのに大分な手數と暇が要る。夫から借りた地面を切り開くのが容易の事でない。次に地ならし植附けに費やすべき金高が意外に多い。其上絶えず人夫を使つて草取りをした上で、六年間苗木の生長するのを馬鹿見たやうに凝と指を銜へて見てゐなければならない段になつて、敬太郎は既に十分退却に價すると思ひ出した所へ、彼に色々の事情を敎へてくれた護謨通は、今暫くすると、あの邊で出來る護謨の供給が、世界の需用以上に超過して、栽培者は非常の恐慌を起すに違ひないと威嚇したので、彼は其後護謨の護の字も口にしなくなつて仕舞つたのである。

五

けれども彼の異常に對する嗜欲は中々是位の事で冷却しさうには見えなかつた。彼は都の眞中に居て、遠くの人や國を想像の夢に上して樂しんでゐる許りでなく、毎日電車の中で乘り合はせる普通の女だの、又は散歩の道すがら行き逢ふ實際の男だのを見てさへ、悉く尋常以上に奇なあるものを、マントの裏かコートの袖に忍ばして居はしないだらうかと考へる。さうして何うか此のマントやコートを引つ繰り返して其奇な所をたゞ一日で好いからちらりと見た上、後は知らん顏をして濟ましてゐたいやうな氣になる。

敬太郎の此傾向は、彼がまだ高等學校に居た時分、英語の教師が教科書としてスチーヴンソンの新亞剌

比亞物語といふ書物を讀まうとした頃から段々頭を持ち上げ出したやうに思はれる。夫迄彼は大の英語嫌ひであつたのに、此書物を讀むやうになつてからも、一回も下讀を怠らずに、中てられさへすれば、必ず起立して譯を附けたのでも、彼が如何にそれを面白がつてゐたかが分る。ある時彼は興奮の餘り小説と事實の區別を忘れて、十九世紀の倫敦に實際こんな事があつたんでせうかと眞面目な顔をして教師に質問を掛けた。其教師はつい此間英國から歸つた許りの男であつたが、黒いメルトンのモーニングの尻から麻の手帛を出して鼻の下を拭ひながら、十九世紀どころか今でもあるでせう。倫敦といふ所は實際不思議な都ですと答へた。敬太郎の眼は其時驚嘆の光を放つた。すると教師は椅子を離れてこんな事を云つた。

「尤も書手が書手だから觀察も奇拔だし、事件の解釋も自ら普通の人間とは違ふんで、斯んなものが出來上つたのかも知れません。實際スチーヴンソンといふ人は辻待の馬車を見てさへ、其所に一種のロマンスを見出だすといふ人ですから」

辻馬車とロマンスに至つて敬太郎は少し分らなくなつたが、思ひ切つて其説明を聞いて見て、始めて成程と悟つた。夫から以後は、此平凡極まる東京の何所にでもころ／＼して、最も平凡を極めてゐる辻待の人力車を見るたんびに、此車だつて昨夕人殺しをする爲の客を出刃ぐるみ乘せて一散に馳けたのかも知れないと考へたり、又は追手の思はくとは反對の方向へ走る汽車の時間に間に合ふ樣に、美しい女を幌の中に隱して、何處かの停車場へ飛ばしたのかも分らないと思つたりして、一人で怖がるやら、面白がるや

ら頻りに喜んでゐた。

そんな想像を重ねるにつけ、是程込み入つた世の中だから、たとひ自分の推測通りと迄行かなくつても、何處か尋常と變つた新しい調子を、彼の神經にはつと響かせ得るやうな事件に、一度位は出會つて然るべき筈だといふ考へが自然と起つてきた。所が彼の生活は學校を出て以來たゞ電車に乘るのと、紹介狀を貰つて知らない人を訪問する位のもので、其他に何といつて取り立てて云ふべき程の小說は一つもなかつた。彼は毎日見る下宿の下女の顏に飽き果てた。毎日食ふ下宿の菜にも飽き果てた。切めて此單調を破るために、滿鐵の方が出來るとか、朝鮮の方が纏まるとかすれば、まだ衣食の途以外に、幾分かの刺戟が得られるのだけれども、兩方共二三日前に當分望みがないと判然して見ると、益眼前の平凡が自分の無能力と密切な關係でもあるかのやうに思はれて、ひどく落膽して仕舞つた。夫で糊口の爲の奔走は勿論の事、往來に落ちたばら錢を探して歩くやうな長閑な氣分で、電車に乘つて、漫然と人事上の探檢を試みる勇氣もなくなつて、昨夕は左程好きでもない麥酒を大いに飲んで寐たのである。

六

こんな時に、非凡の經驗に富んだ平凡人とでも評しなければ評しやうのない森本の顏を見るのは、敬太郞に取つて既に一種の興奮であつた。卷紙を買ふ御供迄して彼を自分の室へ連れ込んだのは是が爲である。

森本は書齋へ坐つて少時下の方を眺めてゐた。
「貴方の室から見た景色に相變らず好うがすね、ことに今日は好い。あの洗ひ落としたやうな空の端に、色づいた樹が、所々暖かく塊まつてゐる間から赤い煉瓦が見える樣子は、慥かに畫になりさうですね」
「さうですね」
敬太郎は已を得ず斯ういふ答をした。すると森本は自分が肱を乘せてゐる窓から一尺ばかり出張つた縁板を見て、
「此所は何うしても盆栽の一つや二つ載せて置かないと納まらない所ですよ」と云つた。
敬太郎は成程そんなものかと思つたけれども、もう「左樣ですね」を繰り返す勇氣も出なかつたので、
「貴方は畫や盆栽が解るんですか」と聞いた。
「解るんですかは少し恐れ入りましたね。全く柄にないんだから、さう聞かれても仕方はないが、——然し田川さんの前だが、斯う見えて盆栽も弄くるし、金魚も飼ふし、一時は畫も好きで能く描いたもんですよ」
「何でも遣るんですね」
「何でも屋に碌なものなしで、とう／＼斯んなものになつちやつた」
森本はさう云ひ切つて、自分の過去を悔ゐるでもなし、又未來の現在を悲觀するでもなし、妙に鋭い表情

の何處にも出てゐない不斷の顏をして敬太郎を見た。
「然し僕は貴方見たやうに變化の多い經驗を、少しでも好いから嘗めて見たいと何時でもさう思つてゐるんです」と敬太郎が眞面目に云ひ掛けると、森本は恰も醉つ拂ひのやうに、右の手を自分の顏の前へ出して、大袈裟に右左に振つて見せた。
「それが極惡い。若い内――と云つた所で、貴方と僕はさう年も違つてゐないやうだが、――兎に角若い内は何でも變つた事が爲て見たいもんでね。所が其變つた事を仕盡くした上で、考へて見ると、何だ馬鹿らしい、こんな事なら爲ない方が餘つ程增しだと思ふ丈でさあ。貴方なんざ、是からの身體だ。大人しくさへして居りや何んな發展でも出來ようつてもんだから、肝心な所で山氣だの謀叛氣だのつて低氣壓を起しちや親不孝に當たらあね。――時に何うです、此間から伺はう伺はうと思つて、つい忙しくつて、伺はずにゐたんだが、何か好い口は見附かりましたか」
正直な敬太郎は憮然として有りの儘を答へた。さうして、到底當分是といふ期待もないから、奔走をやめて少し休養する積りであると附け加へた。森本は一寸驚いたやうな顏をした。
「へえー、近頃は大學を卒業しても、ちよつくら一寸口が見附からないもんですかねえ。餘つ程不景氣なんだね。尤も明治も四十何年といふんだから、其筈には違ひないが」
森本は此處迄來て少し首を傾げて、自分の哲理を自分で嚼み締めるやうな素振をした。敬太郎は相手の

樣子を見て、夫程猜疑とも思はなかつたが、心の内で、此男は心得があつてわざと斯んな言葉遣ひをするのだらうか、又は無學の結果斯うより外言ひ現はす手段を知らないのだらうかと考へた。すると森本が傾けた盃を急に臺に直した。

「何うです、御厭でなきや、鐵道の方へでも御出なすつちや。何なら話して見ませうか」

如何な浪漫的な敬太郎も此男に頼んだら好い地位が得られるとは想像し得なかつた。けれども左も輕くと云つて退ける程の愛嬌も、諧謔と解釋する程の餘裕も有たなかつた。據處なく苦笑しながら、下女を呼んで、

「森本さんの御膳も此所へ持つて來るんだ」と云ひ附けて、酒を命じた。

七

森本は近頃身體の爲に酒を愼んでゐると斷りながら、注いで遣りさへすれば、すぐ猪口を空にした。仕舞にはもうよしませうといふ口の下から、自分で徳利の尻を持ち上げた。彼は平生から閑靜なうちに何處か氣樂な風を帯びてゐる男であつたが、猪口を重ねるにつれて、其閑靜が熱つてくる、氣樂は次第々々に膨張するやうに見えた。自分でも「斯うなりや併呑自若たるもんだ。明日勘當になつたつて驚くんぢやない」と調子を出した。敬太郎が飲めない口なので、時々思ひ出すやうに、盃に唇を附けて、附き合つて

ゐるのを見て、彼は、
「田川さん、貴方本當に飲けないんですか、不思議ですね。酒を飲まない癖に冒險を愛するなんて。あらゆる冒險は酒に始まるんです、さうして女に終るんです」と云つた。彼はつい今迄自分の過去を碌でなしの樣に蹴なしてゐたのに、醉つたら急に模樣が變つて、後光が逆に射すとでも評すべき態度で、氣焰を吐き始めた。さうして夫が大抵は失敗の氣焰であつた。しかも敬太郎を前に置いて、
「貴方なんざあ、失禮ながら、まだ學校を出た許りで本當の世の中は御存じないんだからね。いくら學士で御座いの、博士で候のつて、肩書ばかり振り廻したつて、僕は慴えない積りだ。此方やちやんと實地を踏んで來てるんだもの」と、さつき迄教育に對して多大の尊敬を拂つてゐた事は丸で忘れた樣な風で、無遠慮な極め附け方をした。さうかと思ふと噯の樣な溜息を洩らして自分の無學をさも情なさうに恨んだ。
「まあ手つ取り早く云やあ、此世の中を猿同然渡つて來たんでさあ。斯う申しちや可笑しいが、貴方より十層倍の經驗は慥かに積んでる積りです。それでゐて、未だに此通り解脫が出來ないのは、全く無學即ち學がないからです。尤も教育があつちや、斯う無暗矢鱈と變化する譯にも行かないやうなもんかも知れませんよ」
敬太郎はさつきから氣の毒なる先覺者とでも云つた樣に相手を考へて、其云ふ事に相應の注意を拂つて

聞いてゐたが、なまじひ酒を飲ましたためか、今日は何時もより氣焔だの愚痴だのが多くつて、例のやうに純粹の興味が湧かないのを殘念に思つた。好い加減に酒を切り上げて見たが、矢つ張り物足らなかつた。夫で新しく入れた茶を勸めながら、

「貴方の經歴談は何時聞いても面白い。夫許りでなく、僕のやうな世間見ずは、御話を伺ふたんびに利益を得ると思つて感謝してゐるんだが、貴方が今迄遣つて來た生活のうちで、最も愉快だつたのは何ですか」と聞いて見た。森本は熱い茶を吹き〳〵、少し充血した眼を二三度ぱちつかせて默つてゐた。やがて深い湯呑を干して仕舞ふと、斯う云つた。

「さうですね。遣つた後で考へると、みんな面白いし、又みんな詰らないし、自分ぢや一寸見分けが附かないんだが。――全體愉快つてえのは、その、女づ氣のある方を指すんですか」

「さう云ふ譯でもないんですが、有つたつて差支へありません」

「なんて、實は其方の方が聞きたいんでせう。――然し冗談拔きでね、田川さん。面白い面白くないは偖置いて、あれ程呑氣な生活は世界に又となからうといふ奴を一つ話しませうか、御茶受けの代りに」

敬太郎は一も二もなく所望した。森本は「ぢやあ一寸小便をして來る」と云つて立ち掛けたが、「其代り斷つて置くが女づ氣はありませんよ。女づ氣どころか、第一人間の氣がないんだもの」と念を押して廊下

の外へ出て行つた。敬太郎は一種の好奇心を抱いて、彼の歸るのを待ち受けた。

八

所が五分待つても十分待つても冒險家は容易に顏を現はさなかつた。敬太郎はとう／＼凝と我慢し切れなくなつて、自分で下へ降りて用場を探して見ると、森本の影も形も見えない。念の爲又階段を上がつて、彼の部屋の前まで來ると、障子を五六寸明け放した儘、眞中に手枕をしてごろりと向うむきに轉がつてゐるものが即ち彼であつた。「森本さん、森本さん」と二三度呼んで見たが、中々動きさうにないので、流石の敬太郎も勃として、いきなり室に這入り込むや否や、森本の首筋を攫んで強く搖振つた。森本は不意に蜂にでも螫されたやうに、あつと云つて半ば跳ね起きた。けれども振り返つて敬太郎の顏を見ると同時に、又すぐ夢現のたるい眼附に戻つて、

「やあ貴方ですか。あんまり頂戴した所爲か、少し氣分が變になつたもんだから、此所へ來て一寸休んだらつい眠くなつて」と辯解する樣子に、是といつて他を愚弄する體もないので、敬太郎もつい怒れなくなつた。然し彼の待ち設けた冒險談は是で一頓挫を來したも同然なので、一人自分の室に引き取らうとすると、森本は「どうも濟みません、御苦勞樣でした」と云ひながら、又後から敬太郎に附いて來た。さうして先刻迄自分の坐つて居た座蒲團の上に、きちんと膝を折つて、

「ぢや愈世界に類のない呑氣生活の御話でも始めますかな」と云つた。森本の呑氣生活といふのは、今から十五六年前彼が技手に雇はれて、北海道の内地を測量して歩いた時の話であつた。固より人間の居ない所に天幕を張つて寝起きをして、用が片附き次第、又天幕を擔いで、先へ進むのだから、當人の斷つた通り、到底女つ氣のありよう筈はなかつた。

「何しろ高さ二丈もある熊笹を切り開いて途を附けるんですからね」と彼は右手を額より高く上げて、如何に熊笹が高く茂つてゐたかを形容した。其切り開いた途の兩側に、朝起きて見ると、蝮蛇がとぐろを卷いて日光を鱗の上に受けてゐる。それを遠くから棒で抑へて置いて、傍へ寄つて打ち殺して肉を燒いて食ふのだと森本は話した。敬太郎がどんな味がするかと聞くと、森本は能く思ひ出せないが、何でも魚肉と獸肉の間位だらうと答へた。

天幕の中へは熊笹の葉と小枝を山の樣に積んで、其上に疲れた身體を埋めぬ許りに投げ掛けるのが、例であるが、時には外へ出て焚火をして、大きな熊を眼の前に見る事もあつた。蟲が多いので蚊帳は始終釣つてゐた。ある時其蚊帳を擔いで谷川へ下りて、何とかいふ川魚を掬つて歸つたら、其晩から蚊帳が急に腥くなつて困つた。——凡て是等は森本の所謂呑氣生活の一部分であつた。

彼は又山であらゆる茸を採つて食つたさうである。ます茸といふのは廣蓋程の大きさで、切つて味噌汁の中へ入れて煮ると丸で蒲鉾のやうだとか、月見茸といふのは一抱へもあるけれども、是は殘念だが食に

ないとか、鼠茸といふのは三つ葉の根のやうで可愛らしいとか、中々精しい説明をした。大きな笠の中へ、野葡萄を一杯採つて來て、それ計り食つてゐたものだから、仕舞に舌が荒れて、飯が食へなくなつて困つたといふ話も序に附け加へた。

食ふ話ばかりかと思ふと、又一週間絶食をしたといふ悲酸な物語もあつた。それはみんなの糧が盡きたので、人足が村迄米を取りに行つた留守中に大變な豪雨があつた時の事である。元々村へ出るには、澤邊迄降りて、澤傳ひに里へ下るのだから、俄雨で谷が急に一杯になつたが最後、米など背負つて歸れる譯のものでない。森木は腹が減つて仕方がないから、凝と仰向けに寢て、たゞ空を眺めてゐた所が、仕舞にはぼんやりし出して、夜も晝も滅茶苦茶に分らなくなつたさうである。

「さう長い間飲まず食はずぢや、兩便とも留まるでせう」と敬太郎が聞くと、「いえ何、矢つ張り有りますよ」と森木は頗る氣樂さうに答へた。

九

敬太郎は微笑せざるを得なかつた。然し夫よりも可笑しく感じたのは、森木の形容した大風の勢ひであつた。彼等の一行が測量の途次茫々たる芒原の中で、突然面も向けられない程の風に出會つた時、彼等は四つ這ひになつて、つい近所の密林の中へ逃け込んだ所が、一抱へも二抱へもある大木の枝も幹も凄じい

音を立てて、一度に風から煽振られるので、其動揺が根に傳はつて、彼等の踏んでゐる地面が、地震の時の樣にぐら〳〵したと云ふのである。

「それなら樅や林の中へ逃げ込んだ所で、立つてる譯に行かないでせう」と敬太郎が聞くと、「無論突伏してゐました」といふ答であつたが、いくら非道い風だつて、土の中に張つた大木の根が動いて、地震を起す位の勢ひがあらうとは思へなかつたので、敬太郎は覺えず吹き出して仕舞つた。すると森本も丸で他事の樣に同じく大きな聲を出して笑ひ始めたが、夫が濟むと、急に眞面目になつて、敬太郎の口を抑へるやうに手眞似をした。

「可笑しいが本當です。何うせ常識以下に飛び離れた經驗をする位の僕だから、不中用にやあ違ひない。が本當です。――丸で貴方が見たいに學のあるものが聞きあ全く嘘のやうな話さね。だが田川さん、世の中には大道に限らず隨分面白い事が澤山あるし、又貴方なんざあ其面白い事に打つからう打つからうと苦勞して御出でなさる樣子だが、大學を卒業しちやもう駄目ですよ。いざとなると大抵は自分の身分を思ひますからね。よしんば自分でいくら身を落す積りで掛かつても、まさか親の敵討ぢやなしね、さう眞劍に自分の位置を棄てゝ漂浪するほどの物數奇も今の世にはありませんからね。第一傍がさう爲せないから大丈夫です」

敬太郎は森本の此言葉を、失意のやうにも又得意のやうにも聞いた。さうして腹の中で、成程常調以上

の變つた生活は、普通の學士などには後れないかも知れないと考へた。所がそれを自分にさへ抑へたい氣がするので、わざと抵抗するやうな語氣で、

「だつて、僕は學校を出たには出たが、未だに位置などは無いんですぜ。貴方は位置々々つて頻りに云ふが。——實際位置の奔走にも厭き〳〵して仕舞つた」と投げ出すやうに云つた。すると森本は比較的嚴肅な顔をして、

「貴方のは位置がなくつて有る。僕のは位置が有つて無い。それ丈が違ふんです」と若いものに教へる態度で答へた。けれども敬太郎には此御籤めいた言葉が左程の意義を齎さなかつた。二人は少しの間煙草を吹かして默つてゐた。

「僕もね」とやがて森本が口を開いた。「僕もね、斯うやつて三年越し、鐵道の方へ出てゐるが、もう厭になつたから近々罷めようと思ふんです。尤も僕の方で罷めなけりや向うで罷める丈なんだからね。三年越しと云やあ僕にしちや長い方でさあ」

敬太郎は罷めるが好からうとも罷めないが好からうとも云はなかつた。自分が罷めた經驗も罷められた閲歷もないので、他の進退などは何うでも構はない樣な氣がした。たゞ話しが理に落ちて面白くないといふ自覺丈あつた。森本は夫と察したか、急に調子を易へて、世間話を快活に十分程した後で、「いや何うも御馳走でした。——兎に角田川さん若いうちの事ですよ、何を遣るのも」と、恰も自分が五十位の老人

同じやうなことを云つて歸つて行つた。

だから一週間許りの間、田川は落ち附いて森本と話す機會を有たなかつたが、二人共同じ下宿にゐるのだから、朝か晩に彼の姿を認めない事は稀であつた。顏を洗ふ所などで落ち合ふ時、敬太郎に彼の着てゐる黑襟の掛かつたドテラが常に目に附いた。彼は又襟開の濃い新調の背廣を着て、妙な洋杖を突いて、役所から歸ると能く出て行つた。其洋杖が土間の瀬戸物製の傘入れに入れてあると、はゝあ先生今日は宅に居るなと思ひながら敬太郎は常に下宿の門を出入りした。すると其洋杖がちやんと例の所に立ててあるのに、森本の姿が不意に見えなくなつた。

十

一日二日はつい氣が附かずに過ぎたが、五日目位になつても、まだ森本の影が見えないので、敬太郎は漸く不審の念を起した。給仕に來る下女に聞いて見ると、彼は役所の用で何處かへ出張したのだらうである。固より役人である以上、何時出張しないとも限らないが、敬太郎は平生から此男を卑して、何んでも停車場の構内で、貨物の發送係位を勤めてゐるに違ひないと判じてゐたものだから、出張と聞いて少し意外な心持がした。けれども立つ時既に五六日と斷つて行つたのだから、今日か翌日は歸る筈だと下女に云はれて見ると、實際さうかと思つた。所が豫定の時日が過ぎても、森本の變な洋杖が依然として傘入

れの中にあるのみで、當人のドテラ姿は一向洗面所へ現はれなかつた。
仕舞に宿の神さんが來て、森本さんから何か御音信が御座いましたかと聞いた。敬太郎は自分の方で下へ聞きに行かうと思つてゐた所だと答へた。神さんは多少心元ない色を袋の樣な丸い眼の中に漂はせて出て行つた。夫から一週間程經つても森本はまだ歸らなかつた。敬太郎も漸く不審を抱き始めた。帳場の前を通る時に、未だですかとわざと立ち留まつて聞く事さへあつた。けれども其頃は自分が又思ひ返して、位置の運動を始め出した出花なので、自然其方にばかり頭を專領される日が多いため、是より以上立ち入つて何物をも探る事を敢てしなかつた。實を云ふと、彼は森本の豫言通り、衣食の計のために、好奇家の權利を放棄したのである。
すると或晩主人が一寸御邪魔をしても好いかと斷りながら障子を開けて這入つて來た。彼は腰から古めかしい煙草入を取り出して、其筒を拔く時ぽんといふ音をさせた。夫から銀の烟管に刻草を詰めて、濃い烟を巧者に鼻の穴から迸らせた。斯う緩り構へる彼の本意を、敬太郎は判然向うから話さうと切り出される迄覺らずに、何うも變だと計り考へてゐた。
「實は少し御願ひがあつて上がつたんですが」と云つた主人は稍小聲になつて、「森本さんの入らつしやる所を何うか教へて頂く譯に參りますまいか、決して貴方に御迷惑の懸かるやうな事は致しませんから」と藪から棒に附け加へた。

敬太郎は此意外の質問を受けて、しばらくは何といふ挨拶も口へ出なかつたが、漸く「一體何う云ふ譯なんです」と主人の顏を覗き込んだ。さうして彼の意味を讀まうとしたが、主人は煙管が詰まつたと見えて、敬太郎の眼前で雁首を掃つてゐた。夫が濟んでから羅宇の疏通をぶつ〳〵試した上、そろ〳〵と説明に取り掛かつた。

主人の云ふ所によると、森本は下宿代が此家に六ヶ月許り滯つてゐるのださうである。が、二年越しゐる客ではあるし、遊んでゐる人ぢやなし、此年の末には何うかするからといふ當人の言譯を信用して、別段催促もしなかつた所へ、今度の旅行になつた。家のものは固より出張と許り信じてゐたが、此日限が過ぎても歸らないのみか、何處からも何の音信も來ないので、仕舞にとう〳〵不審を起した。夫で一方に本人の室を調べると共に、一方に勤め先へ行つて出張先を聞き合はせた。ところが室の方は荷物も其儘で、當人の居つた時分と何の變りもなかつたが勤め先の方は又案外であつた。出張したと許り思つてゐた森本に、先月限り罷められてゐたさうである。

「實は貴方は平生から森本さんと御懇意の間柄で入らつしやるんだから、貴方に伺つたら多分何處に御出でか分るだらうと思つて上がつた樣な譯で。決して貴方に森本さんの分を何うの斯うのと申し上げる積りではないのですから、何うか此所で知らして頂けますまいか」

敬太郎は此失踪者の友人として、彼の芳しからぬ行爲に立ち入つた關係でもあるかの如く主人から取扱

はれるのを甚だ迷惑に思つた。成程事實をいへば、つい此間迄或意味の嘆賞を懐にして森本に近づいてゐたには違ひないが、こんな實際問題に迄祕密の打ち合せがあるやうに見做されては、未來を有つ青年として大いなる不面目だと感じた。

十一

正直な彼は主人の疳違ひを腹の中で怒つた。けれども怒る前に先づ冷たい靑大將でも握らせられた樣な不氣味さを覺えた。此妙に落ち附き拂つて古風な煙草入から刻みを撮み出しては雁首へ詰める男の誤解は、正解と同じ樣な不安を敬太郎に與へたのである。彼は談判に伴なふ一種の藝術の如く巧みに烟管を扱ふ人であつた。敬太郎は彼の樣子をしばらく眺めてゐた。さうして只知らないといふより外に、向うの疑惑を晴らす方法がないのを殘念に思つた。果して主人は容易に煙草入を腰へ納めなかつた。烟管を筒へ入れて見たり出して見たりした。其度に例の通りぽんぽんといふ音がした。敬太郎は仕舞に何うしても此音を退治て遣りたいやうな氣がし出した。

「僕はね、御承知の通り學校を出た許りでまだ一定の職業もなにもない貧書生だが、是でも少しは教育を受けた事のある男だ。森本のやうな浮浪の徒と一所に見られちや、少し體面に係る。況や後暗い關係でもあるやうに邪推して、いくら知らないと云つても執濃く疑つてゐるのは怪しからんぢやないか。君がさ

うといふ態度で、一年もゐる客に對する氣なら夫で好い。此方にも料簡がある。僕は過去二年の間君のうち
に厄介になつてゐるが、一ヶ月でも宿料を滯らしたことがあるかい」
　主人は無論敬太郎の人格に對して失禮に當たるやうな疑ひを毛頭抱いてゐない積りであるといふ事を繰
り返して述べた。さうして尚森本から音信でもあつて、彼の居所が分つたら何うぞ忘れずに教へて貰ひ
たいと頼んだ。もしさつき聞いた事が敬太郎の氣に障つたら、いくらでも詫るから勘辨して呉れと云つ
た。敬太郎は主人の煙草入を早く腰に差させようと思つて、單に宜しいと答へた。主人は漸く兩刃の道具
を帶の間へ仕舞ひ込んだ。室を出る時の彼の樣子に、別段敬太郎を疑ふ氣色も見えなかつたので、敬太
郎も默つて了つて好いことをしたと考へた。
　夫からしばらく經つと、森本の室に、何時の間にか新しい客が這入つた。敬太郎は彼の荷物を主人が何
う始末したかに就いて不審を抱いた。けれども主人がかの煙草入を差して帳場に坐して以來、森本の事はも
う聞くまいと決心したので、腹の中は兎も角、上部は知らん顏をしてゐた。さうして依然として出來るや
うな、出來ないやうな地位を、元程焦燥らない程度ながらも、先づ自分の遣るべき第一の義務として、根
氣に狩りあるいてゐた。
　或晩某用で内幸町迄行つて留守を食つたので已むを得ず又電車で引き返すと、偶然向う側に黄八丈
の綿入で赤ん坊を負ぶつた婦人が乗り合はせてゐるのに氣が附いた。其女は眉毛の細くて濃い、首筋の美

しく出來た、何方かと云へば粋な部類に屬する型だつたが、何うしても袢天負をするといふ柄ではなかつた。と云つて、背中の子は慥かに自分の子に違ひないと敬太郎は考へた。猶能く見ると前垂の下から格子縞か何かの御召が出てるので、敬太郎は益變に思つた。外面は雨なので、五六人の乗客は皆傘をつぼめて杖にしてゐた。女のは黒蛇の目であつたが、冷たいものを手に持つのが厭だと見えて、彼女はそれを自分の側に立て掛けて置いた。其疊んだ蛇の目の先に赤い漆で加留多と書いてあるのが敬太郎の眼に留まつた。

此の黒人だか素人だか分らない女と、私生兒だか普通の子だか怪しい赤ん坊と、濃い眉を心持ち八の字に寄せて俯し目勝ちな白い顔と、御召の着物と、黒蛇の目に鮮やかな加留多といふ文字とが互違ひに敬太郎の神經を刺激した時、彼は不圖森本と一所になつて子迄生んだといふ女の事を思ひ出した。森本自身の口から出た「斯ういふと未練がある樣で可笑しいが、顔質は悪い方ぢやありませんでした。眉毛の濃い、時々八の字を寄せて人に物を云ふ癖のある」といつた樣な言葉をぽつ／＼頭の中で憶ひ起しながら、加留多と書いた傘の所有主を注意した。すると女はやがて電車を下りて雨の中に消えて行つた。後に殘つた敬太郎は一人森本の顔や樣子を心に描きつゝ、運命が今彼を何處に連れ去つたらうかと考へ／＼下宿へ歸つた。さうして自分の机の上に差出人の名前の書いてない一封の手紙を見出だした。

十二

好奇心に驅られた敬太郎は破るやうに此無名氏の書信を披いて見た。すると西洋罫紙の第一行目に、親愛なる田川君として下に森本生よりとあるのが何よりの先に眼に入つた。敬太郎はすぐ又封筒を取り上げた。彼は消印の角度を幾通りにも變へて、其所に消印の文字を讀まうと力めたが、肉が薄いので何うしても判斷が附かなかつた。已むを得ず再び本文に立ち歸つて、まづ夫から片附ける事にした。本文には斯うあつた。

「突然消えたんで定めて驚いたでせう。貴方は驚かないにしても、雷獸とさうしてヅク（森本は平生下宿の主人夫婦を、雷獸とさうしてヅクと呼んでゐた。ヅクは耳ヅクの略語である）彼等兩人は驚いたに違ひない。打ち明けた御話しをすると、實は少し下宿代が滯らしてゐたので、話しをしたら雷獸とさうしてヅクが面倒をいふだらうと思つて、わざと斷らずに、自由行動を取りました。僕の室に置いてある荷物を始末したら――行李の中には衣類其他が悉皆這入つてゐますから、相當の金になるだらうと思ふんです。だから兩人に貴方から右を賣るなり着るなりしろと仰しやつて頂きたい。尤も彼雷獸は御承知の如き曲者だから、僕の言葉を待たずして、疾くの昔にさう取計らつてゐるかも知れない。のみならず、此方からかう穩便に出ると、まだ殘つてゐる僕の尻を、貴方に拭つて貰ひたいなどと、頼んでもない難題を持ち掛けるかも

知れませんが、夫には決して取り合つちや不可ません。貴方のやうに高等教育を受けて世の中へ出たての人は兎角雷獣輩が食物にしたがるものですから、其邊はよく御注意なさらないと不可ません。僕だつて教育こそないが、借金を踏んだり善くない位の事はまさかに心得てゐます。來年になれば屹度返してやる積りです。僕に意外な經歴が數々あるからと云つて、貴方に此點迄疑はれては、折角の親友を一人失くしたも同樣、甚だ遺憾の至りだから、何うか雷獣如きものの爲に僕を誤解しないやうに願ひます。

森本は次に自分が今大連で電氣公園の娯樂掛りを勤めてゐる由を書いて、來年の春には活動寫眞買入れの用向きを帶びて、是非共出京する筈だから、其節は御地で久し振に御目に懸かるのを今から樂しみにして待つてゐると附け加へてゐた。さうして其後へ自分が旅行した滿洲地方の景況をさも面白さうに一口位宛吹聽してゐた。中で最も敬太郎を驚かしたのは長春とかにある博打場の光景で、是は嘗て馬賊の大將をしたといふ去る日本人の經營に係るものだが、其所へ行つて見ると、何百人と集まる汚い支那人が、折詰めのやうにぎつしり詰まつて、血眼になりながら、一種の臭氣を吐き合つてゐるのださうである。しかも長春の富豪が、態々半分わざと垢だらけな着物を着て、こつそり此所へ出入するといふんだから、森本だつて何んな眞似をしたか分らないと敬太郎は考へた。

手紙の末段には盆栽の事が書いてあつた。「あの梅の鉢は動坂の植木屋で買つたので、幹は夫程古くないが、下宿の窓などに載せて置いて朝夕眺めるには丁度手頃のものです。あれを獻上するから貴方の室へ

持つて入らつしやい。尤も雷獣とさうしてヅクは兩人共極めて不風流故、床の間の上へ据ゑたなり放つて置いて、もう枯らして仕舞つたかも知れません。夫から上り口の土間の傘入れに、僕の洋杖が差さつてゐ筈です。あれも價格から云へば決して高く踏めるものではありませんが、僕の愛用したものだから、記念のため是非貴方に進上したいと思ひます。如何な雷獣とさうしてヅクもあの洋杖を貴方が取つたつて、まさか故障は申し立てますまい。だから決して御遠慮なさらずと好い。取つて御使ひなさい。——滿洲ことに大連は甚だ好い所です。貴方の樣な有爲の青年が發展すべき所は當分外に無いでせう。思ひ切つて是非入らつしやいませんか。僕は此方へ來て以來滿鐵の方にも大分知人が出來たから、もし貴方が本當に來る積なら、相當の御世話は出來る積りです。但し其節は前以て一寸御通知を願ひます。左樣なら」

敬太郎は手紙を讀んで机の抽出へ入れたなり、主人夫婦へは森本の消息に就いて何事も語らなかつた。洋杖は依然として、傘入れの中に差さつてゐた。敬太郎は出入の際、夫を見るたびに一種妙な感に打たれた。

停留所

一

敬太郎に須永といふ友達があつた。是は軍人の子でありながら軍人が大嫌ひで、法律を修めながら役人にも會社員にもなる氣のない、至つて退嬰主義の男であつた。少なくとも敬太郎にはさう見えた。尤も父は餘程以前に死んだとかで、今では母とたつた二人ぎり、淋しいやうな、又床しいやうな生活を送つてゐる。父は主計官として大分好い地位に迄昇つた上、元來が貨殖の道に明らかな人であつた丈、今では母子共衣食の上に不安の憂ひを知らない好い身分である。彼の退嬰主義も半ばは此安泰な境遇に慣れて、奮闘の刺激を失つた結果とも見られる。といふものは、父が比較的立派な地位にゐた所爲か、彼には世間體の好い計りでなく、實際爲になる親類があつて、幾何でも出世の世話をして遣らうといふのに、彼は何だ蚊だと手前勝手計り並べて、今以て愚圖々々してゐるのを見ても分る。

「さう贅澤ばかり云つてちや勿體ない。厭なら僕に讓るがいゝ」と敬太郎は冗談半分に須永に強請ることもあつた。すると須永は淋しさうな又氣の毒さうな微笑を洩らして、「だつて君ぢや不可ないんだから仕方がないよ」と斷るのが常であつた。斷られる敬太郎は冗談にせよ好い心持はしなかつた。己は己で何う

かすといふ氣概も起して見た。けれども根が執念深くない性質だから、是しきの事で須永に對する反抗心などが長く續きやう筈がなかつた。其上身分が定まらないので、氣の落ち附く背景を有たない彼は、朝から晩迄下宿の一間に凝と坐つてゐる苦痛に堪へなかつた。用がなくつても半日は是非出て歩いた。さうして能く須永の家を訪問れた。一つは何時行つても大抵留守の事がないので、行く敬太郎の方でも張合ひがあつたのかも知れない。

「一昨日も昨日だが、昨日より先に、何か驚嘆に價する事件に會ひたいと思つてるが、いくら電車に乘つて方々歩いても全く駄目だね。攫徒にさへ會はない」などと云ふかと思ふと、「君、教育は一種の權利かと思つてゐたら全く一種の束縛だね。いくら學校を卒業したつて食ふに困るやうぢや何の權利かこれ有らんやだ。夫ぢや位地は何うでも可いから思ふ存分勝手な眞似をして構はないかといふと、矢つ張り構ふからね。厭に人を束縛するよ教育が」と忌々しさうに嘆息することがある。須永は敬太郎の何れの不平に對しても餘り同情がないらしかつた。第一彼の態度からしてが本當に眞面目なのだか、又はたゞ無茶燥ぎに焦燥いでゐるのか見分けが附かなかつたのだらう。或時須永はあまり敬太郎が斯ういふ樣な浮ついた事ばかり言ひ募るので、「夫ぢや君は何んな事がして見たいのだ。衣食問題は別として」と聞いた。敬太郎は警視廳の探偵見たやうな事がして見たいと答へた。

「ぢや爲るが好いぢやないか、譯ないこつた」

「所がさうは行かない」

敬太郎は本氣に何故自分に探偵が出來ないかといふ理由を述べた。元來探偵なるものは世間の表面から底へ潛る社會の潛水夫のやうなものだから、是程人間の不思議を攫んだ職業はたんとあるまい。夫に彼等の立場は、たゞ他の暗黒面を觀察する丈で、自分と墮落して懸かる危險性を帶びる必要がないから、猶の事都合が可いには相違ないが、如何せん其目的が既に罪惡の暴露にあるのだから、豫め人を陷れようとする成心の上に打ち立てられた職業である。そんな人の惡い事は自分には出來ない。自分はたゞ人間の研究者否人間の異常なる機關が暗い闇夜に運轉する有樣を、驚嘆の念を以て眺めてゐたい。――斯ういふのが敬太郎の主意であつた。須永は逆らはずに聞いてゐたが、是といふ批判の言葉も放たなかつた。夫が敬太郎には老成と見えながら其實平凡なのだとしか受取れなかつた。しかも自分を相手にしないやうな落ち附き拂つた風のあるのを惡く思つて別れた。けれども五日と經たないうちに又須永の宅へ行きたくなつて、表へ出ると直ぐ神田行の電車に乘つた。

二

須永はもとの小川亭卽ち今の天下堂といふ高い建物を目標に、須田町の方から右へ小さな横町を爪先上りに折れて、二三度不規則に曲がつた極めて分り惡い所に居た。家並の立て込んだ裏通だから、山の手と

造つて置く家屋敷を廣く取る餘地はなかつたが、夫でも門から玄關迄二間程御影の上を渡らなければ、格子の傍に手が届かない位の一構であつた。もとから自分の持ち家だつたのを、一時親類の某に貸したなり、父が死んだので、無人の活計には場所も廣さも恰好だらうといふ母の意見から、駿河臺の本宅を賣り拂つて此所へ引き移つたのである。尤も夫から大分手を入れた。殆ど新築したと同然だと須永が説明して聞かせた時に、敬太郎は成程左樣かと思つて、二階の床柱や天井板を見廻した事がある。此二階は須永の書齋にするため、後から繼ぎ足したので、風が強く吹く日には少し搖れる氣味はあるが、外に是と云つて非の打ちやうのない綺麗に明らかな四疊六疊二間つゞきの室であつた。其室に坐つてゐると、庭に植ゑた松の枝と、手斧目の附いた板塀の上の方と、夫から忍び返しが見えた。縁に出て手摺から見下ろした時、敬太郎は松の根に一面と咲いた鷺草を眺めて、あの白いものは何だと須永に聞いた事もあつた。

彼は須永を訪問して此座敷に案内されるたびに、書生と若旦那の區別を判然と心に呼び起さゞるを得なかつた。さうして斯う小じんまり片付いて暮らしてゐる須永を輕蔑すると同時に、閑靜ながら餘裕のある此友の生活を羨みもした。青年があんなでは駄目だと考へたり、又あんなにも爲つて見たいと思つたりして、今日も二つの矛盾から出來上がつた斑な興味を懷に、彼は須永を訪問したのである。

彼は小路を二三度曲折して、須永の住居つてゐる通りの角迄來ると、丁度彼より先に一人の女が須永の門を潛

つた。敬太郎はたゞ一目其後姿を見た丈だつたが、青年に共通の好奇心と彼に固有の浪漫趣味とが力を合はせて、引き摺るやうに彼を同じ門前に急がせた。一寸覗いて見ると、もう女の影は消えてゐた。例の通り紅葉を引手に張り込んだ障子が、閑靜に閉まつてゐる丈なのを、敬太郎は少し案外にかつ物足らず眺めてゐたが、やがて沓脱の上に脱ぎ捨てた下駄に氣を附けた。其下駄は勿論女ものであつたが、行儀よく向うむきに揃つてゐる丈で、下女が手を懸けて直した迹が少しも見えない。敬太郎は下駄の向きと、思つたより早く上がつて仕舞つた女の所作とを繼ぎ合はして、是は取次を乞はずに、獨りで勝手に障子を開けて這入つた極めて懇意の客だらうと推察した。でなければ家のものだが、夫では少し變である。須永の家は彼と彼の母と仲働と下女の四人暮しである事を敬太郎はよく知つてゐたのである。

　敬太郎は須永の門前にしばらく立つてゐた。今這入つた女の動靜をそつと塀の外から窺ふといふよりも、寧ろ須永と此女が何んな文に二人の浪漫を織つてゐるのだらうと想像する積りであつたが、矢張り聞き耳は立ててゐた。けれども内は何時もの通り森としてゐた。艶いた女の聲所か、咳嗽一つ聞こえなかつた。

　「許嫁かな」

　敬太郎は先づ第一に斯う考へたが、彼の想像は其位で落ち附く程、訓練を受けてゐなかつた。――母は仲働を連れて親類へ行つたから今日は留守である。飯焚は下女部屋に引き下がつてゐる。須永と女とは今差向ひで何か私語いてゐる。――果してさうだとすると何時もの樣に格子戸をがらりと開けて頼むと大

きな聲を出すのも變なものである。或は須永も母も仲働も一所に出たかも知れない。御さんは乾度晝寐をしてゐる。女は其所へ這入つたのである。とすれば泥棒である。此儘引き返しては濟まない。――敬太郎は盜賊の樣にのそりと立つてゐた。

三

するとニ階の障子がすうと開いて、青い色の硝子瓶を提げた須永の姿が不意に縁側へ現はれたので敬太郎は一寸吃驚した。

「何をしてゐるんだ。落し物でもしたのかい」と上から不思議さうに聞きかける須永を見ると、彼は咽喉の周圍に白いフラネルを捲いてゐた。手に提げたのは含嗽劑らしい。敬太郎は上を向いて、風邪を引いたのかとか何とか二三言葉を換はしたが、依然として其所に立つた儘、動かうともしなかつた。須永は仕舞に這入れと云つた。敬太郎はわざと這入つても可いかと念を入れて聞き返した。須永は殆ど其意味を覺らない人の如く、輕く首肯いたぎり障子の内に引き込んでしまつた。

階子段を上がる時、敬太郎は奥の部屋で微かに衣摺れの音がする樣な氣がした。二階には今迄須永の羽織つてゐたらしい黒八丈の襟の掛かつたどてらが脱ぎ捨ててある丈で、外に平生と變つた所はどこにも認められなかつた。敬太郎の性質から云つても、彼の須永に對する交情から云つても、是程氣に掛かる女の事

を、率直に切り出して聞けない筈はなかつたのだが、今迄に何處か罪な想像を逞しくしたといふ疚しさもあり、又面と向つてすぐとは云ひ悪い皮肉な覘ひを附けた自覺もあるので、今しがた彼の家へ這入つた女は全體何者だと無邪氣に尋ねる勇氣も出なかつた。却て自分の先へ先へと走りたがる心を壓し隱すやうな風に、

「空想はもう當分已めだ。夫よりか口の方が大事だからね」と云つて、兼て須永から聞いてゐた内幸町の叔父さんといふ人に、一應さういふ方の用向きで會つて置きたいから紹介して呉れと眞面目に頼んだ。此叔父といふのは須永の母の妹の連合ひで、官吏から實業界へ這入つて、今では四つか五つの會社に關係を有つてゐる相當な位地の人であつたが、須永は其叔父の力を藉りて何うしようといふ料簡もないと見えて、「叔父が色々云つて呉れるけれども、僕は餘り進まないから」と、かつて敬太郎に話した事があつたのを、敬太郎は覺えてゐたのである。

須永は今朝既に其叔父に會ふ筈であつたが、咽喉を痛めたため、外出を見合はせたのださうで、四五日内には大抵行けるだらうから、其時には是非話して見ようと答へたあとで、「叔父も忙しい身體だしね、夫に方々から頼まれるやうだから、屹度とは受合はれないが、まあ會つて見給へ」と念の爲だか何だか附け加へた。餘り望みを置き過ぎられては困るといふのだらうと敬太郎は解釋したが、夫でも會はないよりは增しだ位に考へて、例に似ず宜しく頼む氣になつた。が、口で頼むほど腹の中では心配も苦勞もしてゐな

かつた。

元來彼が卒業後相當の地位を求める爲に、腐心し運動し奔走し、今も猶しつゝあるのは、常人の容易する如く僞りたる事實ではあるが、未だに成功の曙光が輝かないと云つて、左も苦しさうな樣子を出して見せるうちには、尠くとも五割方の誇張が籠もつてゐた。彼は須永の樣な一人息子ではなかつたが、一妹が片附いて、唯一人殘つてゐる所は兩方共同じであつた。彼は須永の樣に地面家作の所有主でない代りに、國に少し田地を有つてゐた。固より大した石高になるといふ程のものでもない許、親が幾何といふ極まつた金を毎年送つてくれるので、二十や三十の下宿代に窮する身分ではなかつた。其上女親の甘いのに附け込んで、自分で自分の身を喰ふやうな臨時費を請求した事も今迄に一度や二度ではなかつた。だから彼が窮々と云つて嘆くのが、全くの空騒ぎでないにしても、郷黨だの朋友だの又は自分だのに對する虚榮心に煽られてゐる事は確かであつた。そんなら學校にゐるうちもつと勉強して好い成績でも取つて置きさうなものだのに、そこが浪漫家丈あつて、學課は成るべく怠けよう怠けようと心掛けて通して來た結果、頗る鮮やかならぬ及第をして仕舞つたのである。

四

それで約一時間程須永と話す間にも、敬太郎は位地とか衣食とかいふ苦しい問題を自分と進んで持ち出

して置きながら、矢つ張り先刻見た後姿の女の事が氣に掛かつて、肝心の世渡りの方には口先程眞面目になれなかつた。一度下座敷で若々しい女の笑ひ聲が聞こえた時などは、誰か御客が來てゐるやうだねと尋ねて見ようかしらんと考へた位である。所が其考へてゐる時間が、既に自然を打ち壞す道具になつて、折角の間が間外れにならうとしたので、とう〳〵口へ出さずに已めて仕舞つた。

それでも須永の方では成るべく敬太郎の好奇心に媚びる樣な話題を持ち出した氣でゐた。彼は自分の住んでゐる電車の裏通が、如何に小さな家と細い小路の爲に、賽の目のやうに區切られて、名も知らない都會人士の巣を形づくつてゐるうちに、社會の上層に浮き上がらない戲曲が殆ど戸毎に演ぜられてゐると云ふやうな事實を敬太郎に告げた。

先づ須永の五六軒先には日本橋邊の金物屋の隱居の妾がゐる。其妾が宮戸座とかへ出る役者を情夫にしてゐる。夫を隱居が承知で默つてゐる。其向ふ横町に代言だか周旋屋だか分らない小綺麗な格子戸作りの家があつて、時々表へ女記者一名、女コック一名至急入用などといふ廣告を黑板へ書いて出す。其所へある時二十七八の美しい女が、襞を取つた紺綾の長いマントをすぽりと被つて、丸で西洋の看護婦といふ服裝をして來て職業の周旋を頼んだ。それが其家の主人の昔書生をしてゐた家の御孃さんなので、主人は勿論細君も驚いたといふ話がある。次に背中合せの裏通へ出ると、白髮頭で二十位の細君を持つた高利貸がゐる。人の評判では借金の抵當に取つた女房ださうである。其隣の博奕打が、大勢同類を寄せて、互に血

圍み懸り合つてゐる最中に、ねんね子で赤ん坊を負ぶつた上さんが、勝負で夢中になつてゐる亭主を迎へに來る事がある。上さんが泣きながら何うか一所に歸つて呉れといふと、亭主は歸るには歸るが、もう一番勝負して負けたものを取り返してから歸るといふ。すると上さんはそんな意地を張れば張る程負ける丈だから、是非今歸つて呉れと縋り附くやうに頼む。いや歸らない、いや歸れといつて、往來の氷る夜中でも四隣の眠りを驚かせる。……

須永の話しを注意に聞いてゐるうちに、敬太郎は斯ういふ實地小說のはびこる中に年來住み慣れて來た須永も敬さんの見ないやうな芝居をこつそり遣つて、口を拭つて濟ましてゐるのかも知れないといふ氣が強くなつて來た。固より其推察の裏には先刻見た後姿の女が蒼い影を投げてゐた。「一寸に君の方から聞かうぢやないか」と切り込んで見たが、須永はふんと云つて苦笑ひをした丈であつた。其後で御前に「今日は頭が痛いから」と云つた。左も小說は有つてゐるが、君には話さないのだと云はん許りの樣子に聞こえた。

敬太郎が二階から玄關へ下りた時は、例の女下駄がもう見えなかつた。歸つたのか、下駄箱へ仕舞はしたのか、又は氣を利かして隱したのか、彼には丸で見當が附かなかつた。表へ出るや否や、何ういふ料簡か彼はすぐ一軒の煙草屋へ飛び込んだ。さうして其所から一本の葉卷を銜へて出て來た。それを吹かしながら須田町交叉點で電車に乘らうとする途端に、[illegible]といふ規則を思ひ出したので、又萬世橋の方へ歩いて行つた。序に本郷の下宿へ歸る迄葉卷を持たす積りで、ゆつくり〳〵足を運ばせながら[illegible]の

事を考へた。其須永は決して何時もの様に單獨には頭の中へは這入つて來なかつた。考へるたびに屹度後姿の女がちら〳〵跟いて來た。仕舞に「本郷臺町の三階から遠眼鏡で世の中を覗いてゐて、浪漫的探險なんて氣の利いた眞似が出來るものか」と須永から冷笑された様な心持がし出した。

五

彼は今日迄、俗にいふ下町生活に昵懇も趣味も有ち得ない男であつた。時たま日本橋の裏通などを通つて、身を横にしなければ潛れない格子戸だの、三和土の上から譯もなくぶら下がつてゐる鐵燈籠だの、上り框の下を張り詰めた綺麗に光る竹だの、杉だか何だか日光が透つて赤く見える程薄つぺらな障子の腰だのを眼にする度に、如何にもせゝこましさうな心持になる。斯う萬事がきちりと小さく纏つて且光つてゐられては窮屈で堪らないと思ふ。是程小じんまりと几帳面に暮らして行く彼等は、恐らく食後に使ふ楊枝の削り方迄氣に掛けてゐるのではなからうかと考へる。さうして夫が悉く傳説的の法則に支配されて、丁度彼等の用ひる煙草盆の様に、先祖代々順々に拭き込まれた習慣を笠に、恐るべく光つてゐるのだらうと推察する。須永の家へ行つて、用もない松へ大事さうな雪除けをした所や、狹い庭を馬鹿丁寧に枯松葉で敷き詰めた景色抔を見る時ですら、彼は纖細な江戸式の開化の懷に、ほうと育つた若旦那を聯想しない譯に行かなかつた。第一須永が角帶をきうと締めてきちりと坐る事からが彼には變であつた。其所へ其頭の

ると、彼の空中に編み上げる勝手な浪漫が急に温か味を失つて、醜い想像から出來上がつた雲の峯同樣に、意味もなく崩れて仕舞つた。けれども其奥に口髭をだらしなく垂らした二重瞼の瘠せぎすの森木の顏丈は粘り強く殘つてゐた。彼は其顏を愛したいやうな、侮りたいやうな、又憐みたいやうな心持になつた。さうして此凡庸な顏の後に解すべからざる怪しい物がぼんやり立つてゐるやうに思つた。さうして彼が記念に呉れると云つた妙な洋杖を聯想した。

此洋杖は竹の根の方を曲げて柄にした極めて單簡のものだが、たゞ蛇を彫つてある所が普通の杖と違つてゐた。尤も輸出向きに能く見るやうに蛇の身をぐる／＼竹に卷き附けた毒々しいものではなく、彫つてあるのはたゞ頭丈で、其頭が口を開けて何か呑み掛けてゐる所を握りにしたものであつた。けれども其呑み掛けてゐるのが何であるかは、握りの先が丸く滑つこく削られてゐるので、蛙だか鷄卵だか誰にも見當が附かなかつた。森本は自分で竹を伐つて、自分で此蛇を彫つたのだと云つてゐた。

六

敬太郎は下宿の門口を潛る時何より先にまづ此洋杖に眼を附けた。といふよりも途すがらの聯想が、格子戸を開けるや否や、彼の眼を瀨戸物の傘入れの方へ引き附けたのである。實をいふと、彼は森本の手紙を受取つた當座、此洋杖を見るたびに、自分にも說明の出來ない妙な感じがしたので、成るべく眼を觸れ

宿を變へて落ち附いた方が樂だと思ふ程彼は洋杖に災されてゐなかつたのである。

　今日も洋杖は依然として傘入れの中に立つてゐた。鎌首は下駄箱の方を向いてゐた。敬太郎は夫を横に見たなり自分の室に上がつたが、やがて机の前に坐つて、森本に遣る手紙を書き始めた。先づ此間向うから來た音信の禮を述べた上、何故早く返事を出さなかつたかといふ辯解を二三行でも可いから附け加へたいと思つたが、夫を明らさまに打ち明けては、君の樣な漂浪者を知己に有つ僕の不名譽を考へると、音信の往復などは爲る氣になれなかつたからだとでも書くより外に仕方がないので、其所は例の奔走に取り紛れと簡單な一句で胡魔化して置いた。次に彼が大連で好都合な職業に有り附いた祝ひの言葉を一寸入れて、其後へ段々東京も寒くなる時節柄、滿洲の霜や風は嘸凌ぎ惡いだらう。殊に貴方の身體では堪へるに違ひないから、是非用心して病氣に罹らない樣になさいと優しい文句を數行綴つた。敬太郎から云ふと、實は此所が手紙を出す主意なのだから、成るべく自分の同情が先方へ徹する樣に旨く且長く、さうして誰が見ても實意の籠もつてゐるやうに書きたかつたのだけれども、讀み直して見ると、矢つ張り普通の人が普通時候の挨拶に述べる用語以外に、何の新しい所もないので、彼は少し失望した。と云つて、固々戀人に送る艶書程熱烈な眞心を籠めたものでないのは覺悟の前である。それで自分は文章が下手だから、いくら書き直したつて駄目だ位の口實の下に、其所は其儘にして前へ進んだ。

七

森本が下宿へ置き去りにして行つた荷物の始末に就いては義理にも何とか書き添へなければ濟まなかつた。然し其處置の附け方を亭主に聞くのは厭だし、聞かなければ委細の報道は出來る筈はなし、敬太郎は筆の先を宙に浮かした儘考へてゐたが、とう／＼「貴方の荷物は、僕から主人に話して、何うでも貴方の都合の宜い樣に取り計らはせるとの御依賴でしたが、貴方の手紙の通り、僕が何も云はない先に、雷獣の方で勝手に取り計らつて仕舞つたやうですから左樣御承知を願ひます。梅の盆栽を下さるといふ事ですが、是は影も形も見えないやうですから、頂きません。たゞ御禮丈申し述べて置きます。夫から」とつゞけて置いて、又筆を休めた。

敬太郎は愈洋杖の所へ來たのである。根が正直な男だから、あの洋杖に折角の思召だから、頂戴して毎日散步の時突いて出ます抔と空々しい嘘は吐けず、と云つて御親切は難有いが僕は貰ひませんとは猶更書けず、仕方がないから、「あの洋杖は未だに傘入れの中に立つてゐます。持主の歸るのを毎日毎夜待ち暮らしてゐる如く立つてゐます。雷獣もあの蛇の頭へは手を觸れる事を敢てしません。僕はあの首を見るたびに、離別記念としての貴方の手腕に敬服せざるを得ないです」と好い加減な御世辭を並べて、事實を紛す手段とした。

狀袋へ名宛を書くときに、森本の名前を思ひ出さうとしたが、何うしても胸に浮かばないので、已を得ず大連電氣公園内娯樂掛り森本樣とした。今迄の關係上主人夫婦の眼を憚らなければならない手紙なので、下女を呼んでポストへ入れさせる譯にも行かなかつたから、敬太郎はすぐ夫を自分の袂の中に藏した。彼はそれを持つて夕食後散歩旁外へ出懸ける氣で寒い梯子段を下迄降り切ると、須永から電話が掛かつた。

今日内幸町から從妹が來ての話しに、叔父は四五日内に用事で大阪へ行くかも知れないさうだから、餘り遲くなつてはと思つて、立つ前に會つて貰へまいかと電話で聞いて見たら、宜しいといふ返事だから、行く氣なら成るべく早く行つた方が可からう。尤も電話の上に咽喉が痛いので、詳しい話しは出來なかつたから、其積りでゐて呉れといふのが彼の用向きであつた。敬太郎は「どうも難有う。ぢや成るべく早く行くやうにするから」と禮を述べて電話を切つたが、何うせ行くなら今夜にでも行つて見ようといふ氣が起つたので、再び二階へ取つて返して此間拵へたセルの袴を穿いた上、愈表へ出た。

曲り角へ來てポストへ手紙を入れる事は忘れなかつたけれども、肝心の森本の安否は此時既に敬太郎の胸に、たゞ微かな火氣を殘すのみであつた。夫でも狀袋が郵便函の口を滑つて、すとんと底へ落ちた時は、受取人の一週間以内に封を披く樣を想見して、滿更惡い心持もしまいと思つた。

夫から電車へ乘る迄はたゞ一直線にすた〳〵歩いた。考へも一直線に内幸町の方を向いてゐたが、電

車が明神下へ出る時分、何氣なく今しがた電話口で須永から聞いた言葉を、頭の内で繰り返して見ると、敬太郎はつと思ふ所が出て來た。須永は「今日門司町からイトコが來て」と慥かに云つたが、其イトコが叔父さんの子である事に疑ふ迄もない。然し其子が男であるか女であるかは不完全な日本語の丸で關係しない所である。

「何方だらう」

敬太郎は急に氣にし始めた。若しそれが男だとすれば、あの後姿の女に就いての手掛りには成らない。從つて彼は彼の好奇心を徒らに刺戟した丈で、ちつとも動いて來ない。然し若し女だとすると、日といひ時刻といひ、須永の玄關から上り具合といひ、何うも自分より一足先へ這入つたあの女らしい。空想と事實を繋ぎ合せる事に巧みな彼は、さうと極めないうちに、[illegible]的さうと極めて仕舞つた。斯う解釋した時に、今迄燃立つてゐた自分の好奇心に幾分の冷水を注したやうな滿足を覺えると共に、豫期したよりも平凡な方角に、手掛りが一つ出來たと云ふ詰らなさをも感じた。

八

彼は小川町の停留所に來た時、一寸電車を下りても須永の門口迄行つて、友の口から事實を確めて見たい氣に驅られたが、單純な好奇心以外にそんな立ち入つた質問をすべき理由を何處にも見出だし得ないので、我慢し

てすぐ三田線に移つた。けれども眞直に神田橋を拔けて丸の內を疾驅する際にも、自分は今須永の從妹の家に向つて走りつゝあるのだといふ心持は忘れなかつた。彼は勸業銀行の邊で下りる筈の所を、つい櫻田本鄕町迄乘り越して驚ろいて又暗い方へ引き返した。淋しい夜であつたが尋ねる目的の家はすぐ知れた。丸い瓦斯に田口と書いた門の中を覗いて見ると、思つたより奧深さうな構であつた。けれども實際は砂利を敷いた路が往來から筋違に玄關を隱してゐるのと、正面を遮る植込みがこんもり黑ずんで立つてゐるのとで、幾分か嚴しい景氣を夜陰に添へた迄で、門內に這入つた所では見附き程手廣な住居でもなかつた。

　玄關には西洋擬ひの硝子戶が二枚閉ててあつたが、賴むといつても、電鈴を押しても、取次が中々出て來ないので、敬太郎は已むを得ずしばらく其傍に立つて內の樣子を窺つてゐた。すると、何處からか漸く足音が聞こえ出して、眼の前の擦硝子がぱつと明るくなつた。夫から庭下駄で三和土を踏む音が二足三足したと思ふと、玄關の扉が片方開いた。敬太郎は此際取次の風采を想望する程の物數奇もなく、全く漫然と立つてゐた丈であるが、夫でも絣の羽織を着た書生か、双子の綿入を着た下女が、一應御辭儀をして彼の名刺を受取る事とのみ期待してゐたのに、今戶を半分開けて彼の前に立つたのは、思ひも寄らぬ立派な服裝をした老紳士であつた。電氣の光を背中に受けてゐるので、顏は判然しなかつたが、白縮緬の帶丈はすぐ彼の眼に映じた。其瞬間にすぐ是が田口といふ須永の叔父さんだらうといふ感じが敬太郎の頭に働いた。けれども事が餘り意外なので、すぐ挨拶をする餘裕も出ず少しはあつけに取られた氣味で、茫然して

ゐた。目下自分を未だ若く考へてゐる敬太郎には、四十代だらうが五十代だらうが乃至六十代だらうが殆ど區別のない一様の爺さんに見える位、彼は老人に對して親しみのない男であつた。彼は四十九と五十九を見分けて遣る程の同情心を年長者に對して有たなかつたと同時に、其何れに向つても慣れないうちは異人種のやうな薄氣味を惡くるのが常なので、[illegible]ついたのである。然し相手は何も氣に掛らない樣子で、「何か用ですか」と聞いた。丁寧でもなければ横着でもない至つて無雜作な其言葉つきが、少し敬太郎の度胸を回復させたので、彼は漸く自分の姓名を名乘ると共に手短かく來意を告げる機會を得た。すると年寄な男は思ひ出したやうに、「さう〳〵先刻市藏（須永の名）から電話で話しがありました。然し今夜御出でになるとは思ひませんでしたよ」と云つた。さうして君さう早く來たつて不可ないといふ樣子が見えたので、敬太郎は精一杯言譯をする必要を感じた。老人はそれを聞くでもなし聞かぬでもなしといつた風に默つて立つてゐたが「そんなら又入らつしやい。四五日うちに一寸旅行しますが、其前に御目に掛かれる暇さへあれば、御目に掛かつても宜う御座んす」と云つた。敬太郎は恭しく禮を述べて玄關を出たが、暗い夜の中で、禮の述べ方がちと馬鹿丁寧過ぎたと思つた。

是はずつと後になつて、須永の口から敬太郎に知れた話であるが、此所の主人は、此時玄關に近い應接間で、たつた一人碁盤に向つて、白石と黒石を互違ひに並べながら考へ込んでゐたのださうである。夫は客と二石遣つた後の引續きとして、是非共ある問題を解決しなければ氣が濟まなかつたからであるが、肝

心の所で敬太郎がさも田舎者らしく玄關を騷がせるものだから、先づ此邪魔を追つ拂つた後でといふ積りになつて、焦慮つたさの餘り自分と取次に出たのだといふ。須永に此顛末を聞かされた時に、敬太郎は益自分の挨拶が丁寧過ぎたやうな氣がした。

九

中一日置いて、敬太郎は堂々と田口へ電話を懸けて、是からすぐ行つても差支へないかと聞き合はせた。向うの電話口へ出たものは、敬太郎の言葉つきや話し振の比較的横風な所から大分位地の高い人とでも思つたらしく「どうぞ少々御待ち下さいまし、只今主人の都合を一寸尋ねますから」と丁寧な挨拶をして引き込んだが、今度返事を傳へるときは「あゝ、もし〳〵今ね、來客中で少し差支へるさうです。午後の一時頃來るなら來て頂きたいといふ事です」と前よりは言葉が餘程粗末になつてゐた。敬太郎は「さうですか、夫では一時頃上がりますから、どうぞ御主人に宜しく」と答へて電話を切つたが、内心は一種厭な心持がした。

十二時かつきりに午飯を食ふ積りで、あらかじめ下女に云ひ附けて置いた膳が、時間通り出て來ないので、敬太郎は騷々しく鳴る大學の鐘に急き立てられでもする樣に催促をして、出來る丈早く食事を濟ました。電車の中では一昨日の晩會つた田口の態度を思ひ浮かべて、今日も亦あゝいふ風に無雜作な取扱ひを

受けるのか知らん、夫とも向うで會ふといふ位だから、もう少しは愛嬌のある挨拶でもして呉れるか知らんと考へなどした。彼は此紳士の好意で、相當の地位さへ得られるならば、多少腰を曲めて窮屈な思ひをする位は我慢する積りであつた。けれども先刻電話の取次に出たものの様に、五分と經たないうちに、言葉使ひを悪い方に改められたりすると、もう不愉快になつて、どうか其奴が又取次に出なければいゝがと思ふ。其癖自分の掛け方の自分としては少し横風過ぎた事には丸で氣が附かない性質であつた。

小川町の角で、序に須永の家へ曲がる横町を見た時、彼ははつと例の後姿の事を思ひ出して、偶に日蔭から日向へ興味を移した。今日も美しい須永の從妹の居る所へ訪問に出掛けるのだと自分で自分に教へる方が、臆劫な手數を掛けて、好い顔もしない爺さんに、衣食の途を授けて下さいと泣き附きに行くのだと意識するよりも、敬太郎に取つては遙かに麗らかであつたからである。彼は須永の從妹と田口の爺さんを自分勝手に親子と極めて置きながら何處迄も二人を引き離して考へてゐた。此間の晩田口と向き合つて玄關先に立つた時も、光線の具合で先方の人品は判然分らなかつたけれども、眼鼻だちの輪廓丈で評した所が、あまり立派な方でなかつた事は、此爺さんの第一印象として、敬太郎の胸に夜目にも疑ひなく描かれたのである。夫でゐて彼は此男の娘なら、須永との關係は何うあらうとも、器量はあまり可い方ぢやあるまいといふ氣が何處にも起らなかつた。そこで離れてゐて合ひ、合つてゐて離れる樣な日向日蔭の裏表を一枚にした畫を彼は田口家に對して抱いてゐたのである。それを互違ひに繰り返した後、彼は田口の門前

に立つた。すると其所に大きな自動車が御者を乘せた儘待つてゐたので、少し安からぬ感じがした。玄關へ掛かつて名刺を出すと、小倉の袴を穿いた若い書生がそれを受取つて「一寸」と云つた儘奥へ這入つて行つた。其聲が確かに先刻電話口で聞いたのに違ひないので、敬太郎は彼の後姿を見送りながら厭な奴だと思つた。すると彼は名刺を持つた儘又現はれた。さうして「御氣の毒ですが、只今來客中ですから又何うぞ」と云つて、敬太郎の前に突立つてゐた。敬太郎も少し怫とした。

「先程電話で御都合を伺つたら、今客があるから午後一時頃來いといふ御返事でしたが」

「實はさつきの御客がまだ御歸りにならないで、御膳などが出て混雜してゐるんです」

落ち附いて聞きさへすれば滿更無理もない言譯なのだが、電話以後此取次が癪に障つてゐる敬太郎には彼の云ひ草が如何にも氣に喰はなかつた。それで自分の方から先を越す積りか何かで、「さうですか、度々御足勞でした。どうぞ御主人へよろしく」と平仄の合はない捨臺詞のやうな事を云つた上、何だこんな自動車がと云はぬ許りに其傍を擦り抜けて表へ出た。

十

彼は此日必要な會見を都合よく濟ました後、新しく築地に世帶を持つた友人の所へ廻つて、須永と彼の從妹とそれから彼の叔父に當たる田口とを想像の絲で巧みに繋ぎ合はせつゝある一部始終を御馳走に、晩

話し込む気でゐたのである。けれども田口の門を出て日比谷公園の傍に立つた彼の頭には、そんな余裕は更になかつた。後姿を見た丈ではあるが、在所を既に突き留めて、今其人の家を尋ねたのだといふ陽気な心持は固よりなかつた。位置を求めに此所迄来たといふ自覚は猶なかつた。彼はたゞ屈辱を感じた結果として、腹を立てゝゐた丈である。さうして自分を田口のやうな男に紹介した須永こそ此取扱ひに対して当然責任を負はなくてはならないと感じてゐた。彼は帰り掛けに須永の所へ寄つて、逐一顛末を話した上、存分文句を並べてやらうと考へた。それで又電車に乗つて一直線に小川町迄引つ返して来た。時計を見ると、一時にはまだ二十分程間があつた。須永の家の前へ来て、わざと往来から須永々々と二度ばかり呼んで見たが、居るのか居ないのか二階の障子は立て切つた儘遂に開かなかつた。尤も彼は体裁家で、平生から斯ういふ呼び出し方を田舎者らしいといつて厭がつてゐたのだから、聞こえても知らん顔をしてゐるのではなからうかと思つて、敬太郎は正式に玄関の格子口へ掛かつた。けれども取次に出た仲働の口から「今少し前に御出ましになりました」といふ言葉を聞いた時は、一寸張合ひが抜けて少しの間黙つて立つてゐた。

「風邪を引いてゐた様でしたが」

「はい、御風邪を召して入らつしやいましたが、今日は大分好いからと仰しやつて、御出掛けになりました」

敬太郎は歸らうとした。仲働は「一寸御隱居さまに申し上げますから」といつて、敬太郎を格子のうちに待たした儘奥へ這入つた。と思ふと襖の陰から須永の母の姿が現はれた。脊の高い面長の下町風に品のある婦人であつた。

「さあ何うぞ。もう其内歸りませうから」

須永の母に斯う云ひ出されたが最後、江戸慣れない敬太郎は何うそれを斷つて外へ出て可いか、未だに其心得がなかつた。第一何處で斷る隙間もないやうに、調子の好い文句が夫から夫へとずる〳〵彼の耳へ響いて來るのである。それが世間體の好い御世辭と違つて、引き留められてゐるうちに、上がつては迷惑たらうといふ遠慮が何時の間にか失くなつて、つい氣の毒だから少し話して行かうといふ氣になるのである。敬太郎は云はれる儘にとう〳〵例の書齋へ腰を卸ろした。須永の母が御寒いでせうと云つて、仕切りの唐紙を締めて呉れたり、さあ御手を御出しなさいと云つて、佐倉を埋けた火鉢を勸めて呉れたりするうちに、一時昂奮した彼の氣分は次第に落ち附いて來た。彼はシキとかいふ白い絹へ秋田蕗を一面に大きく摺つた襖の模樣だの、唐桑らしくてら〳〵した黄色い手焙だのを眺めて、此しとやかで能辯な、人を外らす事を知らないと云つた風の母と話しをした。

彼女の語る所によると、須永は今日矢來の叔父の家へ行つたのださうである。

「ぢやあ序だから歸りに小日向へ廻つて御寺參りを爲て來て御呉れつて申しましたら、御母さんは近頃

買物になつた樣ですね、此間も他に代理をさせたぢやありませんか、年を取つた所爲かしらなんて惡口を云ひ云ひ出て參りましたが、あれもね貴方、先達て中から風邪を引いて咽喉を痛めて居りますので、今日も彼なら止した方が可いぢやないかと留めて見ましたが、矢つ張り若いものは用心深いやうで、何處か我無しやらで、年寄の云ふ事抔には一切無頓着で御座いますから……」

須永の噂へ行くと、母の眼は唯一の樂しみのやうに斯ういふ調子で倅の話をするのが常であつた。敬太郎の方で須永の名前でも持ち出さうものなら、何時迄でも其問題の後へ喰ひ附いて來て、容易に話頭を離れないのが常になつてゐた。敬太郎もそれには大分慣れてゐるから、此際も向うのいふ通りを只ふんふんと大人しく聞いて、一段落の來るのを待つてゐた。

十一

其内話しがいつか肝心の須永を離れて、矢來の叔父といふ人の方へ移つて行つた。是は内幸町と違つて、此御母さんの實の弟に當る男ださうで、一種の贅澤屋の樣に敬太郎は須永から聞いてゐた。外套の裏に繻子でなくては見つともなくて着られないと云つたり、要りもしないのに古渡りの更紗玉とか稱して、石だか珊瑚だか分らないものを愛玩したりする話は未だに覺えてゐた。「何もしないで贅澤に遊んでゐられる位好い事はないんだから、結構な御身分ですね」と敬太郎が云ふのを引き取るやうに母は、「何うして

貴方、打ち明けた御話しが、まあ何うにか斯うにか遣つて行けるといふ迄で、樂だの贅澤だのといふ段にはまだ中々なので御座いますから不可ません」と打ち消した。

須永の親戚に當たる人の財力が、左程徹太郎に關係のある譯でもないので、彼は夫なり默つて仕舞つた。すると母は少しでも談話の途切れるのを自分の過失ででもあるやうに、すぐ言葉を繼いだ。

「夫でも妹婿の方は御蔭さまで、何だ敷だつて方々の會社へ首を突つ込んで居りますから、此方はまあ不自由なく暮らしてをる模樣で御座いますが、手前共や矢來の弟などになりますと、云はゞ浪人同樣で、昔に比べたら、尾羽うち枯らさない許りの體たらくだつて、よく宅ともさう申しては笑ふこつて御座いますよ」

徹太郎は何となく自分の身の上を顧て氣恥づかしい思ひをした。幸ひに先方がすら／＼喋舌つて呉れるので、此方に受け答へをする文句を考へる必要がないのを責めてもの得として聞き續けた。

「夫にね、御承知の通り市藏があゝいふ引つ込み思案の男だもんで御座んすから、私もたゞ學校を卒業させた丈では、全く心配が拔けませんので、まことに困り切ります。早く氣に入つた嫁でも貰つて、年寄に安心でもさせて呉れる樣におしなと申しますと、さう御母さんの都合のいゝやうに計り世の中は行きやしませんて、天で相手にしないんで御座いますよ。そんなら世話をしてくれる人に頼んで、何處へでも可いから、務めにでも出る氣になればまだしも、そんな事には又丸で無頓着で貴方……」

敬太郎は此點に於て實際須永が横着過ぎると平生から思つてゐた。「餘計な事ですが、少し目上の人から意見でも仕て上げる樣にしたら何うでせう。今御話しの矢來の叔父さんからでも」と全く年寄に同情する氣で云つた。

「所が是が又大の交際嫌ひの變人で御座いまして、忠告どころか、何だ銀行へ這入つて算盤なんかパチパチ云はすなんて馬鹿であるもんかと、斯うで御座いますから頭から相談にも何にもなりません。それを又市藏が嬉しがりますので、矢來の叔父の方が好きだとか氣が合ふとか申しちや能く出掛けます。今日なども日曜ぢやあるし御天氣は好しするから、内幸町の叔父が大阪へ立つ前に一寸あちらへ顔でも出せば可いので御座いますけれども、矢つ張り矢來へ行くんだつて、とう／＼自分の好きな方へ參りました」

敬太郎は此時自分が今日何の爲に馳け込むやうに此家を襲つたかの原因に就いて、又新しく考へ出した。彼は須永の顏を見たら隨分過激な言葉を使つても其不都合を責めた上、僕はもう二度とあすこの門は潛らない積りだから、さう思つて呉れ位の臺詞を云つて歸る氣でゐたのに、肝心の須永は留守で、事情も何も知らない母から、逆さに色々な話しを仕掛けられたので、怒つて遣らうといふ氣は無論拔けて仕舞つたのである。が、夫でも行き掛り上、田口と會見を遂げ得なかつた顚末丈は、一應此母の耳へでも傳へて置く必要があるだらう。それには話しの中に内幸町へ行くとか行かないとか問題になつてゐる今が一番可からう。——斯う敬太郎は思つた。

十二

「實はその内幸町の方へ今日私も出たんですが」と云ひ出すと、自分の息子の事ばかり考へてゐた母は、「おや左樣で御座いましたか」と漸と氣が附いて濟まないといふ顏附をした。此間から敬太郎が躍起になつて口を探してゐる事や、探しあぐんで須永に紹介を頼んだ事や、須永がそれを引き受けて内幸町の叔父に會へるやうに周旋した事は、須永の傍にゐる母として彼女の悉く見たり聞いたりした所であるから、行き屆いた人なら先方で何も云ひ出さない前に、此方から何んな模樣です位は聞いて遣るべきだとでも思つたのだらう。斯う觀察した敬太郎は、此一句を前置きに、今迄の成行を殘らず話さうと力めに掛かつたが、時々相手から「左樣で御座いますとも」とか「本當にまあ、間の惡い時にはね」とか、何だかにも同情したやうな間投詞が出るので、自分がむかつ腹を立てて惡體を吐いた事などは話しのうちから綺麗に拔いて仕舞つた。須永の母は氣の毒といふ言葉を何遍も繰り返した後で、田口を辯護するやうに斯んな事を云つた。――

「そりやあ實の所忙しい男なので。妹などもあゝして一つ家に住んで居りますやうなものゝ、――何で御座んせう。――落ち〳〵話しの出來るのは恐らく一週間に一日も御座いますまい。私が見兼ねて要作さんいくら御金が儲かるたつて、さう働いて身體を壞しちや何にもならないから、偶には骨休めをなさい

が、一旦引け受けた以上は忘れる男ではないから、まあ旅行から歸る迄待つて、緩り會つたら宜からうといふ注意とも慰藉とも附かない助言も與へた。

「矢來のは居つても會はん方で、是は仕方が御座いませんが、内幸町のは居ないでも都合さへ附けば馳けて歸つて來て會ふといつた風の性質で御座いますから、今度旅行から歸つて來さへすれば、此方から何とも云つて遣らないでも、向うで屹度市藏の所へ何とか申して參りますよ。屹度」

斯う云はれて見ると、成程さういふ人らしいが、それは此方が大人しくしてゐればこそで、先刻の樣にぷん〳〵怒つては到底物にならないに極まり切つてゐる。然し今更それを打ち明ける譯には行かないので、敬太郎はたゞ默つてゐた。須永の母は猶「あんな顏はして居りますが、見懸けによらない實意のある剽輕者で御座いますから」と云つて一人で笑つた。

十三

剽輕者といふ言葉は田口の風采なり態度なりに照り合はせて見て、何うも敬太郎の腑に落ちない形容であつた。然し實際を聞いて見ると、成程當たつてゐる所もあるやうに思はれた。田口は昔ある御茶屋へ行つて、姉さん此電氣燈は熱り過ぎるね、もう少し暗くして御呉れと頼んだ事があるさうだ。下女が怪訝な顏をして小さい球と取り換へませうかと聞くと、いゝえさ、其所を一寸捻つて暗くするんだと眞面目に云

ハ開けるので、下女は是は電氣燈のない田舍から出て來た人に違ひないと見て取つたものか、くすく笑ひながら、「日那電氣はランプと違つて捻つたつて暗くはなりませんよ、消えちまふ丈ですから。ほらねとぱちつと音をさせて座敷を眞暗にした上、又ぱつと元通りに明るくするかと思ふと、大きな聲でばあと云つた。田口は少しも悄然ずに、おやく未だ舊式を使つてるね。見つともないぢやないか、此所の家にも似合はないこつた。早く會社の方へ改良を申し込んで置くと可い。順當に直して吳れるから。と左も尤もらしい忠告を與へたので、下女もとうく眞に受け出して、本當に是ぢや不便ね、だいち點けつ放しで寐る時なんか明る過ぎて、困る人が多いでせうからと左も感心したらしく、改良に賛成したさうである。ある時用事が出來て門司とか馬關とか迄行つた時の話は是よりも餘程念が入つてゐる。一所に行くべき筈のAといふ男に差支へが起つて、二日ばかり彼は宿屋で待ち合はしてゐた。其間の退屈紛れに、彼はAを一つ擔いで遣らうと目論んだ。是は町を歩いてゐる時、一軒の寫眞屋の店先で不圖思ひ附いた惡戲で、彼は其處から藝者の寫眞を一枚買つたのである。其裏へA樣と書いて、手紙を添へた贈物のやうに拵へた。其手紙には女を一人雇つて、充分の時間を費へた上、出來る丈Aの心を動かす樣に艶かしく曲らしたもので、誰が見ても嬉しい顔をするに足る許りか、今日の首尾を見たら、明日此所へ御着きの筈だと出てゐたので、久し振に此手紙を上げるんだから、何うか讀み次第、何處其所迄來て頂きたいと書いた中々安くないものであつた。彼は其晩自分で此手紙をポストへ入れて、翌日配達の時又それを自分で受取つたな

り、Aの來るのを待ち受けた。Aが着いても彼は此手紙を中々出さなかつた。力めて眞面目な用談に就いての打合せなどを大事らしく爲續けて、漸と同じ食卓で晩餐の膳に向つた時、突然思ひ出したやうに袂の中からそれを取り出してAに與へた。Aは表に至急親展とあるので、一寸箸を下に置くと、すぐ封を開いたが、少し讀み下すと同時に包んである寫眞を拔いて裏を見るや否や、急に丸める樣に懷へ入れて仕舞つた。何か急ぎの用でも出來たのかと聞くと、いや何といふばかりで、不得要領に又箸を取つたが、何處となくそは／＼した樣子で、まだ段落の附かない用談を其儘に、少し失禮する腹が痛いからと云つて自分の部屋に歸つた。田口は下女を呼んで、今から十五分以内にAが外出するだらうから、出るときは車が待つてでもゐたやうに、Aが何も云はない先に彼を乘せて馳け出して、その思はく通り何處の何といふ家の門へ卸ろすやうにしろと云ひ附けた。さうして自分はAより早く同じ家へ行つて、主婦を呼ぶや否や、今おれの宿の提灯を點けた車に乘つて、是々の男が來るから、來たらすぐ綺麗な座敷へ通して、丁寧に取扱つて、向うで何も云はない先に、御連樣は疾うから御待ち兼ねで御座いますと云つたなり引き退がつて、すぐ己の所へ知らせて呉れと頼んだ。さうして一人で煙草を吹かして腕組をしながら、事件の經過を待つてゐた。すると萬事が旨い具合に豫定の通り進行して、愈自分の出る順が來た。そこでAの部屋の傍へ行つて間の襖を開けながら、やあ早かつたねと挨拶すると、Aは顏の色を變へて驚いた。田口は其前へ坐り込んで、實は是々だと殘らず自分の惡戲を話した上、「擔いだ代りに今夜は僕が奢るよ」と笑ひながら云つ

たんだといふ。

「斯ういふ剽氣な眞似をする男なんで御座いますから」と須永の母が話した後で可笑しさうに笑つた。敬太郎はあの自動車はまさか惡戯ぢやなかつたらうと考へながら下宿へ歸つた。

十四

自動車事件以後敬太郎はもう田口の世話になる見込はないものと諦めた。それと同時に須永の從弟と假定された例の後姿の正體も、停車場の入口に當たる淺い所ではたりと行き留まつたのだと思ふと、其底に齒痒いやうな煮え切らないやうな不愉快があつた。彼は今日迄何一つ自分の力で、先へ突き抜けたといふ自覺を有つてゐなかつた。勉強だらうが、運動だらうが、其他何事に限らず本氣に遣り掛けて、貫ぬき終せた試しがなかつた。生れてから只一つ行ける所迄行つたのは、大學を卒業した位なものである。それすら精を出さずにとぐろ許り卷きたがつてゐるのを、向うで引き摺り出して呉れたのだから、中途で動けなくなつた間誤付のない代りには、漸との思ひで井戸を掘り拔いた時の晴々した心持も知らなかつた。

彼は退屈して困り出した。不圖學生時代に學校へ招待した宗教家の談話を思ひ出した。其宗教家は家庭にも社會にも何の不滿もない身分だのに、自ら進んで坊主になつた人で、其當時の事情を述べる時に、何うしても不思議で堪らないから斯の道に入つて見たと云つた。此人は何んな明らかに透き徹る樣な空の

下に立つても、四方から閉ぢ込められてゐる樣な氣がして苦しかつたのださうである。樹を見ても家を見ても往來を歩く人間を見ても鮮やかに見えながら、自分丈硝子張りの箱の中に入れられて、外の物と直かに續いてゐない心持が絶えずして、仕舞には窒息する程苦しくなつて來るんだといふ。敬太郎は此話を聞いて、それは一種の神經病に罹つてゐたのではなからうかと疑つたなり、今日迄氣にも掛けずにゐた。然し此四五日盆槍屈託してゐるうちに能く〳〵考へて見ると、彼自身が今迄に、何一つ突き拔いて痛快だといふ感じを得た事のないのは、坊主にならない前の此宗敎家の心に何處か似た點があるやうである。勿論自分のは比較にならない程微弱で、しかも性質が丸で違つてゐるから、此坊さんの樣にえらい勇斷を爲る必要はない。もう少し奮發して氣張る事さへ覺えれば、當たつても外れても、今よりはまだ痛快に生きて行かれるのに、今日迄つひぞ其所に心を用ひる事をしなかつたのである。

敬太郎は一人で斯う考へて、何處へでも進んで行かうと思つたが、又一方では、もうすつぽ拔けの後の祭の樣な氣がして、何と云ふ當てもなく又三四日ぶら〳〵と暮らした。其間に有樂座へ行つたり、落語を聞いたり、友達と話したり、往來を歩いたり、色々遣つたが、何れも藥罐頭を攫むと同じ事で、世の中は少しも手に握れなかつた。彼は碁を打ちたいのに、碁を見せられるといふ感じがした。さうして同じ見せられるなら、もう少し面白い波瀾曲折のある碁が見たいと思つた。

すると直ぐ須永と後姿の女との關係が想像された。もと〳〵頭の中で無暗に色澤を着けて奥行のある樣

に組み立てる程の關係でもあるまいし、あつた所が他の事を餘計な御世話だと、自分で自分を嘲りながら、あゝ馬鹿らしいと思ふ後から、矢つ張り何かあるだらうといふ好奇心が今の樣にちよい／＼と閃めいて來るのである。さうして此道をもう少し辛抱強く先へ押して行つたら、自分が今迄經驗した事のない浪漫的な事物に打つかるかも知れないと考へ出す。すると田口の玄關で怒つたなり、あの女の研究を投げて仕舞つた自分の短氣を、自分の好奇心に釣り合はない弱味だと思ひ始める。

當時に就いても、あんな些細の行違ひの爲に愛想づかしを假令一句でも口にして、自分と田口の敷居を高くする筈ではなかつたと思ふ。あれで出來るとも出來ないとも、まだ方のつかない未來を中途半端に仕切つてしまつた。さうして好んで煮え切らない思ひに悩んでゐる姿になつてしまつた。須永の母の保證する所では、田口といふ老人は見掛けに寄らない親切氣のある人ださうだから、或は旅行から歸つて來た上で、又逢つて呉れないとも限らない。が、此方からもう一遍會見の都合を問ひ合はせたり何かして、常識のない馬鹿だと輕蔑されても詰らない。けれども何の遠慮も拔けた心持を確り捕まへる爲には馬鹿と云はれる迄も、其所迄突き詰めて行く必要であるだらう。——敬太郎は屈託しながらも色々考へた

十五

けれども身の一大事を卽座に決定するといふ非常な場合と違つて、敬太郎の思案には屈託の裏に、何處

か呑氣なものがふは〳〵してゐた。此道をとゞの詰り迄進んで見ようか、又は是限り已めにして、更に新しいものに移る支度をしようか。問題は煎じ詰める迄もなく當初から至極簡單に出來上がつてゐたのである。それに迷ふのは、一度籤を引き損なつたが最後、もう浮かぶ瀨はないといふ非道い目に會ふからではなくつて、何方に轉んでも大した影響が起らないため、何うでも好いといふ怠けた心持が何時しらず働くからである。彼は眠い時に本を讀む人が、眠氣に抵抗する努力を厭ひながら、文字の意味を判明頭に入れようと試みる如く、呑氣の懷で決斷の卵を溫めてゐる癖に、たゞ旨く孵化らない事ばかり苦にしてゐた。

この不決斷を逃れなければといふ口實の下に、彼は暗に自分の物數奇に媚びようとした。さうして自分の未來を賣卜者の八卦に訴へて判斷して見る氣になつた。彼は加持、祈禱、御封、蟲封じ、降巫の類に、全然信仰を有つ程、非科學的に教育されてはゐなかつたが、それ相當の興味は、何れに對しても昔から今日迄失はずに成長した男である。彼の父は方位九星に詳しい神經家であつた。彼が小學校へ行く時分の事であつたが、ある日曜日に、彼の父は尻を端折つて、鍬を擔いだ儘庭へ飛び下りるから、何をするのかと思つて、後から跟いて行かうとすると、父は敬太郎に向つて、御前は其所にゐて、時計を見て居ろ、さうして十二時が鳴り出したら、大きな聲を出して合圖をして呉れ、すると御父さんがあの乾に當たる梅の根つこを掘り始めるからと云ひ附けた。敬太郎は子供心に又例の家相だと思つて、時計がちんと鳴り出すや否や命令通り、十二時ですようと大きな聲で叫んだ。それで、其場は無事に濟んだが、あれ程正確に鍬を下

みす積りなら、肝心の時計が狂つてゐない樣に豫め直して置かなくてはならない筈だのにと敬太郎は父の迂闊を可笑しく思つた。學校の時計と自分の家のとは其時二十分近く違つてゐたからである。所が其後摘草に行つた歸りに、馬に蹴られて土堤から下へ轉がり落ちた事がある。不思議に怪我も何もしなかつたのを、御母さんが大層喜んで、全く御地藏樣が御前の身代りに立つて下さつた御蔭だ是御覽と云つて、馬の繋いであつた傍にある石地藏の前に連れて行くと、石の首がぽくりと缺けて、涎掛丈が殘つてゐた。敬太郎の頭には其時から怪しい色をした雲が少し流れ込んだ。其雲が身體の具合や周邊の事情で、濃くなつたり薄くなつたりする變化はあるが、成長した今日に至る迄、未だに拔け切らずにゐた事丈は慥かである。

斯ういふ譯で、常に明治の世に伴はる面白い職業の一つとして、何時でも大道占ひの弓張提灯を眺めてゐた。又筮竹を揉つて算木の音を聞く程の熱心はなかつたが、暗さの傍に、凄い顏を提灯の光に暈した女などが、陰氣に其所に立つてゐるのを見掛けると、此暗い影を未來に投げて、思案に沈んでゐる憐れな人に、易者が何んな希望と不安と恐怖と自信とを與へるだらうといふ好奇心に惹かされて、面白半分、そつと傍へ寄つて、陰の方から立聞きをする事が屢あつた。己の友の誰彼が、自分の能力に悲觀して、試驗を受けようか學業を已めようかと思ひ煩つてゐる頃、ある人が旅行の序に、善光寺如來の御神籤を頂いて來た十五の花といふのを郵便で送つて呉れたら、其中に雲散じて月重ねて明らかなり、といふ句と、花開いて再び黃葉といふ句があつたので、物は試しだからまあ受けて見ようと云つて、受けたら綺麗に及第した時、彼

は更に乘つて、方々の神社で手當り次第御神籤を頂き廻つた事まへある。しかも夫は別に是といふ目的なしに頂いたのだから彼は平生でも、優に賣卜者の顧客になる資格を充分具へてゐたに違ひない。其代り今度の樣な場合にも、何處か慰みがてらに、まあ遣つて見ようといふ浮氣が大分交つてゐた。

十六

敬太郎は何處の占ひ者に行つたものかと考へて見たが、生憎何處といふ當てもなかつた。白山の裏とか、芝公園の中とか、銀座何丁目とか今迄に名前を聞いたのは二三軒あるが、無暗に流行るのは山師らしくつて行く氣にならず、と云つて、自分で嘘と知りつゝ出鱈目を强ひて尤もらしく述べる奴は猶不都合であるし、出來るならば餘り人の込み合はない家で、閑靜な髯を生やした爺さんが奇警な言葉で、簡潔にずばすばと道ひ破つて呉れるのが何處かにゐれば可いがと思つた。さう思ひながら、彼は自分の父が能く相談に出掛けた、鄕里の一本寺の隱居の顏を頭の中に描き出した。夫から不圖氣が附いて、考へるんだか只坐つてるんだか分らない自分の樣子が馬鹿々々しくなつたので、兎に角出て其所いらを步いてるうちに、運命が自分を誘ひ込むやうな占ひ者の看板に打つかるだらうといふ漠然たる頭に帽子を載せた。

彼は久し振に下谷の車坂へ出て、あれから東へ眞直に、寺の門だの、佛師屋だの、古臭い生藥屋だの、德川時代のがらくたを埃と一所に竝べた道具屋だのを左右に見ながら、わざと門跡の中を拔けて、奴鰻の

角へ出た。

彼は子供の時分よく江戸時代の淺草を知つてゐる彼の祖父さんから、しば〳〵觀音樣の繁華を耳にした。仲見世だの、奥山だの、並木だの、駒形だの、色々云つて聞かされる中には、今の人があまり口にしない名前さへあつた。廣小路に菜飯と田樂を食はせるすみ屋といふ洒落た家があるとか、駒形の御堂の前の繩暖簾を下げた鰌屋は昔から名代なものだとか、食物の話も大分聞かされたが、凡ての中で最も敬太郎の頭を刺戟したものは、長井兵助の居合拔きと、脇差をぐい〳〵呑んで見せる豆藏と、江州伊吹山の麓にゐる前足が四つで後足が六つある大蟇の干し固めたのであつた。夫等には藏の二階の長持の中にある草双紙の畫解きが、子供の想像に都合の好いやうな說明を幾何でも與へて呉れた。一本齒の下駄を穿いた儘、小さい三寶の上に曲んだ男が、襷掛けで身體よりも高く反り返つた刀を拔かうとする所や、大きな蝦蟇の上に胡坐をかいて、児雷也が魔法か何か使つてゐる所や、顔より大きさうな天眼鏡を持つた白い髯の爺さんが、唐机の前に坐つて、平突張つたちよん髷を上から見下ろす所や、大抵の不思議なものはみんな繪本から拔け出して、想像の淺草に竝んでゐた。斯う云ふ譯で敬太郎の頭に映る觀音の境内には、歴史的に妖嬌陸離たる色彩が、十八間の本堂を包んで、子供の時から常に陽炎つてゐたのである。東京へ來てから、此怪しい夢は固より手痛く打ち崩されて仕舞つたが、夫でも時々は今でも觀音樣の屋根に鳩の鳥が巣を食つてゐるだらう位の考へにふら〳〵となる事がある。今日も淺草へ行つたら何うかなるだらうといふ料簡

が暗に働いて、足が自ずと此方に向いたのである。然しルナパークの後から活動寫眞の前へ出た時は、是や占ひ者などの居る所ではないと今更の様に其雜沓に驚いた。切めて御賓頭顱でも撫でて行かうかと思つたが、何處にあるか忘れてしまつたので、本堂へ上がつて、魚河岸の大提灯と額堂の繪を退治てゐる額丈見てすぐ雷門を出た。敬太郎の考へでは是から淺草橋へ出る間には、一軒や二軒の易者はあるだらう。もし在つたら何でも構はないから這入る事にしよう。或は高等工業の先を曲がつて柳橋の方へ拔けて見ても好いなどゝ、丸で時分どきに恰好な飯屋でも探す氣で歩いてゐた。所がいざ探すとなると生憎なもので、平生は散歩さへすれば至る所に神易の看板がぶら下がつてゐる樣に、あの廣い表通に門戸を張つてゐる卜者は丸で見當たらなかつた。敬太郎は此企圖も例によつて例の如く、突き拔けずに中途で御仕舞になるのかも知れないと思つて少し失望しながら藏前まで來た。すると漸との事で尋ねる商賣の家が一軒あつた。細長い堅木の厚板に、身の上判斷と割書をした下に、文錢占ひと白い字で彫つて、其又下に、漆で塗つた眞赤な唐辛子が描いてある。此奇體な看板が先づ敬太郎の眼を惹いた。

十七

能く見ると是は一軒の生藥屋の店を仕切つて、其狹い方へ小濟潔した差掛け樣のものを作つたので、中に七色唐辛子の袋を並べてあるから、看板の通りそれを賣る傍、占ひを見る趣向に違ひない。敬太郎は斯

う觀察して、そつと紺屋に似た差掛けの奥を覗いて見ると、小作りな婆さんが只一人裁縫をしてゐた。狹い室一つの住居としか思はれないのに、肝心の易者の影も形も見えないから、主人は他行中で、細君が留守番をしてゐる所かとも思つたが、店先の構造から推すと、奥は生薬屋の方と續いてゐるかも知れないので、一概に留守と見切りを附ける譯にも行かなかつた。それで二三歩先へ出て、藥種店の方を覗くと、八つ目鰻の干したのも釣るしてなければ、大きな龜の甲も飾つてないし、人形の腹をがらん胴にして、五色の五臓を外から見えるやうに、腹の中の棚に載せた古風の裝飾もなかつた。一本寺の隱居に似た髯のある爺さんは固より坐つてゐなかつた。彼は再び立ち戻つて、身の上判斷文錢占ひといふ看板の懸かつた入口から暖簾を潛つて内へ入つた。裁縫をしてゐた婆さんは、針の手を已めて、大きな眼鏡の上から覗けるやうに敬太郎を見たが、たゞ一口、「占ひですか」と聞いた。敬太郎は「え、一寸見て貰ひたいんだが、御留守のやうですね」と云つた。すると婆さんは、膝の上のやはらか物を隅の方へ片附けながら、「御上がりなさい」と答へた。敬太郎は云はれる通り素直に上がつて見ると、狹いけれども居心地の惡い程汚れた室ではなかつた。現に疊抔は取り替へ立てでまだ新しい香がした。婆さんは煮立つた鐵瓶の湯を湯呑みに注いで、香煎を敬太郎の前に出した。さうして昔は藥箱でも載せた棚らしい所に片附けてあつた小机を取り卸しに掛かつた。其机には無地の袱紗が掛けてあつたが、婆さんはそれを其儘敬太郎の正面に据ゑて、さうして再び故の座に歸つた。

「占ひは私がするのです」
敬太郎は意外の感に打たれた。此小さい丸髷に結つた、黒繻子の襟の掛かつた着物の上に、地味な縞の羽織を着た、一心に縫物をしてゐる、純然家庭的の女が、自分の未來に横たはる運命の豫言者であらうとは全く想像の外にあつたのである。其上彼は此婦人の机の上に、筮竹も算木も天眼鏡もないのを不思議に眺めた。婆さんは机の上に乘つてゐる細長い袋の中からちやら〳〵と音をさせて、穴の開いた錢を九つ出した。敬太郎は始めて是が看板に「文錢占ひ」とある文錢なるものだらうと推察したが、偖此九枚の文錢が、暗い中で自分を操つてゐる運命の絲と、どんな關係を有つてゐるか、固より想像し得る筈がないので、たゞ其所に鑄出された模樣と、それが仕舞つてあつた袋とを見比べるだけで、何事も云はずにゐた。袋は能裝束の切れ端か、懸物の表具の餘りで拵へたらしく、金の絲が所々に光つてゐるけれども、大分古いものと見えて、手擦れと時代のため、派出な色を全く失つてゐた。
婆さんは年寄に似合はない白い纖麗な指で、九枚の文錢を三枚宛三列に並べたが、ひよつと顏を上げて、
「身の上を御覽ですか」と聞いた。
「さあ一生涯の事を一度に聞いて置いても損はないが、夫よりか今此所で何うしたら可いか、其方を極めて懸かる方が僕には大切らしいから、まあ夫を一つ願はう」
婆さんはさうですかと答へたが、夫で御年はと又敬太郎の年齡を尋ねた。それから生れた月と日を確め

た。指頭で籤取でもする積で、指と指を揃つて見たり、たゞ揃へたりしてゐたが、やがて又綺麗な指で例の文牌を新しく並べ更へた。林太郎は其に波が出たり或は文字が現はれたりして、三枚が三列に續く順序と排列を、深い意味でもある樣な眼付をして見守つてゐた。

十八

葵さんはしばらく手を膝の上に載せて、何事も云はずに古い鏡の面を凝と注意してゐたが、やがて考への中心點が明確に纏まつたといふ樣子をして、「貴方は今迷つて入らつしやる」と云ひ切つたなり林太郎の顔を見た。林太郎はわざと何も答へなかつた。

「迷はうか止さうかと思つて迷つて入らつしやるが、是は御損ですよ。先へ御出になつた方が、たとひ一時は思はしくない事でも、結局自然御得ですからね」

葵さんは一區切の附けると、又目を伏せて林太郎の樣子を窺つた。林太郎は猶あがいた。先方のいふ事をふん〳〵聞く丈にして、此方では何も喋らない積りに、腹の中で極めて掛つたのであるが、葵さんの其一言に、ほんやりした自分の胸が、硝子の鏡に映つてちらりと姿を現はしたやうな氣がしたので、つい相談に應じて見たくなつた。

「何んでも失敗る樣な事はないでせうか」

「えゝ。だから成るべく大人しくして。短氣を起さないやうにね」

是は豫言ではない、常識があらゆる人に教へる忠告に過ぎないと思つたけれども婆さんの態度に、是といふ故意とらしい點も見えないので、彼は猶質問を續けた。

「進むつて何方の方へ進んだものでせう」

「夫は貴方の方が能く分つて入らつしやる筈ですがね。私はたゞ最う少し先迄御出なさい、其方が御爲だからと申し上げる迄です」

斯うなると敬太郎も行き掛り上さうですかと云つて引込む譯に行かなくなつた。

「だけれども道が二つ有るんだから、その内で何方を進んだら可からうと聞くんです」

婆さんは又默つて文錢の上を眺めてゐたが、前よりは重苦しい口調で、「まあ同じですね」と答へた。さうして先刻裁縫をしてゐた時に散らばした絲屑を拾つて、其中から紺と赤の絹絲の可成長いのを擇り出して、敬太郎の見てゐる前で、それを綺麗に縒り始めた。敬太郎はたゞ手持無沙汰の徒事とばかり思つて、別段意にも留めなかつたが、婆さんは丹念にそれを五六寸の長さに縒り上げて、文錢の上に載せた。

「是を御覧なさい。斯う縒り合はせると、一本の絲が二筋の絲で、二筋の絲が一本の絲になるぢやありませんか。そら派出な赤と地味な紺が。若い時には兎角派出の方へ派出の方へと驅け出して遣り損なひ勝ちのものですが、貴方のは今の所此縒り絲見た樣に丁度好い具合に、一所に絡まり合つてゐる樣ですから

御仕合せです」

纏綿の二字は何とも知らず面白かつたが、御仕合せですと云はれて見ると、嬉しいよりも却て可笑しい心持の方が敬太郎を動かした。

「おや其纏綿で地道を踏んで行けば、其間にちら〳〵派出な赤い色が出て來ると云ふんですね」と敬太郎は向うの言葉を呑み込んだ樣な尋ね方をした。

「さうです左樣なる筈です」と婆さんは答へた。始めから敬太郎は占ひの一言で、是非共右か左へ片附けなければならないと迄切に思ひ詰めてゐた譯でもなかつたけれども、是丈で歸るのも少し物足りなかつた。婆さんの云ふ事が、丸で自分の胸と懸け隔たつた別世界の消息なら、固より論はないが、意味の取り樣では大分自分の今の身の上に、應用の利く點もあるので、敬太郎は其所に微かな未練を殘した。

「最う何も伺ふ事はありませんか」

「さうですね。近い内に一寸した事が出來るかも知れません」

「災難ですか」

「災難でもないでせうが、氣を付けないと遣り損ひます。さうして遣り損へば夫つきり取返しが付かない事です」

十九

敬太郎の好奇心は少し鋭敏になつた。

「全體何んな性質の事ですか」

「夫は起つて見なければ分りません。けれども盗難だの水難だのではない樣です」

「ぢや何うして失敗らない工夫をして好いか、それも分らないでせうね」

「分らない事もありませんが、若し御望みなら、最う一遍占ひ立て直して見て上げても宜う御座んす」

敬太郎は、では御頼み申しますと云はない譯に行かなかつた。婆さんは又纎細な指先を小器用に動かして、例の文錢を裏表に竝べ更へた。敬太郎から云へば先の竝べ方も今度の竝べ方も大抵似たものであるが、婆さんには其所に何か重大の差別があるものと見えて、其一枚を引つ繰り返すにも輕卒に手は下さなかつた。漸く九枚を夫々念入りに片附けた後で、婆さんは敬太郎に向つて「大體分りました」と云つた。

「何うすれば好いんですか」

「何うすればつて、占ひには陰陽の理で大きな形が現はれる丈だから、實地は各自が其場に臨んだ時、其大きな形に合はして考へる外ありませんが、まあ斯うです。貴方は自分の樣な又他人の樣な、長い樣な又短かい樣な、出る樣な又這入る樣なものを持つて入らつしやるから、今度事件が起つたら、第一にそれ

考へたが、自動車事件の記憶がまだ新たに彼の胸を壓迫してゐるので、足を運ぶ勇氣が一寸出なかつた。電話も此際利用しにくかつた。彼は已むを得ず、手紙で用を辨ずる事にした。彼は先達て須永の母に話したと略同樣の顚末を簡略に書いた後で、田口がもう旅行から歸つたか何うか聞き合はせて、若し歸つたなら御多忙中甚だ恐れ入るけれども、都合して會つて呉れる譯には行くまいか、此方は何うせ閑な身體だから、何時でも指定された時日に出られる積りだがと、此間の樣子は、綺麗に忘れた樣な口振を見せた。敬太郎は此手紙を出すと同時に、須永の返事を明日にも豫想した。所が二日立つても三日立つても何の挨拶もないので、少し不安の念に惱まされ出した。なまじひ賣卜者の言葉などに動かされて、恥を搔いては詰らないといふ後悔も交つた。すると四日目の午前になつて、突然田口から電話口へ呼び出された。

二十

電話口へ出て見ると案外にも主人の聲で、今直ぐ來る事が出來るかといふ簡單な問ひ合せであつた。敬太郎はすぐ出ますと答へたが、只夫で電話を切るのは何となく打つ切ら棒過ぎて愛嬌が足りない氣がするので、少し色を着ける爲に、須永君から何か御話しでも御座いましたかと聞いて見た。すると相手は、ええ市藏から御希望を通知して來たのですが、手數だから直接に私の方で御都合を伺ひました。ぢや御待ち申しますから、直ぐどうぞ」と云つて夫なり引つ込んで仕舞つた。敬太郎は又例の袴を穿きながら、今度

ここ樣子が好ささうだと思つた。夫から此間買つた許りの中折を帽子掛けから取ると、未來に富んだ顏に、生氣を漲らして快活に表へ出た。外には白い霜を一度に擺いた日が、木枯しにも吹き捲くられずに、穩やかな往來をおつとりと一面に照らしてゐた。敬太郎は其中を突つ切る電車の上で、光を割いて進む樣な感じがした。

田口の玄關は此間と違つて蕭條してゐた。取次に袴を着けた例の書生が現はれた時は、少し極りが惡かつたが、まさか先達ては失禮しましたとも云へないので、素知らぬ顏をして丁寧に來意を告げた。書生は敬太郎を覺えてゐたのか、居ないのか、只はあと云つたなり名刺を受取つて奧へ這入つたが、やがて出て來て、何うぞ此方へと應接間へ案内した。敬太郎は取次の揃へて呉れた上靴を穿いて、御客らしく通るには通つたが、四五脚ある椅子の何れへ腰を掛けて可いか一寸迷つた。一番小さいのにさへ極めて置けば間違ひはあるまいといふ謙遜から、彼は腰の高い肱懸けも裝飾も附かない最も輕さうなのを擇つて、わざと位置の惡い隅へ席を占めた。

やがて主人が出て來た。敬太郎は使ひ慣れない切り口上を使つて、初對面の挨拶やら會見の禮やらを述べると、主人は輕くそれを聞き流す丈で、只はあはあと挨拶した。さうしていくら區切りが來ても、一向何とも云つて呉れなかつた。彼は主人の態度に失望する程でもなかつたが、自分の言葉がさう思ふ通り長く續かないのに弱つた。一應頭の中にある挨拶を出し切つて仕舞ふと、後は夫限りで、手持無沙汰と極り

ながら默らなければならなかつた。主人は卷煙入から敷島を一本取つて、あとを心持ち敬太郎のゐる方へ押し遣つた。

「市藏から貴方の御話しは少し聞いた事もありますが、一體何ういふ方を御希望なんですか」

實を云ふと、敬太郎には何といふ特別の希望はなかつた。只相當の位置さへ得られゝばと計り考へてゐたのだから、斯う聞かれると盆槍した答より外に出來なかつた。

「凡ての方面に希望を有つてゐます」

田口は笑ひ出した。さうして機嫌の好い顏附をして、學士の數の斯んなに殖えて來た今日、幾何世話をする人があらうとも、さう最初から好い地位が得られる譯のものでないといふ事情を懇ろに說いて聞かせた。然し夫は田口から改めて教はる迄もなく、敬太郎の疾うから痛切に承知してゐる所であつた。

「何でも遣ります」

「何でも遣りますつたつて、まさか鐵道の切符切りも出來ないでせう」

「いゝえ出來ます。遊んでゐるよりは增しですから。將來の見込のあるものなら本當に何でも遣ります。第一遊んでゐる苦痛を逃れる丈でも結構です」

「さう云ふ御考へなら又私の方でも能く氣を附けて置きませう。直ぐといふ譯にも行きますまいが」

「何うぞ。――まあ試しに使つて見て下さい。貴方の御家の――と云つちや餘り變ですが、貴方の私

事にでも可いから一寸使つて見て下さい」

「そんな事でも爲て見る氣がありますか」

「あります」

「それぢや、事に依ると何か頼つて見るかも知れません。何日でも構ひませんか」

「え丶成るべく早い方が結構です」

敬太郎は是で會見を切り上げて、朗らかな顔をして表へ出た。

二十一

穏やかな春の日が又二三日續いた。敬太郎は三階の室から、窓に入る空と樹と屋根瓦を眺めて、自然を橙色に暖める大人しい此日光が、恰も自分の爲に世の中を照らしてゐる樣な愉快を覺えた。彼は此間の會見で、自分に都合の好い結果が、遠い内にわが頭の上に落ちて來るものと固く信ずる樣になつた。さうして其結果が何んな異樣の形を装つて、彼の前に現はれるかを、彼は最も樂しんで待ち暮らした。彼は田口が依頼した仕事のうちには、普通の依頼者の申し出で以上のものが含んでゐた。彼は一定の職業から生ずる義務を尋常に果した許りでなく、刺激に充ちた一時性の用事をも田口から期待した。彼の性質として、もし浪漫的の趣が露を含めて閃めくならば、恐らく尋常の雜務とは切り離された特別の精彩を帶びたものが、

卒然彼の前に投げ出されるのだらう位に考へた。そんな望みを抱いて、彼は毎日美しい日光に浴してゐたのである。

すると四日ばかりして、又田口から電話が掛かつた。少し頼みたい事が出來たが、わざ〳〵呼び寄せるのも氣の毒だし、電話では手間が要つて却て面倒になるし、仕方がないから、速達便で手紙を出す事にしたから、委細はそれを見て承知して呉れ。もし分らない事があつたら、又電話で聞き合はしても可いといふ通知であつた。敬太郎はぼんやり見えてゐた遠眼鏡の度がぴたりと合つた時のやうに愉快な心持がした。彼は机の前を一寸も離れずに、速達便の届くのを待つてゐた。さうして其間絶えず例の想像を逞しくしながら、田口の所謂用事なるものを胸の中で組み立てて見た。其所には何時か須永の門前で見た後姿の女が、稍ともすると斷りなしに入り込んで來た。不圖氣が附いて、もつと實際的のもので有るべき筈だと思ふと、其時丈は自分の空想を叱る樣にしては、彼はもどかしい時を過ごした。

やがて待ち焦がれた狀袋が彼の手に落ちた。彼はすつと音をさせて、封を裂いた。息も繼がずに卷紙の端から端迄を一氣に讀み通して、思はずあつといふ微かな聲を揚げた。與へられた彼の用事は待ち設けた空想よりも猶浪漫的であつたからである。手紙の文句は固より簡單で用事以外の言葉は一切書いてなかつた。今日四時と五時の間に、三田方面から電車に乘つて、小川町の停留所で下りる四十恰好の男がある。それは黑の中折に霜降りの外套を着て、顏の面長い脊の高い、瘦せぎすの紳士で、眉と眉の間に大きな黑

子があるから其特徴を目標に、彼が電車を降りてから二時間以内の行動を探偵して報知しろといふ丈であつた。敬太郎は始めて自分が危險なる探偵小說中に主要の役割を演ずる一個の主人公の樣な心持がし出した。同時に田口が自己の社會的利害を護る爲に、斯んな暗がりの所作を敢てして、他日の用に、他の弱點を握つて置くのではなからうかと云ふ疑ひを起した。さう思つた時、彼は人の狗に使はれる不名譽と不德義を感じて、一種苦悶の脊汗を腋の下に流した。彼は手紙を手にした儘、凝と眸を据ゑたなり固くなつた。然し須永の母から聞いた田口の性格と、自分が直かに彼に會つた時の印象とを纏めて考へて見ると、決してそんな人の惡さうな男とも思はれないので、たとひ他人の内行に探りを入れるにした所で、必ずしも夫程下品な料簡から出るとは限らないといふ判斷も附いて見ると、一旦硬直になつた筋肉の底に、又溫かい血が通ひ始めて、德義に逆らふ吐氣なしに、たゞ興味といふ一點から此問題を面白く眺める餘裕も出來てきた。それで世の中に接觸する經驗の第一着手として、兎も角も田口から依賴された通りに此仕事を遣り終せて見ようといふ氣になつた。彼はもう一遍電報と田口の手紙を讀み直した。さうして其所に書いてある特徴と停留所丈で、果して滿足な結果が實際に得られるだらうか何うかを危めた。

二十二

田口から知らせて來た特徴のうちで、本當に其人の身を離れないものは、眉と眉の間の黒子だけである

が、この日の短かい昨今の、四時とか五時とかいふ薄暗い光線の下で、乘降に忙しい多數の客の中から、指定された局部の一點を目標に、是だと思ふ男を過ちなく見附け出さうとするのは容易の事ではない。ことに四時と五時の間と云へば、丁度役所の退ける刻限なので、丸の内から只一筋の電車を利用して、神田橋を出る役人の數丈でも大したものである。それに外と違つて停留所が小川町だから、年の暮に間もない左右の見世先に、幕だの樂隊だの、蓄音機だのを飾るやら具へるやらして、電燈以外の景氣を附けて、不時の客を呼び寄せる混雜も勘定に入れなければなるまい。それを想像して事の成否を考へて見ると、到底一人の手際ではといふ覺束ない心持が起つて來る。けれども又尋ね出さうとする其人が、霜降りの外套に黑の中折といふ服裝で電車を降りると極まつて見れば、其所にまだ一縷の望がある樣にも思はれる。無論霜降りの外套丈では、どんな恰好にしろ手掛りになりよう筈がないが、黑の中折を被つてゐるなら、色變りより外に用ひる人のない今日、すぐ眼に附くだらう。夫を目宛てに注意したら或は成功しないとも限るまい。

　斯う考へた敬太郎は、兎も角も停留所迄行つて見る事だといふ氣になつた。時計を眺めると、まだ一時を打つた許りである。四時より三十分前に向うへ着くとした所で、三時頃から宅を出れば澤山なのだから、未だ二時間の猶豫がある。彼は此二時間を最も有益に利用する積りで、凝とした儘坐つてゐた。けれども只眼の前に、美土代町と小川町が、丁字になつて交叉してゐる三つ角の雜沓が入り亂れて映る丈で、是と

云つて適當な場所を選ぶに足る上等場所は浮ばなかつた。彼の頭は考へれば考へる程、同じ場所に吸ひ附いたなり丸で動くことを知らなかつた。其所へ、何うしても目指す人には會へまいといふ掛念が、不安を伴なつて胸の中をざわつかせた。敬太郎は一層の事時間が來る迄外を歩き續けに歩いて見ようかと思つた。さう決心をして、兩手を机の緣に掛けて、勢ひよく立ち上がらうとする途端に、此間淺草で占ひの婆さんから聞いた、「近い内に何か事があるから、其時には斯う〳〵いふものを忘れない樣にしろ」といふ注意を思ひ出した。彼は婆さんの其時の言葉を、解すべからざる謎として、殆ど頭の外へ落として仕舞つたにも拘らず、悪戯半分にわざ〳〵紙片に記して机の抽出に入れて置いた。で又其紙片を取り出して、自分の樣で他人の樣な、長い樣で短かい樣な、出る樣で這入る樣なといふ句を飽かず眺めた。始めのうちは今迄通り到底意味のある筈がないとしか見えなかつたが、段々繰り返して讀むうちに、辛抱強く考へさへすれば、斯ういふ妙な特性を有つたものが或は出て來るかも知れないといふ氣になつた。其上敬太郎は婆さんに、自分が持つてゐるんだから、いざといふ場合に忘れない樣になさいと注意されたのを覺えてゐたので、何でも好い、たゞ身の周圍の物から、自分の樣で他人の樣な、長い樣で短かい樣な、出る樣で這入る樣なものを探し出しさへすれば、比較的狹い範圍内で、此問題を解決する事が出來る譯になつて、存外早く片が附くかも知れないと思ひ出した。そこで自由になる是から先の二時間を、全く此謎を解く爲の二時間として、大切に利用しようと決心した。

所が先づ眼の前の机、書物、手拭、座蒲團から順々に進行して行李鞄靴下迄行つたが、一向それらしい物に出合はないうちに、とう〱一時間經つて仕舞つた。彼の頭は焦燥つと共に亂れて來た。彼の觀念は彼の室の中を驅け廻つて落ち附けないので、制するのも聞かずに、戸外へ出て縱横に走つた。やがて彼の前に、霜降りの外套を着た黑の中折を被つた脊の高い瘦せぎすの紳士が、彼の是から探さうといふ其人の權威を具へて、あり〱と現はれた。すると其顏が忽ち大連にゐる森本の顏になつた。彼はだらしのない髭を生やした森本の容貌を想像の眼で眺めた時、突然電流に感じた人の樣にあつと云つた。

二十三

森本の二字は疾うから敬太郎の耳に變な響を傳へる媒介となつてゐたが、此頃ではそれが一層高じて全然一種の符徴に變化して仕舞つた。元から此男の名前さへ出ると、必ず例の洋杖を聯想したものだが、洋杖が二人を繫ぐ緣に立つてゐると解釋しても、或は二人の中を割く邪魔に挾まつてゐると見做しても、兎に角森本と此竹の棒の間にはある距離があつて、さう一足飛に片方から片方へ移る譯に行かなかつたのに、今では夫が一つになつて、森本と云へば洋杖、洋杖と云へば森本といふ位劇しく敬太郎の頭を刺激するのである。其刺激を受けた彼の頭に、自分の所有の樣な又森本の所有の樣な、持主の何方とも片附かないといふ觀念が、熱つた血に流されながら偶然浮かび上がつた時、彼はあゝ是だと叫んで、倒れ掛ける黑い影

の内から、此洋杖丈をうんと捕まへたのである。

「自分の様な他人の様な」と云つた婆さんの謎は是で解けたものと信じて、敬太郎は一人嬉しがつた。けれども未だ「長い様な短かい様な、出る様な這入る様な」といふ所迄は考へて見ないので、彼はあまる二箇目の謎をも等しく此洋杖の中から探し出さうといふ料簡で、更に新たなる努力を鼓舞して掛かつた。

始めは見方一つで長くもなり短かくもなる位の意味かも知れないと思つて、先へ進んで見たが、夫では餘り平凡過ぎて、解釋が附いたも附かないも同じ事の様な心持がした。其所で又後戻りをして、「長い様な短かい様な」といふ言葉を幾度か口の内で繰り返しながら思案した。が、容易に解決の出來る見込は立たなかつた。時計を見ると、自由に使つて可い二時間のうちで、もう三十分しか殘つてゐない。彼は拔け裏と間違へて他の口へ這入り込んだ結果、好んで行き惱みの狀態に悶えてゐるのでは無からうかと、自分で自分の智慧を怨み出した。出端のない行き留りに立つ位なら、もう一遍引き返して、新しい途を探す方が増しだとも考へた。然し斯う時間が逼つてゐるのに、後手から出直しては、到底間に合ふ筈がない、既に此處まで來られたといふ一部分の成功を緣起にして、是非先へ突き拔ける方が順當だとも考へた。是が可からう彼が可からうと右左に思ひ亂れてゐる中に、彼の想像は不圖全體としての杖を離れて、握りに刻まれた蛇の頭に移つた。其瞬間に、鱗のぎら〱した細長い胴と、匙の先に似た短かい頭とを我知らず比較して、胴のない鎌首だから、長くなければならない筈だのに短かく切られてゐる、其所が即ち長い様な短

かい樣な物であると悟つた。彼は此答案を稻妻の如く頭の奧に閃めかして、得意の餘り踴躍した。あとに殘つた「出る樣な這入る樣な」ものは、大した苦勞もなく約五分の間に解けた。彼は鷄卵とも蛙とも何とも名狀し難い或物が、半ば蛇の口に隱れ、半ば蛇の口から現はれて、呑み盡くされもせず、逃れ切りもせず、出るとも這入るとも片の附かない狀態を思ひ浮かべて、すぐ是だと判斷したのである。

是で萬事が綺麗に解決されたものと考へた敬太郎は、躍り上がる樣に机の前を離れて、時計の鎖を帶に絡んだ。帽子は手に持つた儘、袴も穿かずに室を出ようとしたが、あの洋杖を何うして持つて出たものだらうかといふ問題が一寸彼を躊躇さした。あれに手を觸れるのは無論、たとひ傘入れから引き出した處で、森本が置き去りにして行つてから既に久しい今日となつて見れば、主人に斷らないにしろ、咎められたり怪しまれたりする氣遣ひはないに極まつてゐるが、偖彼等が傍に居ない時、又居るにしても見ないうちに、夫を提げて出ようとするには相當の思慮か準備が必要になる。迷信のはびこる家庭に成長した敬太郎は、呪禁に使ふ品物を（是から其目的に使ふんだといふ料簡があつて）手に入れる時には、乾度人の見てゐない機會を偸んで遣らなければ利かないといふ言ひ傳へを、郷里に居た頃、よく母から聞かされてゐたのである。敬太郎は宿の上り口の正面に懸けてある時計を見る振をして、二階の梯子段の中途迄降りて下の樣子を窺つた。

二十四

主人は六疊の居間に、例の通り大きな瀬戸物の丸火鉢を抱へ込んでゐた。細君の姿は何處にも見えなかつた。敬太郎が梯子段の中途で、及び腰をして、硝子越しに障子の中を覗いてゐると、主人の頭の上で急に呼鈴が烈しく鳴り出した。主人は仰向いて番號を見ながら、おい誰かゐないかねと次の間へ聲を掛けた。

敬太郎は又そろ〳〵三階の自分の室へ歸つて來た。

彼はわざ〳〵戸棚を開けて、行李の上に投げ出してあるセルの袴を取り出した。彼は夫を穿くとき、腰板が後に引き摺つて、室の中を歩き廻つた。それから足袋を脱いで、靴下に更へた。是丈身裝を整めた上、彼は又三階を下りた。居間を覗くと細君の姿は依然として見えなかつた。下女も其邊らには居なかつた。呼鈴も今度は鳴らなかつた。家中ひつそり閑としてゐた。たゞ主人丈は前の通り大きな丸火鉢に靠れて、上り口の方を向いたなり凝と坐つてゐた。敬太郎は段々を下迄降り切らない先に、高い所から斜に主人の丸くなつた背中を見て、是はまだ都合が惡いと考へたが、つひに思ひ切つて上り口へ出た。主人は案の定、「御出掛けで」と挨拶した。さうして例の通り下女を呼んで下駄箱に仕舞つてある履物を出させようとした。敬太郎は主人一人の眼を掠めるのにさへ苦心してゐた所だから、此上下女に出られては堪らないと思つて、いや宜しいと云ひながら、自分で下駄箱の垂れを上げて、早速靴を取り卸した。旨い具合に下女

は彼が土間へ降り立つ迄出て來なかつた。けれども、亭主は依然として此方を向いてゐた。

「一寸御願ひですがね。室の机の上に今月の法學協會雜誌がある筈だが、一寸取つて來て吳れませんか。靴を穿いてしまつたんで、又上がるのが面倒だから」

敬太郎はこの主人に多少法律の心得があるのを知つて、わざと斯う頼んだのである。主人は自分より外のものでは到底辨じない用事なので「はあ能うがす」と云つて氣作に立つて梯子段をのぼつて行つた。敬太郎は其ひまに例の洋杖を傘入れから抽き取つたなり、抱き込む樣に羽織の下へ入れて、主人の座に歸らないうちに颯と表へ出た。彼は洋杖の頭の曲がつた角を、右の脇の下に感じつゝ急ぎ足に本郷の通迄來た。其所で一旦羽織の下から杖を出して蛇の首を熟と眺めた。さうして袂の手帛で上から下迄綺麗に拭いた。夫から後は普通の杖の樣に右の手に持つて、力任せに振り／＼歩いた。電車の上では、蛇の頭へ兩手を重ねて、其上に顋を載せた。さうして漸と今一段落附いた自分の努力を顧て、ほつと一息吐いた。同時に是から先指定された停留所へ行つてからの成否が又氣に掛かり出した。考へて見ると、是程骨を折つて、偸む樣に持ち出した洋杖が、何うすれば眉と眉の間の黑子を見分ける必要品になるのか、全く彼の思量の外にあつた。彼はたゞ婆さんに云はれた通り、自分の樣な他人の樣な、長い樣な短かい樣な、出る樣な這入る樣なものを、一生懸命に探し當てて、それを忘れないで携へてゐるといふ迄であつた。此怪しげに見えて平凡な、しかも無暗に輕い竹の棒が、寐かさうと起こさうと、手に持たうと袖に隱さうと、未知の人

を探す上に、果して何の役に立つか知らんと疑つた時、彼は一寸の間、帽を振ひ落とした人の様にけうりとして、車内を見廻した。さうして頭の毛穴から湯気の立つ程業を煮やした先刻の努力を気恥づかしくも感じた。彼は自分で自分の所作を紛らす為に、わざと洋杖を取り直して、電車の床をとん／＼と軽く叩いた。

やがて目的の場所へ来た時、彼は取り敢ず青年会館の手前から引き返して、小川町の通へ出たが、四時にはまだ十五分程間があるので、彼は人通りと電車の響を横切つて向う側へ渡つた。其所には交番があつた。彼も交番の前に立つてゐる巡査と同じ態度で、赤いポストの傍から、真直に南へ走る大通と、緩い弧線を描いて左右に廻り込む広い往来とを眺めた。是から自分の活躍すべき舞台面を一応斯ういふ風に検分した後で、彼はすぐ停留所の所在を確めに掛かつた。

二十五

赤い郵便函から五六間東へ下ると、白いペンキで小川町停留所と書いた鉄の柱がすぐ彼の眼に入つた。此所にさへ待つてゐれば、仮令混雑に取り紛れて注意人物を見失ふ迄も、自己に自分の部署に着いたといふ覚悟はあると考へた彼は、是丈の安心を胸に据つた上、又目標の鉄の柱を離れて、四辺の光景を見廻した。彼のすぐ後には屈竟の瀬戸物屋があつた。小さい盃の沢山並んだのを箱入りにして額の様に仕立て

たのがその軒下に懸かつてゐた。大きな鐵製の鳥籠に、陶器で出來た餌壺を幾個となく外から括り附けたのも、其所にぶら下がつてゐた。其隣は皮屋であつた。眼も爪も全く生きた時の儘に殘した大きな虎の皮に、緋羅紗の縁を取つたのが此店の重な裝飾であつた。敬太郎は琥珀に似た其虎の眼を深く見詰めて立つた。細長くつて眞白な皮で出來た襟巻らしいものの先に、豆狸の樣な顔が附着してゐるのも滑稽に見えた。彼は時計を出して時間を計りながら、又次の店に移つた。さうして瑪瑙で刻つた透明な兎だの、紫水晶で出來た角形の印材だの、翡翠の根懸だの孔雀石の緒締だのの、金の指輪やリンクスと共に、美しく竝んでゐる寶石商の硝子窓を覗いた。

敬太郎は斯うして店から店を順々に見ながら、つい天下堂の前を通り越して唐木細工の店先迄來た。其時後から來た電車が、突然自分の歩いてゐる往來の向う側で留まつたので、若しやといふ心から、筋違に通を横切つて細い横町の角にある唐物屋の傍へ近寄ると、其所にも一本の鐵の柱に、先刻のと同じ樣な、小川町停留所といふ文字が白く書いてあつた。彼は念の爲此角に立つて、二三臺の電車を待ち合はせた。すると最初には青山といふのが來た。次には九段新宿といふのが來た。が、何れも萬世橋の方から眞直に進んで來るので彼は漸く安心した。是でよもやの懸念もなくなつたから、そろ／＼元の位地に歸らうといふ積りで、彼は足の向きを更へに掛かつた途端に、南から來た一臺がぐるりと美土代町の角を回轉して、又敬太郎の立つてゐる傍で留まつた。彼は其車の運轉手の頭の上に黒く掲げられた巣鴨の二字を讀んだ時、

始めて自分の不注意に氣が附いた。三田方面から丸の内を拔けて小川町で降りるには、神田橋の大通を眞直に突き當たつて、左へ曲がつても今敬太郎の立つてゐる停留所で降りられるし、又右へ曲がつても先刻彼の待ち合はして置いた瀬戸物屋の前で降りられるのである。さうして兩方とも同じ小川町停留所と白いペンキで書いてある以上は、自分が是から後を跟けようといふ黒い中折の男は、何方へ降りるのだか、彼には丸で見當が附かない事になるのである。眼を走らせて、二本の赤い鐵柱の距離を目分量で測つて見ると、一町には足りない位だが、幾何眼と鼻の間だからと云つて、一方丈を專門にしてさへ覺束ない彼の監視力に對して、兩方共手落ちなく見張り終せる手際を要求するのは、何れ程自分の敏腕を高く見積もりたい今の敬太郎にも絶對の不可能であつた。彼は自分の住居つてゐる地理上の關係から、常に本郷三田間を連絡する電車に許り乘つてゐた爲、乘換方面から水道橋を通つて同じく三田に續く線路の存在に、今が今迄氣が附かずにゐた自己の迂闊を深く後悔した。

彼は咄嗟の間に不圖思ひ附いた窮策として、須永の助力でも借りに行かうかと考へた。然し時計はもう四時七分前に逼つてゐた。つい鼻の先に住んでゐる須永だけれども、門前迄驅け附ける時間と、かい摘んで用事を呑み込ませる時間を勘定に入れれば、到底間に合ひさうにない。よし五分位の間は取れるとした所で、須永に一方の見張りを頼む以上は、もし例の紳士が彼のゐる方へ降りるならば、何かの手段で敬太郎に合圖をしなければならない。それも此人込の中だから、手を擧げたり手帛を振る位では一寸通じかねる。紛

れもなく敬太郎に分らせようとするには、往來を驚かす程な大きな聲で叫ぶに限ると云つても可い位なものだが、さう云ふ突飛は餘程な場合でも體裁を重んずる須永の樣な男に出來る筈がない。萬一我慢して遣つて呉れた處で、此方から驅けて行く間には、肝心の黒の中折帽を被つた男の姿は見えなくなつて仕舞はないとも云へない。――斯う考へた敬太郎は已むを得ないから運を天に任せて何方か一方の停留所丈守らうと決心した。

二十六

決心は爲たやうなものゝ、夫では今立つてゐる所を動かないための横着と同じ事になるので、わざと成效を度外に置いて仕事に掛かつた不安を感ぜずには居られなかつた。彼は首を延ばす樣にして、又東の停留所を望んだ。位地の所爲か、向きの具合か、夫とも自分が始終乘降に慣れてゐる譯か、どうも其方の方が陽氣に見えた。尋ねる人も何だか向うで降りさうな心持がした。彼はもう一度見張りのステーションを移さうかと思ひながら、猶且決しかねて暫く躊躇してゐた。すると其所へ江戸川行の電車が一臺來てするくと留まつた。誰も降者がないのを確めた車掌は、一分と立たないうちに又車を出さうとした。敬太郎は錦町へ拔ける細い横町を背にして、眼の前の車臺には殆ど氣の附かない程、此所にゐようか彼所へ行かうかと迷つてゐた。所へ後の横町から突然驅け出して來た一人の男が、敬太郎を突き除ける樣にして、ハ

ンドルへ手を掛けた運轉手の傍へ飛び上がつた。敬太郎の驚きが未だ回復しないうちに、電車はがたりと云ふ音を出して旣に動き始めた。飛び上がつた男は硝子戸の内へ半分身體を入れながら失策しましたと云つた。敬太郎は其男と顏を見合はせた時、彼の最後の視線が、自分の足の下に落ちたのを注意した。彼は敬太郎に當たつた拍子に、敬太郎の持つてゐた洋杖を蹴飛ばして、それを持主の手から地面の上へ振り落とさしたのである。敬太郎は直ぐ曲んで洋杖を拾ひ上げようとした。彼は其時蛇の頭が偶然東向きに倒れてゐるのに氣が附いた。さうして其頭の恰好を何となしに、方角を敎へる指標の樣に感じた。

「矢つ張り東が好からう」

彼は早足に瀬戸物屋の前迄歸つて來た。其所で本郷三丁目と書いた電車から降りる客を、一人殘らず物色する氣で立つた。彼は最初の二三臺を親の敵でも覘ふ樣に怖い眼附で吟味した後、少し心に餘裕が出來るに連れて、腹の中が段々氣丈になつて來た。彼は自分の眼の屆く廣場を、一面の舞臺と見傚して、其上に自分と同じ態度の男が三人ゐる事を發見した。其一人は派出所の巡査で、是は自分と同じ方を向いて同じ樣に立つてゐた。もう一人は天下堂の前にゐるポイントマンであつた。最後の一人は廣場の眞中に靑と赤の旗を神聖な象徵の如く振り分ける分別盛りの中年者であつた。其内で何時出て來るか知れない用事を期待しながら、人目にはさも退屈さうに立つてゐるものは巡査と自分だらうと敬太郎は考へた。

電車は入れ代り立ち代り彼の前に留まつた。乘るものは無理にも窮屈な箱の中に押し込まうとする、降

りるものは權柄づくで上から伸し懸かつて來る。敬太郎は何處の何物とも知れない男女が集まつたり散つたりする爲に、自分の前で無作法に演じ出す一分時の爭ひを何度となく見た。けれども彼の目的とする黑の中折の男はいくら待つても出て來なかつた。ことに依ると、もう疾うに西の停留所から降りて仕舞つたものではなからうかと思ふと、斯うして役にも立たない人の顏ばかり見詰めて、眼のちら／＼する程一つ所に立つてゐるのは、隨分馬鹿氣た所作に見えて來る。敬太郎は下宿の机の前で熱に浮かされた人のやうに夢中で費やした先刻の二時間を、充分須永と打ち合せをして彼の援助を得るために利用した方が、遙かに常識に適つた遣り口だと考へ出した。彼が此苦い氣分を痛切に嘗めさせられる頃から往來は段々光を失つて、眼に映る物の色が一面に蒼く沈んで來た。陰鬱な冬の夕暮を補ふ瓦斯と電氣の光がぽつ／＼其所らの店硝子を彩どり始めた。不圖氣が附いて見ると、敬太郎から一間許りの所に、廂髮に結つた一人の若い女が立つてゐた。電車の乘降が始まる度に、彼は注意の餘波を自分の左右に拂つてゐた積りなので、何時何方から歩き寄つたか分らない婦人を思はぬ近くに見た時は、何より先にまづ其存在に驚かされた。

二十七

女は年に合はして地味なコートを引き摺る樣に長く着てゐた。敬太郎は若い人の肉を飾る華麗な色を其裏に想像した。女は又わざと夫を世間から押し包む樣にして立つてゐた。襦袢の襟さへ羽二重の襟巻で隱

してゐた。此羽二重の白いのが、夕暮の濃くなるに連れて、空氣から浮き出して來る外に、女は身の周圍に何といつて他の注意を惹くものを着けて居なかつた。けれども時節柄に頓着なく、常人の好尚を示した此一色が、敬太郎には却つて際立つて見えた。彼は光の拔けて行く寒い空の下で、不調和な春の物に出逢つた感よりも、暮けた往來に冴え／″＼しい一點を認めた氣分になつて女の顏の邊を注意した。女は敬太郎の視線を眞面に受けた時、心持ち身體の向きを變へた。夫でも頓落ち附かない樣子をして、右の手を耳の所迄上げて、鬢から洩れた毛を後へ掻き遣る風をした。固より女の髮は綺麗に揃つてゐたのだから、此擧動が實のない癖としてのみ映つたのだが、其手を見た時敬太郎は又新たな注意を女から強ひられた。女は普通の日本の女性の樣に絹の手袋を穿めてゐなかつた。きちりと合ふ山羊の革製ので、華奢な指をつゝましやかに包んでゐた。夫が色の着いた蠟を薄く手の甲に流したと見える程、肉と革がしつくり喰つ附いたまゝ、一筋の皺も一分の弛みも餘してゐなかつた。敬太郎は女の手を上げた時、此手袋が女の白い手頸を三寸も深く隱してゐるのに氣が附いた。彼は夫限り眼を轉じて又電車に向つた。けれども乘降の一混雜が濟んで、思ふ人が出て來ないと、また心に二三分の餘裕が出來るので、それを利用しようと待ち構へる程の執着はなかつたにせよ、電車の通り越した相間々々には覺られない位の視力を使つて常に女の方を注意してゐた。

始め彼は此女を「本郷行」か「龜澤町行」に乘るのだらうと考へてゐた。所が南方の電車が一順廻つて

來て、自分の前に留まつても、一向來る樣子がないので、彼は少々變に思つた。或は無理に込み合つてる車臺に乘つて、押し潰されさうな窮屈を我慢するよりも、少し時間の浪費を怺へた方が差引き得になるといふ主義の人かとも考へて見たが、滿員といふ札も懸けず、一つや二つの空席は充分ありさうなのが通つて來ても、女は少しも乘る素振を見せないので、敬太郎は愈變に思つた。女は敬太郎から普通以上の注意を受けてゐると氣が付いたらしく、彼が少しでも手足の態度を改めると、雨の降らないうちに傘を廣げる人の樣に、わざと彼の觀察を避ける準備をした。さうして故意に反對の方を見たり、或は向ふへ二三步あるき出したりした。夫がため、妙に遠慮深い所の出來た敬太郎は成るべく露骨に女の方を見るのを憚んでゐた。が仕舞に不圖氣が附いて、此女は不案内のため、自分の勝手で好い加減に極めた停留所の前に來て、乘れもしない電車を何時迄も待つてゐるのではなからうかと思つた。それなら親切に教へて遣るべきだといふ勇氣が急に起つたので、彼は逡巡する氣色もなく、眞正面に女の方を向いた。すると女はふいと步き出して、二三間先の寶石商の窓際迄行つたなり、恰も敬太郎の存在を認めぬものの如くに、其所で瞳を窓硝子に着ける樣に、中に並べた指環だの、帶留だの枝珊瑚の置物だのを眺め始めた。敬太郎は見ず知らずの他人に入らざる好意立てをして、却て自分と自分の品位を落としたのを馬鹿らしく感じた。

女の容貌は始めから大したものではなかつた。眞向きに見ると夫程でもないが、橫から眺めた鼻附は誰の目にも少し低過ぎた。其代り色が白くて、晴々しい心持のする眸を有つてゐた。寶石商の電燈は今硝子

越しに婦人の鼻と、膨くらした頬の一部分と額とを照らして、斜かけに立つてゐる敬太郎の眼に、光と陰とから成る一種特殊な輪廓を與へた。彼は其輪廓と、長いコートに包まれた恰好の可い婦人の姿とを胸に收めて、又電車の方に向つた。

二十八

電車が又二三臺來た。さうして二三臺共又敬太郎の失望を繰り返さして東へ去つた。彼は成功を思ひ切つた人の如くに帽の下から時計を出して眺めた。五時はもう疾うに過ぎてゐた。彼は今更氣が附いた樣に、頭の上に被さる黒い空を仰いで、苦々しく舌打ちをした。是程骨を折つて網を張つた中へ掛からない鳥は、西の停留所から不意で逃げたんだと思ふと、他を瞞す爲にわざわざ拵へた婆さんの豫言も、大事さうに持つて出た竹の洋杖も、其洋杖が與へて呉れた方角の暗示も、悉く忌々しさの種になつた。彼は暗い夜を欺いて輝く電光にちらちらする電燈の光を見廻して、自分を其中心に見出だした時、此明るい輝きも畢竟自分の見逃した夢の影なんだらうと考へた。彼は其位眼を覺ましながらまだ其位寢惚けた心持を失はずに立つてゐたが、やがて早く下宿へ歸つて正氣の人間に復らうといふ覺悟をした。洋杖は自分の馬鹿を嘲る記念だから、歸りの掛けに人の見てゐない所で二つに折つて、蛇の頭も鐵の輪の突きがねも滅茶々々に、萬世橋から神田川の水へ放り込んで遣らうと決心した。

彼は既に動かうとして一步足を移しかけた時、又先刻の若い女の存在に氣が附いた。女は何時の間にか寶石商の窓を離れて、元の通り彼から一間許りの所に立つてゐた。脊が高いので、手足も人尋常より恰好よく伸びた所を、彼は快く始めから眺めたのだが、今度は殊に其右の手が彼の心を惹いた。女は自然の儘に夫をすらりと垂れたなり、丸で他の注意を豫期しないでゐたのである。彼は素直に調子の揃つた五本の指と、しなやかな革で堅く括られた手頸と、手頸と袖口の間から微かに現はれる肉の色を夜の光で認めた。風の少ない晩であつたが、動かないで長く一所に立ち盡くすものに、寒さは辛く當たつた。女は心持ち顋を襟巻の中に埋めて、俯目勝ちに凝としてゐた。敬太郎は自分の存在をわざと眼中に置かない樣な此眼遣ひの底に、却て自分が氣に掛かつてゐたらしい反證を得たと信じた。彼が先刻から盗取眼で、黒の中折帽を被つた紳士を探してゐる間、此女は彼と同じ鋭い注意を集めて、觀察の矢を絶えず此方に射懸けてゐたのではなからうか。彼は或男を探偵しつゝ、又或女に探偵されつゝ、一時間餘りを此所に過ごしたのではなからうか。けれども何處の何物とも知れない男の、何をするか分らない行動を、何の爲に探るのだか、彼には何等の考へがなかつた如く、何處の何物とも知れない女から何を仕出かすか分らない人として何の爲に自分が覘はれるのだか、其所へ行くと矢張り丸で要領を得なかつた。敬太郎は此方で少し歩き出して見せたら向うの樣子がもつと鮮明に分るだらうといふ氣になつて、そろりそろりと派出所の後を西の方へ動いて行つた。勿論女に勘附かれない爲に、彼は振り向いて後を見る動作を固く憚つた。けれども何時迄

と時計を見て先へ行つては、肝心の目的を達する機會がないので、彼は十間程来たと思ふ時分に、わざと見たくもない硝子窓を覗いて、其所に飾つてある天鵞絨の襟の着いた女の子のマントを眺める風をしながら、そつと後を振り向いた。すると女は自分の背後にゐる所ではなかつた。延び上がつても色々な人が自分を追ひ越す樣に後から後から来る陰になつて、白い襟巻も長いコートも更に彼の眼に入らなかつた。彼は其位置へ進む勇氣があるかを自分で自分に疑つた。黒い中折の帽子を被つた人の事なら、定刻の五時を過ぎた今だから、斷念してもたいした遺憾はないが、女の方は何んなつまらない結果に終らうとも、最う少し觀察してゐたかつた。彼は女から自分が探偵されてゐると云ふ疑念を逆に投げ返して、此方から女の行動を今しばらく注意して見ようといふ物數奇を起した。彼は落し物を拾ひに歸る人の急ぎ足で、又元の派出所近く来た。そこの暗い陰に身を寄せる樣にして窺ふと、女は依然として電車と逆の方を向いて立つてゐた。敬太郎の戻つた事には丸で氣が附いてゐない風に見えた。

二十九

其時敬太郎の頭に、此女は處女だらうか細君だらうかといふ疑ひが起つた。女は現代多數の日本婦人にあまねく行はれる廂髪に結つてゐるので、其邊の區別は始めから不分明だつたのである。が、愈物陰に来て、半ば横になつた其姿を眺めた時には、第一番に何方の階級に屬する人だらうといふ問題が、新たに彼

を纏つて來た。
見懸けからいふと或は人に嫁いだ經驗がありさうにも思はれる。然し身體の發育が尋常より遙かに好いから事によれば年は存外取つて居ないのかも知れない。夫なら何故あんな地味な服裝をしてゐるのだらう。敬太郎は婦人の着る着物の色や縞柄に就いて、何をいふ權利も有たない男だが、若い女なら此陰鬱な師走の空氣を跳ね返す樣に、派出な色を肉の上に重ねるものだ位の漠とした觀察はあつたのである。彼は此女が若々しい自分の血に高い熱を與へる刺激性の文を何處にも見せて居ないのを不思議に思つた。女の身に着けたものの內で、纔かに人の注意を惹くのは頸の周圍を包む羽二重の襟卷丈であるが、夫はたゞ淸いと云ふ感じを起す寒い色に過ぎなかつた。あとは冬枯の空と似合つた長いコートですぽりと隱してゐた。
敬太郎は年に合はして餘りに媚びる氣分を失ひ過ぎた此衣服を再び後から見て、何うしても旣に男を知つた結果だと判じた。其上此女の態度には何處か大人びた落附きがあつた。彼は其落附きを品性と敎育から來た所得とは見做し得なかつた。家庭以外の空氣に觸れたため、初々しい羞恥が、手帛に振り懸けた香水の香の樣に自然と拔けて仕舞つたのではなからうかと疑つた。それ許りではない、此女の落附きの中には、落ち附かない筋肉の作用が、身體全體の運動となつたり、眉や口の運動となつて、ちよい／＼出て來るのを彼は先刻目擊した。最も鋭敏に動くものは其眼であらうと彼は疾くに認めてゐた。けれども其銳敏に動かうとする眼を、强ひて動かすまいと力める女の態度も亦同時に認めない譯に行かなかつた。だ

から此女の落付きは、自分で自分の神経を殺してゐるといふ自覚に伴なつたものだと彼は断定して居た。

敬太郎が今迄後から見た女は服装といひ気分といひ比較的沈静して両方の間に旨く調子が取れてゐる様に思はれた。彼女は先刻と違つて、別に姿勢を改めるでもなく、そろ／＼歩き出すでもなく、寶石商の窓へ寄り添ふでもなく、寒さを凌ぎかねる風情もなく、殆ど閑雅とでも形容したい様子をして、一段高くなつた人道の端に立つてゐた。傍には次の電車を待ち合はせる人が二三人散らばつてゐた。彼等は皆向うから来る車臺を見詰めて、早く自分の傍へ招き寄せたい風に見えた。敬太郎が立ち退いたので大いに安心したらしい彼女は、其中で最も熱心に何かを待ち受ける一人となつて、筋向うの曲り角を凝と注意し始めた。敬太郎は派出所の裏を上へ廻つて車道へ降りた。さうしてペンキ塗の交番を楯に、巡査の立つてゐる横から女の顔を覗ふ様に見た。さうして其表情の変化に又驚かされた。今迄後姿を眺めて物陰にゐた時は、彼女を包む一色の目立たないコートと、其脊の高さと、大きな廂髪とを材料に、想像の国で寧ろ自由過ぎる結論を弄んだのだが、斯うして彼女の知らない間に、其顔を遠慮なく眺めて見ると、全く新しい人に始めて出逢つた様な気がしない訳に行かなかつた。要するに女は先刻より大変若く見えたのである。切に何物かを待ち受けてゐる其眼も其口も、たゞ生々した一種華やかな気色に充ちて、夫より外の表情は毫も見当たらなかつた。敬太郎は其中に幽かな無邪気さへ認めた。

やがて女の見詰めてゐる方角から一輛の電車が弓なりに曲がつた線路を、ぐるりと緩く廻転して来た

それが女の居る前で滑る樣に留まつた時、中から二人の男が出た。一人は紙で包んだボール箱の樣なものを提げて、すた／＼巡査の前を通り越して人道へ飛び上がつたが、一人は降りると直に女の前に行つて、其所に立ち留まつた。

三十

敬太郎は女の笑ひ顔を此時始めて見た。唇の薄い割に口の大きいのを其特徴の一つとして彼は最初から眺めてゐたが、美しい齒を露き出しに現はして、潤澤の饒かな黒い大きな眼を、上下の瞼の觸れ合ふ程、共に寄せた時は、此女から夢にも豫期しなかつた印象が新たに彼の頭に刻まれた。敬太郎は女の笑ひ顔に見惚れると云ふよりも寧ろ驚いて相手の男に視線を移した。すると其男の頭の上に黒い中折が乘つてゐるのに氣が附いた。外套は判切霜降りとは見分けられなかつたが、帽子と同じ暗い光を敬太郎の眸に投げた。其上脊は高かつた。痩せぎすでもあつた。たゞ年齢の點に至ると、敬太郎には兎角の判斷を下しかねた。けれども其人が壽命の度盛の上に於て、自分とは遙か隔たつた向うに居る事丈は慥かなので、彼は此男を躊躇なく四十恰好と認めた。是丈の特點を前後なく殆ど同時に胸に入れ得た時、彼は自分が先刻から馬鹿を盡くして附け覘つた本人がやつと今電車を降りたのだと斷定しない譯に行かなかつた。彼は例刻の五時が疾うの昔に過ぎたのに、妙な酔興を起して、矢張り同じ所にぶら附いて居た自分を仕合せだと思つた。

くして、自分の目的を自分で打ち毀すと同じ結果になる。
斯う考へた敬太郎は、自然の順序として相應の機會が廻つて來る迄は、黒子の有る無しを見屆ける丈は差し控へた方が得策だらうと判斷した。其代り見え隱れに二人の後を跟けて、出來得るならば斷片的でも可いから、彼等の談話を小耳に挾まうと覺悟した。彼は先方の許諾を待たないで、彼等の言動を、ひそかに我胸に疊み込む事の德義的價値に就いて、別に良心の相談を受ける必要を認めなかつた。さうして自分の骨折から出る結果は、世故に通じた田口によつて、必ず善意に利用されるものと只淡泊に信じてゐた。
やがて男は女を誘ふ風をした。女は笑ひながら夫を拒む樣に見えた。仕舞に半ば向き合つてゐた二人が、肩と肩を揃へて瀨戸物屋の軒端近く歩き寄つた。其所から手を組み合はせない許りに竝んで東の方へ歩き出した。敬太郎は二三間早足に進んで、すぐ彼等の背後迄來た。さうして自分の歩調を彼等と同じ速度に改めた。萬一女に振り向かれても、疑惑を免れる爲に、彼は決して彼等の後姿には眼を注がなかつた。偶然前後して天下の往來を同じ方角に行くものの如くに、故意とあらぬ方を見て歩いた。

三十一

「だつて餘りだわ。斯んなに人を待たして置いて」
敬太郎の耳に入つた第一の言葉は、女の口から出た斯ういふ意味の句であつたが、是に對する男の答は

全く聞き取れなかつた。夫から五六間行つたと思ふ頃、二人の足が急に今迄の歩調を失つて、並んだ影法師が殆ど敬太郎の前に立ち塞がりさうにした。敬太郎の方でも、後から向うに突き當たらない限りは先へ通り抜けなければ跋が悪くなつた。彼は二人の後戻りを恐れて、急に傍にあつた菓子屋の店先へ寄り添ふやうに自分を片附けた。さうして其所に並んで居る大きな硝子壺の中のビスケットを見詰める風をしながら、二人の動くのを待つた。男は外套の中へ手を入れる様に見えたが、夫が済むと少し身體を横にして、下向きに右手で持つたものを店の灯に映した。男の顔の下に光るものが金時計である事が、其時敬太郎に解つた。

「まだ六時だよ。そんなに遅かあない」

「遅いわ貴方、六時なら。妾もう少しで歸る所よ」

「何うも御氣の毒さま」

二人は又歩き出した。敬太郎も壺入りのビスケットを見棄てて其後に従つた。二人は淡路町迄来て其所から駿河臺下へ抜ける細い横町を曲がつた。敬太郎も續いて曲がらうとすると、二人は其角にある西洋料理屋へ入つた。其時彼は其門口から射す強い光を浴びた男と女の顔を横から一目見た。彼等が停留所を離れる時、二人連れ立つて何處へ行くだらうか、敬太郎には丸で想像も附かなかつたのだが、突然斯んな家へ入られて見ると、何でもない所丈に、却て案外の感に打たれざるを得なかつた。それは寶亭と云つて、

敬太郎の元から知つてゐる料理屋で、古くから大學へ出入りをする家であつた。近頃普請をしてから新しいペンキの色を半分電車通に曝して、斜懸けに立ち切られた様な棟を南向きに見せてるのを、彼は通り掛りに時々注意した事がある。彼は其薄青いペンキの光る内側で、額に仕立てたミユンヘン麥酒の廣告寫眞を仰ぎながら、肉刀と肉叉を凄じく鬪はした數度の記憶さへ有つてゐた。

二人の行く先に就いては、是といふ明らかな希望も豫期も無かつたが、少しは紫がゝつた空氣の匂ふ迷路の中に引き入れられるかも知れない位の感じが暗に働いて是迄後を跟けて來た敬太郎には、馬鈴薯や牛肉を揚げる油の臭ひが、臺所からぷん〱往來へ溢れる西洋料理屋は餘りに平凡らしく見えた。けれども彼は、二人の身體が、誰にでも近寄る事の出來る、普通の洋食店のペンキの奥に閉はれてゐるのを寧ろ心自分の到底近寄れない幽玄な所へ姿を隱して、夫限り出て來ないよりは、遙かに都合が好いと考へ直した丈夫だと覺つた。幸ひ彼は此位な程度の家で、冬空の外氣に刺激された食慾を充たすに足る程の財布を懷中してゐた。彼はすぐ二人の後を追つて其所の二階へ上らうとしたが、電燈の強く往來へ射す門口迄來た時、不圖氣が附いた。既に女から顏を覺えられた以上、殆ど同時に一つ二階へ押し上がつては不味い。ひよつとすると此人に自分を跟けて來たのだといふ疑惑を故意先方に與へる譯になる。

敬太郎は何氣ない振をして、往來へ射す光を横切つた儘、黑い小路を一丁許り先へ歩いた。さうして其小路の盡きる坂下から又黑い人となつて、自分の影法師を自分の身體の中へ疊み込んだ様にひつそりと明

るい門口迄歸つて來た。それから其門を潛つた。時々來た事があるので、彼は此家の勝手を略承知してゐた。下には客を通す部屋がなくつて、二階と三階丈で用を辨じてゐるが、餘程込み合はなければ三階へは案内しない、大抵は二階で濟むのだから、上がつて右の奥か、左の横にある廣間を覗けば、大抵二人の席が見えるに違ひない、もし其處に居なかつたら表の方の細長い室迄開けてやらう位の考へで、階段を上がり掛けると、白服の給仕が彼を案内すべく上り口に立つてゐるのに氣が附いた。

三十二

敬太郎は手に持つた洋杖を其儘に段々を上り切つたので、給仕は彼の席を定める前に、まづ其洋杖を受取つた。同時に此方へと云ひながら背中を向けて、右手の廣間へ彼を案内した。彼は給仕の後から自分の洋杖が何處に落ち附くかを一目見届けた。すると其所に先刻注意した黒の中折帽が掛かつてゐた。霜降りらしい外套も、女の着て居た色合のコートも釣るしてあつた。給仕が其裾を動かして、竹の洋杖を突込んだ時、大きな模樣を拔いた羽二重の裏が敬太郎の眼にちらついた。彼は蛇の頭がコートの裏に隱れるのを待つて、更に其持主の方に眼を轉じた。幸ひに女は男と向き合つて、入口の方に背中許りを見せてゐた。新しい客の來た物音に、振り返りたい氣があつても、ぐるりと廻るのが、一旦席に落ち附いた品位を崩す恐れがあるので、必要のない限り、普通の婦人はさういふ動作を避けたがるだらうと考へた敬太郎は、女

の後姿を眺めながら、一先づ安堵の思ひをした。女は彼の推察通り果して後を向かなかつた。彼は其間に女の坐つてゐるすぐ傍迄行つて背中合せに第二列の食卓に就かうとした。其時男は顔を上げて、まだ腰も掛けず向きも改めない敬太郎を見た。彼の食卓の上には支那めいた鉢に植ゑた松と梅の盆栽が飾り附けてあつた。彼の前にはスープの皿があつた。彼は其中に大きな匙を落としたなり敬太郎と顔を見合はせたのである。二人の間に横たはる六尺に足らない距離は明らかな電燈が隈なく照らしてゐた。卓上に掛けた白い布が又此明るさを助けるやうに、潔い光を四方の食卓から反射してゐた。敬太郎は斯ういふ都合のいゝ條件の具備した室で、男の顔を満足する迄見た。さうして其顔の眉と眉の間に、田口から通知のあつた通り、大きな黒子を認めた。

此黒子を別にして、男の容貌に是と云つた特異な點はなかつた。眼も鼻も口も凡て人並であつた。けれども離れ〴〵に見ると凡庸な道具が揃つて、面長な顔の表に夫々の位地を占めた時、彼は尋常以上に品格のある紳士としか誰の目にも映らなかつた。敬太郎と顔を合はせた時、スープの中に匙を入れた儘、啜る手を少時已めた態度などは、何處かに寧ろ氣高い風を帯びてゐた。敬太郎はそれなり背中を彼の方に向けて自分の席に着いたが、探偵といふ文字に普通附着してゐる意味を心のうちで考へ出して、此男の風采態度と探偵とは到底釣り合はない性質のものだといふ氣がした。敬太郎から見ると、此人は探偵して然るべき何物をも彼の人相の上に有つて居なかつたのである。彼の顔の表に並んでゐる眼鼻口の何れを取つても、

世の奥に秘密を隠さうとするには、餘りに出来が尋常過ぎたのである。彼は自分の席へ着いた時、田口から引き受けた此宵の仕事に對する自分の興味が、既に三分の一ばかり蒸發した樣な失望を感じた。第一斯んな詰らない仕事を田口から引き受けた德義上の可否さへ疑はしくなつた。

彼は自分の注文を通したなり、ポカンとして麵麭に手も觸れずに居た。男と女は彼等の傍に坐つた新しい客に幾分か遠慮の氣味で、一寸の間話しを途切らした。けれども敬太郎の前に暖められた白い皿が現はれる頃から、又少し寛づいたと見えて、二人の聲が互違ひに敬太郎の耳に入つた。——

「今夜は不可ないよ。少し用があるから」

「何んな用？」

「何んな用つて、大事な用さ。中々さう安くは話せない用だ」

「あら好くつてよ。妾ちやんと知つてゐるわ。——散々つぱら他を待たした癖に」

女は少し拗ねたやうな物の云ひ方をした。男は四邊に遠慮する風で、低く笑つた。二人の會話は夫限り靜かになつた。やがて思ひ出した樣に男の聲がした。

「何しろ今夜は少し遲いから止さうよ」

「些とも遲かないわ。電車に乗つて行きやあ直きぢやありませんか」

女が勸めてゐる事も男が躊躇してゐる事も敬太郎には能く解つた。けれども彼等が何處へ行く積りなの

だか、その肝心な目的地になると、彼には何等の觀念もなかつた。

三十三

もう少し聞いてゐる内には或は中りが附くかも知れないと思つて、敬太郎は自分の前に殘された皿の上の肉刀と、其傍に轉がつた赤い人參の一切を眺めてゐた。女は猶男を强ひる事を已めない樣子であつた。男は其度に何とか蚊とか云つて逃れてゐた。然し相手を怒らせまいとする優しい態度は何時も變らなかつた。敬太郎の前に新しい肉と青豌豆が運ばれる時分には、女もとうとう我を折り始めた。敬太郎は心の内で、女が何處迄も剛情を張るか、でなければ男が好い加減に降參するか、何方かになれば可いがと、ひそかに祈つてゐたのだから、思つた程女の强くないのを發見した時は少なからず殘念な氣がした。責めて二人の間に名を出す必要のないものとして略されつゝあつた目的地丈でも、何かの機會に小耳に挾んで置きたかつたが、愈話しが纏まらないとなると、男女の問答は自然外へ移らなければならないので、當分其望みも絶えてしまつた。

「ぢや行かなくつても可いから、あれを頂戴」と、やがて女が云ひ出した。

「あれつて。只あれぢや分らない」

「ほら彼よ。此間の。ね、分つたでせう」

「ちつとも分らない」

「失敬ね、貴方は。ちやんと分つてる癖に」

敬太郎は一寸振り向いて後が見たくなつた。其時階段を踏む大きな音が聞こえて、三人許りの客がどや／＼と一度に上がつて来た。其内の一人はカーキー色の服に長靴を穿いた軍人であつた。さうして床の上を歩く音と共に、腰に釣るした剣をがちや／＼鳴らした。三人は上がつて左側の室へ案内された。此物音が例の男と女の会話を掻き乱した為、敬太郎の好奇心もちらつく剣の光が落ち附く迄中途に停止してゐた。

「此間見せて頂いたものよ。分つて」

男は分つたとも分らないとも云はなかつた。敬太郎には無論想像さへ附かなかつた。彼は女が何故淡泊に自分の欲しいといふものの名を判切云つて呉れないかを恨んだ。彼は何とはなしに夫が知りたかつたのである。すると、

「あんなもの今茲に持つてるもんかね」と男が云つた。

「誰も茲に持つてるつて云やしないわ。たゞ頂戴つて云ふのよ。今度で可いから」

「そんなに欲しけりや遣つても可い。が――」

「あつ嬉しい」

敬太郎は又振り返つて女の顔が見たくなつた。男の顔も序に見て置きたかつた。けれども女と一直線に

なつて、背中合せに坐つてゐる自分の位置を考へると、此際そんな言動は慎まなければならないので、眼の遣り所に困るといふ風で、たゞ正面をぼかんと見廻した。すると勝手の上り口の方から、給仕が白い皿を二つ持つて入つて來て、夫を古いのと引き更へに、二人の前へ置いて行つた。

「小鳥だよ。食べないか」と男が云つた。

「妾もう澤山」

女は燒いた小鳥に手を觸れない樣子であつた。其代り暇の出來た口を男よりは餘計動かした。二人の問答から察すると、女の男に呉れと逼つたのは珊瑚樹の珠か何からしい。男は斯ういふ事に精通してゐるといふ口調で、色々な説明を女に與へてゐた。が、夫は敬太郎には興味もなければ、解りもしない好事家の嬉しがる知識に過ぎなかつた。練物で作つたのへ指先の紋を押し附けたりして、時々旨く胡麻化した贋物があるが、夫は手障りが何處かさら／＼するから、本當の古渡りとは直ぐ區別ができる抔と丁寧に女に教へてゐた。敬太郎は前後を綜合して、何でも餘程貴い、又大變珍らしい、今時さう容易くは手に入らない時代の附いた珠を、女が男から貰ふ約束をしたといふ事が解つた。

「遣るには遣るが、御前あんなものを貰つて何にする氣だい」

「貴方こそ何になさるの。あんな物を持つてて、男の癖に」

三十四

しばらくして男は「御前西洋菓子を食べるかい、珈琲にするかい」と女に聞いた。女は「何方でも好いわ」と答へた。彼等の食事が漸く終りに近附いた合圖とも見られる此簡單な問答が、今迄うつかりと二人の話しに釣り込まれてゐた敬太郎に、忽ち自分の義務を注意する樣に響いた。彼は此料理屋を出た後の二人の行動をも觀察する必要があるものとして、自分で自分の役割を作つてゐたのである。彼は二人と同時に二階を下りる事の不得策を初めから承知してゐた。後れて席を立つにしても、卷烟草を一本喫はない先に、往來と人と、雜沓と暗闇の中に、彼等の姿を見失ふのは慥かであつた。もし間違ひなく彼等の影を踏んで後から喰つ附いて行かうとするなら、何うしても一足先へ出て、相手に氣の附かない物陰か何かで、待ち合はせるより外に仕方がないと考へた。敬太郎は早く勘定を濟まして置くに若くはないといふ氣になつて、早速給仕を呼んでビルを請求した。

男と女はまだ落ち附いて話してゐた。然し二人の間に何といふ極まつた題目も起らないので、夫を種に意見や感情の交換も始まる機會はなく、只だらしのない雲の樣に夫から夫へと流れて行く丈に過ぎなかつた。男の特徴に數へられた眉と眉の間の黒子抔も偶然女の口に上つた。

「何故そんな所に黒子なんぞが出來たんでせう」

「何も近頃になつて急に出來やしまいし、生れた時からあるんだ」
「だけどさ。見つともなかなくつて、其んな所にあつて」
「幾何見つともなくつても仕方がないよ。生れ附きだから」
「早く大學へ行つて取つて貰ふと可いわ」
敬太郎は此時指洗椀の水に自分の顔の映る程下を向いて、兩手で自分の痣を隱す樣に抑へながら、くす〳〵と笑つた。所へ給仕が釣錢を盆に乘せて持つて來た。敬太郎はそつと立つて目立たない樣に階段の上り口迄大人しく足を運ぶと、其所に立つてゐた給仕が大きな聲で、「御立あち」と下へ知らせた。同時に敬太郎は先刻給仕に預けた洋杖を取つて來るのを忘れた事に氣が附いた。其洋杖はいまだに室の隅に置いてある帽子掛けの下に突き込まれた儘、女の長いコートの裾に隱されてゐた。敬太郎は室の中にゐる男女を憚る樣に、拔き足で後戻りをして、靜かにそれを取り出した。彼が蛇の頭を握つた時、すべ〳〵した羽二重の裏と、柔らかい外套の裏が、優しく手の甲に觸れるのを彼は感じた。彼は又爪先で歩かない許りに氣を附けて階段の上迄來ると、其所から急に調子を變へて、とん、とん、とんと刻み足に下へ馳け下りた。表へ出るや否や電車通を直ぐ向うへ横切つた。其突當りに、大きな古着屋のやうな洋服屋のやうな店があるので、彼は其店の電燈の光を後にして立つた。斯うしてさへゐれば料理屋から出る二人が大通を右へ曲がらうが、左へ折れようが、又は中川の角に添つて連雀町の方へ拔けようが、或は門からすぐ小路傳

ひに駿河臺下へ向はうが、何方へ行かうと見逃す氣遣ひはないと彼は心丈夫に洋杖を突いて、目指す家の門口を見守つてゐた。

彼は約十分許り待つた後で、注意の燒點になる光の中に、一向人影が射さないのを不審に思ひ始めた。已むを得ず二階を眺めてその窓丈明るくなつた奥を覗く樣に、彼等の早く席を立つ事を希つた。さうして待ち草臥れた眼を移す毎に、屋根の上に廣がる黑い空を仰いだ。今迄地面の上を照らしてゐる人間の光ばかりに欺かれて、丸で其存在を忘れてゐた此大きな夜は、黑い頭の上で、先刻から寒さうな雨を釀してゐたらしく、敬太郎の心を佗びしがらせた。不圖考へると、今迄は自分に遠慮して只の話しをしたゐた二人が、自分の立つたのを幸ひに、自分の役目として是非聞いて置かなければならない樣な肝心の相談でもし始めたのではなからうか。彼は此疑惑と共に黑い空を仰ぎながら、其内に二人の向き合つた姿をありくと認めた。

三十五

彼はあまり注意深く立ち廻つて、却つて洋食店の門を早く出過ぎたのを悔んだ。けれども二人が共に氣兼ねをする以上は、たとひ同じ席に何時迄も根が生えた樣に腰を据ゑてゐた所で、矢つ張り普通の世間話より外に聞く譯には行かないのだから、よし今迄坐つた儘動かないものと假定しても、其結果は早く席を立

つたと略同じ事になるのだと思ふと、彼は寒いのを我慢しても、同じ所に見張つてゐるより仕方なかつた。すると帽子の廂へ雨が二雫程落ちた樣な氣がするので、彼は仰向いて黑い空を眺めた。闇より外に何も眼を遮らない頭の上は、彼の立つてゐる電車通と違つて非常に靜かであつた。彼は頬の上に一滴の雨を待ち受ける積りで、久しく顏を上げたなり、恰好さへ分らない大きな暗いものを見詰めてゐる間に、今にも降り出すだらうといふ懸念を何處かへ失つて、こんな落ち附いた空の下にゐる自分が、何故こんな落ち附かない眞似を好んで遣るのだらうと偶然考へた。同時に凡ての責任が自分の今突いてゐる竹の洋杖にあるやうな氣がした。彼は例の如く蛇の頭を握つて、寒さに對する鬱憤を晴らす如くに、二三度それを烈しく振つた。其時待ち侘びた人の影法師が揃つて洋食店の門口を出た。敬太郎は何より先に女の細長い頸を包む白い襟卷に眼を附けた。二人はすぐと大通へ出て、敬太郎の向う側を、先刻とは反對の方角に、元來た道へ引き返しに掛かつた。敬太郎も猶豫なく向うへ渡つた。彼等は緩い步調で、賑やかに飾つた店先を軒毎に覗く樣に足を運ばした。後から跟いて行く敬太郎は是非共二人に釣り合つた步き方をしなければならないので、其遲過ぎるのが大分苦になつた。男は香の高い葉卷を銜へて、行く〱夜の中へ微かな色を立てる煙を吐いた。それが風の具合で後から從ふ敬太郎の鼻を時々快く侵した。彼は其香ひを嗅ぎ〱鈍い足並を我慢して眞直に其跡を踏んだ。男は脊が高いので後から見ると、一寸西洋人の樣に思はれた。夫には彼の吹かしてゐる強い葉卷が多少錯覺を助けた。すると聯想が忽ち作偶の方に移つて、女が旦那から

買つて貰つた革の手袋を穿めてゐる洋妾の樣に思はれた。敬太郎が不圖斯ういふ空想を起して、可笑しいと思ひながらも、なほ一人で興を催してゐると、二人は最前待ち合はした停留所の前まで來て一寸立ち留まつたが、やがてまた線路を横切つて向う側へ越した。敬太郎も二人のする通りを眞似た。すると二人はまた美土代町の角を此方から反對の側へ渡つた。敬太郎もつゞいて同じ側へ渡つた。二人はまた歩き出して南へ動いた。角から半町許り來ると、其所にも赤く塗つた鐵の柱が一本立つてゐた。二人は其柱の傍へ寄つて立つた。彼等は又三田線を利用して南へ、歸るか、行くか、する人だと此時始めて氣が附いた敬太郎は、自分も是非同じ電車へ乘らなければなるまいと覺悟した。彼等は申し合はせた樣に敬太郎の方を顧た。固より彼のゐる方から電車が横町を曲がつて來るからではあるが、夫にしても敬太郎は餘り好い心持はしなかつた。彼は帽子の鍔を引つ繰り返して、ぐつと下へ卸ろして見たり、手で顏を撫でて見たり、成るべく軒下へ身を寄せて見たり、わざと變な見當を眺めて見たりして、電車の現はれるのをつらく待ち佗びた。

間もなく一臺來た。敬太郎はわざと二人の乘つた後から這入つて、嫌疑を避けようと工夫した。夫でしばらく後の方に愚圖々々してゐると、女は例の長いコートの裾を踏まへない許りに引き摺つて車掌臺の上に足を移した。然しあとから直ぐ續くと思つた男は、案外上がる氣色もなく、足を揃へた儘、兩手を外套の隱袋に突き差して立つてゐた。敬太郎は女を見送りに男がわざ〳〵此所迄足を運んだのだといふ事に漸く氣が附いた。實をいふと、彼は男よりも女の方に餘計興味を持つてゐたのである。男と女が此所で分か

れるとすれば、無論男を捨てて女の先途丈を見屆けたかつた。けれども自分が田口から依託されたのは女と關係のない黑い中折帽を被つた男の行動丈なので、我は我慢して車臺に飛び上がるのを差し控へた。

三十六

女は車臺に乘つた時、一寸男に目禮したが、夫限り中へ這入つて仕舞つた。冬の夜の事だから、窓硝子は悉く締め切つてあつた。女はことさらにそれを開けて内から首を出す程の愛嬌も見せなかつた。夫でも男はのつそり立つて、車の動くのを待つてゐた。車は動き出した。二人の間に挨拶の交換がもう必要でないと認めた如く、電力は急いで光る窓を南の方へ運び去つた。男は此時口に銜へた葉卷を土の上に投げた。夫から足の向きを變へて又三つ角の交叉點迄出ると、今度は左へ折れて唐物屋の前で留まつた。其所に敬太郎が人に突き當たられて、竹の洋杖を取り落とした記憶の新しい停留所であつた。彼は男の後を見え隱れに此所迄跟いて來て、又見たくもない唐物屋の店先に飾つてある新柄の襟飾だの、絹帽だの、鶉の縞の膝掛だのを覗き込みながら、斯う遠慮をする樣では、探偵の興も覺める丈だと考へた。女が既に離れた以上、自分の仕事に飽きが來たと云つては濟まないが、前同樣であるべき窮屈の程度が急に著しく感ぜられてならなかつた。彼の依賴されたのは中折の男が小川町で降りてから二時間内の行動に限られてゐるのだから、もう是で偵察の役目は濟んだものとして、下宿へ歸つて寐ようかとも思つた。

其所へ男の待つてゐる電車が來たと見えて、彼は長い手で鐵の棒を握るや否や痩せた身體を體よく留まり切らない車臺の上に乘せた。今迄躊躇してゐた敬太郎は急に此瞬間を失つてはといふ氣が出たので、すぐ同じ車臺に飛び上がつた。車內は其程込みあつて居なかつたので、乘客は自由に互の顏を見合ふ餘裕を充分持つてゐた。敬太郎は席の中に身體を入れると同時に、既に席を占めた五六人から一度に視線を集められた。其うちには今坐つた許りの中折の男のも交つてゐたが、彼の敬太郎を見た眼のうちには、おやといふ認識はあつたが、附け覘はれてゐるなといふ疑惑は更に現はれてゐなかつた。敬太郎は漸く伸び／＼した心持になつて、男と同じ側を擇つて腰を掛けた。此電車で何處へ連れて行かれる事かと思つて軒先を見ると、江戸川行と黒く書いてあつた。彼は男が乘り換へさへすれば、自分も早速降りる積りで、停留所へ來る每に男の樣子を窺つた。男は始終隱袋へ手を突き込んだ儘、多くは自分の正面かわが膝の上かを見てゐた。其樣子を形容すると、何も考へずに何か考へ込んでゐると云ふ風であつた。所が九段下へ掛かつた頃から、長い首を時々伸ばして、或物を確めたい樣に、窓の外を覗き出した。敬太郎もつい釣り込まれて、見惡い外を透かす樣に眺めた。やがて電車の走る響の中に、窓硝子にあたつて摧ける雨の音が、ほつりほつりと耳元でし始めた。彼は携へてゐる竹の洋杖を眺めて、この代りに雨傘を持つて來れば可かつたと思ひ出した。

彼は洋食店以後、中折を被つた男の人柄と、世の中に丸で疑ひを掛けてゐない其眼附とを注意した結果、

此時不圖、こんな窮屈な思ひをして、入らざる材料を集めるよりも、いつそ露骨に此方から話し掛けて、當人の許諾を得た事實を田口に報告した方が、今更遲蒔きの様でも、まだ氣が利いてゐやしないかと考へて、自分で自分を彼に紹介する便法を工夫し始めた。其内電車はとう〳〵終點迄來た。雨は益烈しくなつたと見えて、車が留まるとざあといふ音が急に彼の耳を襲つた。中折の男は困つたなと云ひながら、外套の襟を立てて洋袴の裾を返した。敬太郎は洋杖を突きながら立ち上がつた。男は雨の中へ出ると、直ぐ寄つて來る俥引を捕まへた。敬太郎も後れない様に一臺雇つた。車夫は梶棒を上げながら、何處へと聞いた。敬太郎はあの車の後に附いて行けと命じた。車夫はへいと云つて無暗に馳け出した。一筋道を矢來の交番の下迄來ると、車夫は又梶棒を留めて、旦那何方へ行くんですと聞いた。男の乘つた車は幾何幌の内から延び上がつても影さへ見えなかつた。敬太郎は車上に洋杖を突つ張つた儘、雨の音のする中で方角に迷つた。

報告

一

眼が醒めると、自分の住み慣れた六疊に、何時もの通り寢てゐる自分が、敬太郎には全く夢に思はれた。昨日の出來事は凡て本當の樣でもあつた。又纏まりのない夢の樣でもあつた。もつと綿密に形容すれば、「本當の夢」の樣でもあつた。醉つた氣分で町の中に活動したといふ記憶も伴なつてゐた。夫よりか、醉つた氣分が世の中に充ち充ちてゐたといふ感じが一番強かつた。停留所も電車も醉つた氣分に充ちてゐた。寶石商も、革屋も、赤と青の旗振りも、同じ空氣に醉つてゐた。薄青いペンキ塗の洋食店の二階も、其所に席を占めた眉の間に黑子のある紳士も、色の白い女も、悉く此空氣に包まれてゐた。二人の話しに出て來る、何處にあるか分らない所の名も、男が女に遣る約束をした珊瑚の珠も、みんな陶然とした一種の氣分を帶びてゐた。最も此氣分に充ちて活躍したものは竹の洋杖であつた。彼が其洋杖を突いたまゝ、幌を打つ雨の下で、方角に迷つた時の心持は、此氣分の高潮に達した幕前の一區切りとして、殆ど狐から取り憑かれた人の感じを彼に與へた。彼は其時店の灯で佗びしく照らされたびしよ濡れの往來と、坂の上に小さく見える交番と、其左手にぼんやり黑くうつる木立とを見廻して、果して是が今日の仕事の結末かと疑

つた。彼は已むを得ず車夫に梶棒を向け直させて、思ひも寄らない本郷へ行けと命じた事を記憶してゐた。彼は寐ながら天井を眺めて、自分に最も新しい昨日の世界を、幾順となく眼の前に循環させた。彼は二日酔の眼と頭をもつて、蠶の絲を吐く樣に夫から夫へと出てくる此記念の畫を飽かず見詰めてゐたが、仕舞には眼先に漂ふふは〳〵した夢の蒼蠅さに堪へなくなつた。夫でも後から後からと向うで獨り勝手に現はれて來るので、彼は正氣でありながら、何かに魅入られたのではなからうかと云ふ疑ひさへ起した。彼は此淺い疑ひに關聯して、例の洋杖を胸に思ひ浮かべざるを得なかつた。昨日の男も女も彼の眼には繪を見る程明らかであつた。容貌は固より服裝から步き附きに至る迄悉く記憶の鏡に判切と映つた。夫でゐて二人とも遠くの國にゐる樣な心持がした。遠くの國にゐながら、つい近くにあるものを見るやうに、鮮やかな色と形を備へて眸を促して來た。此不思議な影響が洋杖から出たかも知れないといふ神經を敬太郎は何處かに持つてゐた。彼は昨夕法外な車賃を貪られて、宿の門口を潜つた時、何心なく其洋杖を持つた儘自分の室迄歸つて來て、是は人の目に觸れる所に置くべきものでないといふ顏をして、寐る前に、戶棚の奥の行李の後へ投げ込んで仕舞つたのである。

今朝は蛇の頭に夫程の意味がないやうにも思はれた。ことに是から田口に逢つて、探偵の結果を報告しなければならないと云ふ實際問題の方が頭に浮いて來ると、猶更さういふ感じが深くなつた。彼は一日の午後から宵へ掛けて、妙に一種の空氣に醉はされた氣分で活動した自覺は慥かにあるが、いざ其活動の結

果を、普通の人間が處世上に利用出來る樣に、筋の立つた報告に纏める段になると、自分の引き受けた仕事は成功してゐるのか失敗してゐるのか殆ど分らなかつた。從つて洋杖の御蔭を蒙つてゐるのか、ゐないのかも判然しなかつた。床の中で前後を繰り返した敬太郎には、正しく其御蔭を蒙つてゐるらしくも見えた。又決して其御蔭を蒙つてゐない樣にも思はれた。

彼は兎も角も二日醉の魔を拂ひ落としてからの事だと決心して、急に夜着を剝ぐつて跳ね起きた。夫から洗面所へ下りて氷る程冷たい水で頭をざあ／＼洗つた。是で昨日の夢を髮の毛の根本から振ひ落として、普通の人間に立ち還つた樣な氣になれたので、彼は景氣よく三階の室に上つた。其所の窓を潔く明け放した後は、東向きに直立して、上野の森の上から高く射す太陽の光を全身に浴びながら、十遍許り深呼吸をした。斯う精神作用を人間並に刺激した後で、彼は一服しながら、田口へ報告すべき事柄の順序や條項に就いて力めて實際的に思慮を回らした。

二

斯う纏めて見ると、田口の役に立ちさうな種は丸で上がつてゐない樣にも思はれるので、敬太郎は少し心細くなつて來た。けれども先方では今朝にも彼の報告を待ち受けてゐるやうに氣が急くので、彼は早速田口の宅へ電話を掛けた。是から直ぐ行つて可いかと聞くと、大分待たした後で、差支へないといふ答が、

例の書生の口を通して來たので、彼は猶豫なく内幸町へ出掛けた。

田口の門前には車が二臺待つてゐた。玄關にも靴と下駄が一足宛あつた。彼は此間と違つて日本間の方へ案内された。其所は十疊程の廣い座敷で、長い床に大きな懸物が二幅掛かつてゐた。湯呑の樣な深い茶碗に、書生が番茶を一杯汲んで出した。桐を刳つた手焙も同じ書生の手で運ばれた。柔らかい座蒲團も同じ男が勸めて呉れた丈で、女は一切出て來なかつた。敬太郎は廣い室の眞中に畏まつて、主人の足音の近附くのを窮屈に待つた。所が其主人は用談が果しないと見えて、何時迄待つても中々現はれなかつた。敬太郎は已むを得ず茶色になつた古さうな懸物の價額を想像したり、手焙の縁を撫で廻したり、或は行し膝へきちりと兩手を乘せて一人改まつて見たりした。凡て自分の周圍があまり綺麗に調つてゐる丈に、居心地が新し過ぎて彼は容易に落ち附けなかつたのである。仕舞に違ひ棚の上にある畫帖らしい物を取り卸ろして覽ようかと思つたが、其立派な表紙が、是は裝飾だから手を觸れちや不可ないと斷る樣に光るので、彼はつひに手を出しかねた。

斯う敬太郎の神經を惱ました主人は、彼を稍小一時間も待たした後で、漸く應接間から出て來た。

「何うも長い間御待たせ申して。――客が中々歸らないものだから」

敬太郎は此言葉に對して適當と思ふ樣な挨拶を一口と、それに添へた丁寧な御辭儀を一つした。夫からすぐ昨日の事を云ひ出さうとしたが、何を何う先に述べたら都合が可いか、此場に臨んで急に又迷ひ始め

たうとう、降參してしまつた。主人は又冒頭から左も忙しさうに聲も身體も取り扱つてゐる癖に、何處か頭の中に餘裕の貯藏庫でもある樣に、決して周章てて探偵の結果を聞きたがらなかつた。本郷では氷が張るかとか、三階では風が強く當たるだらうとか、下宿にも電話があるのかとか、調子は至極面白さうだけれども、其實詰らない事許り話しの種にした。敬太郎は向うの問に從つて主人の滿足する程度にわが答を運んでゐたが、相手は斯んな無意味な話しを進めて行くうちに、暗に彼の樣子を注意してゐるらしかつた。其時漸く彼もぼんやり氣が附いた。然し主人が何故そんな注意を自分に拂ふのか、其譯は丸で解らなかつた。すると、

「何うです昨日は。旨く行きましたか」と主人が突然聞き出した。斯う聞かれるだらう位の腹は始めから敬太郎にも有つたのだが、正直に答へれば「何うですか」といふ他を馬鹿にした生返事になるので、彼は一寸口籠もつた後、

「ええ御通知のあつた人丈は漸と探し當てました」と答へた。

「眉間に黒子がありましたか」

敬太郎は少し隆起した黒い肉の一點を局部に認めたと答へた。

「衣服も此方から云つて上げた通りでしたか。黒の中折に、霜降りの外套を着て」

「さうです」

「夫ぢや大抵間違ひはないでせう。四時と五時の間に小川町で降りたんですね」
「時間は少し後れた樣です」
「何分位」
「何分か知りませんが、何でも五時餘つ程過ぎの樣でした」
「餘つ程過ぎ。餘つ程過ぎならそんな人を待つてゐなくても好いぢやありませんか。四時から五時迄の間と、わざ／＼時間を切つて通知して上げた位だから、五時が過ぎればもう貴方の義務は濟んだも同然ぢやないですか。何故其儘歸つて、其通り報知しないんです」
今迄穩やかに機嫌よく話してゐた長者から突然斯う手嚴しく遣り附けられようとは、敬太郎は夢にも思はなかつた。

三

敬太郎は今迄下町出の旦那を眼の前に描いてゐた。夫が突然規律づくめの軍人として彼を威壓して來た時、彼は忽ち心の中心を狂はした。友達に對してなら云ひ得る「君の爲だから」といふ言葉も挨拶も有つてゐたのだが、此場合には夫が丸で役に立たなかつた。
「たゞ私の勝手で、時間が來ても其所を動かなかつたのです」

敬太郎が斯う答へるか答へないうちに、田口は今の屹とした態度をすぐ崩して、

「そりや私の爲に大變都合が好かつた」と機嫌の好い調子で受けたが、「然し貴方の相手と云ふのは何です」と聞き返した。敬太郎は少し逡巡した。

「なに夫や聞かないでも構ひません。貴方の事だから。話したくなければ話さないでも差支へない」

田口は斯う云つて、自分の前に引き附けた手提煙草盆の抽出を開けると、其中から角で出來た細長い耳搔を捜し出した。それを右の耳の中に入れて、左も痒さうに搔き廻した。敬太郎は見ない振をしてわざと自分を見てゐるやうな、又耳丈に氣を取られてゐるやうな、田口の體面を薄氣味惡く感じた。

「實は停留所に女が一人立つてゐたのです」と彼はとう／＼自白して仕舞つた。

「年寄ですか、若い女ですか」

「若い女です」

「成程」

田口はたゞ一口斯う云つた丈で、何とも後を繼いで呉れなかつた。敬太郎も頓挫したなり言葉を途切らした。二人はしばらく差向ひの儘口を利かずにゐた。

「いや、若からうが年寄だらうが、其婦人の事を聞くのは可くなかつた。夫は貴方丈に關係のある事なんでせうから、止しにしませう。私の方ぢや唯頰に黒子のある男に就いて、研究の結果さへ伺へば可いん

だから」
「然し其女が黒子のある人の行動に始終入り込んでくるのです。第一女の方で男を待ち合はしてゐたのですから」
「はあ」
田口は一寸思ひも寄らぬといふ顔附をしたが「ぢや其婦人は貴方の御知合でも何でもないのですね」と聞いた。敬太郎は固より知合だと答へる勇氣を有たなかつた。極りの悪い思ひをしても、見た事も口を利いた事もない女だと正直に云はなければならなかつた。田口はさうですかと、穩やかに敬太郎の返事を受けた丈で、少しも追窮する氣色を見せなかつたが、急に捌けた調子になつて、
「何んな女なんです。其若い婦人と云ふのは。器量からいふと」と興味に充ちた顔を煙草盆の上に出した。
「いえ、なに、詰らない女なんです」と敬太郎は前後の行き掛り上答へて仕舞つて、實際頭の中でも詰らない様な氣がした。是が相手と場合次第では、うん器量は中々好い方だ位は固より云ひ兼ねなかつたのである。田口は「詰らない女」といふ敬太郎の判斷を聞いて、忽ち大きな聲を出して笑つた。敬太郎には其意味がよく解らなかつたけれども、何でも頭の上で大嵐が崩れたやうな心持がして、幾分か顔が熱くなつた。

「宜御座んす、夫で。——夫から何うしました。女が停留所で待ち合はしてゐる所へ男が來て」

田口は又普通の調子に戻つて、眞面目に事件の經過を聞かうとした。實をいふと敬太郎は自分が是から話す顛末を、何うして握る事が出來たかの苦心談を、先づ冒頭に敷衍して、二つある同じ名の停留所に迷つた事から、不思議な謎の活きて働く洋杖を、何う抱へ出して、何う利用したかに至る迄を、自分の手柄の成るべく重く響く樣に、詳しく述べたかつたのであるが、會ふや否や四時と五時との行違で遣られた上に、勝手に見張りの時間を延ばした原因になる例の女が、原因にも何にもならない見ず知らずの女だつたりした不味い所があるので、自分を廣告する勇氣は全く拔けてゐた。夫で男と女が洋食屋へ入つてから以後の事實を淡泊に話して見ると、宅を出る時自分が心配してゐた通り、少しも捕まへ所のない、恰も灰色の雲を一摑み田口の鼻の先で開いて見せたと同じ樣な貧しい報告になつた。

四

夫でも田口は別段厭な顏も見せなかつた。落ち附いた腕組を仕舞迄解かずに、只ふんとか、成程とか、夫からとか云ふ短かい言葉を、時々敬太郎の爲に投げ込んで呉れる丈であつた。其代り報告の結末が來ても、まだ何か豫期してゐる樣に、今迄の態度を容易に變へなかつた。敬太郎は仕方なしに、「たゞ夫丈です。實際詰らない結果で御氣の毒です」と言譯を附け加へた。

「いや大分參考になりました。何うも御苦勞でした。中々骨が折れたでせう」

田口の此挨拶の中に、大した感謝の意を含んでゐない事は無論であつたが、自分が馬鹿に見えつゝある今の敬太郎には是丈の愛嬌が充分以上に聞こえた。彼は辛うじて恥を掻かずに濟んだといふ安心を此時漸く得た。同時に垂味の出來た氣分が、すぐ田口に向いて働き掛けた。

「一體あの人は何なんですか」

「さあ何でせうか。貴方は何う鑑定しました」

敬太郎の前には黑の中折を被つて襟開きの廣い霜降りの外套を着た男の姿がありくと現はれた。其人の樣子といひ言葉遣ひといひ歩き附きといひ、何から何迄判切見えたには見えたが、田口に對する返事は一口も出て來なかつた。

「何うも分りません」

「ぢや性質は何んな性質でせう」

性質なら敬太郎にも略見當が附いてゐた。「穩やかな人らしく思ひました」と觀察の通りを答へた。

「若い女と話してゐる所を見て、さう云ふんぢやありませんか」

斯う云つた時、田口の脣の角に薄笑の影がちら附いてゐるのを認めた敬太郎は、何か答へようとした口を又塞いで仕舞つた。

「若い女には誰でも優しいものですよ。貴方だつて滿更經驗のない事でもないでせう。ことに彼の男と來たら、人一倍左うなのかも知れないから」と田口は遠慮なく笑ひ出した。けれども笑ひながらちやんと敬太郎の上に自分の眼を注いでゐた。敬太郎は傍で自分を見たら嘸氣の利かない愚物になつてゐるんだらうと考へながらも、矢つ張り苦しい思ひをして田口と共に笑はなければ居られなかつた。

「ぢや女は何物なんでせう」

田口は此所で觀察點を急に男から女へ移した。さうして今度は自分の方で敬太郎に斯ういふ質問を掛けた。敬太郎はすぐ正直に「女の方は男よりも猶分り惡いです」と答へて仕舞つた。

「素人だか黑人だか、大體の區別さへ附きませんか」

「左樣」と云ひながら、敬太郎は一寸考へて見た。革の手袋だの、白い襟卷だの、美しい笑ひ顏だの、長いコートだの、續々記憶の表面に込み上げて來たが、それを綜べ括つた所で何處からも此問に應ぜられる樣な要領は得られなかつた。

「割合に地味なコートを着て、革の手袋を穿めて居ましたが……」

女の身に着けた品物の中で、特に敬太郎の注意を惹いた此二點も、田口には何の興味も與へないらしかつた。彼はやがて眞面目な顏をして、「ぢや男と女の關係に就いて何か御意見はありませんか」と聞き出した。

敬太郎は先刻自分の報告が滯りなく濟んだ證據に、御苦勞さまと云ふ謝辭さへ受けた後で、斯う難問が續發しようとは毫も思ひ掛けなかつた。しかも窮してる所爲か、それが順を逐つて段々六づかしい方へ競り上がつて行く樣に感ぜられてならなかつた。田口は敬太郎の行き詰まつた樣子を見て、再び同じ問を外の言葉で說明して吳れた。

「例へば夫婦だとか、兄弟だとか、又はたゞの友達だとか、情婦だとかですね。色々な關係があるうちで何だと思ひますか」

「私も女を見た時に、處女だらうか細君だらうかと考へたんですが……然し何うも夫婦ぢやない樣に思ひます」

「夫婦でないにしてもですね。肉體上の關係があるものと思ひますか」

五

敬太郎の胸にも此疑ひは最初から多少萌さないでもなかつた。改めて自分の心を解剖して見たら、彼等二人の間に秘密の關係が旣に成立してるるといふ假定が遠くから彼を操つて、それが爲に偵察の興味が一段と鋭く研ぎ澄まされたのかも知れなかつた。肉と肉の間に起る此關係を外にして、研究に價する交渉は男女の間に起り得るものでないと主張する程彼は理論家ではなかつたが、暖かい血を有つた青年の常とし

て、此頃の若い男女の醜いところに、始めて男女らしい心持が湧いて来るとは思つてゐたので、成るべく其所を離れように世の中を見渡したかつたのである。年の若い彼の眼には、人間といふ大きな世界があまり明瞭に映らない代りに、男女といふ小さな宇宙は斯く鮮やかに映つた。従つて彼は大抵の社会的関係を、出来るだけ此一点に集めて眺めて楽しんでゐた。停留所で逢つた二人の関係も、敬太郎の気の附かない頭の裏では、疾に斯ういふ一対の男女として最初から結び附けられてゐたらしかつた。彼は又其背後に罪悪を想像して要るないのに恐れを抱く程の道徳家でもなかつた。彼は世間並な道義心の所有者として有り触れた人間の一人であつたけれども、其道義心は彼の空想力と違つて、いざといふ場合にならなければ働かないのを常とするので、停留所の二人を自分に最も興味のある男女関係に引き直して見ても、別段不愉快にはならずに済んだのである。彼はたゞ年齢の上に於て二人の相違の甚しいのを疑つた。が、又一方では其相違が却つて彼の眼に映ずる「男女の世界」なるものの特色を濃く示してゐる様にも見えた。

彼の二人に対する心持は知らず〱の間に斯う弛んでゐたのだが、愈さうかと正式に田口から質問を掛けられて見ると、断然とした返答は、責任のあるなしに拘はらず、纏まつた形となつて頭の中には現はれ悪かつた。それで斯う云つた。——

「内縁上の関係はあるかも知れませんが、無いかも分りません」

田口は哄笑した。其所へ廊下の端を歩いた書生が、一枚の名刺を盆に載せて持つて来た。田口は一寸夫れ

を受取つた儘、「まあ分らない所が本當でせう」と敬太郎に答へたが、すぐ書生の方を見て、「應接間へ通して置いて……」と命令した。先刻から餘程窮してゐた矢先だから、敬太郎はこの來客を好い機に、もう此所で切り上げようと思つて身繕ひに掛かると、田口はわざ〳〵彼の立たない前に夫を遮つた。さうして敬太郎の辟易するのに頓着なく猶質問を進行させた。其内で敬太郎の明瞭に答へられるのは殆ど一ヶ條もなかつたので、彼は大學で受けた口答試驗の時よりもまだ辛い思ひをした。

「ぢや是限りにしますが、男と女の名前は分りましたらう」

田口の最後と斷つた此問に對しても、敬太郎は固より滿足な返事を有つてゐなかつた。彼は洋食店で二人の談話に注意を拂ふ間にも何々さんとか何々子とか或はお何とかいふ言葉が乾度何處かへ交つて來るだらうと心待ちに待つてゐたのだが、彼等は特にそれを避ける必要でもある如くに、御互の名は勿論、第三者の名も決して引合ひにさへ出さなかつたのである。

「名前も全く分りません」

田口は此答を聞いて、手焙の胴に當てた手を動かしながら、拍子を取るやうに、指先で桐の縁を敲き始めた。それを少時繰り返した後で、「何うしたんだか餘り要領を得ませんね」と云つたが、直ぐ言葉を繼いで、「然し貴方は正直だ。其所が貴方の美點だらう。分らない事を分つた樣に報告するよりも餘つ程好いかも知れない。まあ買へば其所を買ふんですね」と笑ひ出した。敬太郎は自分の觀察が、果して實用に向か

なかつたのを發見して、多少わが迂濶に恥ぢ入る氣も起つたが、然し僅か二三時間の注意と忍耐と推測では、たとひ自分より十層倍行き屆いた人間に代理を頼んだ所で、田口を滿足させる樣な結果は得られる譯のものでないと固く信じてゐたから、此評價に對して夫程の苦痛も感じなかつた。其代り正直と賞められた事も大した嬉しさにはならなかつた。此位の正直さ加減は全く世間並に過ぎないと彼には見えたからである。

六

敬太郎は先刻から頭の上がらない田口の前で、たつた一言で好いから、思ひ切つた自分の腹をずばりと云つて見たいと考へてゐたが、此所で云はなければ最う云ふ機會はあるまいといふ氣が此時不圖萌した。

「要領を得ない結果許りで私も甚だ御氣の毒に思つてゐるんですが、貴方の御聞きになる樣な立ち入つた事が、あれ丈の時間で、私の樣な迂濶なものに見極められる譯はないと思ひます。斯ういふと生意氣に聞こえるかも知れませんが、あんな小刀細工をして後なんか跟けるより、直かに會つて聞きたい事丈遠慮なく聞いた方が、まだ手數が省けて、さうして動かない確かな所が分りやしないかと思ふのです」

是丈云つた敬太郎は、定めて世故に長けた相手から笑はれるか、冷やかされる事だらうと考へて田口の顏を見た。すると田口は案外にも寧ろ眞面目な態度で「貴方に夫丈の事が解つてゐましたか。感心だ」と

云つた。敬太郎はわざと答を控へてゐた。

「貴方のいふ方法は最も迂濶の樣で、最も簡便な又最も正當な方法ですよ。其所に氣が附いて居れば人間として立派なものです」と田口が再び繰り返した時、敬太郎は益〻返答に窮した。

「夫程の考へがちやんとある貴方に、あんな詰らない仕事を御頼み申したのは私が惡かつた。人物を見損なつたのも同然なんだから。が、市藏が貴方を紹介する時に、さう云ひましたよ。貴方は探偵の遣るやうな仕事に興味を有つて御出でだつて。夫でね、つい飛んでもない事を御願ひして。止しやあ可かつた……」

「いゝえ須永君にはさう云ふ意味の事を慥かに話した覺えがあります」と敬太郎は苦しい思ひをして答へた。

「左樣でしたか」

田口は敬太郎の矛盾を此一句で切り棄てたなり、夫以上に追窮する愚を敢てしなかつた。さうして問題をすぐ改めて見せた。

「ぢや何うでせう。默つて後なんどを跟けずに、貴方のいふ通り尋常に玄關から掛かつて行つちや。貴方に夫丈の勇氣がありますか」

「無い事もありません」

「あんなに曝け出した後で」

「あんなに曝け出したつて、私はあの人達の不名譽になる樣な秘密に決して觸てゐない積りです」

「御尤もだ。そんなら一つ行つて御覽なさい。紹介するから」

田口は斯う云ひながら、大きな聲を出して笑つた。けれども敬太郎には此申し出が滿更の冗談とも思へなかつたので、彼は紹介狀を携へて本當に眉間の黒子と向き合つて話して見ようかといふ料簡を起した。

「會ひますから紹介狀を書いて下さい。私は彼の人と話して見たい氣がしますから」

「宜いでせう。是も修業の一つだから、まあ會つて直かに研究して御覽なさい。貴方の事だから田口に賴まれて此間の晩後を跟け廻した位乾度云ふでせう。然し夫は構はない。云ひたければ云つても宜う御座んす。私に遠慮は要らないから。夫から彼の女との關係もですね、貴方に勇氣さへあるなら聞いて御覽なさい。何うです、それを聞く丈の度胸が貴方にありますか」

田口は此所で一寸言葉を切らして敬太郎の顔を見たが、答の出ないうちに又自分から話を續けた。

「たとひ何方とも口に出せる樣に自然が持ち掛けて來る迄は、聞いても話しても不可ませんよ。いくら勇氣があつたつて、常識のない奴だと思はれる丈だから、夫所ぢやない、彼の男は唯でさへ隨分會ひ惡い方なんだから、そんな事を無暗に喋舌らうものなら、直ぐ歸つて呉れ位云ひ兼ねないですよ。紹介をして上げる代りには、其所いらは能く用心しないとね……」

敬太郎は固より畏まりましたと答へた。けれども腹の中では黒の中折の男を田口の樣に見る事が何うしても出來なかつた。

七

田口は硯箱と卷紙を取り寄せて、さら〳〵と紹介状を書き始めた。やがて名宛を認め終ると「たゞ通り一遍の文言丈並べて置いたら夫で好いでせう」と云ひながら、手蹟の前に曝した手紙を敬太郎に讀んで聞かせた。其中には書いた當人の自白した如く、是といつて特別の注意に價する事は少しも出て來なかつた。只此者は今年大學を卒業した許りの法學士で、事によると自分が世話をしなければならない男だから、何うか會つて話しをして遣つて呉れとある丈だつた。田口は異存のない敬太郎の顔を見屆けた上で、すぐ其卷紙をくる〳〵と卷いて封筒へ入れた。それから其表へ松本恒三樣と大きく書いたなり、わざと封をせずに敬太郎に渡した。敬太郎は眞面目になつて松本恒三樣の五字を眺めたが、肥つた締りのない書體で、此人が斯んな字を書くかと思ふ程拙らしく出來てゐたし

「さう感心して何時迄も眺めてゐちやあ不可ない」

「番地が書いてない樣ですが」

「あゝ左うか。そいつは私の失念だ」

田口は再び手紙を受け取つて、名宛の人の住所と番地を書き入れて呉れた。

「まあ是なら好いでせう。不味くつて大きな所は土橋の大壽司流とでも云ふのかな。まあ役に立ちさへすれば可からう、我慢なさい」

「いえ結構です」

「序に女の方へも一通書きませうか」

「女も御存じなのですか」

「ことによると知つてるかも知れません」と答へた田口は何だか意味のありさうに微笑した。

「御面倒でなければ、御序に一本書いて頂いても宜しう御座います」と敬太郎も冗談半分に頼んだ。

「まあ止した方が安全でせうね。貴方のやうな年の若い男を紹介して、もし間違ひでも出来ると責任問題だから。浪漫――何とか云ふぢやありませんか、貴方のやうな人の事を。私や學問がないから、今頃流行るハイカラな言葉を直ぐ忘れちまつて困るが、何とか云ひましたつけね、あの小説家の使ふ言葉に。……

……」

敬太郎はまさか夫や斯う云ふ言葉でせうと教へる氣にもなれなかつた。唯え、、と馬鹿見た様に笑つてゐた。さうして面倒をすればする程、段々非道く冷やかされさうなので、心の内では、此一段落が開いたら、早く切り上げて歸らうと思つた。彼は田口の呉れた紹介狀を懐に收めて、「では二三日内に是非行つ

て行つて參りませう。其模樣で又伺ふ事に致しますから」と云ひながら、柔らかい座蒲團の上を滑り下りた。田口は「何うも御苦勞でした」と丁寧に挨拶した丈で、ロマンチツクもコスメチツクも悉皆忘れてしまつたといふ顏附をして立ち上がつた。

敬太郎は歸り途に、今會つた田口と、是から會はうといふ松本と、夫から松本を待ち合はした例の恰好の可い女とを、合はせたり離したりして頻りに其關係を考へた。さうして考へれば考へる程一歩宛迷宮の奧に引き込まれる樣な面白味を感じた。今日田口での獲物は松本といふ名前丈であるが、此名前が色々に錯綜した事實を自分の爲に締め括つてゐる妙な嚢の樣に彼には思へるので、其所から何が出るか分らない丈夫丈彼には樂しみが多かつた。田口の説明によると、近寄り惡い人の樣にも聞こえるが、彼の見た所では田口より數倍話しが爲易さうであつた。彼は今日田口から得た印象のうちに、人を取扱ふ點に掛けて成程老練だといふ嘆賞の聲を見出だした上、人物としても何處か偉さうに思はれる點が、時々彼の眼を射る樣にちら／＼輝いたにも拘らず、其前に坐つてゐる間、彼は始終何物にか縛られて自由に動けない窮屈な感じを取り去る事が出來なかつた。絶えず監視の下に置かれた樣な此状態は、一時性のものでなくつて、幾何面會の度數を重ねても、決して薄らぐ折はなからうと迄彼には見えた位である。彼は斯ういふ風に氣の置ける田口と反對の側に、何でも遠慮なく聞いて怒られさうにない、話し聲其物のうちに既に懷かし味の籠もつた樣な松本を想像して已まなかつた。

八

翌朝早く支度をして松本に會ひに行かうと思つてゐると生憎寒い雨が降り出した。窓を細目に開けて高い二階から外を見渡した時分には、もう世の中が一面に濡れてゐた。屋根瓦に徹る樣な佗びしい色をしばらく眺めてゐた敬太郎は、田口の紹介狀を机の上に置いて、出ようか止さうかと一寸思案したが、早く會つて見たいといふ氣が強く起るので、とう／＼机の前を離れた。さうして豆腐屋の喇叭が、陰氣な空氣を劈いて鋭く往來に響く下の方へ降りて行つた。

松本の家は矢來なので、敬太郎は此間の晩狐に撮まれたと同じ思ひをした交番下の景色を想像しつゝ、其所へ來ると、坂下と坂上が兩方共二股に割れて、勾配の附いた眞中丈がいびつに膨れてゐるのを發見した。彼は寒い雨の絲が斜に吹き掛けるのも厭はずに足を留めて、あの晩車夫が梶棒を握つた儘立往生をしたのは此處だらうと思ふ所を見廻した。今日も同じ樣に雨がさあ／＼降つて、彼の踏んでゐる土は[illegible]を吸ひ込む程に濡れてゐた。たゞ晝丈に周圍は暗いながらも明るいので、立ち留まつた時の心持は此間とは丸で趣きが違つてゐた。敬太郎は後の方に高く黑ずんでゐる目白臺の森と、右手の奥に[illegible]と連なり合つた水稻荷の木立を見て坂を上がつた。それから同じ番地の家の何軒でもある矢來の中をぐる／＼歩いた。始めのうちは小さい横町を右へ折れたり左へ曲がつたり、濡れた[illegible]殼の垣を覗いたり、古い椿の生ひ

被さつてゐる墓地らしい構の前を通つたりしたが、松本の家は容易に見當たらなかつた。仕舞に草臥れて、ある横町の角にある車屋を見附けて、其所の若い者に聞いたら、何でもない事の樣にすぐ敎へて吳れた。

松本の家は此車屋の筋向うを這入つた突當りの、竹垣に圍はれた綺麗な住居であつた。門を潛ると子供か太鼓を鳴らしてゐる音が聞こえた。玄關へ掛かつて案內を賴んでも其太鼓の音は毫も已まなかつた。其代り四邊は森閑として人の住んでゐる臭さへしなかつた。雨に鎖された家の奧から現はれた十六七の下女は、手を突いて紹介狀を受取つたなり無言の儘引つ込んだが、少時してから又出て來て、「甚だ勝手を申し上げて濟みませんで御座いますが、雨の降らない日に御出で願へますまいか」と云つた。今迄就職運動のため諸方へ行つて斷られ附けてゐる敬太郎にも、此斷り方丈は不思議に聞こえた。彼は何故雨が降つては面會に差支へるのか直ぐ反問したくなつた。けれども下女に議論を仕掛けるのも一種變な場合なので、「ぢや御天氣の日に伺へば御目に掛かれるんですね」と念晴しに聞き直して見た。下女は唯「はい」と答へた丈であつた。敬太郎は仕方なしに又雨の降る中へ出た。ざあと云ふ音が急に烈しく聞こえる中に、子供の鳴らす太鼓が未だどん〳〵と響いてゐた。彼は矢來の坂を下りながら變な男が有つたものだといふ觀念を數度繰り返した。田口が唯でさへ會ひ惡いと云つたのは、斯んな所を指すのではなからうかとも考へた。其日は家へ歸つても、氣分が中止の姿勢に餘儀なく据ゑ附けられた儘、何の方角へも進行出來ないの

が野暮になつた。久し振に須永の宅へでも行つて、此間からの顛末を茶話に半日を暮らさうかと考へたが、何うせ行くなら、今の仕事に一段落附けて、自分にも見當の立つた筋を吹聽するのでなくては話しばいもしないので、遂に行かず仕舞ひにしてしまつた。

翌日は昨日と打つて變つて好い天氣になつた。起き上がる時、あらゆる濁りを朝の力で洗ひ落とした樣に[illegible]に輝く蒼空を、眩しさうに仰ぎ見た敬太郎は、今日こそ松本に會へると喜んだ。彼は此間の晩行李の後に隱して置いた例の洋杖を取り出して、今日は一つ是を持つて行つて見ようと考へた。彼はそれを突いて、又矢來の坂を上がりながら、昨日の下女が今日も出て來て、折角ですが今日は御天氣過ぎますから、最少し曇つた日に御出で下さいましと云つたら何んなものだらうと想像した。

九

所が昨日と違つて、門を潛つても、子供の鳴らす太鼓の音は聞こえなかつた。玄關には此前目に着かなかつた衝立が立つてゐた。其衝立には淡彩の鶴がたつた一羽佇んでゐる丈で、姿見の樣に細長い其格好が、普通の寸法と違つてゐる意味で敬太郎の注意を促した。取次には例の下女が現はれたには相違ないが、其後から遠慮のない足音をどん／＼立てて二人の子供が衝立の影迄來て、珍らしさうな顔をして敬太郎を眺めた。昨日に比べると是丈の變化を認めた彼は、最後に何うぞといふ案内と共に、硝子戸の締まつてゐる

座敷へ通つた。其眞中にある金魚鉢の樣に大きな瀨戶物の火鉢の兩側に、下女は座蒲團を一枚つゝ置いて、其一枚を敬太郞の席とした。其座蒲團は更紗の模樣を染めた眞丸の形をしたものなので、敬太郞は不思議さうに其上へ坐つた。床の間には刷毛でがしく〳〵と粗末に書いた樣な山水の軸が懸かつてゐた。敬太郞は何處が掛て何處が巖だか見分けの附かない畫を、輕蔑に値する裝飾品の如く眺めた。すると其隣に銅鑼が下がつてゐて、それを叩く棒迄添へてあるので、益〻變つた室だと思つた。

すると間の襖を開けて隣座敷から黑子のある主人が出て來た。「能く御出です」と云つたなり、すぐ敬太郞の鼻の先に坐つたが、其調子は決して愛嬌のある方ではなかつた。唯何處かおつとりして居るので、相手に餘り重きを置かない所が、却て敬太郞に樂な心持を與へた。それで火鉢一つを境に、顏と顏を突き合はせながら、敬太郞は別段氣が詰まる思ひもせずにゐられた。其上彼は此間の晩、慥かに自分の顏を此所の主人に覺えられたに違ひないと思ひ込んでゐたにも拘らず、今會つて見ると、覺えて居るのだか、居ないのだか、平然としてそんな素振は、口にも色にも出さないので、彼は猶更氣兼ねの必要を感じなくなつた。最後に主人は昨日雨天のため面會を謝絕した理由も言譯も一言も述べなかつた。述べ度くなかつたのか、述べなくつても構はないと認めてゐたのか、夫すら敬太郞には丸で判斷が附かなかつた。

話しは自然の順序として、紹介者になつた田口の事から始まつた。「貴方は是から田口に使つて貰はうといふのでしたね」といふのを冒頭に、主人は敬太郞の志望だの、卒業の成績だのを一通り聞いた。夫か

ら世の揉まれた苦勞をした事もない、社會觀とか人生觀とかいふ小六づかしい抽象的の問題を、時々持ち出して敬太郎を苦しめた。彼は其時心のうちで、此松本といふ男は世に著はれない學者の一人なのではなからうかと疑つた位、妙な理窟をちら／＼と閃めかされた。夫許でなく、松本は田口を捕まへて、役には立つが頭の凹つてゐない男だと罵つた。

「田口もあゝ忙しくしてゐちや、頭の中に纏まつた考への出來る閑がないから駄目です。彼奴の腦と來たら、年が年中擦鉢の中で、擂木に攪き廻されてる味噌見たやうなもんでね。あんまり活動し過ぎて、何の形にもならない」

敬太郎には何故松本が田口に對して斯う迄惡口を吐くのか譯が分らなかつた。けれども彼の不思議に感じたのは、是程の惡語を放つ主人の態度なり口調なりに、毫も毒々しい所だの、小憎らしい點だのの見えない事であつた。彼の罵る言葉は、人を罵つた經驗を知らない樣な落附きを具へた彼の聲を通して、敬太郎の耳に響くので、敬太郎も強く反抗する氣になれなかつた。たゞ一種變つた人だといふ感じが新しい刺戟を受ける丈であつた。

「だつて、碁を打つ、謠を謠ふ、色々な事を遣る。尤も何れも下手糞なんですが」

「そりや餘裕のある證據ぢやないでせうか」

「餘裕つて君――僕に雨が降るから天氣の好い日に來て呉れつて、貴方を斷つたでせう。其譯は

今云ふ必要もないが、何しろそんな穏當な斷り方が世間にあると思ひますか。田口だつたら左う云ふ斷り方は決して出來ない。田口が好んで人に會ふのは何故だと云つて御覧。田口は世の中に求める所のある人だからです。つまり僕の樣な高等遊民でないからです。いくら他の感情を害したつて、困りやしないといふ餘裕がないからです。」

十

「實は田口さんからは何も伺はずに參つたのですが、今御使ひになつた高等遊民といふ言葉は本當の意味で御用ひなのですか」

「文字通りの意味で僕は遊民ですよ。何故」

松本は大きな火鉢の縁へ兩肱を掛けて、其一方の先にある拳骨を顎の支へにしながら敬太郎を見た。敬太郎は初對面の客を客と感じてゐないらしい此松本の樣子に、成程高等遊民の本色があるらしくも思つた。彼は煙草道樂と見えて、今日は大きな丸い雁首の附いた木製の西洋パイプを口から離さずに、時々思ひ出した樣な濃い烟を、まだ火の消えてゐない證據として、狼烟の如くぱつ〱と揚げた。其烟が彼の顔の傍で何時の間にか消えて行く具合が、何處にも締りを設ける必要を認めてゐないらしい彼の眼付と相待つて、今迄經驗した事のない一種靜かな心持を敬太郎に與へた。彼は少し薄くなりかゝつた髮を、頭の眞中から

左右へ分けてゐるので、平たい頭が猶の事尋常に落ち附いて見えた。彼は又普通世間の人が着ない樣な茶色の無地の羽織を着て、同じ色の上足袋を白の上に重ねてゐた。其色がすぐ坊主の法衣を聯想させる所が又變に特別な男らしく敬太郎の眼に映つた。自分で高等遊民だと名乘るものに會つたのは是が始めてではあるが、松本の風采なり態度なりが、如何にもさう云ふ階級の代表者らしい感じを、少し不意を打たれた氣味の敬太郎に投げ込んだのは事實であつた。

「失禮ながら御家族は大勢で入らつしやいますか」

敬太郎は自ら高等遊民と稱する人に對して、何ういふ譯か先づ斯ういふ問が掛けて見たかつた。すると松本は「えゝ子供が澤山ゐます」と答へて、敬太郎の忘れ掛かつてゐたパイプからぱつと烟を出した。

「奥さんは……」

「妻は無論居ます。何故ですか」

敬太郎は取り返しの附かない愚な問を出して、始末に行かなくなつたのを後悔した。相手が夫程感情を害した樣子を見せないにしろ、不思議さうに自分の顏を眺めて、解決を豫期してゐる以上は、何とか云はなければ濟まない場合になつた。

「貴方の樣な方が、普通の人間と同じ樣に、家庭的に暮らして行く事が出來るかと思つて一寸伺つた迄です」

「僕が家庭的に……。何故。高等遊民だからですか」
「さう云ふ譯でも無いんですが、何だかそんな心持がしたから一寸伺つたのです」
「高等遊民は田口などよりも家庭的なものですよ」
敬太郎はもう何も云ふ事がなくなつて仕舞つた。彼の頭脳の中では、返事に行き詰まつた困却と、此所で問題を變へようとする努力と、これを緒口に、革の手袋を穿めた女の關係を確めたい希望が三つ一所に働くので、元から夫程秩序の立つてゐない彼の思想に猶更暗い影を投げた。けれども松本はそんな事に丸で注意しない風で、困つた敬太郎の顔を平氣に眺めてゐた。若し是が田口であつたなら手際よく相手を打ち据ゑる代りに、打ち据ゑるとすぐ向ふから局面を變へて呉れて、相手に見苦しい立往生などは決してさせない鮮やかな腕を有つてゐるのにと敬太郎は思つた。氣は置けないが、人を取扱ふ點に於て、全く冴えた熟練を欠いてゐる松本の前で、敬太郎は圖らず二人の相違を認めた樣な氣がしてゐると、松本は偶然「貴方はさういふ問題を考へて見た事がないやうですね」と聞いて呉れた。
「えゝ丸で考へて居ません」
「考へる必要は有りませんね。一人で下宿してゐる以上は。けれども幾何一人だつて、廣い意味での男對女の問題は考へるでせう」
「考へると云ふより寧ろ興味があるといつた方が適當かも知れません。興味なら無論有ります」

十一

二人は人間として離れて利害を感ずる此問題に就いて暫時話した。けれども年齢の違ひだか段の違ひだか、松本の云ふ事は肝心の肉を抜いた骨組丈を並べて見せる樣で、敬太郎に對しては彼の頭の中迄這入り込んで來て、共に流れなければ已まない程の切實な勢ひを丸で持つてゐなかつた。其代り敬太郎の秩序立たない斷片的の言葉も口を出ると直ぐ熱を失つて、少しも松本の胸に徹らないらしかつた。

斯んな縁遠い話しをしてゐる中で、たゞ一つ敬太郎の耳に新しく響いたのは、露西亞の文學者のゴーリキとかいふ人が、自分の主張する社會主義とかを實行する上に、資金の必要を感じて、それを調達のため細君同伴で亞米利加へ渡つた時の話であつた。其時ゴーリキは大變な人氣を一身に集めて、招待やら歡迎やらに忙殺される程の景氣のうちに、自分の目的を苦もなく着々と進行させつゝあつた。所が彼の本國から伴れて來た細君といふのが、本當の細君でなくて單に彼の情婦に過ぎないといふ事實が何處からか曝露した。すると今迄狂熱に達してゐた彼の名聲が、忽ちどさりと落ちて、廣い新大陸に誰一人として彼と握手するものが無くなつて仕舞つたので、ゴーリキは已むを得ず其儘亞米利加を去つた。といふのが筋であつた。

「露西亞と亞米利加では是丈男女關係の解釋が違ふんです。ゴーリキの遣り口は露西亞なら殆ど問題に

ならない位些細な事件なんでせうがね。下らない」と松本は全く下らなさうな顔をした。
「日本は何方でせう」と敬太郎は聞いて見た。
「まあ露西亞派でせうね。僕は露西亞派で澤山だ」と云つて、松本は又狼烟の様な濃い烟をぱつと口から吐いた。
此所迄來て見ると、此間の女の事を尋ねるのが敬太郎に取つて少しも苦にならない様な氣がし出した。
「先達ての晩神田の洋食店で私は貴方に御目に懸かつたと思ふんですが」
「えゝ會ひましたね。よく覺えてゐます。夫から歸りにも電車の中で會つたぢやありませんか。君も江戸川迄乘つた様だが、あすこいらに下宿でもしてゐるんですか。あの晩は雨が降つて困つたでせう」
松本は果して敬太郎を記憶してゐた。夫を初めから口に出すでもなく、今になつて漸く氣が附いた振をするでもなく、話しても可し話さないでも可しと云つた風の彼の態度が、無邪氣から出るのか、度胸から出るのか、又は鷹揚な彼の生れ附きから出るのか、敬太郎には一寸判斷しかねた。
「御伴れが御有りの様でしたが」
「えゝ別嬪を一人伴れてゐました。貴方は慥か一人でしたね」
「一人です。貴方も御歸りには御一人ぢやなかつたですか」
「左うです」

一寸はきく〳〵進んだ問答は此所へ來たらぴたりと留まつて仕舞つた。松本が又女の事を云ひ出すかと思つて待つてゐると、「貴方の下宿は牛込ですか、小石川ですか」と丸で無關係の問を敬太郎は掛けられた。

「本鄕です」

松本は腑に落ちない顏をして敬太郎を見た。本鄕に住んでゐる彼が、何故江戶川の終點迄乘つたのか、其理由を聞きたいと云はぬ許りの松本の眼付を見た時、敬太郎は面倒だから此所で一つ心持よく萬事を打ち明けて仕舞はうと決心した。もし怒られたら、詫る丈で、詫つて聞かれなければ、御辭儀を丁寧にして歸れば好からうと覺悟を極めた。

「實は貴方の後を跟けてわざ〳〵江戶川迄來たのです」と云つて松本の顏を見ると、案外にも豫期した程の變化も起らないので、敬太郎は先づ安心した。

「何の爲に」と松本は殆ど何時もの樣な緩い口調で聞き返した。

「人から賴まれたのです」

「賴まれた？誰に」

松本は始めて、少し驚いた聲の中に、常より強いアクセントを置いて、斯う聞いた。

十二

「實は田口さんに賴まれたのです」

「田口とは。田口要作ですか」

「左うです」

「だつて君はわざ〳〵田口の紹介狀を持つて僕に會ひに來たんぢやありませんか」

斯う一句々々問ひ詰められて行くよりは、自分の方で一思ひに今迄の經過を話して仕舞ふ方が樂な氣がするので、敬太郎は田口の速達便を受取つて、すぐ小川町の停留所へ見張りに出た冒險の第一節目から始めて、電車が江戸川の終點に着いた後の雨の中の立往生に至る迄の顛末を包まず打ち明けた。固よりたゞ筋の通る丈を目的に、誇張は無論布衍の類はしさも出來る限り避けたので、時間が夫程掛からなかつた所爲か、松本は話しの進行してゐる間一口も敬太郎を遮らなかつた。話しが濟んでからも、直ぐとは聲を出す樣子は見えなかつた。敬太郎は主人の此沈默を、感情を害した結果ではなからうかと推察して、怒り出されないうちに早く謝るに越した事はないと思ひ定めた。すると主人の方から突然口を利き始めた。

「どうも怪しからん奴だね、あの田口といふ男は。夫に使はれる君も亦君だ。餘つ程の馬鹿だね」

斯ういつた主人の顏を見ると、呆れ返つてゐる風は誰の目にも着くが、怒氣を帶びた樣子は比較的何處にも表はれてゐないので、敬太郎は寧ろ安心した。此際馬鹿と呼ばれる位の事は、彼に取つて何でもなかつたのである。

「何うも悪い事をしました」

「謝つて貰ひたくも何ともない。只君が御氣の毒だから云ふのですよ。あんな者に使はれて」

「それ程悪い人なんですか」

「一體何の必要があつて、そんな愚な事を引き受けたのです」

物數奇から引き受けたといふ言葉は、此場合何うしても敬太郎の口へは出て來なかつた。彼は已むを得ず、衣食問題の必要上何うしても田口に頼らなければならない事情があるので、面白くないとは知りながら、つい承諾したのだといふ風な答をした。

「衣食に困るなら仕方がないが、もう止した方が可いですよ。餘計な事ぢやありませんか、寒いのに雨に降られて人の後を跟けるなんて」

「誠に愚の極でした。是からはもう遣らない積りです」

此返事を聞いた松本は何とも云はず、たゞ苦笑ひをしてゐた。それが敬太郎には輕蔑の意味にも憐憫の意味にも取れるので、彼は何れにしても甚だ肩身の狹い思ひをした。

「貴方は僕に對して濟まん事をした様な風をしてゐるが、實際左うなのですか」

元來我は謝つたゞ夫程に感じてゐない敬太郎も斯う聞かれると、行き掛り上左うだと思はざるを得なかつた。又左う答へざるを得なかつた。

「ぢや田口へ行つてね。此間僕の伴れてゐた若い女は高等淫賣だつて、僕自身がさう保證したと云つて呉れ玉へ」
「本當にさういふ種類の女なんですか」
徹太郎は一寸驚かされた顏をして斯う聞いた。
「まあ何でも好いから、高等淫賣だと云つて呉れ玉へ」
「はあ」
「はあぢや不可ない、慥かに左う云はなくつちや。云へますか、君」
徹太郎は現代に教育された青年の一人として、斯ういふ意味の言葉を、年長者の前で口にする無遠慮を憚る程の男ではなかつた。けれども松本が強ひて此四字を田口の耳へ押し込まうとする奧底には、何か不愉快な或物が潛んでゐるらしく思はれるので、さう輕々しい調子で引き受ける氣も起らなかつた。彼が挨拶に困つて六づかしい顏をしてゐると、それを見た松本は「何、君心配しないでも可いですよ。相手が田口だもの」と云つたが、暫くして漸と氣が附いた樣に、「君は僕と田口との關係をまだ知らないんでしたね」と聞いた。徹太郎は「まだ何も知りません」と答へた。

十三

「甘い關係を話すと、君が田口に向つてあの女の事を高等淫賣だと云ふ勇氣が出惡くなる丈だから話り僕には損になるんだが、何時迄も罪もない君を馬鹿にするのも氣の毒だから、聞かして上げよう」

斷りをいふ前置きを置いた上、松本は田口と自分が社會的に何う交渉してゐるかを説明して呉れた。其説明は最も簡單に濟む丈に最も敬太郎を驚かした。それを一言でいふと、田口と松本は近い親類の間柄だつたのである。松本に二人の姉があつて、一人が須永の母、一人が田口の細君、といふ互の縁續きを始めて呑み込んだ時、敬太郎は、田口の義弟に當る松本が、叔父といふ資格で、彼の姪と時間を極めて停留所で待ち合はした上、ある西洋軒で會食したといふ事實を、世間の出來事のうちで最も平凡を極めたものの一つの樣に見た。それを追ひ込み入つた女でも隱してゐるやうに、一生懸命に自分の燃やした陽炎を散らつかせながら、彼等を追つ掛けて歩いたのが、左も左も馬鹿々々しくなつて來た。

「御孃さんは何で又昨夕彼處迄出張つてゐたんですか。たゞ私を釣る爲なんですか」

「何須永へ行つた歸りなんです。僕が田口で話してゐると、彼の子が電話を掛けて、四時半頃停留所で待ち合はせてゐるから、一寸歸りに降りて呉れといふんです。面倒だから止さうと思つたけれども、是非何とか蚊とかいふから、降りた所がね。今朝御父さんから聞いたら、叔父さんが御歳暮に指環を買つて遣ると云つてゐたから、停留所で待ち伏せをして、逃がさない樣に一所に行つて買つて貰へと云はれたから先刻から此所で待つてゐたんだつて、人の知りもしないのに、一人で勝手な請求を持ち出して中々動かない。

仕方がないから、まあ西洋料理位で胡魔化して置かうと思つて、とう〳〵寶亭へ連れ込んだんです。——實に田口といふ男は箆棒だね。わざ〳〵夫程の手數を掛けて、何もそんな下らない眞似をするにも當たらないぢやないか。騙された君よりも餘つ程田口の方が箆棒ですよ」
敬太郎には騙された自分の方が遙かに愚物に思はれた。さうと知つたら、探偵の結果を報告する時にも、もう少しは手加減が出來たものをと、自ら擬い顏もしなければならなかつた。
「貴方は丸で御承知ない事なんですね」
「知るものかね、君。いくら高等遊民だつて、そんな暇の出る筈がないぢやありませんか」
「御孃さんは何うでせう。多分御存じなんだらうと思ひますが」
「左うさ」と云つて松本はしばらく思案してゐたが、やがて判切した口調で「いや知るまい」と斷言した。「あの箆棒の田口に、一つ取柄があると云へば云はれるのだが、彼の男は幾何惡戯をしても、其惡戯をされた當人が、もう少しで恥を搔きさうな際どい時になると、ぴたりと留めて仕舞ふか、又は自分が其場へ出て來て、當人の體面に拘らない内に綺麗に始末を附ける。其所へ行くと箆棒には違ひないが感心な所があります。つまり遣り方は惡辣でも、結末には妙に溫かい情の籠もつた人間らしい點を見せて來るんです。今度の事でも恐らく自分一人で呑み込んでゐる丈でせう。君が僕の家へ來なかつたら、僕は乾度此事件を知らずに濟むんだつたらう。自分の娘にだつて、君の馬鹿を證明する樣な策略を、始めから吹

嬲する程無邪氣な男ぢやない。だから序に惡戯も止せば可いんだがね、夫が何うしても止せない所が、要するに意地です」

田口の性格に對する松本の斯ういふ批評を默つて聞いてゐた敬太郎は、自分の馬鹿な振舞を顧る後悔よりも、自分を馬鹿にした責任者を怨むよりも、寧ろ惡戯をした田口を賴もしいと思ふ心が、わが胸の裏で一番勝ちを制したのを自覺した。が、果して左ういふ人ならば、何故彼の前に出て話しをしてゐる間に、あんな窮屈な感じが起るのだらうといふ不審も自づと萌さない譯に行かなかつた。

「貴方の御話しで大分田口さんが解つて來た樣ですが、私はあの方の前へ出ると、何だか氣が落ち附かなくつて變に苦しいです」

「そりや向うでも君に氣を許さないからさ」

十四

斯う云はれて見ると、田口が自分に氣を許してゐない眼遣ひやら言葉附やらがあり／＼と敬太郎の胸に、疑ひもない記憶として讀まれた。けれども田口程の老巧のものに、何で學校を出た許りの青臭い自分が、要注意者になるのか、敬太郎は全く合點が行かなかつた。彼は見た通りの儘の自分で、誰の前へ出ても通用するものと今迄固く己を信じてゐたのである。彼はたゞ斯樣な青年として、他に憚られたり氣を置かれた

りする資格さへない樣に自分を見縊つてゐた丈に、經驗の程度の違ふ年長者から、自分の思はくと違ふ待遇を受けるのを寧ろ不思議に考へ出した。

「私はそんな裏表のある人間と見えますかね」

「何うだか、そんな細かい事は初めて會つた丈ぢや分らないですよ。然し有つても無くつても、僕の君に對する待遇には一向關係がないから可いぢやありませんか」

「けれども田口さんから左う思はれちや……」

「田口は君だから左う思ふんぢやない、誰を見ても左う思ふんだから仕方がないさ。あゝして長い間人を使つてゐるうちには、大分騙されなくつちやならないからね。偶に自然其儘の美しい人間が自分の前に現はれて來ても、矢つ張り氣が許せないんです。夫があゝ云ふ人の因果だと思へば夫で好いぢやないか。田口は僕の義兄だから、斯う云ふと變に聞こえるが、本來は美質なんです。決して惡い男ぢやない。唯あゝして何年となく事業の成功といふ事丈を重に眼中に置いて、世の中と鬪つてゐるものだから、人間の見方が妙に片寄つて、此奴は役に立つだらうかとか、此奴は安心して使へるだらうかとか、まあそんな事ばかり考へてゐるんだね。あゝなると女に惚れられても、是や自分に惚れたんだらうか、自分の持つてゐる金に惚れたんだらうか、直ぐ其所を疑らなくつちや居られなくなるんです。美人でさへ左うなんだから君見たいな野郞が窮屈な取扱ひを受けるのは當然だと思はなくつちや不可ない。何所が田口の田口たる所なん

だらう」

敬太郎は此批評で田口といふ男が自分にも判切呑み込めた樣な氣がした。けれども斯ういふ風に一々彼を首肯せる程の判斷を、彼の頭に鐵槌で叩き込む樣に入れて呉れる松本は抑何者だらうか、其點になると敬太郎は依然として茫漠たる雲に對する思ひがあつた。批評に上らない前の田口でさへ、此男よりは却つて活きた人間らしい氣がした。

同じ松本に就いて見ても、此間の晩神田の洋食屋で、田口の娘を相手にして珊瑚樹の珠が何うしたとか斯うしたとか云つてゐた時の方が、餘つ程活きて動いてゐた。今彼の前に坐つてゐるのは、大きなパイプを銜へた木像の靈が、口を利くと同じ樣な感じを敬太郎に與へる丈なので、彼はたゞ其人の本體を髣髴するに苦しむに過ぎなかつた。彼が一方では明瞭な松本の批評に心服しながら、一方では松本の何者なるかを斯ういふ風に考へつゝ、自分は頭腦の惡い、直覺の鈍い、世間並以下の人物ぢやあるまいかと疑り始めた時、此漠然たる松本が又口を開いた。

「夫でも田口が泥棒を遣つて呉れた爲、君は却て仕合せをした樣なものですね」

「何故ですか」

「屹度何か位置を拵へて呉れますよ。是なりで放つて置きや田口でも何でもありやしない。夫は責任を持つて受合つて上げても宜い。が、詰らないのは僕だ。全く探偵のされ損だから」

二人は顔を見合はせて笑つた。敬太郎が丸い更紗の座蒲團の上から立ち上がつた時、主人はわざわざ玄關迄送つて出た。其所に飾つてあつた墨繪の鶴の衝立の前に、瘠せた高い身體をしばらく佇まして、靴を穿く敬太郎の後姿を眺めてゐたが、「妙な洋杖を持つてゐますね。一寸拜見」と云つた。さうして夫を敬太郎の手から受取つて、「へえ、蛇の頭だね。中々旨く刻つてある。買つたんですか」と聞いた。「いえ素人が刻つたのを貰つたんです」と答へた敬太郎は、夫を振りながら又矢來の坂を江戸川の方へ下つた。

雨の降る日

一

雨の降る日に面會を謝絶した松本の理由は、遂に當人の口から聞く機會を得ずに久しく過ぎた。敬太郎も其内に取り紛れて忘れて仕舞つた。不圖それを耳にしたのは、彼が田口の世話で、ある地位を得たのを緣故に、遠慮なく同家へ出入の出來る身になつてからの事である。其時分の彼の頭には、停留所の經驗が既に新しい色彩を失ひ掛けてゐた。彼は時々須永から其話を持ち出されては苦笑するに過ぎなかつた。須永はよく彼に向つて、何故其前に僕の所へ來て打ち明けなかつたのだと詰問した。内幸町の叔父が人を擔ぐ位の事は、母から聞いて知つて居る筈だのにと責める事もあつた。仕舞には、君があんまり色氣が有り過ぎるからだと調戯ひ出した。敬太郎は其度に「馬鹿云へ」で通してゐたが、心の内では何も、須永の門前で見た後姿の女を思ひ出した。其女が取りも直さず停留所の女であつた事も思ひ出した。さうして何處か遠くの方で氣恥づかしい心持がした。其女の名が千代子で、其妹の名が百代子である事も、今の敬太郎には珍らしい報知ではなかつた。

彼が松本に會つて、凡て内幕の消息を聞かされた後、田口へ顏を出すのは多少極りの惡い思ひをする丈

であつたに拘らず、顏を出さなければ締め括りが附かないといふ行き掛りから、笑はれるのを覺悟の前で、又田口の門を潜つた時、田口は果して大きな聲を出して笑つた。けれども其笑ひの中には己の機略に誇る高慢の響よりも、迷つた人を本來の路に返して遣つた喜びの勝利が聞こえてゐるのだと敬太郎には解釋された。田口は其時訓戒の爲だとか教育の方法だとかいつた風の、恩に着せた言葉を一切使はなかつた。ただ惡意でした譯でないから、怒つては不可ないと斷つて、すぐ其場で相當の位置を拵へて呉れる約束をした。それから手を鳴らして、停留所に松本を待ち合はせてゐた方の姉娘を呼んで、是が私の娘だとわざわざ紹介した。さうして此方は市さんの御友達だよと云つて敬太郎を娘に教へてゐた。娘は何で斯ういふ人に引き合はされるのか、一寸解しかねた風をしながら、極めて餘所々々しく丁寧な挨拶をした。敬太郎が千代子といふ名を覺えたのは其時の事であつた。

是が田口の家庭に接觸した始めての機會になつて、敬太郎は其後も用事なり訪問なりに緣を藉りて、同じ人の門を潜る事が多くなつた。時々は玄關脇の書生部屋へ這入つて、嘗て電話で口を利き合つた事のある書生と世間話さへした。奧へも無論通る必要が生じて來た。細君に呼ばれて内向きの用を足す場合もあつた。中學校へ行く長男から英語の質問を受けて窮する事も稀ではなかつた。出入りの度數が斯う重なるにつれて、敬太郎が二人の娘に接近する機會も自然多くなつて來たが、一種間の延びた彼の調子と、比較的引き締まつた田口の家風と、差向ひで坐る時間の缺乏とが、容易に打ち解け難い境遇に彼等を置き去り

にしたが、彼等の間に取り換はされた言葉は、無論形式丈を重んずる堅苦しいものではなかつたが、大抵は五分と掛からない當用に過ぎないので、親しみは夫程出る暇がなかつた。彼等が公然と顔を突き合はさせて、例に無く長い時間を、遠慮の交らない談話に更かしたのは、正月半ばの歌留多會の折であつた。其時敬太郎は千代子から、貴方随分鈍いのねと云はれた。百代子からは、妾貴方と組むのは厭よ、負けるに極まつてるからと罵られた。

夫から又一ヶ月程經つて、梅の音信の新聞に出る頃、敬太郎はある日曜の午後に、久し振に須永の二階で暮らした時、偶然遊びに來てゐた千代子に出逢つた。三人して夫から夫へと纏まらない話しを續けて行くうちに、不圖松本の評判が千代子の口に上つた。

「あの叔父さんも随分變つてるのね。雨が降ると一しきり能く面會を斷つた事があつてよ。今でもだうか知ら」

二

「實は僕も雨の降る日に行つて斷られた一人なんだが……」と敬太郎が云ひ出した時、須永と千代子は申し合はせた様に笑ひ出した。

「君も随分運の悪い男だね。大方例の洋杖を持つて行かなかつたんだらう」と須永は調戯ひ始めた。

「だつて無理だわ、雨の降る日に洋杖なんか持つて行けつたつて。ねえ田川さん」
此理攻めの辯護を聞いて、敬太郎も苦笑した。
「一體田川さんの洋杖つて、何んな洋杖なの。妾一寸見たいわ。見せて頂戴、ね、田川さん。下へ行つて見て來ても好くつて」
「今日は持つて來ません」
「何故持つて來ないの。今日は貴方夫でも好い御天氣よ」
「大事な洋杖だから、いくら好い御天氣でも、只の日には持つて出ないんだとさ」
「本當？」
「まあ其んなものです」
「ぢや旗日に丈突いて出るの」
敬太郎は一人で二人に當たつてゐるのが少し苦しくなつた。此次内幸町へ行く時は、乾度持つて行つて見せるといふ約束をして漸く千代子の追窮を遁れた。其代り千代子から何故松本が雨の降る日に面會を謝絶したかの原因を話して貰ふ事にした。――
夫は珍らしく秋の日の曇つた十一月のある午過ぎであつた。千代子は松本の好きな雲丹を母から言附かつて矢來へ持つて來た。久し振に遊んで行かうか知らと云つて、わざ／＼乘つて來た車迄返して、緩り腰

を儲けた。松本には十三になる女を頭に、男、女、男と互違ひに順序よく四人の子が揃つてゐた。是等は恰も一つ違ひに生れて、何れも世間並に成長しつゝあつた。家庭に華やかな匂ひを着ける此生き〳〵した装飾物の外に、松本夫婦は取つて二つになる宵子を、指環に嵌めた真珠の様に大事に抱いて離さなかつた。彼女は真珠の様に透明な青白い皮膚と、漆の様に濃い大きな眼を有つて、前の年の雛の節句の前の宵に松本夫婦の手に落ちたのである。千代子は五人のうちで、一番この子を可愛がつてゐた。来る度に屹度何か玩具を買つて来て遣つた。或時は余り多量に甘いものを当てがつて叔母から怒られた事さへある。すると千代子は大事さうに宵子を抱いて縁側へ出て、ねえ宵子さんと云つては、わざと二人の親しい様子を叔母に見せた。叔母は笑ひながら、何だね喧嘩でもしやしまいしと云つた。松本は、御前そんなに其子が好きなら御祝ひの代りに上げるから、嫁に行くとき持つて御出でと調戯つた。

其日も千代子は坐ると直で宵子を相手にして遊び始めた。宵子は生れてからついぞ月代を剃つた事がないので、頭の毛が非常に細く柔らかに延びてゐた。さうして皮膚の青白い所為か、其髪の色が日光に照らされると、潤沢の多い紫を含んでぴか〳〵縮れ上がつてゐた。「宵子さんかん〳〵結つて上げませう」と云つて、千代子は丁寧に其縮れ毛に櫛を入れた。それから乏しい片鬢を一束に割いて、其根に赤いリボンを括り附けた。宵子の頭は御供の様に平に開いてゐた。彼女は短かい手をやつと其御供の片隅へ乗せて、リボンの端を抑へながら、母のゐる所迄よたよた歩いて来て、イボン〳〵と云つた。母があゝ好く

かん〳〵が結へましたねと賞めると、千代子は嬉しさうに笑ひながら、子供の後姿を眺めて、今度は御父さんの所へ行つて見せて入らつしやいと指圖した。宵子は又足元の危い歩き附きをして、松本の書齋の入口迄來て、四つ這ひになつた。彼女が父に禮をするときには必ず四つ這ひになるのが例であつた。彼女は其所で自分の尻を出來る丈高く上げて、御供の樣な頭を敷居から二三寸の所迄下げて、又ぼう〳〵と云つた。書見を一寸已めた松本が、あゝ好い頭だね、誰に結つて貰つたのと聞くと、宵子は頭を下げた儘、ちい〳〵と答へた。ちい〳〵と云ふのは、舌の廻らない彼女の千代子を呼ぶ常の符徴であつた。後に立つて見てゐた千代子は小さい唇から出る自分の名前を聞いて、又嬉しさうに大きな聲で笑つた。

三

其内子供がみんな學校から歸つて來たので、今迄赤いリボンに占領されてゐた家庭が、急に幾色かの華やかさを加へた。幼稚園へ行く七つになる男の子が、巴の紋の附いた陣太鼓の樣なものを持つて來て、宵子さん叩かして上げるから御出でと連れて行つた。其時千代子は巾着の樣な恰好をした赤い毛織の足袋が廊下を動いて行く影を見詰めてゐた。其足袋の紐の先には丸い房が附いてゐて、それが小さな足を運ぶ度にはつ〳〵と飛んだ。

「あの足袋は慥か御前が編んで遣つたのだつたね」

「えゝ可愛らしいわね」

千代子は座敷へ坐つて、しばらく叔父と話してゐた。其うちに曇つた空から淋しい雨が落ち出したと思ふと、それが見る／＼音を立てて、坊主になつた梧桐をしたゝか濡らし始めた。松本も千代子も申し合はせた様に、硝子越しの雨の色を眺めて、手焙に手を翳した。

「芭蕉があるもんだから餘計音がするのね」

「芭蕉はよく持つものだよ。此間から今日は枯れるか、今日は枯れるかと思つて、毎日斯うして見てゐるが中々枯れない。山茶花が散つて、青桐が裸になつても、まだ青いんだからなあ」

「妙な事に感心するのね。だから恒三は閑人だつて云はれるのよ」

「其代り御前の御父さんには芭蕉の研究なんか死ぬ迄出來つこない」

「爲たかないわ、そんな研究なんか。だけど叔父さんは内の御父さんよりか全く學者ね。私本當に敬服してよ」

「生意氣云ふな」

「あら本當よ。だつて何を聞いても知つてるんですもの」

二人が斯んな話しをしてゐると、只今此方が御見えになりましたと云つて、下女が一通の紹介状の様なものを持つて來て松本に渡した。松本は「千代子待つて御出で。今に又面白い事を教へて遣るから」と笑

ひながら立ち上がつた。

「厭よ又此間見たいに、西洋煙草の名なんか澤山覺えさせちや」

松本は何も答へずに客間の方へ出て行つた。千代子も茶の間へ取つて返した。其所には雨に降り込められた室の光を補ふため、もう電氣燈が點つてゐた。臺所では既に夕飯の支度を始めたと見えて、瓦斯七輪が二つとも忙しく青い㷔を吐いてゐた。やがて子供は大きな食卓に二人づゝ向ひ合せに坐つた。宵子丈は別に下女が附いて食事をするのが例になつてゐるので、此晩は千代子が其役を引き受けた。彼女は小さい朱塗の椀と小皿に盛つた魚肉とを盆の上に載せて、横手にある六疊へ宵子を連れ込んだ。其所は家のものの着更へをする爲に多く用ひられる室なので、簞笥が二つと姿見が一つ、壁から飛び出した樣に据ゑてあつた。千代子は其姿見の前に玩具の樣な椀と茶碗を載せた盆を置いた。

「さあ宵子さん、まんまよ。御待ち遠さま」

千代子が粥を一匙宛掬つて口へ入れて遣る度に、宵子は甘しい〱だの、頂戴々々だの色々な藝を強ひられた。仕舞には自分一人で食べると云つて、千代子の手から匙を受け取つた時、彼女は又丹念に匙の持ち方を教へた。宵子は固より極めて短かい單語より外に發音出來なかつた。さう持つのではないと叱られると、乾度御供の樣な平たい頭を傾けて、斯う？斯う？と聞き直した。それを千代子が面白がつて、何遍も繰り返してゐるうちに、何時もの通り斯う？と半分言ひ懸けて、心持ち横にした大きな眼で千代子を

見下げた時、突然宵の手に持つた匙を放り出して、千代子の膝の前に俯伏せになつた。

「何うしたの」

千代子は何の気も付かずに宵子を抱き起した。すると丸で眠つた子を抱へた様に、たゞ手應へがぐたりとした丈なので、千代子は急に大きな聲を出して、宵子さん宵子さんと呼んだ。

四

宵子はうと／＼寐入つた人の様に眼を半分閉ぢて口を半分開けた儘千代子の膝の上に支へられた。千代子は平手で其背中を二三度叩いたが、何の效目もなかつた。

「叔母さん、大變だから來て下さい」

母は驚いて箸と茶碗を放り出したなり、足音を立てゝ這入つた來た。何うしたのと云ひながら、電燈の眞下で顔を仰向けにして見ると、唇にもう薄く紫の色が注してゐた。口へ掌を當てゝも、呼息の通ふ音はしなかつた。母は呼吸の塞まつた様な苦しい聲を出して、下女に濡手拭を持つて來さした。それを宵子の額に載せた時、「脈はあつて」と千代子に聞いた。千代子は又小さい手頸を握つたが、脈は何處にあるか丸で分らなかつた。

「叔母さん何うしたら好いでせう」と蒼い顔をして泣き出した。母は呆然と其所に立つて見てゐる子供。

に、「早く御父さんを呼んで入らつしやい」と命じた。子供は四人とも客間の方へ馳け出した。其足音が廊下の端づれで止まつたと思ふと、松本が不思議さうな顔をして出て来た。「何うした」と云ひながら、蔽ひ被さる様に細君と千代子の上から宵子を覗き込んだが、一目見ると急に眉を寄せた。

「醫者は……」

醫者は時を移さず来た。「少し模様が變です」と云つてすぐ注射をした。然し何の效能もなかつた。「駄目でせうか」といふ苦しく張り詰めた問が、固く結ばれた主人の唇を洩れた。さうして絶望を怖れる怪しい光に充ちた三人の眼が一度に醫者の上に据ゑられた。鏡を出して瞳孔を眺めてゐた醫者は、此時宵子の裾を捲くつて肛門を見た。

「是では仕方がありません。瞳孔も肛門も開いて仕舞つてゐますから。何うも御氣の毒です」

醫者は斯う云つたが又一筒の注射を心臓部に試みた。固より夫は何の手段にもならなかつた。松本は透き徹る様な娘の肌に針の突き刺される時、自ら眉間を險しくした。千代子は涙をぼろぼろ膝の上に落とした。

「病因は何でせう」

「何うも不思議です。たゞ不思議といふより外に云ひ様がないやうです。何う考へても……」と醫者は首を傾けた。「芥子湯でも使はして見たら何うですか」と松本は素人料簡で聞いた。「好いでせう」と醫

者はすぐ答へたが、其顔には毫も疑惑の色が出なかつた。

やがて熱い湯を盥へ汲んで、湯氣の濛々と立つ眞中へ辛子を一袋空けた。母と千代子は默つて宵子の着物を取り除けた。醫者は熱湯の中へ手を入れて「もう少し注水めませう。餘り熱いと火傷でもなさると不可ませんから」と注意した。

醫者の手に抱き取られた宵子は、湯の中に五六分浸けられてゐた。三人は息を殺して柔らかい皮膚の色を見詰めてゐた。「もう好いでせう。餘り長くなると……」と云ひながら、醫者は宵子を盥から出した。母はすぐ受取つてタオルで丁寧に拭いて元の着物を着せて遣つたが、ぐた〳〵になつた宵子の様子に、些とも前と變りがないので、「少しの間此儘寢かして置いて遣りませう」と恨めしさうに松本の顔を見た。松本は夫が可からうと答へた儘、又座敷の方へ取つて返して、來客を玄關に送り出した。

小さい蒲團と小さい枕がやがて宵子の爲に戸棚から取り出された。其上に常の夜の安らかな眠りに落ちたとしか思へない宵子の姿を眺めた千代子は、わつと云つて突伏した。

「叔母さん飛んだ事をしました……」

「何も千代ちやんがした譯ぢやないんだから……」

「でも私が御飯を食べさしてゐたんですから……叔父さんにも叔母さんにも實に濟みません」

千代子は途切れ〳〵の言葉で、先刻自分が夕飯の世話をしてゐた時の、平生と異ならない元氣な様子を、

何遍も繰り返して聞かした。松木は腕組をして「何うも矢つ張り不思議たよ」と云つたが「おいお仙、此所へ寐かして置くのは可哀さうだから、あつちの座敷へ連れて行つてやらう」と細君を促した。千代子も手を貸した。

五

手頃な屏風がないので、唯都合の好い位置を擇つて、何の圍ひもない所へ、そつと北枕に寐かした。今朝方玩弄にしてゐた風船玉を茶の間から持つて來て、お仙が其枕元に置いて遣つた。顔へは白い晒し木綿を掛けた。千代子は時々それを取り除けて見ては泣いた。「一寸貴方」とお仙が松木を顧て「丸で觀音樣の樣に可愛い顔をしてゐます」と鼻を詰まらせた。松木は「左うか」と云つて、自分の坐つてゐる席から宵子の顔を覗き込んだ。

やがて白木の机の上に、樒と線香立と白團子が並べられて、蠟燭の灯が弱い光を放つた時、三人は始めて眠りから覺めない宵子と自分達が遠く離れて仕舞つたといふ心細い感じに打たれた。彼等は代る〴〵線香を上げた。其烟の香が、二時間前とは全く違ふ世界に誘ひ込まれた彼等の鼻を斷えず刺激した。外の子供は平生の通り早く寐かされた後に、咲子といふ十三になる長女丈が起きて線香の側を離れなかつた。

「御前も御寐よ」

「まだ内幸町からも神田からも誰も來ないのね」

「もう來るだらう。好いから早く御寐」

咲子は立つて廊下へ出たが、其所で振り回つて、千代子を招いた。千代子が同じく立つて廊下へ出ると小さな聲で、怖いから一所に便所へ行つて呉れろと頼んだ。便所には電燈が點けてなかつた。千代子は燐寸を擦つて手燭に灯を移して、咲子と一所に廊下を曲がつた。歸りに下女部屋を覗いて見ると、仲働が出入の車夫と火鉢を挾んでひそ／＼何か話してゐた。千代子には夫が宵子の不幸を細かに語つてゐるらしく聞かれた。外の下女は茶の間で來客の用意に膳を拭いたり茶碗を並べたりしてゐた。

弔問を兼ねた親類のものが其内二三人寄つた。何れ又來るからと云つて歸つたのもあつた。千代子は來る人毎に宵子の突然な最後を繰り返し／＼語つた。十二時過ぎからお仙に通夜をする人の爲に、わざと置火燵を拵へて室に入れたが、誰もあたるものはなかつた。主人夫婦は無理に勸められて寢室へ退いた。其後で千代子は幾度か短かくなつた蠟燭の燭を新しく繼いだ。雨はまだ降り已まなかつた。夕方簷端に響いた聲はもう聞こえない代りに、雨滴の樋にあたる音が、非常に淋しくて悲しい響を彼女の耳に絶えず送つた。彼女は此雨の中で、時々宵子の顏に當てた晒を取つては啜り泣きをしてゐるうちに夜が明けた。

翌日は女がみんなして宵子の經帷子を縫つた。百代子が新たに内幸町から來たのと、外に懇意の家の細君が二人程見えたので、小さい袖や裾が、方々の手に渡つた。千代子は半紙と筆と硯とを持つて廻つて、

南無阿彌陀佛といふ六字を誰にも一枚づゝ書かした。「市さんも書いて上げて下さい」と云つて、須永の前へ來た。「何うするんだい」と聞いた須永は、不思議さうに筆と紙を受取つた。

「細かい字で書ける丈一面に書いて下さい。後から六字宛を短冊形に剪つて棺の中へ散らしにして入れるんですから」

皆畏まつて六字の名號を認めた。咲子は見ちや厭よと云ひながら袖屏風をして曲がりくねつた字を書いた。十一になる男の子は僕は假名で書くよと斷つて、ナムアミダブツと電報の樣に幾何も並べた。午過ぎになつて愈棺に入れるとき松本は千代子に「御前着物を着換へさして御遣りな」と云つた。千代子は泣きながら返事もせずに、冷たい宵子を裸にして抱き起した。その背中には紫色の斑點が一面に出てゐた。着換へが濟むとお仙が小さい珠數を手に掛けてやつた。同じく小さい編笠と藁草履を棺に入れた。昨日の夕方迄穿いてゐた赤い毛絲の足袋も入れた。其紐の先に附けた丸い珠のぶら／＼動く姿がすぐ千代子の眼に浮かんだ。みんなの呉れた玩具も足や頭の所へ押し込んだ。最後に南無阿彌陀佛の短冊を雪の樣に振り掛けた上へ蓋をして、白綸子の被をした。

六

友引は善くないといふお仙の說で、葬式を一日延ばしたため、家の中は陰氣な空氣の裡に常よりは賑は

つた。七つになる嘉吉といふ男の子が、何時もの陣太鼓を叩いて叱られた後、そつと千代子の傍へ来て、宵子さんはもう帰つて来ないのと聞いた。須永は笑ひながら、明日は嘉吉さんも焼場へ持つて行つて、宵子さんと一所に焼いて仕舞ふ積りだと調戯ふと、嘉吉はそんな積りなんか僕厭だなと云ひながら、大きな眼をぐる／＼させて須永を見た。咲子は、御母さん妾も明日御葬式に行きたいわとお仙に強請つた。妾もと九つになる重子が頼んだ。お仙は漸く気が附いた様に、奥で田口夫婦と話をしてゐた夫を呼んで、

「貴方、明日入らしつて」と聞いた。

「行くよ。御前も行つてやるが好い」

「えゝ、行く事に極めてます。子供には何を着せたら可いでせう」

「紋附でも可いぢやないか」

「でも余り模様が派手だから」

「袴を穿けば可いよ。男の子は海軍服で沢山だし。御前は黒紋附だらう。黒い帯は持つてるかい」

「持つてます」

「千代子、御前も持つてるなら喪服を着て供に立つて御遣り」

こんな世話を焼いた後で、松本は又奥へ引き返した。千代子も不断着を上げに立つた。棺の上を見ると、何時の間にか綺麗な花環が載せてあつた。「何時来たの」と傍に居る妹の百代に聞いた。百代は小さな声

で「先刻」と答へたが、「叔母さんが子供のだから、白い花だけでは淋しいつて、わざと赤いのを交ぜさしたんですつて」と説明した。姉と妹はしばらく其所に並んで坐つてゐた。十分ばかりすると、千代子は百代の耳に口を附けて、「百代さん貴方宵子さんの死顔を見て」と聞いた。百代は「えゝ」と首肯いた。

「何時」

「ほら先刻御棺に入れる時見たんぢやないの。何故」

千代子は夫を忘れてゐた。妹が若し見ないと云つたら、二人で棺の蓋をもう一遍開けようと思つたのである。「御止しなさいよ、怖いから」と云つて百代は首を掉つた。

晩には通夜僧が來て御經を上げた。千代子が傍で聞いてゐると、松本は坊さんを捕まへて、三部經がどうだの、和讃がどうだのといふ變な話しをしてゐた。其會話の中には親鸞上人と蓮如上人といふ名が度々出て來た。十時少し廻つた頃、松本は菓子と御布施を僧の前に並べて、もう宜しいから御引き取り下さいと斷つた。坊さんの歸つた後でお仙が其理由を聞くと、「何坊さんも早く寐た方が勝手だあね。宵子だつて御經なんか聽くのは嫌ひだよ」と濟ましてゐた。千代子と百代子は顔を見合はせて微笑した。

あくる日は風のない明らかな空の下に、小さな棺が靜かに動いた。路端の人はそれを何か不可思議のものでもあるかの樣に目送した。松本は白張の提灯や白木の輿が嫌ひだと云つて、宵子の棺を喪車に入れたのである。其喪車の周圍に垂れた黒い幕が搖れる度に、白綸子の覆をした小さな棺の上に飾つた花環がち

らちら見えた。其所いらに遊んでゐた子供が驅け寄つて來て、珍らしさうに車の中を覗き込んだ。車と行き逢つた時、脱帽して過ぎた人もあつた。

寺では簡略な佛事も形式通り濟んだ。千代子は廣い本堂に坐つてゐる間、不思議に涙も何も出なかつた。最後に遺骸の顔を見しよといつて蓋ひに鎖された宵子は見えなかつた。燒香の時、重子が香を撮んで香爐の裏へ燻べるのを間違へて、灰を一撮み取つて、抹香の中へ打ち込んだ折には、可笑しくなつて吹き出した位である。式が果ててから松本と須永と別に一二人棺に附き添つて火葬場へ廻つたので、千代子は外のものと一所にまた矢來へ歸つて來た。車の上で、切なさの少し減つた今よりも、苦しい位悲しかつた昨日一昨日の氣分の方が、清くて美しい物を多量に含んでゐたらしく考へて、其時味はつた痛烈な悲哀を却つて戀しく思つた。

七

骨上げにはお仙と須永と千代子と夫に平生宵子の守をしてゐた清といふ下女が附いて都合四人で行つた。柏木の停車場を下りると二丁位な所を、つい氣が附かずに宅から車に乘つて出たので、時間は却つて長く掛かつた。火葬場の景色は千代子に取つて生れて始めてであつた。久しく見ずにゐた郊外の自然さへ忘れ物を思ひ出した樣に嬉しかつた。眼に入るものは青い麥畠と青い大根畠と常磐木の中に赤や黄や褐色を雜多に交

ぜた森の色であつた。前へ行く須永は時々後を振り返つて、穴八幡だの諏訪の森だのを千代子に敎へた。車が暗いだら〳〵坂へ來た時、彼は又小高い杉の木立の中にある細長い塔を千代子の爲に指さした。夫には弘法大師千五十年供養塔と刻んであつた。その下に熊笹の生ひ茂つた吹井戸を控へて、一軒の茶見世が橋の袂を左も田舍道らしく見せてゐた。折々坊主になりかけた高い樹の枝の上から、色の變つた小さい葉が一つづゝ落ちて來た。夫が空中で非常に早くきり〳〵舞ふ姿が鮮やかに千代子の眼を刺激した。夫が容易に地面の上へ落ちずに、何時迄も途中でひら〳〵するのも、彼女には眼新しい現象であつた。

火葬場は日當りの好い平地に南を受けて建てられてゐるので、車を門内に引き入れた時、思つたより陽氣な影が千代子の胸に射した。お仙が事務所の前で、松本ですがと云ふと、郵便局の受附口見た樣な窓の中に坐つてゐた男が、鍵は御持ちでせうねと聞いた。お仙は變な顏をして急に懷や帶の間を探り出した。

「飛んだ事をしたよ。鍵を茶の間の用簞笥の上へ置いたなり……」

「持つて來なかつたの。ぢや困るわね。まだ時間があるから急いで市さんに取つて來て貰ふと好いわ」

二人の問答を後の方で冷淡に聞いてゐた須永は、鍵なら僕が持つて來てゐるよと云つて、冷たい重いものを袂から出して叔母に渡した。お仙が夫を受附口へ見せてゐる間に、千代子は須永を窘めた

「市さん、貴方本當に惡らしい方ね。持つてるなら早く出して上げれば可いのに。叔母さんは宵子さんの事で、頭が盆槍してゐるから忘れるんぢやありませんか」

須永は唯微笑して立つてゐた。

「貴方の樣な不人情な人は斯んな時には一層來ない方が可いわ。宵子さんが死んだつて、涙一つ零すぢやなし」

「不人情なんぢやない。また子供を持つた事がないから、親子の情愛が能く解らないんだよ」

「まあ。能く叔母さんの前でそんな呑氣な事が云へるのね。ぢや妾なんか何うしたの。何時子供持つた覺えがあつて」

「あるか何うか僕は知らない。けれども千代ちやんは女だから、大方男より美しい心を持つてるんだらう」

お仙は二人の口論を聞かない人の樣に、用事を濟ますとすぐ待合所の方へ步いて行つた。其處へ腰を掛けてから、立つてゐる千代子を手招きした。千代子はすぐ叔母の傍へ來て座に着いた。須永も續いて這入つて來た。さうして二人の向う側にある涼み臺見た樣なものの上に腰を掛けた。[illegible]も御掛けと云つて自分の席を割いて遣つた。

四人が茶を呑んで待ち合はしてゐる間に、骨上げの連中が二三組見えた。最初のは田舍染みた御婆さん丈で、是はお仙と千代子の服裝に對して遠慮でもしたらしく口數を多く利かなかつた。次には尻を絡げた親子連が來た。活潑な聲で、壺を下さいと云つて、一番安いのを十六錢で買つて行つた。三番目には前髪

に角帯を締めた男とも女とも片の附かない盲者が、紫の袴を穿いた女の子に手を引かれて遣つて來た。さうして未だ時間はあるだらうねと念を押して、袂から出した卷煙草を喫ひ始めた。須永は此盲者の顏を見ると立ち上がつてぷいと表へ出たぎり中々返つて來なかつた。所へ事務所のものがお仙の傍へ來て、用意が出來ましたから何うぞと促したので、千代子は須永を呼びに裏手へ出た。

八

眞鍮の掛札に何々殿と書いた並等の竈を、薄氣味惡く左右に見て裏へ拔けると、廣い空地の隅に松薪が山の様に積んであつた。周圍には綺麗な孟宗藪が蒼々と茂つてゐた。其下が麥畠で、麥畠の向うが又岡續きに高く蜿蜒してゐるので、北側の眺めは殊に晴々しかつた。須永は此空地の端に立つて廣い眼界をぼんやり見渡してゐた。

「市さん、もう用意が出來たんですつて」

須永は千代子の聲を聞いて默つた儘歸つて來たが、「あの竹藪は大變見事だね。何だか死人の膏が肥料になつて、あゝ生々延びる様な氣がするぢやないか。此所に出來る筍は屹度旨いよ」と云つた。千代子は「おゝ厭だ」と云ひ放しにして、さつさと並等を通り拔けた。宵子の竈は上等の一號といふので、扉の上に紫の幕が張つてあつた。その前に昨日の花環が少し凋み掛けて、臺の上に靜かに横たはつてゐた。夫

か昨夜宵子の肉を燒いた熱氣の記念の樣に思はれるので、千代子は急に息苦しくなつた。御坊が三人出て來た。其内の一番年を取つたのが「御封印を……」と云ふので、須永は「よし、構はないから開けて呉れ」と頼んだ。畏まつた御坊は自分の手で封印を切つて、かちやりと響く音をさせながら錠を拔いた。黑い鐵の扉が左右へ開くと、薄暗い奥の方に、灰色の丸いものだの、黑いものだの、白いものだのが、形を成さない一塊となつて朧氣に見えた。御坊は「今出しませう」と斷つて、レールを二本前の方に繼ぎ足して置いて、鐵の棒に似たものを二つ棺臺の端に掛けたかと思ふと、忽然がら／＼といふ音と共に、かの形を成さない一塊の燒殼りが四人の立つてゐる鼻の下へ出て來た。千代子は其なかで、例の御供に似てふつくらと膨らんだ宵子の頭蓋骨が、生きてゐた時其儘の姿で殘つてゐるのを認めて急に手帛を口に銜へた。御坊は此頭蓋骨と頰骨と外に二つ三つの大きな骨を殘して、「あとは綺麗に篩つて持つて參りませう」と云つた。

四人は各自木箸と竹箸を一本宛持つて、臺の上の白骨を思ひ／＼に拾つては、白い壺の中へ入れた。さうして云ひ合はせた樣に泣いた。たゞ須永丈は蒼白い顏をして口も利かず鼻も鳴らさなかつた。「齒は別になさいますか」と聞きながら、御坊が小箸用に齒を拾ひ分けて呉れた時、顎なくしや／＼と潰して其中から二三枚拾ひ出したのを見た須永は、「斯うなると丸で人間の樣な氣がしないな。砂の中から小石を拾ひ出すと同じ事だ」と獨り言の樣に云つた。下女が三和土の上にぽた／＼と涙を落とした。お仙と千代子は箸を置いて手帛を顏へ當てた。

車に乗るとき千代子は杉の箱に入れた白い壺を抱いて夫を膝の上に載せた。車が駈け出すと冷たい風が膝掛と杉箱の間から吹き込んだ。高い欅が白茶けた幹を路の左右に並べて、彼等を送り迎へる如くに細い枝を揺り動かした。其細い枝が遙か頭の上で交叉する程繁く両側から出てゐるのに、自分の通る所は存外明るいのを奇妙に思つて、千代子は折々頭を上げては、遠い空を眺めた。宅へ着いて遺骨を佛壇の前に置いた時、すぐ寄つて来た子供が、蓋を開けて見せて呉れといふのを彼女は断然拒絶した。

やがて家内中同じ室で晝飯の膳に向つた。「斯うして見ると、まだ子供が澤山ゐるやうだが、是で一人もう缺けたんだね」と須永が云ひ出した。

「生きてる内は夫程にも思はないが、逝かれて見ると一番惜しい様だね。此所にゐる連中のうちで誰か代りになれば可いと思ふ位だ」と松本が云つた。

「非道いわね」と重子が咲子に耳語いた。

「叔母さん又奮發して、宵子さんと瓜二つの様な子を拵へて頂戴。可愛がつて上げるから」

「宵子と同じ子ぢや不可ないでせう、宵子でなくつちや。御茶碗や帽子と違つて代りが出來たつて、亡くしたのを忘れる譯にや行かないんだから」

「己は雨の降る日に紹介狀を持つて會ひに來る男が厭になつた」

須永の話

一

敬太郎は須永の門前で後姿の女を見て以來、此二人を結び附ける縁の糸を常に想像した。其糸には一種夢の樣な匂があるので、二人を眼の前に、須永とし又千代子として眺める時には、却て何處かへ消えて仕舞ふ事が多かつた。けれども彼等が普通の人間として敬太郎の肉眼に現實の刺戟を與へない折々には、失はれた糸が又二人の中を離すべからざる因果の如くに繋いだ。田口の家へ出入をする樣になつてからも、須永と千代子の關係に就いては、一口でさへ誰からも聞いた事はなし、又二人の樣子を直かに觀察しても尋常の從兄妹以上に何物も見出いてゐなかつたには違ひないが、斯ういふ當初からの聯想に支配されて、彼は頭の何處かに、二人を常に一對の男女として眺める傾きを有つてゐた。女の連れ添はない若い男や、男の手を組まない若い女は、要するに敬太郎から見れば自然を損なつた片輪に過ぎないので、彼が自分の知る彼等を頭のうちで斯樣に組み合はせたのは、まだ片輪の境遇に迷兒附いてゐる二人に、自然が生み附けた通りの資格を早く與へて遣りたいといふ道義心の要求から起つたのかも知れなかつた。

それは小六づかしい理窟だから、假令何んな要求から起らうと敬太郎の爲に辯ずる必要はないが、此頃

になつて偶然千代子の結婚談を耳にした彼が、頭の中の世界と、頭の外にある社會との矛盾に、一寸首を捻つたのは事實に相違なかつた。彼は其話を書生の佐伯から聞いたのである。尤も佐伯の樣なものが、まだ事の纏まらない先から、奥の委しい話を知らう筈がなかつた。彼はたゞ漠然とした顏の筋肉を何時もより緊張させて、何でもそんな評判ですと云ふ丈であつた。千代子を貰ふ人の名前も無論分らなかつたが、身分の實業家である事は慥かに思はれた。

「千代子さんは須永君の所へ行くのだと許り思つてゐたが、左うぢやないのかね」

「左うも行かないでせう」

「何故」

「何故つて聞かれると、僕にも明瞭な答は出來惡いんですが、一寸考へて見ても六づかしさうですね」

「左うかね、僕は又丁度好い夫婦だと思つてるがね。親類ぢやあるし、年だつて五つか六つ違ひなら可笑しかなしさ」

「知らない人から見ると一寸さう見えるでせうがね。裏面には色々複雜な事情もある樣ですから」

敬太郎は佐伯の云はゆる「複雜な事情」なるものを根掘り葉掘り聞きたくなつたが、何だか自分を門外漢扱ひにする樣な彼の言葉が癪に障るのと、高が玄關番の書生から家庭の内幕を聞き出したと云はれては自分の品格に拘るのと、最後には、口程詳しい事情を佐伯が知つてゐる氣遣ひがないのとで、夫限り其話

しば已めにした。其折序ながら奥へ行つて細君に挨拶をして少時話したが、別に平生と何う變る樣子もないので、御目出たう御座いますと云ふ勇氣も出なかつた。

是は敬太郎が須永の宅で矢來の叔父さんの家にあつた不幸を千代子から聞いたつい二三日前の事であつた。其日彼が久し振に須永を訪問したのも、實は其結婚問題に就いて須永の考へを確める積りであつた。須永が何處の何人と結婚しようと、千代子が何處の何人に片附かうと、夫は敬太郎の關係する所ではなかつたが、此二人の運命が、夫程容易く右左へ未練なく離れ／＼になり得るものか、又は自分の想像した通り密に組んだ糸の樣なものが、二人にも見えない縁となつて、彼等を冥々のうちに繫ぎ合はせてゐるものか。夫とも此夢で織つた帶とでも形容して然るべき散ら散らするものが、或時は二人の眼に明らかに見え、或時は全く切れて、彼等をばら／＼に孤立させるものか、——其所いらが敬太郎には知りたかつたのである。固より夫は單なる物數奇に過ぎなかつた。彼は明らかに左うだと自覺してゐた。けれども須永に對してなら、此物數奇を滿足させても無禮に當たらない事も自覺してゐた。夫計りか此物數奇を滿足させる權利があると迄信じてゐた。

二

其日は生憎千代子に妨げられた上、仕舞には須永の母さへ出て來たので、大分長く坐つてゐたにも拘ら

ず、立ち入つた話しは一切持ち出す機會がなかつた。たゞ敬太郎は偶然にも自分の前に並んだ三人が、有りの儘の今の姿で、現に似合はしい夫婦と姑に成り終せてゐるといふ事に不圖思ひ及んだ時、彼等を世間並の形式で纏めるのは、最も容易い仕事の樣に考へて歸つた。

次の日曜が又幸ひな暖かい日和を凡ての勤め人に惠んだので、敬太郎は朝早くから須永を尋ねて郊外に誘はうとした。無精で我儘な彼は玄關先迄出て來ながら、中々應じさうにしなかつたのを、母親が無理に勸めて漸く靴を穿かした。靴を穿いた以上彼は、敬太郎の意志通り何方へでも動く人であつた。其代りいくら相談を掛けても、ある判切した方角へ是非共足を運ばなければならないと主張する男ではなかつた。彼と矢來の松本と一所に出ると、二人とも行先を考へずに歩くので、一致して飛んでもない所へ到着する事がまゝ有つた。敬太郎は現に此人の母の口から其例を聞かされたのである。

此日彼等は兩國から汽車に乘つて鴻の臺の下迄行つて降りた。夫から美しい廣い河に沿つて土堤の上をのそ／＼歩いた。敬太郎は久し振に晴々した好い氣分になつて、水だの岡だの帆懸船だのを見廻した。須永も景色は賞めたが、まだ斯んな吹き晴らしの土堤などを歩く季節ぢやないと云つて、寒いのに伴れ出した敬太郎を恨んだ。早く歩けば暖かくなると云つて敬太郎はさつさと歩き始めた。須永は呆れた樣な顏をして跟いて來た。二人は柴又の帝釋天の傍迄來て、川甚といふ家へ這入つて飯を食つた。其所で誂へた鰻の蒲燒が甘垂るくて食へないと云つて、須永は又苦い顏をした。先刻から二人の氣分が熱しないので、し

んみりした話しをする餘地が出て來ないのを苦しがつてゐた敬太郎は、此時須永に「江戸つ子は贅澤なものだね。細君を貰ふときにも左う贅澤を云ふかね」と聞いた。

「云へれば誰だつて云ふさ。何も江戸つ子に限りあしない。君見た樣な田舍ものだつて云ふだらう」

須永は斯う答へて澄ましてゐた。敬太郎は仕方なしに「江戸つ子は無愛嬌なものだね」と云つて笑ひ出した。須永も突然可笑しくなつたと見えて笑ひ出した。夫から後は二人の氣分と同じ樣に、二人の會話も圓滑に流れ出した。敬太郎が須永から「君も此頃は大分落ち附いて來た樣だ」と評されても、彼は「少し眞面目になつたかね」と大人しく受けるし、彼が須永に「君は益偏窟に傾くぢやないか」と調戲つても、須永は「何うも自分ながら厭になる事がある」と快く己の弱點を承認する丈であつた。

斯ういふ打ち解けた心持で、二人が差向ひに互の胸の奥を見透して恥づかしがらない時に、千代子の問題が持ち出されたのは、其眞相を聞かうとする敬太郎に取つて偶然の仕合せであつた。彼は先づ一週間程前耳にした彼女が近いうちに結婚するといふ噂を皮切りに須永を襲つた。其時須永は少しも昂奮した樣子を見せなかつた。寧ろ何時もより沈んだ調子で、「又何か緣談が起り掛けてゐるやうだね。今度は旨く纏まれば可いが」と答へたが、急に口調を更へて、「なに君は知らない事だが、今迄もさう云ふ話は何度もあつたんだよ」と左も陳腐らしさうに說明して聞かせた。

「君は貰ふ氣はないのかい」

「僕が貰ふ樣に見えるかね」

話しは斯んな風に、御互で引き摺る樣にして段々先へ進んだが、愈際どい所迄打ち明けるか、左もなければ題目を更へるより外に仕方がないといふ點迄押し詰められた時、須永はとう〳〵敬太郎に「又洋杖を持つて來たんだね」と云つて苦笑した。敬太郎も笑ひながら縁側へ出た。其所から例の洋杖を取つて又這入つて來たが「此通りだ」と蛇の頭を須永に見せた。

三

須永の話しは敬太郎の豫期したよりも遙かに長かつた。――

僕の父は早く死んだ。僕がまだ親子の情愛を能く解しない子供の頃に突然死んで仕舞つた。僕は子がないから、自分の血を分けた温かい肉の塊りに對する情に、今でも比較的薄いかも知れないが、自分を生んで呉れた親を懷かしいと思ふ心は其後大分發達した。今の心を其時分持つてゐたならと考へる事も稀ではない。一言でいふと、當時の僕は父には甚だ冷淡だつたのである。尤も父も決して甘い方ではなかつた。今の僕の胸に映る彼の顏は、骨の高い血色の勝れない、親しみの薄い、嚴格な表情に充ちた肖像に過ぎない。僕は自分の顏を鏡の裡に見るたんびに、それが胸の中に收めた父の容貌と大變似てゐるのを思ひ出しては不愉快になる。自分が父と同じ厭な印象を、傍の人に與へはしまいかと苦に病んで、其所で氣が引け

る訳ではない。斯んな陰欝な口や顔が代表するよりも、まだ増しな温かい情愛を、血の中に流してゐる今の自分から推して、あんな冷酷に見えた父も、心の底には自分以上に熱い涙を貯へてゐたのではなからうかと考へると、父の記念として、彼の酷い上皮丈を覚えてゐるのが、子として如何にも情ない心持がするからである。父は死ぬ二三日前僕を枕元に呼んで、「市蔵、おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくつちやならないぞ。知つてるか」と云つた。僕は生れた時から母の厄介になつてゐたのだから、今更改めて父からそれを聞かされるのを妙に思つた。仕方がないから黙つて坐つてゐると、父は骨計りになつた顔の筋を無理に動かす様にして、「今の様に腕白ぢや、御母さんも構つて呉れないぞ。もう少し大人しくしないと」と云つた。僕は母が今迄構つて呉れたんだから此儘の僕で沢山だといふ気が充分あつた。それで父の小言を丸で必要のない余計な事の様に考へて病室を出た。

父が死んだ時母は非常に泣いた。葬式が出る間際になつて、僕は着物を着換へさせられた儘、手持無沙汰だから、一人縁側へ出て、蒼い空を覗き込む様に眺めてゐると、白無垢を着た母が何を思つたか不意に其所へ出て来た。田口や松本を始め、側に立つものはみんな向うの方で混雑してゐたので、傍には誰も見えなかつた。母は突然自分の坊主頭へ手を被せて、泣き腫らした眼を自分の上に据ゑた。さうして小さい声で、「御父さんが御亡くなりになつても、御母さんが今迄通り可愛がつて上げるから安心なさいよ」と云つた。僕は何とも答へなかつた。涙も落さなかつた。其時は夫で済んだが、両親に対する僕の記憶に、

生長の後に至つて、遠くの方で曇らすものは、二人の此時の言葉であるといふ感じが其後次第々々に強く明らかになつて來た。何の意味も附ける必要のない彼等の言葉に、僕は何故厚い疑惑の裏打ちをしなければならないのか、それは僕自身に聞いて見ても丸で說明が附かなかつた。時々は母に向つて直かに問ひ糺して見たい氣も起つたが、母の顏を見ると急に勇氣が挫けて仕舞ふのが例であつた。さうして心の中の何處かで、それを打ち明けたが最後、親しい母子が離れ〴〵になつて、永久今の睦まじさに戻る機會はないと僕に耳語くものが出て來た。夫でなくても、母は僕の眞面目な顏を見守つて、そんな事が有つたつけかねと笑ひに紛らしさうなので、さう剝ぐらかされた時の殘酷な結果を豫想すると、到底口へ出された義理ぢやないと思ひ直しては默つてゐた。

僕は母に對して決して柔順な息子ではなかつた。父の死ぬ前に枕元へ呼び附けられて意見された丈あつて、小さいうちから能く母に逆らつた。大きくなつて、女親だけに猶更優しくして遣りたいといふ分別が出來た後でも、矢つ張り彼女の云ふ通りにはならなかつた。此二三年は殊に心配ばかり掛けてゐた。が、幾何勝手を云ひ合つても、母子は生れて以來の母子で、此貴い觀念を傷つけられた覺えは、重手にしろ淺手にしろ、まだ經驗した試しがないといふ考へから、若し彼の事を云ひ出して、二人共後悔の瘢痕を遺さなければ濟まない痛手を受けたなら、夫こそ取り返しの附かない不幸だと思つてゐた。此畏怖の念は神經質に生れた僕の頭で拵へるのかも知れないとも疑つて見た。けれども僕にはそれが現在よりも明らかな未來

として存在してゐる事が多かつた。だから僕は彼の時の父と母の言葉を、それなり忘れて仕舞ふ事が出来なかつたのを、今でも情なく感ずるのである。

四

父と母の間は何れ程圓滿であつたか、僕には分らない。僕はまだ妻を貰つた經驗がないから、さう云ふ事を口にする資格はないかも知れないが、如何な仲の善い夫婦でも、時々は氣不味い思ひを爲合ふのが人間の常だらうから、彼等だつて永く添つてゐるうちには面白くない汚點を双方の胸の裏に見出しつゝ、世間も知らず互も口にしない不滿を、自分一人苦く味はつて我慢した場合もあつたのだらうと思ふ。尤も父は癇癖の強い割に陰性な男だつたし、母は長唄をうたふ時より外に、大きな聲の出せない性分なので、僕は二人の言ひ爭ふ現場を、父の死ぬ迄未だ曾て目擊した事がなかつた。要するに世間から云へば、僕等の宅程靜かに整つた家庭は滅多に見當らなかつたのである。あの位他の惡口を露骨にいふ松本の叔父でさへ、今だにさう認めて間違ひないものと信じ切つてゐる。

母は僕に對して死んだ父を讃る毎に、世間の夫のうちで最も完全に近いものの標本に吹聽して已まない。是は自分が僕の頭の底に溜つた儘沈んでゐる父の記憶を清めたい母の精神とも思はれる。又は彼女自身の記憶に時間の霞を掛けて昔を淡く出す積りとも見られる。けれども慈愛に充ちた親としての父を僕に

紹介する時には、彼女の態度が全く一變する。平生僕が目の當りに見てゐるあの柔和な母が、何うして斯う眞面目になれるだらうと驚く位、嚴肅な氣象で僕を打ち据ゑる事さへあつた。が、夫は僕が中學から高等學校へ移る時分の昔である。今はいくら母に強請つて同じ話しを繰り返して貰つても、そんな氣高い氣分には到底なれない。僕の情操は其頃から學校を卒業する迄の間に、近頃の小說に出る主人公の樣に、丸で荒み果てたのだらう。現代の空氣に中毒した自分を呪ひたくなると、僕は時々もう一遍で好いから、母の前であゝ云ふ崇高な感じに觸れて見たいといふ望みを起すが、同時に其望みが到底遂げられない過去の夢であるといふ悲しみも湧いて來る。

　母の性格は吾々が昔から用ひ慣れた慈母といふ言葉で形容さへすれば、夫で盡きてゐる。僕から見ると彼女は此二字の爲に生れて此二字の爲に死ぬと云つても差支へない。まことに氣の毒であるが、夫でも母は生活の滿足を此一點にのみ集注してゐるのだから、僕さへ充分の孝行が出來れば、是に越した彼女の喜びはないのである。が、もし其僕が彼女の意に背く事が多かつたら、是程の不幸は又彼女に取つて決してない譯になる。それを思ふと僕は非常に心苦しい事がある。

　思ひ出したから此所で一寸云ふが、僕は生れてからの一人息子ではない。子供の時分に妙ちやんといふ妹と毎日遊んだ事を覺えてゐる。其妹は大きな模樣のある被布を平生着て、人形の樣に髮を切り下げてゐた。さうして僕の事を常に市藏ちやん市藏ちやんと云つて、兄さんとは決して呼ばなかつた。此妹

は父の亡くなる何年前かに實扶的里亞で死んで仕舞つた。其頃は血清注射がまだ發明されない時分だつたので、治療も大變に困難だつたのだらう。僕は固より實扶的里亞と云ふ名前さへ知らなかつた。宅へ見舞に來た松本に、御前も實扶的里亞かと調戲はれて、うん左うぢやないよ僕軍人だよと答へたのを今だに忘れずにゐる。妹が死んでから當分六づかしい父の顔が大分優しく見えた。母に向つて、まことに御前には氣の毒な事をしたといつた顔が殊に穏やかだつたので、子供ながら、つい其時の言葉迄小さい胸に刻み附けて置いた。然し母が夫に對して何う答へたかは全く知らない。いくら思ひ出さうとしても思ひ出せない所を見ると、初めから聽かなかつたのだらう。是程鋭敏に父を觀察する能力を、子供の時から持つてゐた僕の、母に對する注意に缺けてゐたのも不思議である。人間が自分よりも餘計に他を知りたがる癖のあるものだとすれば、僕の父は母よりも餘程他人らしく僕に見えてゐたのかも分らない。それを逆に云ふと、母は觀察に價しない程僕に親しかつたのである。――兎に角妹は死んだ。それから僕は父に對しても母に對しても一人息子であつた。父が死んで以後の今の僕は母に對しての一人息子である。

五

だから僕は母を出來る丈大事にしなければ濟まない。が、實際は同じ原因が却て僕を我儘にしてゐる。僕は大學を卒業してから今日迄、まだ就職といふ問題について唯の一日も頭を痛めた事がない。居た

時の成績は寧ろ好い方であつた。席次を目安に人を採る今の習慣を利用しようと思へば、随分友達を羨ましがらせる位置に坐り込む機會もないではなかつた。現に一度はある方面から人選の依託を受けた某教授に呼ばれて意向を聞かれた記憶さへ有つてゐる。夫だのに僕は動かなかつた。固より自慢で斯う云ふ話しをするのではない。眞底を打ち明ければ寧ろ自慢の反對で、全く信念の缺乏から來た引込み思案なのだから不愉快である。が、朝から晩迄氣骨を折つて、世の中に持て囃された所で、何處が何うしたんだといふ横着は、無論斷る時から附け纏つてゐた。僕は時めくために生れた男ではないと思ふ。法律などを修めないで、植物學か天文學でも遣つたらまだ性に合つた仕事が天から授かるかも知れないと思ふ。僕は世間に對しては甚だ氣の弱い癖に、自分に對しては大變辛抱の好い男だから左う思ふのである。

斯ういふ僕の我儘を我儘なりに通して呉れるものは、云ふ迄もなく父が遺して行つた僅ばかりの財産である。もし此財産がなかつたら、僕は何んな苦しい思ひをしても、法學士の肩書を利用して、世間と戰はなければならないのだと考へると、僕は死んだ父に對して改めて感謝の念を捧げたくなると同時に、自分の我儘は此財産のためにやつと存在を許されてゐるのだから餘程腰の坐らない淺薄なものに違ひないと推斷する。さうして其犧牲にされてゐる母が一層氣の毒になる。

母は昔堅氣の教育を受けた婦人の常として、家名を揚げるのが子たるものの第一の務めだといふ樣な考へを、何より先に抱いてゐる。然し彼女の家名を揚げるといふのは、名譽の意味か、財産の意味か、權力

の意味か、又は面目の意味か、其所へ行くと全く何の分別もない。たゞ漠然と、一つが頭の上に落ちて来れば、凡て其他が後を追つて門前に輻湊する位に思つてゐる。然し僕はさういふ問題に就いて、何事も母に説明して遣る勇氣がない。説明して聞かせるには、先づ僕の見識で尤もと認めた家名の揚げ方をした上でないと、僕に其資格が出來ないからである。僕は如何なる意味に於ても家名を揚げ得る男ではない。たゞ汚さない丈の見識を頭に入れて置く計りである」さうして其見識は母に見せて喜んで貰へる所か、彼女とは丸で懸け離れた縁のないものなのだから、母も心細いだらう。僕も淋しい。

僕が母に掛ける心配の數あるうちで、第一に擧げなければならないのは、今話した通りの僕の缺點である。然し此缺點を矯めずに母と不足なく暮らして行かれる程、母は僕を愛してゐて呉れるのだから、唯濟まないと思ふ心を失はずに、此儘で押せば押せない事もないが、此我儘よりももつと鋭い失望を母に與へさうなので、僕が私かに胸を痛めてゐるのは結婚問題である。結婚問題と云ふより僕と千代子を取り卷く周圍の事情と云つた方が適當かも知れない。夫を説明するには話しの順序として先づ千代子の生れない當時に溯る必要がある。其頃の田口は決して今程の幅利きでも資産家でもなかつた。たゞ將來見込のある男だからと云ふので、父が母の妹に當たるあの叔母を嫁に遣るやうに周旋したのである。田口は固より僕の父を先輩として仰いでゐた。何數につけて相談もしたり、世話にもなつた。兩家の間に新しく成立した此親しい關係が、月と共に加速度を以て圓滿に進行しつゝある際に千代子が生れた。其時僕の母は何う思つ

たものか、大きくなつたら此子を市藏の嫁に貰れまいかと田口夫婦に頼んだのださうである。母の語る所によると、彼等は其折快く母の頼みを承諾したのだと云ふ。固より後から百代が生れる。吾一といふ男の子も出來る、千代子を遣らうとすれば何處へでも遣られるのだが、乾度僕に遣らなければならない程確かに母に受合つたか何うか、其所は僕も知らない。

六

兎に角僕と千代子の間には兩方共物心の附かない當時から既に斯ういふ絆があつた。けれども其絆は僕等二人を結び附ける上に於て頗る怪しい絆であつた。二人は固より天に上がる雲雀の如く自由に生長した。絆を綯つた人でさへ確と其端を握つてゐる氣ではなかつたのであらう。僕は怪しい絆といふ文字を奇縁といふ意味で此所に使ふ事の出來ないのを深く母の爲に悲しむのである。

母は僕の高等學校に這入つた時分夫となく千代子の事を仄めかした。其頃の僕に色氣のあつたのは無論である。けれども未來の妻といふ觀念は丸で頭に無かつた。そんな話しに取り合ふ落ち附きさへ持つてゐなかつた。殊に子供の時から一所に遊んだり喧嘩をしたり、殆ど同じ家に生長したと違はない親しみのある少女は、餘り自分に近過ぎるためか甚だ平凡に見えて、異性に對する普通の刺激を與へるに足りなかつた。是は僕の方ばかりではあるまい、千代子も恐らく同感だらうと思ふ。其證據には長い交際の前後を通

じて、僕は未だ曾て男として彼女から取り扱はれた經驗を記憶する事が出來ない。彼女から見た僕は、然らうが泣かうが、科をしようが色眼を使はうが、常に變らない從兄に過ぎないのである。尤も是は幾分か、純粹な氣性を受けて生れた彼女の性情からも出るので、其所になると又僕程彼女を知り拔いてゐるものはないのだが、單に夫丈であゝ男女の牆壁が取り除けられる譯のものではあるまい。たゞ一度……然し是は後で話す方が宜からうと思ふ。

母は自分のいふ事に耳を借さなかつた僕を羞恥家と解釋して、再び時機を待つものの如くに、此問題を懷に收めた。羞恥は僕と雖も否定する勇氣がない。然し千代子に意があるから羞恥んだのだと取つた母は、全くの反對を事實と認めたと同じ事である。要するに母は未來に對する準備といふ考へから、僕等二人を成る可く仲善く育て上げようと力めた結果、男女としての二人を次第に遠ざからした。さうして自分では知らずにゐた。夫を知らなければならない樣にした僕は全く殘酷であつた。

其日の事を語るのが僕には實際の苦痛である。母は高等學校時代に匂はした千代子の問題を、僕が大學の二年になる迄、凝と懷に抱いた儘一人で温めてゐたと見えて、ある晩――春休みの頃の花の咲いたといふ噂のあつた試日の晩――そつと僕の前に出して見せた。其時は僕も大分大人らしくなつてゐたので、靜かに其問題を取り上げて、裏表から丁寧に吟味する餘裕が出來てゐた。母も其時にはたゞ遠くから匂はせる丈でなくて、自分の希望に正當の形式を具へる事を忘れなかつた。僕は何心なく從妹は血族だから厭だ

と答へた。母は千代子の生れた時呉れろと頼んで置いたのだから貰つたら可いだらうと云つて僕を驚かした。何故そんな事を頼んだのかと聞くと、何故でも私の好きな子で、御前も嫌ふ筈がないからだと、赤ん坊には應用の利かない樣な挨拶をして僕を弱らせた。段々其所を押して見ると、仕舞に涙ぐんで、實は御前の爲ではない、全く私の爲に頼むのだと云ふ。しかも何うして夫が母の爲になるのか、其理由は幾何聞いても語らない。最後に何でも蚊でも千代子は厭かと聞かれた。僕は厭でも何でもないと答へた。然し當人も僕の所へ來る氣はなし、田口の叔父も叔母も僕に呉れたくはないのだから、そんな事を申し込むのは止した方が好い、先方で迷惑する丈だからと教へた。母は約束だから迷惑しても構はない、又迷惑する筈がないと主張して、昔田口が父の世話になつたり厄介になつたりした例を數へ擧げた。僕は已むを得ないから此問題は卒業する迄解決を着けずに置かうと云ひ出した。母は不安の裏に一縷の望みを現はした顏色をして、もう一遍篤と考へて見て呉れと頼んだ。

斯ういふ事情で、今迄母一人で懐に抱いてゐた問題を、其後は僕も抱かなければならなくなつた。田口は又田口流に、同じ問題を孵しつゝあるのではなからうか。假令千代子を外へ縁附けるにしても、いざと云ふ場合には一應此方の承諾を得る必要があるとすれば、叔父も氣掛りに違ひない。

七

僕は不安になつた。母の顔を見る度に、彼女を欺いて其日々々を姑息に送つてゐる樣な氣がして濟まなかつた。一頃は思ひ直して出來得るならば母の希望通り千代子を貰つて遣りたいとも考へた。僕は其爲にわざ／＼用もない田口の家へ遊びに行つて夫となく叔父や叔母の樣子を見た。彼等は僕の母の内意に應ずる準備として何事も僕を疎んずる樣な素振を口にも擧動にも決して示さなかつた。彼等は夫程淺薄な又不親切な人間で無かつたのである。けれども彼等の娘の未來の夫として、僕が彼等の眼に如何に憐むべく映じてゐたかは、遂に聞かぬ僕の見拔いてゐた所と、いつとも變化して來ないばかりか、近頃になつて益其憐さが著しくなる樣に思はれた。彼等は單に僕の弱々しい性格と僕の蒼白い顔色とを婿として肯はない積りらしかつた。尤も僕は神經の鋭く動く性質だから、物を誇大に考へ過ごしたり、要らぬ僻みを起して見たりする癖がよくあるので、自分の胸に收めた委しい叔父叔母の觀察を遠慮なく此所に述べる非禮は憚りたい。たゞ一言で云ふと、彼等は其當時千代子を僕の嫁にしようと斷言したのだらう。少なくとも遣つても可い位には考へてゐたのだらう。が、其後彼等の社會に占め得た地位と、彼等とは背中合せに進んで行く僕の性格が、二重に實行の便宜を奪つて、たゞ惚けかゝつた空しい義理の拔け殼を、彼等の頭の何處かに置き去りにして行つたと思へば差支へないのである。

僕と彼等とはあらゆる人の結婚問題に就いても多くを語る機會を持たなかつた。たゞある時叔母と僕との間に斯んな會話が取り換はされた。

「市さんも最う徐々奥さんを探さなくつちやなりませんね。姉さんは疾うから心配してゐるやうですよ」

「好いのがあつたら母に知らして遣つて下さい」

「市さんには大人しくつて優しい、親切な看護婦見た樣な女が可いでせう」

「看護婦見た樣な嫁はないかつて探しても、誰も來手はありませんよ」

僕が苦笑しながら、自ら嘲る如く斯う云つた時、今迄向うの隅で何かしてゐた千代子が、不意に首を上げた。

「妾行つて上げませうか」

僕は彼女の眼を深く見た。彼女も僕の顏を見た。けれども兩方共其所に意味のある何物をも認めなかつた。叔母は千代子の方を振り向きもしなかつた。さうして「御前の樣な露骨のがら／＼した者が、何で市さんの氣に入るものかね」と云つた。僕は低い叔母の聲のうちに、窘める樣な又怖れる樣な一種の響を聞いた。千代子は唯から／＼と面白さうに笑つた丈であつた。其時百代子も傍に居た。是は姉の言葉を聞いて微笑しながら席を立つた。形式を具へない斷りを云はれたと解釋した僕はしばらくして又席を立つた。

此事件後僕は同じ問題に關して母の滿足を買ふための努力を益屑しとしなくなつた。自尊心の強い父の子として、僕の神經は斯ういふ點に於て自分でも驚く位過敏なのである。勿論僕は其折の叔母に對し

て洩して感情を害しはしなかつた。此方からまだ正式の申し込みを受けてゐない叔母としては、あゝより外に意向の洩らし方も無かつたのだらうと思ふ。千代子に至つては何を云はうが笑はうが、何時でも蟠りのない彼女の胸の中を、其儘外に表はしたに過ぎないと考へてゐた。僕は其時の千代子の言葉や様子から推して、彼女が僕の所へ来たがつてゐない事丈は、従前通り慥かに認めたが、同時に、もし差し向ひで僕の母にしんみり話し込まれでもしたら、えゝさういふ譯なら御嫁に来て上げませうと其場ですぐ承知しないとも限るまいと思つて、ひそかに掛念を抱いた位である。彼女はさう云ふ時に、平氣で自分の利害や親の意思を犠牲に供し得る極めて純粋の女だと僕は常から信じてゐたからである。

八

意地の強い僕は母を嬉しがらせるよりも成る可く自我を傷つけない様にと祈つた。其結果千代子が僕の知らない間に、母から説き落されてはと掛念して、暗に夫を防ぐ分別をした。母は彼女の生れ落ちた當初既に僕の嫁と極めた丈あつて、多くある姪や甥の中で、取り分け千代子を可愛がつた。千代子も子供の時分から僕の家を生家の如く心得て遠慮なく寐泊りに来た。其縁故で、田口と僕の家が昔に比べると比較的疎くなつた今日でも、千代子丈は叔母さん叔母さんと云つて、生みの親にでも逢ひに来る様な朗らかな顔をして、しげ／＼出入りをして居た。單純な彼女は、自分の身を的に時々起る縁談をさへ、隠す所なく

母に打ち明けた。人の好い母は又夫を素直に聞いて遣る丈で、恨めしい眼附一つも見せ得なかつた。僕の恐れる懇談は、斯ういふ關係の深い二人の間に、何時起らないとも限らなかつたのである。

僕の分別といふのは先づ此點に關して、當分母の口を塞いで置かうとする用心に過ぎなかつた。所がいざ改まつて母にそれを切り出さうとすると、唯自分の我を通す爲に、弱い親の自由を奪ふのは殘酷な子に違ひないといふ心持が、何處にか萌すので、つい夫なりにして已める事が多かつた。尤も年寄の眉を曇らすのがたゞ情ない計りで已めたとも云はれない。是程親しい間柄でさへ今迄思ひ切つた所を千代子に打ち明け得なかつた母の事だから、假令此儘にして置いても、まあ當分は大丈夫だらうといふ考へが、母に對する僕を多少抑へたのである。

夫で僕は千代子に關して何といふ明瞭な處置も取らずに過ぎた。尤も斯ういふ不安な狀態で日を送つた時期にも、丸で田口の家と打絶えた譯ではなかつたので、偶には單に母の喜ぶ顏を見るだけの目的をもつて內幸町迄電車を利用した覺えさへあつたのである。さういふ或日の晩、僕は久し振に千代子から、習ひ立ての珍らしい手料理を御馳走するからと引き止められて、夕飯の膳に就いた。何時も留守勝ちな叔父が其日は丁度內に居て、食事中例の氣作な話しを續けにしたため、若い人の陽氣な笑ひ聲が障子に響く位家の中が賑はつた。飯が濟んだ後で、叔父は何ういふ考へか、突然僕に「市さん久し振に一局やらうか」と云ひ出した。僕は左程氣が進まなかつたけれども折角だから、遣りませうと答へて、叔父と共に別室へ

退いた。二人は其所で二三番打つた。固より下手と下手の勝負なので、時間の掛かる筈もなく、盤石を片附けても未だ夫程遅くはならなかつた。二人は烟草を呑みながら又話しを始めた。其時僕は適當な機會を利用してわざと叔父に「千代子さんの縁談はまだ纏まりませんか」と聞いた。それは固より僕が千代子に對して他意のないといふ事を示すためであつた。が又一方では、一日も早く此問題の解決が着けば、自分も安心だし、千代子も幸福だと考へたからである。すると叔父は流石に男だけあつて、何の躊躇もなく斯う云つた。——

「いや未だ中々左う行きさうもない。段々そんな話を持つて來て呉れるものはあるが、何しろ六づかしくつて困る。其上調べれば調べる程面倒になる丈だし、まあ大抵の所で纏まるなら纏めて仕舞はうかと思つてる。——縁談なんてものは妙なものでね。今だから御前に話すが、實は千代子の生れたとき、御前の御母さんが、是を市藏の嫁に欲しいつてね——生れ立ての赤ん坊をだよ」

叔父は此時笑ひながら僕の顔を見た。

「母は本氣で左う云つたんださうです」

「本氣さ。姉さんは又正直な人だからね。實に好い人だ。今でも時々眞面目になつて叔母さんに其話しをするさうだ」

叔父は再び大きな聲を出して笑つた。僕は果して叔父が斯う輕く此事件を解釋してゐるなら、母の爲に

少し辯じて遣らうかと考へたが、もし是が世慣れた人の巧妙な覺らせ振だとすれば、一口でも云ふ丈が愚だと思ひ直して默つた。叔父は親切な人で又世慣れた人である。彼の此時の言葉は何方の眼で見て可いのか、僕には今以て解らない。たゞ僕が其時以來千代子を貰はない方へ愈傾いたのは事實である。

九

夫から二ヶ月許りの間僕は田口の家へ近寄らなかつた。母さへ心配しなければ、夫限り内幸町へは足を向けずに濟ましたかも知れなかつた。たとひ母が心配するにしても、單に彼女に對する懸念丈が問題なら、或は僕の氣隨をいさといふ極點迄押し通したかも知れなかつた。僕はそんな風に生み附けられた男なのである。所が二ヶ月の末になつて、僕は突然自分の片意地を飜さなければ不利だといふ事に氣が附いた。實を云ふと、僕が田口と疎遠になればなる程、母はあらゆる機會を求めて、益千代子と接觸する樣に力め出したのである。さうして何時なんどき僕の最も恐れる直接の談判を、千代子に向つて開かないとも限らない樣に、漸々形勢を切迫させて來たのである。僕は思ひ切つて、此危機を一幀場先へ繰り越さうとした。さうして其決心と共に又田口の敷居を跨ぎ出した。

彼等の僕を遇する態度に固より變りはなかつた。僕の彼等に對する樣子も亦二ヶ月前の通りであつた。僕と彼等とは故の如く笑つたり、巫山戲たり、揚足の取りつ競をしたりした。要するに僕の田口で費やし

た時間は、騒がしい位陽氣であつた。本當の所をいふと、僕には少し陽氣過ぎたのである。従つて腹の中が常に空虚な努力に疲れてゐた。鋭い眼で注意したら、何處かに僞りの影が射して、本來の自分を醜く彩せつてゐたらうと思ふ。其内で自分の氣分と自分の言葉が、半紙の裏表の樣にぴたりと合つた愉快な感じた覺えが唯一遍ある。夫は家例として年に一度か二度田口の家族が揃つて遊びに出る日の出來事であつた。僕は知らずに奥へ通つて、千代子一人が閑靜に坐つてゐるのを見て驚いた。彼女は風邪を引いたと見えて、咽喉に濕布をして居た。常にも似ない蒼い顔色も淋しく思はれた。微笑しながら、「今日は妾御留守居よ」と云つた時、僕は始めて皆出揃つた事に氣が附いた。

其日の彼女は病氣の所爲か何時もよりしんみり落ち附いてゐた。僕の顔さへ見ると、屹度冷やかし文句を並べて、何うしても惡口の云ひ合ひを挑まなければ已まない彼女が、一人ぼつちで妙に沈んでゐる姿を見たとき、僕は不圖可憐な心を起した。夫で席に着くや否や、優しい慰藉の言葉を口から出す氣もなく自ら出した。すると千代子は一種變な表情をして、「貴方今日は大變優しいわね。奥さんを貰つたら左ういふ風に優しく仕て上げなくつちや不可ないわね」と云つた。遠慮がなくて親しみ丈持つてゐた僕は、今迄千代子に對していくら無愛嬌に振舞つても差支へないものと暗に自ら許してゐたのだといふ事に此時始めて氣が附いた。さうして千代子の眼の中に何處か嬉しさうな色の微かながら漂ふのを認めて、自分が惡かつたと後悔した。

二人は殆ど一所に生長したと同じ樣な自分達の過去を振り返つた。昔の記憶を語る言葉が互の脣から當時を蘇生らせる便りとして洩れた。僕は千代子の記憶が、僕よりも遙かに勝れて、細かい所迄鮮やかに行き渡つてゐるのに驚いた。彼女は今から四年前、僕が玄關に立つた儘袴の綻びを彼女に縫はせた事迄覺えてゐた。其時彼女の使つたのは木綿絲でなくて絹絲であつた事も知つてゐた。

「妾貴方の描いて吳れた畫をまだ持つててよ」

成程左う云はれて見ると、千代子に畫を描いて遣つた覺えがあつた。けれども夫は彼女が十二三の時の事で、自分が田口に買つて貰つた繪の具と紙を僕の前へ押し付けて無理矢理に描かせたものである。僕の畫道に於ける嗜好は、夫から以後今日に至る迄、つひぞ畫筆を握つた試しがないのでも分るのだから、赤や綠の單純な刺激が、一通り彼女の眼に映つて仕舞へば、興味は其所に盡きなければならない筈のものであつた。夫を保存してゐると聞いた僕は迷惑さうに苦笑せざるを得なかつた。

「見せて上げませうか」

僕は見ないでも可いと斷つた。彼女は構はず立ち上がつて、自分の室から僕の畫を納めた手文庫を持つて來た。

千代子は其中から僕の描いた畫を五六枚出して見せた。それは赤い椿だの、紫の東菊だの、色變りのダリヤだので、孰れも單純な花卉の寫生に過ぎなかつたが、要らない所にわざと手を掛けて、時間の浪費を厭はずに、細かく綺麗に塗り上げた手際は、今の僕から見ると殆ど驚くべきものであつた。僕は是程綿密であつた自分の昔に感服した。

「貴方それを描いて下すつた時分は、今より餘つ程親切だつたわね」

千代子は突然斯う云つた。僕には其意味が丸で分らなかつた。畫から眼を上げて、彼女の顏を見ると、彼女も黒い大きな眸を僕の上に凝と据ゑてゐた。僕は何ういふ譯でそんな事を云ふのかと尋ねた。彼女はそれでも答へずに僕の顏を見詰めてゐた。やがて何時もより小さな聲で「でも近頃頼んだつてそんなに精出して描いては下さらないでせう」と云つた。僕は描くとも描かないとも答へられなかつた。たゞ腹の中で、彼女の言葉を尤もだと首肯つた。

「夫でも能く斯んな物を丹念に仕舞つて置くね」

「妾御嫁に行く時も持つて行く積りよ」

僕は此言葉を聞いて變に悲しくなつた。さうして其悲しい氣分が、すぐ千代子の胸に應へさうなのが猶恐ろしかつた。僕は其刹那既に涙の滴れさうな黒い大きな眼を自分の前に想像したのである。

「そんな下らないものは持つて行かないが可いよ」

「可いわ、持つて行つたつて。妾のだから」
彼女は斯う云ひつゝ、赤い椿や紫の東菊を重ねて、又文庫の中へ仕舞つた。僕は自分の氣分を變へるためわざと彼女に何時頃嫁に行く積りかと聞いた。彼女はもう直きに行くのだと答へた。
「然しまだ極まつた譯ぢやないんだらう」
「いゝえ、もう極まつたの」
彼女は明らかに答へた。今迄自分の安心を得る最後の手段として、一日も早く彼女の縁談が纏まれば好いがと念じてゐた僕の心臟は、此答と共にどきんと音のする浪を打つた。さうして毛穴から這ひ出す樣な脂汗が、背中と腋の下を不意に襲つた。千代子は文庫を抱いて立ち上がつた。障子を開けるとき、上から僕を見下ろして「嘘よ」と一口判切云ひ切つた儘、自分の室の方へ出て行つた。
僕は動く考へもなく故の席に坐つてゐた。僕の胸には忌々しい何物も宿らなかつた。千代子の嫁に行く行かないが、僕に何う影響するかを、此時始めて實際に自覺する事の出來た僕は、それを自覺させて呉れた彼女の翻弄に對して感謝した。僕は今迄氣が附かずに彼女を愛してゐたのかも知れなかつた。或は彼女が氣が附かないうちに僕を愛してゐたのかも知れなかつた。――僕は自分といふ正體が、夫程解り惡い怖いものなのだらうかと考へて、しばらく茫然としてゐた。すると彼方の方で電話がちりん〳〵と鳴つた。千代子が縁傳ひに急ぎ足で遣つて來て、僕に一所に電話を掛けて呉れと頼んだ。僕には一所に掛けるとい

ふ意味が呑込めなかつたが、すぐ立つて彼女と共に電話口へ行つた。

「もう呼び出してあるのよ。妾聲が嗄れて、咽喉が痛くつて話しが出來ないから貴方代理をして頂戴。聞く方は妾が聞くから」

僕は相手の名前も分らない、又向うの話しの通じない電話を掛けるべく、前屈みになつて用意をした。千代子は既に受話器を耳に宛ててゐた。それを通して彼女の頭へ送られる言葉は、獨り彼女が占有する丈なので、僕はたゞ彼女の小聲でいふ挨拶を大きくして譯も解らず先方へ取次ぐに過ぎなかつた。夫でも始めの内は滑稽も構はず平氣で遣つてゐたが、次第に僕の好奇心を挑發する樣な返事が千代子の口から出て來るので、僕は屈んだ儘、おい一寸それを御貸しと聲を掛けて左手を眞直に千代子の方へ差し伸べた。千代子は笑ひながら否をして見せた。僕は更に姿勢を正しくして、受話器を彼女の手から奪はうとした。彼女は決して夫を離さなかつた。取らうとする取らせまいとする爭ひが二人の間に起つた時、彼女は手早く電話を切つた。さうして大きな聲を揚げて笑ひ出した。——

十一

斯ういふ光景が若し今より一年前に起つたならと僕は其後何遍も繰り返して思つた。さう思ふ度に、もう遲過ぎる、時機は既に去つたと運命から宣告される樣な氣がした。今からでも斯ういふ光景を二度三

度と重ねる機會は捉まへられるではないかと、同じ運命が暗に僕を唆す日もあつた。成程二人の情愛を互に反射させ合ふ爲にのみ眼の光を使ふ手段を憚らなかつたなら、千代子と僕とは其日を基點として出立しても、今頃は人間の利害で割く事の出來ない愛に陷つてゐたかも知れない。たゞ僕はそれと反對の方針を取つたのである。

田口夫婦の意向や僕の母の希望は、他人の入れ智慧同樣に意味の少ないものとして、單に彼女と僕を裸にして生れ附き丈を比較すると、僕等は到底一所になる見込のないものと僕は平生から信じてゐた。是は何故と聞かれても滿足の行く樣に答辯が出來ないかも知れない。僕は人に說明する爲にさう信じてゐるのでないから。僕はかつて文學好きのある友達からダヌンチオと一少女の話を聞いた事がある。ダヌンチオといふのは今の以太利で一番有名な小說家ださうだから、僕の友達の主意は無論彼の勢力を僕に紹介する積りだつたのだらうが、僕には其所へ引合ひに出された少女の方が彼よりも遙かに興味が多かつた。其話は斯うである。――

ある時ダヌンチオが招待を受けてある會合の席へ出た。文學者を國家の裝飾の樣に持て囃す西洋の事だから、ダヌンチオは其席に群がる凡ての人から多大の尊敬と愛嬌を以て偉人の如く取扱はれた。彼が滿堂の注意を一身に集めて、衆人の間を彼所此所徘徊してゐるうち、何ういふ機會か自分の手巾を足の下へ落とした。混雜の際と見えて、彼は固より、傍のものも一向それに氣が附かずにゐた。すると未だ年の若い

美しい娘が一人其手巾を床の上から取り上げて、ダヌンチオの前へ持つて來た。彼女はそれをダヌンチオに渡す積りで、是は貴方のでせうと聞いた。ダヌンチオは難有うと答へたが、娘の美しい器量に對して一寸敬意が必要になつたと見えて、「貴方のにして持つて入らつしやい、進上しますから」と恰も少女の喜びさうな事を云つた。女は一口の答もせず默つて其手巾を指先で撮んだ儘煖爐の傍へ行つていきなり火の中に投げ込んだ。ダヌンチオは別にして其他の席に居合はせたものは悉く微笑を洩らした。

僕は此話を聞いた時、年の若い栗色の髮毛を有つた伊太利生れの美人を思ひ浮かべるよりも、其代りとしてすぐ千代子の眼と眉を想像した。さうして夫が若し千代子でなくつて妹の百代子であつたなら、たとひ腹の中は何うあらうとも、其場は禮を云つて快く手巾を貰ひ受けたに違ひあるまいと思つた。たゞ千代子には夫が出來ないのである。

口の惡い松本の叔父は此姉妹に渾名を附けて常に大蝦蟇と小蝦蟇と呼んでゐる。二人の口が唇の薄い割に長過ぎる所が銀貨入れの蟇口だと云つては常に二人を笑はせたり怒らせたりする。是は性質に關係のない顏形の話であるが、同じ叔父が口癖の樣に此姉妹を評して、小蟇は大人しくつて好いが、大蟇は少し猛烈過ぎると云ふのを聞く度に、僕はあの叔父が何う千代子を觀察してゐるのだらうと考へて、必ず彼の眼識に疑ひを挾みたくなる。千代子の言語なり擧動なりが時に猛烈に見えるのは、彼女が女らしくない粗野な所を内に藏してゐるからではなくつて、餘り女らしい優しい感情に前後を忘れて自分を投げ掛けるから

だと僕は固く信じて疑はないのである。彼女の有つてゐる善惡是非の分別は殆ど學問や經驗と獨立してゐる。たゞ直覺的に相手を目當てに燃え出す丈である。夫だから相手は時によると稻妻に打たれた樣な思ひをする。當りの強く烈しく來るのは、彼女の胸から純粹な塊りが一度に多量に飛んで出るといふ意味で、刺だの毒だの腐蝕劑だのを吹き掛けたり浴びせ掛けたりするのとは丸で譯が違ふ。其證據にはたとひ何れ程烈しく怒られても、僕は彼女から清いもので自分の腸を洗はれた樣な氣持のした場合が今迄に何遍もあつた。氣高いものに出會つたといふ感じさへ稀には起した位である。僕は天下の前にたゞ一人立つて、彼女はあらゆる女のうちで尤も女らしい女だと辯護したい位に思つてゐる。

十二

是程好く思つてゐる千代子を妻として何處が不都合なのか。――實は僕も自分で自分の胸に斯う聞いた事がある。其時理由も何もまだ考へない先に、僕はまづ恐ろしくなつた。さうして夫婦としての二人を長く眼前に想像するに堪へなかつた。斯んな事を母に云つたら定めし驚くだらう、同年配の友達に話しても或は通じないかも知れない。けれども強ひて沈默のなかに、記憶を埋める必要もないから、それを自分丈の感想に止めないで此所に自白するが、一口に云ふと、千代子は恐ろしい事を知らない女なのである。さうして僕は恐ろしい事丈知つた男なのである。だから唯釣り合はない許りでなく、夫婦となれば正に逆に

出來上がるより外に仕方がないのである。

僕は常に考へてゐる。「純粹な感情程美しいものはない。美しいもの程強いものはない」と。強いものが尊ばれないのは當り前である。僕がもし千代子を妻にするとしたら、妻の眼から出る強烈な光に堪へられないだらう。其光は必ずしも怒を示すとは限らない。情の光でも、愛の光でも、若しくは憐憫の光でも同じ事である。僕は屹度其光の爲に射竦められるに極まつてゐる。それと同程度或はより以上の輝くものを、返禮として彼女に與へるには、感情家として僕が餘りに貧弱だからである。僕は芳烈な一樽の清酒を貰つても、それを味はひ盡くす資格を持たない下戸として、今日迄世間から教育されて來たのである。

千代子が僕の所へ嫁に來れば必ず殘酷な失望を經驗しなければならない。彼女は美しい天賦の感情を、有るに任せて惜し氣もなく夫の上に注ぎ込む代りに、それを受け入れる夫が、彼女から精神上の營養を得て、大いに世の中に活躍するのを唯一の報酬として夫から豫期するに違ひない。年の行かない、學問の乏しい、見識の狹い點から見ると氣の毒と評して然るべき彼女は、頭と腕を擧げて實世間に打ち込んで、肉眼で指す事の出來る權力か財力を攫まなくつては男子でないと考へてゐる。單純な彼女は、たとひ僕の所へ嫁に來ても、矢張りさう云ふ働き振を僕から要求し、又要求さへすれば僕に出來るものとのみ思ひ詰めてゐる。二人の間に横たはる根本的の不幸は此所に存在すると云つても差支へないのである。僕は今云つた通り、妻としての彼女の美しい感情を、さう多量に受け入れる事の出來ない至つて燥つた性質なのだが、

よし燒石に水を濺いだ時の樣に、それを悉く吸ひ込んだ所で、彼女の望み通りに利用する譯には到底行かない。もし純粹な彼女の影響が僕の何所かに表はれるとすれば、それは幾何說明しても彼女には全く分らない所に、思ひも寄らぬ形となつて發現する丈である。萬一彼女の眼に留まつても、彼女はそれをコスメチツクで塗り堅めた僕の頭や羽二重の足袋で包んだ僕の足よりも難有がらないだらう。要するに彼女から云へば、美しいものを僕の上に永久浪費して、次第々々に結婚の不幸を嘆くに過ぎないのである。

僕は自分と千代子を比較する每に、必ず恐れない女と恐れる男といふ言葉を繰り返したくなる。仕舞にはそれが自分の作つた言葉でなくつて、西洋人の小說に其儘出てゐる樣な氣を起す。此間講釋好きの松本の叔父から、詩と哲學の區別を聞かされて以來は、恐れない女と恐れる男といふと、忽ち自分に緣の遠い詩と哲學を想ひ出す。叔父は素人學問ながら斯んな方面に興味を有つてゐる丈に、面白い事を色々話して聞かしたが、僕を捕まへて「御前の樣な感情家は」と暗に詩人らしく僕を評したのは間違つてゐる。僕に云はせると、恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。僕の思ひ切つた事の出來ずに愚圖愚圖してゐるのは、何より先に結果を考へて取越苦勞をするからである。千代子が風の如く自由に振舞ふのは、先の見えない程強い感情が一度に胸に湧き出るからである。彼女は僕の知つてゐる人間のうちで、最も恐れない一人である。だから恐れる僕を輕蔑するのである。僕は又感情といふ自分の重みで蹴爪附きさうな彼女を、運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐むのである。否時によると彼女の爲に戰慄

する のである。

十三

須永の話しの末段は少し敬太郎の理解力を苦しめた。事實を云へば彼は又彼なりに詩人とも哲學者とも云ひ得る男なのかも知れなかつた。然し夫は傍から彼を見た眼の評する言葉で、敬太郎自身は決して何方とも思つてゐなかつた。從つて詩とか哲學とかいふ文字も、月の世界でなければ役に立たない夢の樣なものとして、殆ど一顧に價しない位に見限つてゐた。其上彼は理窟が大嫌ひであつた。右か左へ自分の身體を動かし得ない唯の理窟は、いくら旨く出來ても彼には用のない眉唾紙幣と同じ物であつた。從つて恐れる男と恐れない女とかいふ辻占に似た文句を、默つて聞いてゐる筈はなかつたのだが、しつとりと潤つた身の上話の續きとして、感想が其所へ流れ込んで來たものだから、敬太郎も能く解らないながら素直に耳を傾けなければ濟まなかつたのである。

須永も其所に氣が附いた。

「話が理窟張つて六づかしくなつて來たね。あんまり一人で調子に乘つて饒舌つてゐるものだから」

「いや構はん。大變面白い」

「洋杖の效果がありやしないか」

「何うも不思議にあるやうだ。序にもう少し先迄話す事にしようぢやないか」

「もう無いよ」

須永はさう云ひ切つて、静かな水の上に眼を移した。敬太郎も少時黙つてゐた。不思議にも今聞かされた須永の詩だか哲學だか分らないものが、形の判然しない雲の峯の様に、頭の中に聳えて容易に消えさうにしなかつた。何事も語らないで彼の前に坐つてゐる須永自身も、平生の紋切形を離れた怪しい一種の人物として彼の眼に映じた。何うしてもまだ話しの續きがあるに違ひないと思つた敬太郎は、今の一番仕舞の物語は何時頃の事かと須永に尋ねた。それは自分の二三年生位の時の出來事だと須永は答へた。敬太郎は同じ關係が過去一年餘りの間に何ういふ徑路を取つて何う進んで、今は何んな解決が附いてゐるかと聞き返へした。須永は苦笑して、先づ外へ出てからにしようと云つた。二人は勘定を濟まして外へ出た。須永は先へ立つ敬太郎の得意に振り動かす洋杖の影を見て又苦笑した。

柴又の帝釋天の境内に來た時、彼等は平凡な堂宇を、義理に拜ませられたやうな顔をしてすぐ門を出た。さうして二人共汽車を利用してすぐ東京へ歸らうといふ氣を起した。停車場へ來ると間怠こい田舎汽車の發車時間にはまだ大分間があつた。二人はすぐ其所にある茶店に入つて休息した。次の物語は其時敬太郎が前約を楯に須永から聞かして貰つたものである。――

僕が大學の三年から四年に移る夏休みの出來事であつた。宅の二階に籠もつて此暑中を何う暮らしたら

宜からうと思案してゐると、母が下から上がつて來て、閑になつたら鎌倉へ一寸行つて來たら何うだと云つた。鎌倉には其一週間程前から田口のものが避暑に行つてゐた。元來叔父は餘り海邊を好まない性質なので、一家のものは毎年輕井澤の別莊へ行くのを例にしてゐたのだが、其年は是非海水浴がしたいと云ふ妹娘の希望を容れて材木座にある、或人の邸宅を借り入れたのである。移る前に千代子が暇乞かた〴〵報知に來て、まだ行つては見ないけれども、山陰の涼しい崖の上に、二段か三段に建てた割合手廣な住居ださうだから是非遊びに來いと母に勸めてゐたのを、僕は傍で聞いてゐた。夫で僕は母に貴方こそ行つて遊んで來たら氣保養になつて可からうと忠告した。母は懷から千代子の手紙を出して見せた。夫には千代子と百代子の連名で、母と僕と一所に來る樣にと、彼等の女親の命令を傳へる如く書いてあつた。母が行くとすれば年寄一人を汽車に乘せるのは心配だから、是非共僕が附いて行かなければならなかつた。變窟な僕がにいふと、さう混雜した所へ二人で押し掛けるのは、世話にならないにしても氣の毒で厭だつたけれども母は行きたい樣な顏をした。さうして夫が僕の爲に行きたい樣な顏に見えるので僕は益厭になつた。が、とゞの詰りとう〳〵行く事にした。斯う云つても人には通じないかも知れないが、僕は意地の強い男で、又意地の弱い男なのである。

十四

母は内氣な性分なので平生から餘り旅行を好まなかつた。昔風に重きを置かなければ承知しない嚴格な父の生きてゐる頃は外へもさう度々は出られない樣子であつた。現に僕は父と母が娯樂の目的をもつて一所に家を留守にした例を覺えてゐない。父が死んで自由が利くやうになつてからも、さう勝手な時に好きな所へ行く機會は不幸にして僕の母には與へられなかつた。一人で遠くへ行つたり、長く宅を空けたりする便宜を有たない彼女は、母子二人の家庭に斯うして幾年を老いたのである。

鎌倉へ行かうと思ひ立つた日、僕は彼女のために一個の鞄を携へて直行の汽車に乘つた。母は車の動き出す時、隣に腰を掛けた僕に、汽車も久し振だねと笑ひながら云つた。さう云はれた僕にも實は餘り頻繁な經驗ではなかつた。新しい氣分に誘はれた二人の會話は平生よりは生々してゐた。何を話したか自分にも一向覺えのない事を、聞いたり聞かれたりして斷續に任せてゐるうちに車は目的地に着いた。豫め通知をしてないので停車場には誰も迎へに來てゐなかつたが、車を雇ふとき某さんの別莊と注意したら、車夫はすぐ心得て引き出した。僕はしばらく見ないうちに、急に新しい家の多くなつた砂道を通りながら、松の間から遠くに見える畠中の黄色い花を美しく眺めた。それは一寸見ると丸で菜種の花と同じ趣きを具へた目新しいものであつた。僕は車の上で、この散ら〳〵する色は何だらうと考へ拔いた揚句、突然唐茄子だと氣が附いたので獨り可笑しがつた。

車が別莊の門に着いた時、戸障子を取り外した座敷の中に動く人の影が往來から能く見えた。僕はその

うちに白い浴衣を着た男のゐるのを見て、多分叔父が昨日あたり東京から來て泊つてるのだらうと思つた。所が奥に居るものが悉く僕等を迎へるために玄關へ出て來たのに、其男丈は少しも顏を見せなかつた。勿論叔父なら其位の事は有る可き筈だと思つて、座敷へ通つて見ると、其所にも彼の姿は見えなかつた。僕がまご／＼してゐるうちに、叔母と母が汽車の中は蒸暑かつたらうとか、見晴らしの好い所が手に入つて結構だとか、年寄の女だけに口數の多い挨拶の遣り取りを始めた。千代子と百代子は母の爲に浴衣を勸めたり、脱ぎ捨てた着物を晒干して吳れたりした。僕は下女に風呂場へ案内して貰つて、水で顏と頭を洗つた。海岸からは大分道程のある山手だけれども水は存外惡かつた。手拭を絞つて金盥の底を見てゐると、細かい砂の様な滓が澱んだ。

「是を御使ひなさい」といふ千代子の聲が突然後でした。振り返ると、乾いた白いタオルが肩の所に出てゐた。僕はタオルを受取つて立ち上がつた。千代子は又傍にある鏡臺の抽出から櫛を出して吳れた。僕が鏡の前に坐つて髮を解かしてゐる間、彼女は風呂場の入口の柱に身體を持たして、僕の濡れ頭を眺めてゐたが、僕が何も云はないので、向うから「惡い水でせう」と聞いた。僕は鏡の中を見たなり、何うして斯んな色が着いてゐるのだらうと云つた。水の問答が濟んだとき、僕は櫛を鏡臺の上に置いて、タオルを肩に掛けた儘立ち上がつた。千代子は僕より先に柱を離れて座敷の方へ行かうとした。僕は藪から棒に後から叔父の名を呼んで、叔父は何處にゐるかと尋ねた。彼女は立ち止まつて振り返つた。

「御父さんは四五日前一寸入らしつたけど、一昨日又川が出來たつて東京へ御歸りになつた限りよ」

「此所にや居ないのかい」

「えゝ。何故。ことによると今日の夕方吾一さんを連れて、又入らつしやるかも知れないけども」

千代子は明日もし天氣が好ければ皆と魚を漁りに行く筈になつてゐるのだから、田口が都合して今日の夕方迄に來て吳れなければ困るのだと話した。さうして僕にも是非一所に行けと勸めた。僕は魚の事よりも先刻見た浴衣掛けの男の居所が知りたかつた。

十五

「先刻誰だか男の人が一人座敷に居たぢやないか」

「あれ高木さんよ。ほら秋子さんの兄さんよ。知つてるでせう」

僕は知つて居るとも居ないとも答へなかつた。然し腹の中では、此高木と呼ばれる人の何者かをすぐ了解した。百代子の學校朋輩に高木秋子といふ女のある事は前から承知してゐた。其人の顏も、百代子と一所に撮つた寫眞で知つてゐた。手蹟も繪端書で見た。一人の兄が亞米利加へ行つてゐるのだとか、今歸つて來た許りだとかいふ話も其頃耳にした。困らない家庭なのだらうから、其人が鎌倉へ遊びに來てゐる位は怪しむに足らなかつた。よし此所に別莊を持つてゐた所で不思議はなかつた。が、僕は其高木といふ男

の住んでゐる家を千代子から聞き度くなつた。

「つい此下よ」と彼女に云つた限りであつた。

「別荘かい」と僕は重ねて聞いた。

「えゝ」

二人はそれ以外を話さずに座敷へ歸つた。座敷では母と叔母がまだ海の色が何うだとか、大島が何方の見當に中たるとかいふ左程でもない事を、問題らしく聞いたり教へたりしてゐた。百代子は千代子に彼等の父が此日の夕方迄に來ると云つて、わざ／＼知らせて來た事を告げた。二人は明日魚を漁りに行く時の樂しみを、今眼の當りに描き出して、既に手の内に握つた人の如く語り合つた。

「高木さんも入らつしやるんでせう」

「市さんも入らつしやい」

僕は行かないと答へた。其理由として、少し宅に用があつて、今夜東京へ歸らなければならないからといふ説明を加へた。然し腹の中では只でさへ斯う混雜してゐる處へ、もし田口が吾一でも連れて來たら、夫こそ自分の寢る場所さへ無くなるだらうと心配したのである。其上僕は姉妹の知つてゐる高木といふ男に會ふのが厭だつた。彼は先刻迄二人と僕の評判をしてゐたが、僕の來たのを見て、遠慮して裏から歸つたのだと百代子から聞いた時、僕はまづ厭な思ひを逃れて好かつたと喜んだ。僕に夫程知らない人を怖

がる性分なのである。
僕の歸ると云ふのを聞いた二人は、驚いた樣な顏をして留めに掛かつた。殊に千代子は躍起になつた。彼女は僕を捉まへて變人だと云つた。母を一人殘してすぐ歸る法はないと云つた。歸ると云つても歸さないと云つた。彼女は自分の妹や弟に對してよりも、僕に對しては遙かに自由な言葉を使ひ得る特權を有つてゐた。僕は平生から彼女が僕に對して振舞ふ如く大膽に率直に（或時は善意ではあるが）威壓的に、他人に向つて振舞ふ事が出來たなら、僕の樣な他に缺點の多いものでも、嘸愉快に世の中を渡つて行かれるだらうと想像して、大いに此小さな暴君を羨ましがつてゐた。
「えらい權幕だね」
「貴方は親不孝よ」
「ぢや叔母さんに聞いて來るから、もし叔母さんが泊つて行く方が可いつて、仰しやつたら、泊つて入らつしやいね」
百代子は仲裁を試みる樣な口調で斯う云ひながら、すぐ年寄の話してゐる座敷の方へ立つて行つた。僕の母の意向は無論聞く迄もなかつた。從つて百代子の年寄二人から齎した返事も此所に述べるのは蛇足に過ぎない。要するに僕は千代子の捕虜になつたのである。
僕はやがて一寸町へ出て來るといふ口實の下に、午後の暑い日を洋傘で遮りながら別莊の附近を順序な

く感じた。久しく見ない土地の昔を偲ぶ爲と云へば云へない事もないが、僕にそんな寂びた心持を嬉しがる風流があつたにした所で、今は夫に耽る落付も餘裕も與へられなかつた。僕は只うろ〳〵と其所等の門札を讀んで歩いた。さうして比較的立派な平屋建の門の柱に、高木の二字を認めた時、是だらうと思つて、しばらく門前に佇んだ。夫から僕は全く何の目的もなしに猶緩漫な歩行を約十五分許り續けた。然し是は僕が自分の心に、高木の家を見る爲にわざ〳〵表へ出たのではないと申し渡したと同じ樣なものであつた。僕はさつさと引き返した。

十六

實を云ふと、僕は此高木といふ男に就いて、殆ど何も知らなかつた。只一遍百代子から彼が適當な配偶を求めつゝある由を聞いた丈である。其時百代子が、御姉さんには何うかしらと、丁度相談でもする樣に僕の顔色を見たのを覺えてゐる。僕は何時もの通り冷淡な調子で、好いかも知れない、御父さんか御母さんに話して御覽と云つたと記憶する。夫から以後僕の田口の家に足を入れた度數は何遍あるか分らないが、高木の名前は少なくとも僕のゐる席で二度と誰の口にも上らなかつたのである。夫程關係の薄い、顔さへ見た事のない男の住居に何の興味があつて、僕はわざ〳〵暑さを冒して外出したのだらう。僕は今日迄其理由を誰にも話さずにゐた。自分自身にも其時には能く説明が出來なかつた。たゞ遠くの方

にある一種の不安が、僕の身體を動かしに來たといふ漠たる感じが胸に射した計りであつた。それが鎌倉で暮らした二日の間に、紛れもないある形を取つて發展した結果を見て、僕を散歩に誘ひ出したのも矢張り同じ力に違ひないと今から思ふのである。

　僕が別莊へ歸つて一時間經つか經たないうちに、僕の注意した門札と同じ名前の男が忽ち僕の前に現はれた。田口の叔母は、高木さんですと云つて丁寧に其男を僕に紹介した。彼は見るからに肉の緊まつた血色の好い青年であつた。年から云ふと、或は僕より上かも知れないと思つたが、其きび〲した顏附を形容するには、是非共青年といふ文字が必要になつた位彼は生氣に充ちて居た。僕は此男を始めて見た時、是は自然が反對を比較する爲に、わざと二人を同じ座敷に竝べて見せるのではなからうかと疑つた。無論其不利益な方面を代表するのが僕なのだから、斯う改まつて引き合はされるのが、僕にはたゞ悪い洒落としか受取られなかつた。

　二人の容貌が既に意地の好くない對照を與へた。然し樣子とか應對振とかになると僕は更に甚しい相違を自覺しない譯に行かなかつた。僕の前にゐるものは、母とか叔母とか從妹とか、皆親しみの深い血屬ばかりであるのに、夫等に取り捲かれてゐる僕が、此高木に比べると、却て何處からか客にでも來たやうに見えた位、彼は自由に遠慮なく、しかも或程度の品格を落とす危險なしに己を取扱ふ術を心得てゐたのである。知らない人を怖れる僕に云はせると、此男は生れるや否や交際場裏に棄てられて、其儘今日迄同じ

所で人と戯つたのだと評したかつた。彼は十分と經たないうちに、凡ての會話を僕の手から奪つた。さうして夫を悉く一身に集めて仕舞つた。其代り僕を除け物にしない爲の注意を拂つて、時々僕に一句か二句の言葉を與へた。夫が又生憎僕には興味の乘らない話題ばかりなので、僕はみんなを相手にする事も出來ず、高木一人を相手にする譯にも行かなかつた。彼は田口の叔母を親しげに御母さん〳〵と呼んだ。千代子に對しては、僕と同じ樣に、千代ちやんといふ幼馴染に用ひる名を、自然に命ぜられたかの如く使つた。さうして僕に、先程御着きになつた時は、丁度千代ちやんと貴方の御噂をしてゐた所でしたと云つた。

僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかつた。話しをする所を聞いて、すぐ及ばないと思つた。夫迄でも此場合に僕を不愉快にするには充分だつたかも知れない。けれども段々彼を觀察してゐるうちに、彼は自分の得意な點を、劣者の僕に見せ附ける樣な態度で、誇り顏に發揮するのではなからうかといふ疑ひが起つた。其時僕は急に彼を憎み出した。さうして僕の口を利くべき機會が廻つて來てもわざと沈默を守つた。

落ち附いた今の氣分で其時の事を回顧して見ると、斯う解釋したのは或は僕の僻みだつたかも分らない。僕はよく人を疑る代りに、疑る自分も同時に疑はずには居られない性質だから、結局他に話しをする時にも何方と判然した所が云ひ惡くなるが、若し夫が本當に僕の僻み根性だとすれば、其裏面には未だ凝結した形にならない嫉妬が潜んでゐたのである。

十七

僕は男として嫉妬の强い方か弱い方か自分にも能く解らない。競爭者のない一人息子として寧ろ大事に育てられた僕は、少なくとも家庭のうちで嫉妬を起す機會を有たなかつた。小學や中學は自分より成績の好い生徒が幸ひにしてさう無かつた爲か、至極太平に通り拔けた樣に思ふ。高等學校から大學へ掛けては、席次に左程重きを置かないのが、一般の習慣であつた上、年毎に自分を高く見積る見識といふものが加はつて來るので、點數の多少は大した苦にならなかつた。此等を外にして、僕はまだ痛切な戀に落ちた經驗がない。一人の女を二人で爭つた覺えは猶更ない。自白すると僕は若い女殊に美しい若い女に對しては、普通以上に精密な注意を拂ひ得る男なのである。往來を歩いて綺麗な顏と綺麗な着物を見ると、雲間から明らかな日が射した時の樣に晴れやかな心持になる。會にはその所有者になつて見たいと云ふ考へが起る。然し其顏と其着物が何う果敢なく變化し得るかをすぐ豫想して、醉ひが去つて急にぞつとする人の淺間しさを覺える。僕をして執念く美しい人に附け纏はらせないものは、正に此酒に棄てられた淋しみの障害に過ぎない。僕は此氣分に乘り移られるたびに、若い自分が突然老人か坊主に變つたのではあるまいかと思つて、非常な不愉快に陷る。が、或は夫が爲に戀の嫉妬といふものを知らずに濟ます事が出來たかも知れない。

僕は普通の人間でありたいといふ希望を有つてゐるから、嫉妬心のないのを自慢にしたくも何ともないけれども、今話した樣な譯で、眼の當りに此高木といふ男を見る迄は、さういふ名の附く感情に強く心を奪はれた試しがなかつたのである。僕は其時高木から受けた名狀し難い不快を明らかに覺えてゐる。さうして自分の所有でもない、又所有にする氣もない千代子が原因で、此嫉妬心が燃え出したのだと思つた時、僕は何うしても僕の嫉妬心を抑へ附けなければ自分の人格に對して申し譯がない樣な氣がした。僕は存在の權利を失つた嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。幸ひ千代子と百代子が日が薄くなつたから海へ行くと云ひ出したので、高木が必ず彼等に跟いて行くに違ひないと思つた僕は、早く跡に一人殘りたいと願つた。彼等は果して高木を誘つた。所が意外にも彼は何とか言譯を拵へて容易に立たうとしなかつた。僕はそれを僕に對する遠慮だらうと推察して、益眉を暗くした。彼等は次に僕を誘つた。僕は固より應じなかつた。高木の面前から一刻も早く逃れる機會は、與へられないでも手を出して奪ひたい位に思つてゐたのだが、今の氣分では二人と濱邊まで行く努力が既に大儀であつた。母は失望した樣な顏をして、一所に行つて御出でなと云つた。僕は默つて遠くの海の上を眺めてゐた。姉妹は笑ひながら立ち上がつた。

「相變らず偏窟ね貴方は。丸で腕白小僧見たいだわ」

千代子に斯う罵られた僕は、實際誰の目にも立派な腕白小僧として見えたらう。僕自身も腕白小僧らし

い思ひをした。調子の好い高木は縁側へ出て、二人の爲に菅笠の樣に大きな麥藁帽を取つて遣つて、行つて入らつしやいと挨拶をした。

二人の後姿が別莊の門を出た後で、高木は猶しばらく年寄を相手に話してゐた。斯うやつて避暑に來てゐると氣樂で好いが、何うして日を送るかが大問題になつて却て苦痛になる抔と、實際活氣に充ちた身體を暑さと退屈さに持ち扱つてゐる風に見えた。やがて、是から晩迄何をして暮らさうかしらと獨り言の樣に云つて、不意に思ひ出した如く、玉は何うですと僕に聞いた。幸ひにして僕は生れてからまだ玉突といふ遊戯を試みた事がなかつたのですぐ斷つた。高木は丁度好い相手が出來たと思つたのに殘念だと云ひながら歸つて行つた。僕は活潑に動く彼の後影を見送つて、彼は是から姉妹のゐる濱邊の方へ行くに違ひないといふ氣がした。けれども僕は坐つてゐる席を動かなかつた。

十八

高木の去つた後、母と叔母は少時彼の噂をした。初對面の人丈に母の印象は殊に深かつた樣に見えた。氣の置けない、至つて行き屆いた人らしいと云つて賞めてゐた。叔母は又母の批評を一々實例に照らして確める風に見えた。此時僕は高木に就いて知り得た極めて乏しい知識の殆ど全部を訂正しなければならない事を發見した。僕が百代子から聞いたのでは、亞米利加歸りといふ話であつた彼は、叔母の語る所によ

ると、まう亡はなくつて全く英吉利で教育された男であつた。叔母は英國流の紳士といふ言葉を誰かから聞いたと見えて、二三度それを使つて、何の心得もない母を驚かしたのみか、だから何處となく品の善い所があるんですよと母に説明して聞かせたりした。母は只へゝと感心するのみであつた。

二人が斯んな話をしてゐる内、僕は殆んど一口も口を利かなかつた。唯上部から見て平生の調子と何の變る所もない母が、此際高木と僕を比較して、腹の中で何う思つてゐるだらうと考へると、僕は母に對して氣の毒でもあり又恨めしくもあつた。同じ母が、千代子對僕と云ふ古い關係を一方に置いて、更に千代子對高木といふ新しい關係を一方に想像するなら、果して何んな心持になるだらうと思ふと、假令少しの不安でも、遣り得られる所をわざと匿してゐるために彼女を連れ出したも同じ事になるので、僕は唯でさへ不愉快な上に、幸番に儲きないといふ苦痛をもう一つ重ねた。

高木の模樣から推す上で、實際には事實となつて現はれて來なかつたから何とも云ひ兼ねるが、叔母は此機會を利用して、若し縁があつたら千代子を高木に遣る積りでゐる位の打明け話を、僕等親子に向つて、明言とも宣告とも判斷のつかない儀式の下に、する氣だつたかも知れない。凡てに氣が附く前に、斯うなると其で僕より迂遠い母は何うだか、僕は其場で叔母の口から、僕と千代子と永久に手を別つべき宣告の第一聲を聽取してゐたのである。幸か不幸か、叔母もまた何も云ひ出さないうちに、[illegible]輪の線をひらくくさして歸つて來た。僕が叔母の占ひの的中しなかつたのを、母の爲に喜んだのは事實であ

る、同時に同じ出來事が僕を焦躁しがらせたのも嘘ではない。
夕方になつて、僕は姉妹と共に東京から來る筈の叔父を停車場に迎へるべく母に命ぜられて家を出た。彼等は揃ひの浴衣を着て白い足袋を穿いてゐた。それが後から見送つた彼等の母の眼に彼等が如何なる誇りとして映じたらう。千代子と並んで歩く僕の姿が又僕の母には普通以上に何んなに價が高かつたらう。僕は母を欺く材料に自然から使はれる自分を心苦しく思つて、門を出る時振り返つて見たら、母も叔母もまだ此方を見てゐた。
途中迄來た頃、千代子は思ひ出した樣に突然留まつて、「あの高木さんを誘ふのを忘れた」と云つた。百代子はすぐ僕の顏を見た。僕は足の運びを止めたが、口は開かなかつた。「最う好いぢやないの、此所迄來たんだから」と百代子が云つた。「だつて妾先刻誘つて呉れつて頼まれたのよ」と千代子が云つた。百代子は又僕の顏を見て逡巡つた。
「市さん貴方時計持つて入らしつて。今何時」
僕は時計を出して百代子に見せた。
「まだ間に合はない事はない。誘つて來るなら來ると好い。僕は先へ行つて待つてゐるから」
「最う遲いわよ貴方。高木さん、もし入らつしやる積りなら屹度一人でも入らしつてよ。後から忘れましたつて詫つたら夫で好かないの」

姉妹は二三度押し問答の末遂に後戻りをしない事にした。高木は百代子の豫言通りまた汽車の着かないうちに急ぎ足で構内へ這入つて來て、姉妹に、何うも手違い、あれ程頼んで置くのにと云つた。夫から御母さんはと聞いた。最後に僕の方を向いて、先程はと愛想の好い挨拶をした。

十九

其晩は叔父と從弟を待ち合はした上に、僕等母子が新に食卓に加はつたので、食事の時間が何時もより、大分後れた許りでなく、私かに恐れた通り賑しい混雜の中に箸と茶碗の動く光景を見せられた。叔父は笑ひながら、市さん丸で火事場の樣だらう、然し會には斯んな騷ぎをして飯を食ふのも面白いものだよと云つて、周圍の言譯をした。閑靜な膳に慣れた母は、此賑やかさの中に實際叔父の言葉通り愉快らしい顏をしてゐた。母は内氣な癖に斯ういふ陽氣な席が好きなのである。彼女は其時偶然口に上つた一皿にした小鯛の燒いたのを美味いと云つて頻りに賞めた。

「此方に頼んどくと何時でも拵へて來て呉れますよ。何なら、歸りに持つて入らつしやいな。姉さんが好きだから上げたいと思つてたんですが、つい序が無かつたもんだから。夫にすぐ悪くなるんでね」

「己も何時か大磯で誂へてわざ〳〵東京迄持つて歸つた事があるが、餘つ程氣を附けないと途中でね」

「腐るの」と千代子が聞いた。

「叔母さん興津鯛御嫌ひ。妾是よか興津鯛の方が美味しいわ」と百代子が云つた。
「興津鯛は又興津鯛で結構ですよ」と母は大人しい答をした。
斯んなくだ／＼しい會話を、僕が何故覺えてゐるかと云ふと、僕は其時母の顏に表はれた、さも滿足らしい氣持を能く注意して見てゐたからであるが、最う一つは僕が母と同じ様に一鹽の小鰺を好いてゐたからでもある。
序だから此所で云ふ。僕は自分の嗜好や性質の上に於て、母に大變能く似た所と、全く違つた所と兩方有つてゐる。是はまだ誰にも話さない秘密だが、實は單に自分の心得として、過去幾年かの間、僕は母と自分と何處が何う違つて、何處が何う似てゐるかの詳しい研究を人知れず重ねたのである。何故そんな眞似をしたかと母に聞かれては云ひ兼ねる。たとひ僕が自分に聞き糺して見ても判切云へなかつたのだから、理由は話せない。然し結果からいふと斯うである。――缺點でも母と共に具へてゐるなら僕は大變嬉しかつた。長所でも母になくつて僕丈有つてゐると甚だ不愉快になつた。其内で僕の最も氣になるのは、僕の顏が父に丈似て、母とは丸で縁のない目鼻立に出來上がつてゐる事であつた。僕は今でも鏡を見るたびに、器量が落ちても構はないから、もつと母の人相を多量に受け繼いで置いたら、母の子らしくつて嘸心持が好いだらうと思ふ。
食事の後れた如く、寐る時間も順繰りに延びて大分遲くなつた。其上急に人數が増えたので、床の位置

や二三層倍を極める丈が叔母に取つての一骨折であつた。男三人は一所に固められて、同じ蚊帳に寝た。叔父は肥つた身體を持ち扱つて、團扇をしきりにばた/\云はした。

「市さん何うだい、暑いぢやないか。是ぢや東京の方が餘つ程樂だね」

僕も僕の隣に寐る吾一も東京の方が樂だと云つた。夫では何を苦しんでわざ/\鎌倉下りの[illegible]けて来て、狭い蚊帳へ押し合ふ様に寐るんだか、叔父にも吾一にも僕にも説明のしやうがなかつた。

「是も一興だ」

疑問は叔父の此一句で忽ち納りが附いたが、暑さの方は中々去らないので誰もすぐには寐つかれなかつた。吾一は若いだけに、明日の魚捕りの事を叔父に向つてしきりに質問した。叔父は又眞面目だか冗談だか、船に乗りさへすれば、魚の方で風を望んで降る様な旨い話をして聞かせた。夫がたゞ自分の倅を相手にする許でなく、時々はねえ市さんと、そんな事に丸で冷淡の僕迄相手にするのだから少し變であつた。然し僕の方ではそれに對して相當な挨拶をする必要があるので、話しの濟む前には、僕は當然同行者の一人として受け答へをする様になつてゐた。僕は固より行く積りでも何でもなかつたのだから、此變化は僕に取つて少し意外の感があつた。氣樂さうに見える叔父は其内大きな鼾をかき始めた。吾一もすや/\寐入つた。僕丈は開いてゐる眼をわざと閉ぢて、更ける迄色々な事を考へた。

二十

翌日眼が覺めると、隣に寐てゐた吾一の姿が何時の間にかもう見えなくなつてゐた。僕は寐足らない頭を枕の上に着けて、夢とも思索とも名の附かない路を辿りながら、時々別種の人間を偸み見る樣な好奇心を以て、叔父の寐顔を眺めた。さうして僕も寐てゐる時は、傍から見ると、矢張り斯う苦のない顔をしてゐるのだらうかと考へ抔した。其所へ吾一が這入つて來て、市さん何うだらう天氣はと相談した。一寸起きて見ろと促すので、起き上がつて縁側へ出ると、海の方には一面に柔らかい霧の幕が掛かつて、近い岬の木立さへ常の色には見えなかつた。降つてるのかねと僕は聞いた。吾一はすぐ庭先へ飛び下りて、空を眺め出したが、少し降つてると答へた。

彼は今日の船遊びの中止を深く氣遣ふものの如く、二人の姉迄縁側へ引つ張り出して、頻りに何うだらう何うだらうを繰り返した。仕舞に最後の審判者たる彼の父の意見を必要と認めたものか、まだ寐てゐる叔父をとう／＼呼び起した。叔父は天氣抔は何うでも好いと云つた樣な眠たい眼をして、空と海を一應見渡した上、何此模樣なら今に屹度晴れるよと云つた。吾一はそれで安心したらしかつたが、千代子は當てにならない無責任な天氣豫報だから心配だと云つて僕の顔を見た。僕は何とも云へなかつた。叔父は、なに大丈夫大丈夫と受合つて風呂場の方へ行つた。

食事を濟ます頃から霧の樣な雨が降り出した。それでも風がないので、海の上は平生よりも却て穩やかに見えた。生憎な天氣なので人の好い母はみんなに氣の毒がつた。叔母は今に乾度本降りになるから今日は止した方が好からうと注意した。けれども若いものは惡く行く方を主張した。叔父はぢや御婆さん丈殘して、若いものが揃つて出掛ける事にしようと云つた。すると叔母が、では御爺さんは何方になさるのとわざと叔父に聞いて、みんなを笑はした。

「今日は是でも若いものの部だよ」

叔父は此言葉を證據立てる爲だか何だか、早速立つて浴衣の尻を端折つて下へ降りた。姉弟二人も其儘の姿で縁から降りた。

「御前達も尻を捲くるが好い」

「厭な事」

母は山賊の樣な毛脛を露出しにした叔父と、靜御前の笠に似た恰好の麥藁帽を被つた女二人と、黒い兵兒帶を二重に結びにした僕を、縁の上から見下ろして、全く都離れのした不思議な團體の如く眺めた。

「市さんが又何か惡口を云はうと思つて見てゐる」と百代子が薄笑ひをしながら僕の顔を見た。

「早く降りて入らつしやい」と千代子が叱る樣に云つた。

「市さんに惡い下駄を貸して上げるが好い」と叔父が注意した。

僕は一も二もなく降りたが、約束のある高木が來ないので、夫が又一つの問題になつた。大方此天氣だから見合はしてゐるのだらうと云ふのが、みんなの意見なので、僕等がそろ〳〵歩いて行く間に、吾一が馳足で迎ひに行つて連れて來る事にした。
叔父は例の調子でしきりに僕に話し掛けた。僕も相手になつて歩調を合はせた。其うちに、男の足だものだから、何時の間にか姉妹を乘り越した。僕は一度振り返つて見たが、二人は後れた事に一向頓着しない樣子で、毫も追ひ附かうとする努力を示さなかつた。僕には夫がわざと後から來る高木を待ち合はせる爲の樣にしか取れなかつた。それは誘つた人に對する禮儀として、彼等の取るべき當然の所作だつたのだらう。然し其時の僕にはさう思へなかつた。さう思ふ餘地があつても、さうは感ぜられなかつた。早く來いといふ合圖をしようといふ考へで振り向いた僕は、合圖を止めて又叔父と歩き出した。さうして其儘小坪へ這入る入口の岬の所迄來た。其所は海へ出張つた山の裾を、人の通れる丈の狹い幅に削つて、ぐるりと向う側へ廻り込まれる樣にした坂道であつた。叔父は一番高い坂の角迄來て留まつた。

二十一

彼は突然彼の體格に相應した大きな聲を出して姉妹を呼んだ。自白するが、僕は夫迄に何度も後を振り返つて見ようとしたのである。けれども氣が咎めると云ふのか、自尊心が許さないと云ふのか、振り向か

うとする毎に、首が[illegible]の様に堅くなつて後へ廻らなかつたのである。

見ると二人の姿はまだ一町程下にあつた。さうして其すぐ後に高木と吾一が續いてゐた。叔父は遠慮のない大きな聲を出して、おゝいと呼んだ時、姉妹は同時に僕等を見上げたが、千代子はすぐ後にゐる高木の方を向いた。すると高木は被つてゐた麥藁帽を右の手に取つて、僕等を目當しに頻りに振つて見せた。けれども四人のうちで聲を出して叔父に應じたのは只吾一丈であつた。彼は彼の學校で號令の稽古でもしたものと見えて、海と崖に反響する様な答と共に両手を一度に頭の上に差し上げた。

叔父と僕は崖の鼻に立つて彼等の近寄るのを待つた。彼等は叔父に呼ばれた後も呼ばれない前と同じ遲い歩調で、何か話しながら上がつて來た。僕には夫が尋常でなくつて、大いに巫山戯てゐる様に見えた。高木は茶色のだぶ〳〵した外套の様なものを着て時々隠袋へ手を入れた。此暑いのにまさか外套は着られまいと思つて、最初は不思議に眺めてゐたが、段々近くなるに従つて、それが薄い雨除である事に氣が附いた。其時叔父が突然、市さんヨットに乗つて其所いらを遊んで歩くのも面白いだらうねと云つたので、僕は急に氣が附いた様に高木から眼を轉じて脚の下を見た。すると磯に近い所に、真白に塗つた空船が一艘、静かな波の上に浮いてゐた。糠雨と迄も行かない細かいものが猶降り已まないので、海は一面に蒸されて、平生なら手に取る様に見える向う側の絶壁の樹も岩も、殆ど一色に眺められた。其中を二人は漸く僕等の傍迄來た。

「何うも御待たせ申しまして、實は髭を剃つてゐたものだから、途中で已める譯に行かず……」と高木は叔父の顔を見るや否や云ひ譯をした。
「えらい物を着込んで暑かありませんか」と叔父が聞いた。
「暑くつたつて脱ぐ譯に行かないのよ。上はハイカラでも下は蠻殻なんだから」と千代子が笑つた。高木は雨外套の下に、直かに半袖の薄い襯衣を着て、變な半洋袴から餘つた脛を丸出しにして、黑足袋に組下駄を引つ掛けてゐた。彼は此通りと雨外套の下を僕等に示した上、日本へ歸ると服裝が自由で貴女の前でも氣兼ねがなくつて好いと云つてゐた。
一同がぞろ〳〵揃つて道幅の六尺ばかりな汚苦しい漁村に這入ると、一種不快な臭ひがみんなの鼻を襲つた。高木は隱袋から白い手巾を出して短かい髭の上を掩つた。叔父は突然其所に立つて僕等を見てゐた子供に、西の者で南の方から養子に來たものの宅は何處だと奇體な質問を掛けた。子供は知らないと云つた。僕は千代子に何でそんな妙な聞き方をするのかと尋ねた。昨夕聞き合せに人を遣つた家の主人が云ふには、名前は忘れたから是々の男と云つて探して歩けば分ると教へたからだと千代子が話して聞かした時、僕は此呑氣な教へ方と、同じく呑氣な聞き方を、如何にも餘裕なくこせついてゐる自分と比べて見て、妙に羨ましく思つた。
「それで分るんでせうか」と高木が不思議な顔をした。

「分つたら餘つ程奇體だわね」と千代子が笑つた。

「何大丈夫分るよ」と叔父が受合つた。

吾一は面白半分人の顔さへ見れば、西のもので南の方から養子に來たものの宅は何處だと聞いては、其度にみんなを笑はした。一番仕舞に、編笠を被つて白の手甲と脚絆を着けた月琴彈きの若い女の休んでゐる汚い茶店の婆さんに同じ問を掛けたら、婆さんは案外にもすぐ其所だと容易く教へて呉れたので、みんなが又手を拍つて笑つた。それは往來から山手の方へ三級ばかりに仕切られた石段を登り切つた小高い所にある小さい瓦葺の家であつた。

二十二

此細い石段を思ひ〳〵の服裝をした六人が前後してぞろ〳〵登る姿は、傍で見てゐたら定めし變なものだつたらうと思ふ。其上六人のうちで、是から何をするか明瞭した考へを有つてゐたものは誰もないのだから甚だ氣樂である。肝心の叔父さへ唯船に乘る事を知つてゐる丈で、後は網だか釣りだか、又何處迄漕いで出るのか一向辨別へないらしかつた。百代子の後から足の力で擦り減らされて凹みの多くなつた石段を踏んで行く僕は斯んな無意味な行動に、己を委ねて悔いない所を、避暑の趣きとでも云ふのかと思ひつつ上つた。同時に此無意味な行動のうちに、意味ある劇の大切な一幕が、ある男とある女の間に暗に演ぜ

られつゝあるのでは無からうかと疑つた。さうして其一幕の中で、自分の務めなければならない役割が若し有るとすれば、穏やかな顔をした運命に、輕く翻弄される役割より外にあるまいと考へた。最後に何事も打算しないで唯無雑作に遣つて除ける叔父が、人に氣の附かないうちに、此幕を完成するとしたら、彼こそ比類のない巧妙な手際を有つた作者と云はなければなるまいといふ氣を起した。僕の頭に斯ういふ影が射した時、すぐ後から跟いて上がつて來る高木が、是ぢや暑くつて堪まらない、御免蒙つて雨防衣を脱がうと云ひ出した。

家は下から見たよりも猶小さくて汚かつた。戸口に杓子が一つ打ち附けてあつて、夫に百日風邪吉野平吉一家一同と書いてあるので、主人の名が漸く分つた。夫を見附け出して、みんなに聞こえるやうに讀んだのは、目敏い吾一の手柄であつた。中を覗くと天井も壁も悉く黒く光つてゐた。人間としては婆さんが一人居たぎりである。其婆さんが、今日は天氣が好くないので、大方御出でぢやあるまいと云つて早く海へ出ましたから、今濱へ下りて呼んできませうと斷りを述べた。船へ乗つて出たのかねと叔父が聞くと、婆さんは多分あの船だらうと答へて、手で海の上を指した。靄はまだ晴れなかつたけれども、先刻よりは空が大分明るくなつたので、沖の方は比較的判切見える中に、指された船は遠くの向うに小さく横たはつてゐた。

「あれぢや大變だ」

「此方へ御出しなさい。持つてるから」

さうして高木から二つの品を受け取つた時、彼女は改めて又彼の半袖姿を見て笑ひながら、「とう〳〵鑵殼になつたのね」と評した。高木は唯苦笑した丈で、すぐ濱の方へ下りて行つた。僕は左も運動家らしく發達した彼の肩の肉が、急いで石段を下りる爲に手を振る毎に動く樣を後から無言のまゝ注意して眺めた。

二十三

船に乘るためにみんなが揃つて濱に下り立つたのは夫から約一時間の後であつた。濱には何んの祭の前か過ぎか、深く砂の中に埋められた高い幟の棒が二本僕の眼を惹いた。岳一は何處からか磯へ打ち上げた楢枝を拾つて來て、廣い砂の上に大きな字と大きな顏をいくつも並べた。

「さあ御乘り」と坊主頭の船頭が云つたので、六人は順序なくごた〳〵に船緣から這ひ上がつた。偶然の結果千代子と僕は後のものに押されて、仕切りの附いた舳の方に二人膝を突き合はせて坐つた。叔父は一番先に、胴の間といふのか、眞中の廣い所に、家長らしく胡坐をかいて仕舞つた。さうして高木が其日の客として取り扱ふ積りか、さあ何うぞと案内したので、彼は否應なしに叔父の傍に座を占めた。百代子と岳一は彼等の次の間と云つた樣な仕切りの中に船頭と一所に這入つた。

「何うです此方が空いてますから入らつしやいませんか」と高木はすぐ後の百代子を顧た。百代子は難

有うといつたきり席を移さなかつた。僕は始めから千代子と一つ薄縁の上に坐るのを快く思はなかつた。僕の高木に對して嫉妬を起した事は既に明らかに自白して置いた。其嫉妬は程度に於て昨日も今日も同じだつたかも知れないが、それと共に競爭心は未だ嘗て微塵も僕の胸に萌さなかつたのである。僕も男だから是から先いつ何んな女を的に劇烈な戀に陷らないとも限らない。然し僕は斷言する。若し其戀と同じ度合の劇烈な競爭を敢てしなければ思ふ人が手に入らないなら、僕は何んな苦痛と犧牲を忍んでも、超然と手を懷にして戀人を見棄てて仕舞ふ積りでゐる。男らしくないとも、勇氣に乏しいとも、意志が薄弱だとも、他から評したら何うにでも評されるだらう。けれども其程切ない競爭をしなければ吾有に出來にくい程、何方へ動いても好い女なら、夫程切ない競爭に價しない女だとしか僕には認められないのである。僕には自分に靡かない女を無理に抱く喜びよりは、相手の戀を自由の野に放つて遣つた時の男らしい氣分で、わが失戀の瘡痕を淋しく見詰めてゐる方が、何の位良心に對して滿足が多いか分らないのである。

僕は千代子に斯う云つた。――

「千代ちやん行つちや何うだ。彼方の方が廣くつて樂な樣だから」

「何故、此所に居ちや邪魔なの」

千代子はさう云つた儘動かうともしなかつた。僕には高木がゐるから彼方へ行けといふのだといふ樣な說明は、露骨と聞こえるにしろ、厭味と受取られるにしろ、全く口にする勇氣は出なかつた。たゞ彼女か

ら斯う云はれた僕の胸に、一種の嬉しさが閃めいたのは、口と腹と何う裏表になつてゐるかを曝露する好い證據で、自分で自分の薄弱な性情を自覺しない僕には痛い打撃であつた。

昨日會つた時よりは氣の所爲か少し控へ目になつたやうに見える高木は、千代子と僕の間に起つた此問答を聞きながら知らぬ振をしてゐた。船が磯を離れたとき、彼は「好い案排に空模樣が直つて來ました。是ぢや日がかん／＼照るより却て結構です。船遊びには持つて來いといふ御天氣で」といふ樣な事を叔父と話し合つたりした。叔父は突然大きな聲を出して「船頭、一體何を捕るんだ」と聞いた。叔父も其他のものも、此時迄何を捕るんだか一向知らずにゐたのである。坊主頭の船頭は、粗末な言葉で、蛸を捕るんだと答へた。此奇拔な返事には千代子も百代子も驚くよりも可笑しかつたと見えて、忽ち聲を出して笑つた。

「蛸は何處にゐるんだ」と叔父が又聞いた。

「此所いらにゐるんだ」と船頭は又答へた。

さうして湯屋の留桶を少し深くした樣な小判形の桶の底に、硝子を張つたものを水に伏せて、其中に顏を突込む樣に押し込みながら、海の底を覗き出した。船頭は此妙な道具を鏡と稱へて、二つ三つ餘分に持ち合はせたのを、すぐ僕等に貸して與れた。第一にそれを利用したのは船頭の傍に座を取つた吾一と百代子であつた。

二十四

鏡が先から先へと順々に回つた時、叔父は是や鮮やかだね、何でも見えると非道く感心してゐた。叔父は人間社會の事に大抵通じてゐる所爲か、萬に高を括る癖に、斯ういふ自然界の現象に襲はれるとすぐ驚く性質なのである。自分は千代子から渡された鏡を受け取つて、最後に一枚の硝子越しに海の底を眺めたが、かねて想像したと少しも異なる所のない極めて平凡な海の底が眼に入つた丈である。其所には小さい岩が多少の凹凸を描いて一面に連なる間に、蒼黒い藻草が限りなく蔓延つてゐた。其藻草が恰も生温い風に嬲られる樣に、波のうねりで靜かに又永久に細長い葉を前後に搖かした。

「市さん蛸が見えて」

「見えない」

僕は顏を上げた。千代子は又首を突込んだ。彼女の被つてゐたへな〳〵の麥藁帽子の縁が水に浸かつて、船頭に操られる船の勢ひに逆らふ度に、可憐な波をちよろ〳〵起した。僕は其後に見える彼女の黒い髮と白い頸筋を、其顏よりも美しく眺めてゐた。

「千代ちやんには、見附かつたかい」

「駄目よ。蛸なんか何處にも泳いでゐやしないわ」

「餘つ程慣れないと中々見附ける譯に行かないんださうです」
是は高木が千代子の爲に說明して呉れた言葉であつた。彼女は兩手で桶を抑へたまゝ、船縁から乘り出した身體を高木の方へ捻ぢ曲げて、「道理で見えないのね」といつたが、其儘水に戯れる樣に、兩手で抑へた桶をぶく／＼動かしてゐた。百代子が向うの方から御姉さんと呼んだ。吾一は居所も分らない蛸を無暗に突き廻した。突くには一間許りの細長い女竹の先に一種の穗先を着けた變なものを用ひるのである。船頭は桶を齒で銜へて、片手に棹を使ひながら、船の動いて行くうちに、蛸の居所を探し中てるや否や、その長い竹で巧みにぐにや／＼した怪物を突き刺した。
蛸は船頭一人の手で、何疋も船の中に上がつたが、何れも同じ位な大きさで、是はと驚く程のものはなかつた。始めのうちこそ皆珍らしがつて、捕れるたびに騷いで見たが、仕舞には流石元氣な叔父も少し飽きて來たと見えて、「斯う蛸ばかり捕つても仕方がないね」と云ひ出した。高木は煙草を吹かしながら、船底にかたまつた獲物を眺め始めた。
「千代ちやん、蛸の泳いでゐる所を見た事がありますか。一寸來て御覽なさい、餘つ程妙ですよ」
高木は斯う云つて千代子を招いたが、傍に坐つてゐる僕の顏を見た時、「須永さん何うです、蛸が泳いでゐますよ」と附け加へた。僕は「左うですか。面白いでせう」と答へたなり直ぐ席を立たうともしなかつた。千代子はどれと云ひながら高木の傍へ行つて新しい座を占めた。僕は故の所から彼女にまだ泳いでゐる

かと尋ねた。

「えゝ面白いわ、早く來て御覽なさい」

蛸は八本の足を眞直に揃へて、細長い身體を一氣にすつ〳〵と區切りつゝ、水の中を一直線に船板に突き當たる迄進んで行くのであつた。中には烏賊の樣に黑い墨を吐くのも交つてゐた。僕は中腰になつて一寸其光景を覗いたなり故の席に戻つたが、千代子は夫限り高木の傍を離れなかつた。

叔父は船頭に向つて蛸はもう澤山だと云つた。船頭は歸るのかと聞いた。向うの方に大きな竹籠の樣なものが二つ三つ浮いてゐたので、蛸ばかりで淋しいと思つた叔父は、船を其一つの側へ漕ぎ寄せさした。申し合はせた樣に、船中立ち上がつて籠の内を覗くと、七八寸もあらうと云ふ魚が、縱橫に狹い水の中を驅け廻つて居た。その或ものは水の色を離れない蒼い光を鱗に帶びて、自分の勢ひで前後左右に作る波を肉の裏に透す樣に輝いた。

「一つ掬つて御覽なさい」

高木は大きな掬網の柄を千代子に握らした。千代子は面白半分それを受取つて水の中で動かさうとしたが、動きさうにもしないので、高木は己の手を添へて二人一所に籠の中を覺束なく搔き廻した。然し魚は掬へる所ではなかつたので、千代子は直ぐそれを船頭に返した。船頭は同じ掬網で叔父の命ずる儘に何疋でも魚を上へ撰り出した。僕等は奇怪な蛸の單調を破るべく、鷄魚、鯛、[illegible]の變化を喜んで又席に上

つた。

二十五

僕は其晩一人東京へ歸つた。母はみんなに引き留められて、歸るときには吾一か誰か送つて行くといふ條件の下に、猶二三日鎌倉に留まる事を肯じた。僕は何故母が彼等の勸める儘に、人を好く落ち附いてゐるのだらうと、鋭く磨がれた自分の神經から推して、悠長過ぎる彼女を齒痒く思つた。

高木には夫から以後つひぞ顏を合はせた事がなかつた。千代子と僕に高木を加へて三つ巴を描いた一種の關係が、夫限り發展しないで、其中の劣敗者に當たる僕が、恰も運命の先途を豫知した如き態度で、中途から渦卷の外に逃れたのは、此話を聞くものに取つて、定めし不本意であらう。僕自身も幾分か火の手のまだ收まらないうちに、取り急いで纏を撤した樣な心持がする。と云ふと、僕に始めからある目論見があつて、わざ／＼鎌倉へ出掛けたとも取れるが、嫉妬心だけあつて競爭心を有たない僕にも相應の己惚は陰氣な暗い胸の何處かで時々ちら／＼陽炎つたのである。僕は自分の矛盾をよく研究した。而して千代子に對する己惚を飽く迄積極的に利用し切らせない爲に、他の思想やら感情やらが、入れ代り立ち替り雜然として吾心を奪ひに來る煩はしさに惱んだのである。

彼女は時によると、天下に唯一人の僕を愛してゐる樣に見えた。僕は夫でも進む譯に行かないのである。

然し未練に眼を拭いて、思ひ切つた態度に出ようかと思案してゐるうちに、彼女は忽ち僕の手から遁れて、全くの他人と違はない顔になつて仕舞ふのが常であつた。僕が鎌倉で暮らした二日の間に、斯ういふ潮の満干は既に二三度あつた。或時は自分の意志で此變化を支配しつゝ、わざと近寄つたり、わざと遠退いたりするのでなからうかといふ微かな疑惑をさへ、僕の胸に濁らせた。それ許りではない。僕は彼女の言行を、一つの意味に解釋し終つたすぐ後から、丸で反對の意味に同じものを又解釋して、其實何方が正しいのか分らない徒らな忌々しさを感じた例も少なくはなかつた。

僕は其二日間に釣る積りのない女に釣られさうになつた。さうして高木といふ男が苟も眼の前に出沒する限りは、今でも仕舞迄釣られて行きさうな心持がした。僕は高木に對して競爭心を有たないと先に斷つたが、誤解を防ぐために、もう一度同じ言葉を繰り返したい。もし千代子と高木と僕と三人が巴になつて戀か愛か人情かの旋風の中に狂ふならば、其時僕を動かす力は高木に勝たうといふ競爭心でない事を僕は斷言する。夫は高い塔の上から下を見た時、恐ろしくなると共に、飛び下りなければ居られない神經作用と同じ物だと斷言する。結果が高木に對して勝つか負けるかに歸着する上部から云へば、競爭と見えるかも知れないが、動力は全く獨立した一種の働きである。しかも其動力は高木が居さへしなければ決して僕を襲つて來ないのである。僕は其二日間に、此怪しい力の閃きを物凄く感じた。さうして強い決心と共に、すぐ鎌倉を去つた。

僕は強い刺激に充ちた小説を讀むに堪へない程弱い男である。強い刺激に充ちた小説を實行する事は猶更出來ない男である。僕は自分の氣分が小説になり掛けた刹那に驚いて、東京へ引き返したのである。だから汽車の中の僕は、半分は優者で半分は劣者であつた。比較的乘客の少ない中等列車のうちで、僕は自分と書き出して自分と裂き棄てた樣な此小説の續きを色々に想像した。其所には海があり、月があり、磯があつた。若い男の影と若い女の影があつた。始めは男が激して女が泣いた。後では女が激して男が宥めた。終には二人手を引き合つて音のしない砂の上を歩いた。或は額があり、疊があり、涼しい風が吹いた。二人の若い男が其所で意味のない口論をした。それが段々熱い血を頰に呼び寄せて、終には二人共自分の人格に拘る樣な言葉使ひをしなければ濟まなくなつた。果ては立ち上がつて拳を揮ひ合つた。或は……芝居に似た光景は幾幕となく眼の前に描かれた。僕は其何れをも嘗め試みる機會を失つて却て自分の爲に喜んだ。人は僕を老人見た樣だと云つて嘲るだらう。もし詩に訴へてのみ世の中を渡らないのが老人なら、僕は嘲られても滿足である。けれども若し詩に涸れて乾びたのが老人なら、僕は此品評に甘んじたくない。僕は始終詩を求めて藻搔いてゐるのである。

二十六

僕は東京へ歸つてからの氣分を想像して、或は刺激の眼の前に控へた鎌倉にゐるよりも却て焦躁つきは

しまいかと心配した。さうして相手もなく一人焦躁つく事の甚しい苦痛を徒らに胸の中に描いて見た。偶然にも結果は他の一方に外れた。僕は僕の希望した通り、平生に近い落附きと冷靜と無頓着とを、比較的容易に、淋しいわが二階の上に齎し歸る事が出來た。僕は新しい匂ひのする蚊帳を座敷一杯に釣つて、軒に鳴る風鈴の音を樂しんで寐た。朝には町へ出て草花の鉢を抱へながら格子を開ける事もあつた。母が居ないので、凡ての世話は作といふ小間使がした。鎌倉から歸つて、始めてわが家の膳に向つた時、給仕の爲に黑い丸盆を膝の上に置いて、僕の前に畏まつた作の姿を見た僕は、今更の樣に彼女と鎌倉にゐる姉妹との相違を感じた。作は固より好い器量の女でも何でもなかつた。けれども僕の前に出て畏まる事より外に何も知つてゐない彼女の姿が、僕には如何に慎しやかに如何に控へ目に、如何に女として憐れ深く見えたらう。彼女は美の何物であるかを考へるさへ、自分の身分では既に生意氣過ぎると思ひ定めた樣子で、大人しく坐つてゐたのである。僕は珍らしく彼女に優しい言葉を掛けた。さうして彼女に年は幾何だと聞いた。彼女は十九だと答へた。僕は又突然嫁に行きたくはないかと尋ねた。彼女は紅い顏をして下を向いたなり、露骨な問を掛けた僕を氣の毒がらせた。僕と作とは夫迄殆ど用の口より外に利いた事がなかつたのである。僕は鎌倉から新しい記憶を持つて歸つた反動として、其時始めて、自分の家に使つてゐる下婢の女らしい所に氣が附いた。愛とは固より彼女と僕の間に云ひ得べき言葉でない。僕はたゞ彼女の身の周圍から出る落ち附いた、氣安い、大人しやかな空氣を愛したのである。

僕が作の爲に安慰を得たと云つては、自分ながら可笑しく聞こえる。けれども今考へて見ても、夫より外の原因は全く考へ附かない樣だから、矢つ張り作が――作がといふより、其時の作が代表して僕に見せて吳れた女性のある方面の性質が、想像の刺激にすら焦躁立ちたがつてゐた僕の頭を靜めて吳れたのだらうと思ふ。白狀すれば鎌倉の景色は折々眼に浮かんだ。其景色のうちには無論人間が活動してゐた。たゞ夫が僕の遠くにゐる、僕とは到底利害を一にし得ない人間の活動らしく見えたのは幸福であつた。

僕は二階に上つて書架の整理を始めた。綺麗好きな母が始終氣を附けて掃除を怠らなかつたに拘らず、一々書物を並べ直すとなると、思はぬ埃の色を、目の屆かない陰に見附けるので、殘らず揃へる迄には、中々手間取つた。僕は暑中に似合はしい閑事業として、成る可く時間の掛かる樣に、氣が向けば手にした本を何時迄も讀み耽つて見ようといふ氣樂な方針で蝸牛の如く進行した。作は時々たまらない拂塵の音を聞き附けて、梯子段から銀杏返しの頭を出した。僕は彼女に書架の一部を雜巾で拭いて貰つた。然し何時迄掛かるか分らない仕事の手傳を、濟むまでさせるのも氣の毒だと思つて、直ぐ階下へ下げた。僕は一時間程書物を伏せたり立てたりして少し草臥れたから煙草を吹かして休んでゐると、作が又梯子段から顏を出した。さうして、私でよろしければ何ぞ致しませうかと尋ねた。僕は作に何かさせて遣りたかつた。不幸にして西洋文字の讀めない彼女には手の出せない書物の整理なので、僕は氣の毒だけれども、何好いよと斷つて又下へ追ひ遣つた。

作の事なぞう一々云ふ必要もないが、つい前からの關係で、彼女の其時の行動を覺えて居たから話したのである。僕は一本の卷煙草を呑み切つた後で又整理に掛かつた。今度は作の爲にわれ一人の世界を妨げられる虞れなしに、書架の二段目を一氣に片附けた。其時僕は久しく友達に借りて、つい返すのを忘れてゐた綺麗な書物を、偶然棚の後から發見した。それは寧ろ薄い小形の本だつたので、つい外のものの向う側へ落ちたなり埃だらけになつて、今日迄僕の眼を掠めて居たのである。

二十七

僕に此本を貸して呉れたものは或文學好きの友達であつた。僕はかつて此男と小説の話をして、思慮の勝つたものは、萬事に考へ込む丈で、一向華やかな行動を仕切る勇氣がないから、小説に書いても詰らないだらうと云つた。僕の本性からあまり小説を愛讀しないのは、僕に小説中の人物になる資格が乏しいので、資格が乏しいのは、考へ〳〵して愚圖つく所爲だらうと僕は思つてゐたから、僕はつい斯ういふ質問を掛けて見たくなつたのである。其時彼は机上にあつた此本を指して、此所に書いてある主人公は、非常に目覺ましい思慮と、恐ろしく強い思ひ切つた行動を具へてゐると告げた。僕は一體何んな事が書いてあるのかと聞いた。彼はまあ讀んで見ろと云つて、其本を取つて僕に渡した。表題にはゲダンケといふ獨逸字が書いてあつた。彼は露西亞物の飜譯だと教へて呉れた。僕は薄い書物を手にしながら、重ねてそ

の梗概を彼に尋ねた。彼は梗概などは何うでも好いと答へた。さうして中に書いてある事が嫉妬なのだか、復讐なのだか、深刻な惡戲なのだか、醉興な計略なのだか、眞面目な所作なのだか、氣狂の推理なのだか、常人の打算なのだか、殆ど分らないが、何しろ華々しい行動と同じく華々しい思慮が伴なつてゐるから、兎も角も讀んで見ろと云つた。僕は書物を借りて歸つた。然し讀む氣はしなかつた。僕は讀み耽らない癖に、小說家といふものを一切馬鹿にしてゐた上に、友達のいふ樣な事には些とも心を動かすべき興味を有たなかつたからである。

此出來事を悉皆忘れてゐた僕は、何の氣も附かずに其ゲダンケを今棚の後から引き出して厚い塵を拂つた。さうして見覺えのある例の獨逸字の標題に眼を附けると共に、かの文學好きの友達と彼の其時の言葉とを思ひ出した。すると突然何處から起つたか分らない好奇心に驅られて、直ぐ其一頁を開いて初めから讀み始めた。中には恐るべき話が書いてあつた。

或女に意のあつた或男が、其婦人から相手にされないのみか、却てわが知り合ひの人の所へ嫁入られたのを根に、新婚の夫を殺さうと企てた。但し唯殺すのではない。女房が見てゐる前で殺さなければ面白くない。しかも其見てゐる女房が彼を下手人と知つてゐながら、何時迄も指を銜へて、彼を見てゐる丈で、夫より外に何うにも手の附けやうのないといふ複雜な殺し方をしなければ氣が濟まない。彼は其手段として一種の方法を案出した。ある晩餐の席へ招待された好機を利用して、彼は急に劇しい發作に襲はれた振

在し始めた。傍から見ると丸で、狂人としか思へない暴動を其場で敢てした後は、同席の一人残らずから、全くの狂人と信じられたのを見濟まして、心の内で的に當たつた策略を賛嘆した。彼は人目に觸れ易い社交場裡で、同じ所作を總て三度繰り返した後、發作の爲に精神に狂ひの出る危險な人といふ評判を一般に博し得た。彼は北手數の懸かつた準備の上に、手の附けやうのない殺人罪を築き上げる積りでゐたのである。運ある彼の發作が、華やかな交際の色を暗く摘ひ出してから、今迄無意に往來してゐた諸家の門戸が、彼に對して急に固く鎖される樣になつた。けれども夫は彼の苦にする所ではなかつた。彼は寧自由に出入の出來る一軒の家を持つてゐた。それが取りも直さず彼の將に死の國に蹴落とさうとしつゝある友と其細君の家だつたのである。彼は其日何氣ない顔をして友の住居を窺いた。其所で世間話に時を移すと見せて、暗に目の前の人に飛び掛かる機を窺つた。彼は机の上にあつた重い文鎭を取つて、突然足で人が殺せるだらうかと尋ねた。友は固より彼の問を眞に受けなかつた。彼は構はず出來る丈の力を文鎭に込めて、細君の見てゐる前で、友の頭を打ち殺した。さうして、狂人の名の下に、精神病院に送られた。彼は驚くべき思慮と分別と推理の力とを以て、以上の顚末を基礎に、自分の決して狂人でない譯をひたすら辯解してゐる。かと思ふと、其顚末を又疑つてゐる。のみならず、其疑ひを又辯解しようとしてゐる。彼は畢竟正氣なのだらうか、狂人なのだらうか、――彼は書物を手にした儘慄然として恐れた。

二十八

僕の頭は僕の胸を抑へる爲に出來てゐた。行動の結果から見て、甚しい悔を遺さない過去を顧ると、是が人間の常態かとも思ふ。けれども胸が熱しかける度に、嚴肅な頭の威力を無理に加へられるのは、普通誰でも經驗する通り、甚しい苦痛である。僕は意地張りといふ點に於て、何方かといふと寧ろ陰性の痼癖持ちだから、發作に心を襲はれた人が急に理性の爲に喰ひ留められて、劇しい自動車の速力を卽時に殺す樣な苦痛は滅多に嘗めた事がない。夫ですら或場合には命の心棒を無理に曲げられるとでも云はなければ形容しやうのない活力の燃燒を内に感じた。二つの爭ひが起る度に、常に頭の命令に屈從して來た僕は、或時は僕の頭が強いから屈從させ得るのだと思ひ、或時は僕の胸が弱いから屈從するのだとも思つたが、何うしても此爭ひは生活の爲の爭ひでありながら、人知れず、わが命を削る爭ひだといふ畏怖の念から解脫する事が出來なかつた。

夫だから僕はゲダンケの主人公を見て驚いたのである。親友の命を蟲の息の樣に輕く見る彼は、理と情との間に何等の矛盾をも扞格をも認めなかつた。彼の有する凡ての知力は、悉く復讐の燃料となつて、殘忍な兇行を手際よく仕遂げる方便に供せられながら、毫も悔ゆる事を知らなかつた。彼は周密なる思慮を牽ゐて、滿腔の毒血を相手の頭から浴びせ掛け得る偉大なる俳優であつた。若しくは尋常以上の頭腦と情

熱と意氣に充ちた狂人であつた。僕は平生の自分と比較して、斯う顧慮なく一心に振舞へるゲダンケの主人公が大いに羨ましかつた。同時に汗の滴る程恐ろしかつた。出來たら嘸痛快だらうと思つた。出來した後は定めし堪へがたい良心の苛責に逢ふだらうと思はれた。

けれども若し僕の高木に對する嫉妬がある不可思議の徑路を取つて、向後今の數十倍に熾く身を燒くなら何うだらうと僕は考へた。然し僕は其時の自分を自分で想像する事が出來なかつた。始めは人間の元來からの作りが違ふんだから、到底斯んな眞似は爲得まいといふ見地から、直ぐ此問題を棄却しようとした。次には、僕でも同じ程度の復讐が充分遣つて除けられるに違ひないといふ氣がし出した。最後には、僕の樣に平生に理と情の爭ひに惱んで愚圖ついてゐるものにして始めて斯んな猛烈な兇行を、冷靜に打算的に且組織的に、遂行しうるのだと思ひ出した。僕は最後に何故斯う思つたのか自分にも分らない。たゞ斯う思つた時急に變な心持に襲はれた。其心持は純然たる恐怖でも不安でも不快でもなく、夫等よりは遙かに複雜なものに見えた。が、纏まつて心に現はれた狀態から云へば、丁度大人しい人が酒の爲に大膽になつて、是なら何でも遣れるといふ滿足を感じつゝ、同時に醉ひに打ち勝たれた自分は、品性の上に於て平生の自分よりも遙かに墮落したのだと氣が付いて、さうして墮落は酒の影響だから何處へ何う逃げても人間として到底免れる事は出來ないのだと沈痛に諦めを附けたと同じ樣な變な心持であつた。僕は此變な心持と共に、千代子の見てゐる前で、高木の腦天に重い文鎭を骨の底迄打ち込んだ夢を、大きな眼を開きな

がら見て、驚いて立ち上がつた。

下へ降りるや否や、いきなり風呂場へ行つて、水をざあ〳〵頭へ掛けた。茶の間の時計を見ると、もう午過ぎなので、それを好い機會に、其所へ坐つて飯を片附ける事にした。給仕には例の通り作が出た。僕は二口、三口無言で飯の塊りを頬張つたが、突然彼女に、おい作僕の顔色は何うかあるかいと聞いた。作は吃驚した眼を大きくして、いゝえと答へた。夫で問答が切れると、今度は作の方が何うか遊ばしましたかと尋ねた。

「いゝや、大して何うもしない」

「急に御暑う御座いますから」

僕は默つて二杯の飯を食ひ終つた。茶を注がして飲み掛けた時、僕は又突然作に、鎌倉抔へ行つて混雜するより宅にゐる方が靜かで好いねと云つた。作は、でも彼方の方が御涼しう御座いませうと云つた。僕はいや却て東京より暑い位だ、あんな所にゐると氣ばかり焦燥々々して不可ないと説明して遣つた。作は御隱居さまはまだ當分彼地に御出で御座いますかと尋ねた。僕はもう歸るだらうと答へた。

二十九

僕は僕の前に坐つてゐる作の姿を見て、一筆がきの朝貌の樣な氣がした。只貴い名家の手にならないの

が遺憾であるが、心の中はさう云ふ種類の畫と同じく簡略に出來上がつてゐるとしか僕には受取れなかつた。作の人物を畫に喩へて何の爲になると聞かれるかも知れない。深い意味もなからうが、實は彼女の給仕を受けて飯を食ふ間に、今しがた「グダニク」を讀んだ自分と、今黑塗の盆を持つて畏まつてゐる彼女とを比較して、自分の腹は何故斯う執濃い油繪の樣に複雜なのだらうと呆れたからである。白狀すると僕は高等教育を受けた證據として、今日迄自分の頭が他より複雜に働くのを自慢にしてゐた。所が何時か其働きに疲れてゐた。何の因果で斯う迄事を細かに刻まなければ生きて行かれないのかと考へて情なかつた。僕は結論を腹の中に置きながら、作の顏を見て尊い感じを起した。

「作御前でも色々物を考へる事があるかね」

「私なんぞ別に何も考へる程の事が御座いませんから」

「考へないかね。それが好いね。考へる事がないのが一番だ」

「あつても智慧が御座いませんから、筋道が立ちません。全く駄目で御座います」

「仕合せだ」

僕は思はず斯う云つて作を驚かした。作は突然僕から冷やかされたとでも思つたらう。氣の毒な事をした。

其夕暮に思ひ掛けない母が出し拔けに鎌倉から歸つて來た。僕は其時日の暮れ掛けた二階の縁に籐椅子

を持ち出して、作が跣足で庭先へ水を打つ音を聞いてゐた。下へ降りて玄關へ出た時、僕は母を送つて來るべき筈の吾一の代りに、千代子が彼女の後に跟いて脊脱から上がつたのを見て非常に驚いた。僕は籐椅子の上で千代子の事を全く考へずに居たのである。考へても彼女と高木とを離す事は出來なかつたのである。さうして二人は當分鎌倉の舞臺を動き得ないものと信じてゐたのである。僕は日に燒けて心持ち色の黒くなつたと思はれる母と顔を見合はして挨拶を取り替はす前に、先づ千代子に向つて何うして來たのだと聞きたかつた。實際僕は其通りの言葉を第一に用ひたのである。

「叔母さんを送つて來たのよ。何故。驚いて」

「そりや難有う」と僕は答へた。僕の千代子に對する感情は鎌倉へ行く前と、行つてからとで大分違つてゐた。行つてからと歸つて來てからとでも亦大分違つてゐた。高木と一所に束ねられた彼女に對するのと、斯う一人に切り離された彼女に對するのとでも亦大分違つてゐた。彼女は年を取つた母を吾一に託するのが不安心だつたから、自分で隨いて來たのだと云つて、作が足を洗つてゐる間に、母の單衣を箪笥から出したり、夫を旅行着と着換へさせたり抔して、元の千代子の通り鮮やかに振舞つた。僕は母にあれから何か面白い事がありましたかと尋ねた。母は滿足らしい顔をしながら、別に是といふ珍らしい事も無かつたと答へたが、「でもね久し振に好い氣保養をしました。御蔭で」と云つた。僕にはそれが傍にゐる千代子に對しての禮の言葉と聞こえた。僕は千代子に今日是から又鎌倉へ歸るのかと尋ねた。

「泊つて行くわ」

「何處へ」

「さうね。内幸町へ行つても好いけど、あんまり廣過ぎて淋しいから。――久し振に此所へ泊らうかしら、ねえ叔母さん」

僕には千代子が始めから僕の家に泊る積りで出て來たやうに見えた。自白すれば僕は其所へ坐つて一分と經たないうちに、叔母の前にゐる彼女の言語動作を一種の立場から觀察したり、評價したり、解釋したりしなければならない様になつたのである。僕はそこに氣が附いた時、非常な不愉快を感じた。又さういふ努力には自分の神經が疲れ切つてゐる事も感じた。僕は自分で自分に逆らつて餘儀なく斯う心を働かすのか、或は千代子が僕を無理に強ひて動く様にするのか。何方にしても僕は腹立たしかつた。

「千代ちやんが來ないでも吾一さんで澤山だのに」

「だつて妾責任があるぢやありませんか。叔母さんを招待したのは妾でせう」

三十

「市さんも招待を受けたんだから、蹤いて來て貰へば好かつた」

「だから僕の云ふ事を聞いて、もつと入らつしやれば好いのに」

「いゝえ彼の時にさ。僕の歸つた時にさ」
「左樣すると丸で看護婦見た樣ね。好いわ看護婦でも、附いて來て上げるわ。何故さう云はなかつたの」
「云つても斷られさうだつたから」
「妾こそ斷られさうだつたわ、ねえ叔母さん。偶に招待に應じて來て置きながら、厭に六ずかしい顏ばかりしてゐるんですもの。本當に貴方は少し病氣よ」
「だから千代子に附いて來て貰ひたかつたのだらう」と母が笑ひながら云つた。
僕は母の歸るつい一時間前迄千代子の來る事を豫想し得なかつた。夫は今改めて繰り返す必要もないが、それと共に僕は母が高木に就いて齎す報道を殆ど確實な未來として豫期してゐた。穩やかな母の顏が不安と失望で曇る時の氣の毒さも豫想してゐた。僕は今此豫期と全く反對の結果を眼の前に見た。彼等は二人とも常に變らない親しげな叔母姪であつた。彼等の各自は各自に特有な溫か味と清々しさを、何時もの通り互の上に、又僕の上に心持よく加へた。
其晩は散步に出る時間を儉約して、女二人と共に二階に上がつて涼みながら話をした。僕は母の命ずる儘軒端に七草を描いた岐阜提灯を懸けて、其中に細い蠟燭を點けた。熱いから電燈を消さうと發議した千代子は、遠慮なく疊の上を暗くした。風のない月が高く上つた。柱に凭れてゐた母が鎌倉を思ひ出すと云つた。電車の音のする所で月を看るのは何だか可笑しい氣がすると、此間から海邊に馴染んだ千代子が

詫した。僕は先刻の籐椅子の上に腰を卸ろして團扇を使つてゐた。作が下から一度許り上がつて來た。一度は煙草盆の火を入れ更へて、僕の足の下に置いて行つた。二返目には近所から取り寄せた氷菓子を盆に載せて持つて來た。僕は其度毎に階級制度の嚴重な封建の代に生れた樣に、卑しい召使の位置を生涯の分と心得てゐる此作と、何んな人の前へ出ても貴女として振舞つて通るべき氣位を具へた千代子とを比較しない譯に行かなかつた。千代子は作が出て來ても、作でない外の女が出て來たと同じ樣に、なんにも氣に留めなかつた。作の方では一旦起つて梯子段の傍迄行つて、もう降りようとする間際に屹度振り返つて、千代子の後姿を見た。僕は自分が鎌倉で高木を傍に見て暮らした二日間を思ひ出して、材料がないから何も考へないと明言した作に、千代子といふハイカラな有毒の材料が與へられたのを憐れに眺めた。

「高木は何うしたらう」といふ問が僕の口元迄屢出た。けれども單なる消息の興味以外に、何か爲にする不純なものが自分を前に押し出すので、其都度卑怯だと遠くで罵られる爲か、つい聞くのを屑しとしなくなつた。夫に千代子が歸つて母丈になりさへすれば、彼の話は遠慮なく出來るのだからとも考へた。然し白状すると、僕は千代子の口から直下に高木の事を聞きたかつたのである。さうして彼女が彼を何う思つてゐるか、夫を判切胸に疊み込んで置きたかつたのである。是は嫉妬の作用なのだらうか。もし此話を聞くものが、嫉妬だといふなら、僕には少しも異議がない。今の料簡で考へて見ても、何うも外の名は附け惡いやうである。それなら僕が夫程千代子に戀してゐたのだらうか。問題が斯う推移すると、僕も返

事に窮するより外に仕方がなくなる。僕は實際彼女に對して、そんなに熱烈な愛を脈搏の上に感じてゐなかつたからである。すると僕は人より二倍も三倍も嫉妬深い譯になるが、或はさうかも知れない。然しもつと適當に評したら、恐らく僕本來の我儘が原因なのだらうと思ふ。たゞ僕は一言それに附け加へて置きたい。僕から云はせると、既に鎌倉を去つた後猶高木に對しての嫉妬心が斯う燃えるなら、それは僕の性情に缺陷があつたばかりでなく、千代子自身に重い責任があつたのである。相手が千代子だから、僕の弱點が是程に濃く胸を染めたのだと僕は明言して憚らない。では千代子の何の部分が僕の人格を墮落させるのだらうか。夫は到底分らない。或は彼女の親切ぢやないかとも考へてゐる。

三十一

千代子の樣子は何時もの通り明けつ放しなものであつた。彼女は何んな問題が出ても苦もなく口を利いた。それは必竟腹の中に何も考へてゐない證據だとしか取れなかつた。彼女は鎌倉へ行つてから水泳を自習し始めて、今では脊の立たない所迄行くのが樂しみだと云つた。夫を用心深い百代子が剣呑がつて、詫る樣に悲しい聲を出して止めるのが面白いと云つた。其時母が半ば心配で半ば呆れた樣な顔をして、何ですね女の癖にそんな輕機みな眞似をして。是からは後生だから叔母さんに免じて、あぶない惡巫山戯は止して御呉れよ」と頼んでゐた。千代子はたゞ笑ひながら、大丈夫よと答へた丈であつたが、ふと緣側の椅

子は僕を捕まへて、市さんもさう云ふ御転婆は嫌ひでせうと聞いた。僕は唯、あんまり好きぢやないと云つて、月の光の隈なく落ちる庭を眺めてゐた。もし僕が自分の品格に對して尊敬を拂ふ事を忘れたなら、「然し高木さんには氣に入るんだらう」といふ言葉を其後に屹度附け加へたに違ひない。其所迄引き摺られなかつたのは、僕の體面上まだ仕合せであつた。

千代子は斯くの如く開けつ放しであつた。けれども夜が更けて、母がもう寝ようと云ひ出すまで、彼女は高木の事をとう〳〵一口も話頭に上せなかつた。其處に僕は甚しい故意を認めた。白い紙の上に一點の暗い印氣が落ちた様な氣がした。鎌倉へ行くまで千代子を天下の女性のうちで、最も純粹な一人と信じてゐた僕は、鎌倉で暮らした僅か二日の間に、始めて彼女の技巧を疑ひ出したのである。其疑ひが今漸く僕の胸に根を張らうとした。

「何故高木の話をしないのだらう」

僕は寝ながら斯う考へて苦しんだ。同時に斯んな問題に睡眠の時間を奪はれる愚かさを自分でよく承知してゐた。だから苦しむのが馬鹿々々しくて猶癪が起つた。僕は例の通り二階に一人寝てゐた。母と千代子は下座敷に蒲團を並べて、一つの蚊帳の中に身を横たへた。僕はすや〳〵寝てゐる千代子を自分の直ぐ下に想像して、畢竟のつそつ苦しがる僕は負けてゐるのだと考へない譯に行かなくなつた。僕は寝返りを打つ事さへ厭になつた。自分がまだ眠られないといふ弱味を階下へ響かせるのが、勝利の報知として千代

子の胸に傳はるのを恥辱と思つたからである。
僕が斯うして同じ問題を色々に考へてゐるうちに、同じ問題が僕には色々に見えた。高木の名前を口へ出さないのは、全く彼女の僕に對する好意に過ぎない。僕に氣を悪くさせまいと思ふ親切から彼女はわざとそれ丈を遠慮したのである。斯う解釋すると鎌倉にゐた時の僕は、あれ程單純な彼女をして、僕の前に高木の二字を公にする勇氣を失はしめた程、不合理に機嫌を悪く振舞つたのだらう。もし左樣だとすれば、自分は人の氣を悪くする爲に、人の中へ出る、不愉快な動物である。宅へ引つ込んで交際さへ爲なければ夫で宜い。けれども若し親切を冠らない技巧が彼女の本義なら……。僕は技巧といふ二字を細かに割つて考へた。高木を媒鳥に僕を釣る積りか。釣るのは、最後の目的もない癖に、唯僕の彼女に對する愛情を一時的に刺激して樂しむ積りか。或は僕にある意味で高木の樣になれといふ積りか。さうすれば僕を愛しても好いといふ積りか。或は高木と僕と戰ふ所を眺めて面白かつたといふ積りか。又は高木を僕の眼の前に出して、斯ういふ人があるのだから、早く思ひ切れといふ積りか。――僕は技巧の二字を何處迄も割つて考へた。さうして技巧なら戰爭だと考へた。戰爭なら何うしても勝負に終るべきだと考へた。
僕は寐附かれないで負けてゐる自分を口惜しく思つた。電燈は蚊帳を釣るとき消して仕舞つたので、室の中に隙間もなく蔓延る暗闇が窒息する程重苦しく感ぜられた。僕は眼の見えない所に眼を向けて頭丈働かす苦痛に堪へなくなつた。寐返りさへ愼んで我慢してゐた僕は、急に起つて室を明るくした。序に線

側へ出て雨戸を一枚細目に開けた。月の傾いた空の下には動く風もなかつた。僕はたゞ比較的冷やかな空氣を肌と咽喉に受けた丈であつた。

三十二

翌日は何時も一人で寐てゐる時より一時間半も早く眼が覺めた。すぐ起きて下へ降りると、銀杏返しの上へ白地の手拭を被つて、長火鉢の灰を掃つてゐた作が、おやもう御目覺めでと云ひながら、すぐ顏を洗ふ道具を風呂場へ並べて呉れた。僕は歸りに埃だらけの茶の間を爪先で通り拔けて玄關へ出た。其時序に二人の寐てゐる座敷を蚊帳越しに覗いて見たら、目敏い母も昨日の汽車の疲れが出た所爲か、未だ靜かな眠りを貪つてゐた。千代子は固より夢の底に埋まつてゐる様に正體なく枕の上に頭を落としてゐた。僕は目的もなく表へ出た。朝の散歩の趣きを久しく忘れてゐた僕には、常に變らない町の色が、騷さと雜沓とに染め附けられない安息日の如く穩やかに見えた。電車の線路が研ぎ澄まされた光を眞直に地面の上に伸ばすのも落附いた感じであつた。けれども僕は散歩がしたくつて出たのではなかつた。唯眼が早く覺め過ぎて、中有に延びた命の斷片を、運動で埋める積りで歩くのだから、夫程の興味は空にも地にも乃至町にも見出だす事が出來なかつた。

一時間ばかりして僕は寧ろ疲れた顏を母からも千代子からも怪しまれに戻つて來た。母は何處へ行つた

のと聞いたが、後から、色澤が好くないよ、何うか御仕かいと尋ねた。

「昨夕好く寐られなかつたんでせう」

僕は千代子の此言葉に對して答ふべき術を知らなかつた。實を云ふと、昂然としてなに好く寐られたよと云ひたかつたのである。不幸にして僕は夫程の技巧家でなかつた。と云つて、正直に寐られなかつたと自白するには餘り自尊心が強過ぎた。僕は遂に何も答へなかつた。

二人が同じ食卓で朝飯を濟ますや否や、母が昨日涼しいうちにと賴んで置いた髪結が來た。洗ひ立ての白い胸掛をかけて、敷居越しに手を突いた彼女は、御歸りなさいましと親しい挨拶をした。彼女は此職業に共通な目出度い口振を有つてゐた。それを得意に使つて、内氣な母に避暑を誇りの種に話させる機會を一句毎に作つた。母は滿足らしくも見えたが、さう喋々しくは饒舌り得なかつた。髪結はより效き目のある相手として、すぐ年の若い千代子を選んだ。千代子は固より誰彼の容赦なく一樣に氣易く應對の出來る女だつたので、御孃樣と呼び掛けられる度に相當の受け答へをして話しを彈ました。千代子の泳ぎの噂が出た時、髪結は活潑で宜しう御座います、近頃の御孃樣方はみんな水泳の稽古をなさいますと誰が聞いても拵へたやうな御世辭を云つた。

妙な事を吹聽する樣で可笑しいが、實を云ふと僕は女の髪を上げる所を見てゐるのが好きであつた。母が乏しい髪を工面して、何うか斯うか髷に結ひ上げる樣子は、いくら上手が纏めるにしても、夫程見榮え

のある譯ではないが、それでも退屈を凌ぐには恰好な慰みであつた。僕は髪結の手の動く間に、自然と出來上がつて行く小さな母の丸髷を眺めてゐた。さうして腹の中で、千代子の髪を日本流に櫛を入れたら嘸見事だらうと思つた。千代子は色の美しい、癖のない、長くて多過ぎる髪の所有者だつたからである。此場合何時もの僕なら、千代ちやんも序に結つて御貰ひなと屹度勸める所であつた。然し今の僕にはそんな親しげな要求を彼女に向つて投げ掛ける氣が出なかつた。すると偶然にも千代子の方で、何だか妾も一つ結つて見たくなつたと云ひ出した。母は御結ひよ久し振にと誘つた。髪結は是非御上げ遊ばせな、私始めて御髪を拜見した時から束髪にして入らつしやるのは勿體ないと思つとりましたと左も結ひたさうな口振を見せた。千代子はとう〳〵鏡臺の前に坐つた。

「何に結はうかしら」

髪結は島田を勸めた。母も同じ意見であつた。千代子は長い髪を背中に垂れた儘突然市さんと呼んだ。

「貴方何が好き」

「旦那様も島田が好きだと屹度仰しやいますよ」

僕はぎくりとした。千代子は平氣の樣に見えた。わざと僕の方を振り返つて、「ぢや島田に結つて見せたげませうか」と笑つた。「好いだらう」と答へた僕の聲は如何にも鈍に聞こえた。

三十三

僕は千代子の髪の出來上がらない先に二階へ上がつた。僕の樣な神經質なものが拘つて來ると、無關係の人の眼には殆ど子供らしいと思はれる樣な所作を敢てする。僕は中途で鏡臺の傍を離れて、美しい島田髷をいたゞく女が男から強奪する嘆賞の租稅を免れた積りでゐた。其時の僕は夫程此女の虛榮心に媚びる好意を有たなかつたのである。

僕は自分で自分の事を彼此取り繕つて好く聞こえるやうに話したくない。然し僕如きものでも長火鉢の傍で起るこんな戰術よりはもう少し高尙な問題に頭を使ひ得る積りである。たゞ其所迄引き摺り落とされた時、僕の弱點として何うしても脫線する氣になれないのである。僕は自分でその詰らなさ加減をよく心得てゐた丈に、それを敢てする僕を自分で憎み自分で輕蔑つた。

僕は空威張りを卑劣と同じく嫌ふ人間であるから、低くても小さくても、自分らしい自分を話すのを名譽と信じて成るべく隱さない。けれども、世の中で認めてゐる偉い人とか高い人とかいふものは、悉く長火鉢や臺所の卑しい人生の葛藤を超越してゐるのだらうか。僕はまだ學校を卒業した許りの經驗しか有たない靑二才に過ぎないが、僕の知力と想像に訴へて考へた所では、恐らくそんな偉い人高い人は何時の世にも存在してゐないのではなからうか。僕は松本の叔父を尊敬してゐる。けれども露骨な事を云へば、あ

の叔父の樣なのは偉く見える人、高く見せる人と評すれば夫で足りてゐると思ふ。僕は僕の敬愛する叔父に對しては僞物屑物の名を加へる非禮と偏見とを憚りたい。が、事實上彼は世俗に拘泥しない顏をして、腹の中で拘泥してゐるのである。小事に齷齪しない手を拱いて、頭の奥で齷齪してゐるのである。外へ出さない丈が、普通より品が好いと云つて僕は讃辭を呈したく思つてゐる。さうして其外へ出さないのは財産の御蔭、年齢の御蔭、學問と見識と修養の御蔭である。が、最後に彼と彼の家庭の調子が釣合好く取れてゐるからでもあり、彼と社會の關係が逆な樣で實は順に行くからでもある。——話しがつい横道へ外れた。僕は僕の周圍を[illegible]た所を餘り長く詳說し過ぎたかも知れない。

僕は今云つた通り早く二階へ上がつて仕舞つた。二階は日が近いので、階下よりは餘程凌ぎ惡いのだけれども、平生見つけた所爲で、僕は一日の大部分を此所で暮らす事にしてゐたのである。僕は何時もの通り机の前に坐つたなり煙管を啣いて茫然してゐた。今朝煙草の灰を棄てたマジョリカの灰皿が綺麗に掃除されて僕の膝の前に載せてあつたのに氣が附いて、僕は其中に雅はされた二羽の鶉を眺めながら、其灰を空けた作の手を想像に描いた。すると下から梯子段を踏む音がして誰か上がつて來た。僕は其足音を聞くや否や、直にそれが作でない事を知つた。僕は斯う無聊に屈託してゐる所を千代子に見られるのを屈辱の樣に感じた。同時に側にあつた書物を開けて、先刻から讀んでゐた振をする程器用な機轉を用ひるのを好まなかつた。

「結へたから見て頂戴」
僕は僕の前にすぐ斯う云ひながら坐る彼女を見た。
「可笑しいでせう。久しく結はないから」
「大變美しく出來たよ。是から何時でも島田に結ふと可い」
「二三度壞しちや結ひ、壞しちや結ひしないと不可ないのよ。毛が馴染まなくつて
斯んな事を聞いたり答へたり三四返してゐるうちに、僕は何時の間にか昔と同じ樣に美しい素直な邪氣のない千代子を眼の前に見る氣がし出した。僕の心持が何かの調子で和げられたのか、千代子の僕に對する態度が何處かで角度を改めたのか、それは判然と云ひ惡い。斯うだと説明の出來る捕へ所は兩方になかつたらしく記憶してゐる。もし此氣易い狀態が一二時間も長く續いたなら、或は僕の彼女に對して抱いた變な疑惑を、過去に溯つて當初から眞直に黑い棒で誤解といふ名の下に消し去る事が出來たかも知れない。所が僕はつい不味い事をしたのである。

三十四

夫は外でもない。少時千代子と話してゐるうちに、彼女が單に頭を見せに上がつて來た許りでなく、今日是から鎌倉へ歸るので、其左樣ならを云ひに一寸顏を出したのだと云ふ事を知つた時、僕はつい用意の

事の出來ない、從つて輕蔑しながらも何處かに恐ろしい所を有つた男として、或意味の尊敬を拂つてゐたのである。是は公にこそ明言しないが、向うでも腹の底で正式に認めるし、僕も冥々のうちに彼女から僕の權利として要求してゐた事實である。

所が偶然高木の名前を口にした時、僕は忽ち此尊敬を永久千代子に奪ひ返された樣な心持がした。と云ふのは、「高木さんも」といふ僕の問を聞いた千代子の表情が急に變化したのである。僕はそれを強ちに勝利の表情とは認めたくない。けれども彼女の眼のうちに、今迄僕が未だ嘗て彼女に見出だした試しのない、一種の侮蔑が輝いたのは疑ひもない事實であつた。僕は豫期しない瞬間に、平手で横面を力任せに打たれた人の如くにぴたりと止まつた。

「あなた夫程高木さんの事が氣になるの」

彼女は斯う云つて、僕が兩手で耳を抑へたい位な高笑ひをした。僕は其時鋭い侮辱を感じた。けれども咄嗟の場合何といふ返事も出し得なかつた。

「貴方は卑怯だ」と彼女が次に云つた。此突然な形容詞にも僕は全く驚かされた。僕は、御前こそ卑怯だ、呼ばないでもの所へわざ〳〵人を呼び附けて、と云つて遣りたかつた。けれども年弱な女に對して、向うと同じ程度の激語を使ふのはまだ早過ぎると思つて我慢した。千代子もそれなり默つた。僕は漸くにして「何故」といふ僅か二字の問を掛けた。すると千代子の濃い眉が動いた。彼女は、僕自身で僕の卑怯

な意味を充分自覺してゐながら、たま／＼他の指摘を受けると、自分の弱點が相手に曝れる爲に、取り繕つて空つ違惚けるものと此間を解釋したらしい。

「何故つて、貴方自分でよく解つてるぢやありませんか」

「解らないから聞かして御吳れ」と僕が云つた。僕は階下に母を控へてゐるし、感情に訴へる若い女の氣質もよく呑み込んだ積りでゐたから、出來る丈相手の氣を拔いて話しを落ち附かせる爲に、其時の僕としては、寧ろ無理な程の、優しかつ緩い調子を取つたのであるが、夫が却て千代子の氣に入らなかつたと見える。

「それが解らなければ貴方が馬鹿よ」

僕は恐らく平生より蒼い顏をしたらうと思ふ。自分では曖昧な千代子の上に凝と据ゑた眸を記憶してゐる。其時何物も恐れない千代子の眼が、僕の視線と無言のうちに行き合つて、兩方共しばらく其所に止まつてゐた所も記憶してゐる。

三十五

「千代ちやんの樣な活潑な人から見たら、僕見たいに引込み思案なものは無論卑怯なんだらう。僕は思つた事をすぐ口へ出したり、又は其儘所作にあらはしたりする勇氣のない、極めて因循な男なんだから。

其點で卑怯だと云ふなら云はれても仕方がないが……」

「そんな事を誰が卑怯だと云ふもんですか」

「然し輕蔑はしてゐるだらう。僕はちやんと知つてる」

「貴方こそ妾を輕蔑してゐるぢやありませんか。妾の方が餘つ程よく知つてゐるわ」

僕は殊更に彼女の此言葉を肯定する必要を認めなかつたから、わざと返事を控へた。

「貴方は妾を學問のない、理窟の解らない、取るに足らない女だと思つて、腹の中で馬鹿にし切つてゐるんです」

「それは御前が僕を愚圖と見縊つてゐるのと同じ事だよ。僕は御前から卑怯と云はれても構はない積りだが、苟も德義上の意味で卑怯と云ふなら、そりや御前の方が間違つてゐる。僕は少なくとも千代ちやんに關係ある事柄に就いて、道德上卑怯な振舞をした覺えはない筈だ。愚圖とか煮え切らないとか云ふべき所に、卑怯と云ふ言葉を使はれては、何だか道義的勇氣を缺いた――といふより、德義を解しない下劣な人物の樣に聞こえて甚だ心持が惡いから訂正して貰ひたい。夫とも今いつた意味で、僕が何か千代ちやんに對して濟まない事でもしたのなら遠慮なく話して貰はう」

「ぢや卑怯の意味を話して上げます」と云つて千代子は泣き出した。僕は是迄千代子を自分より強い女と認めてゐた。けれども彼女の強さは單に優しい一途から出る女氣の凝り塊りとのみ解釋してゐた。所が

今僕の前に現はれた彼女は、唯勝ち氣に充ちた丈の、世間に有りふれた、俗つぽい婦人としか見えなかつた。僕は心を動かす所なく、彼女の涙の間から如何なる說明が出るだらうと待ち設けた。彼女の唇を洩れるものは、自己の體面を衞る强辯より外に何ら有る筈がないと、僕は固く信じてゐたからである。彼女は濡れた睫毛を二三度繁叩いた。

「貴方は妾を無教育の馬鹿だと思つて始終冷笑してゐるんです。貴方は妾を……愛してゐないんです。つまり貴方は妾と結婚なさる氣が……」

「そりや千代ちやんの方だつて……」

「まあ御聞きなさい。そんな事は御互だと云ふんでせう。そんなら夫で宜うござんす。何も貰つて下さいとは云やしません。唯何故愛してもゐず、結婚にもしようと思つてゐない女に對して……」

彼女は此所へ來て急に口籠つた。不敏な僕は其後へ何が出て來るのか、まだ覺れなかつた。「御前に對して」と僕は彼女を促す樣に問を掛けた。彼女は突然情を衝き破つた風に、「何故嫉妬なさるんです」と云ひ切つて、前よりは劇しく泣き出した。僕はさつと血が顏に上る時の熱りを兩方の頰に感じた。彼女は殆ど夫を注意しないかの如くに見えた。

「貴方は卑怯です、德義的に卑怯です。妾が叔母さんと貴方を鎌倉へ招待した料簡さへ貴方は旣に疑つてゐらつしやる。それが旣に卑怯です。が、それは問題ぢやありません。貴方は他の招待に應じて置きな

がら、何故平生の樣に愉快にして下さることが出來ないんです。妾は貴方を招待した爲に恥を搔いたも同じ事です。貴方は妾の宅の客に侮辱を與へた結果、妾にも侮辱を與へてゐます」

「侮辱を與へた覺えはない」

「あります。言葉や仕打ちは何うでも構はないんです。貴方の態度が侮辱を與へてゐるんです。態度が與へてゐないでも、貴方の心が與へてゐるんです」

「そんな立ち入つた批評を受ける義務は僕にないよ」

「男は卑怯だから、さう云ふ下らない挨拶が出來るんです。高木さんは紳士だから貴方を容れる雅量が幾何でもあるのに、貴方は高木さんを容れる事が決して出來ない。卑怯だからです」

松本の話

一

夫から市藏と千代子との間が何うなつたか僕は知らない。別に何うもならないんだらう。少なくとも傍で見てゐると、二人の關係は昔から今日に至る迄全く變らない樣だ。二人に聞けば色々な事を云ふだらうが、夫は其時限りの氣分に制せられて、眞しやかに前後に通じない嘘を、永久の價値ある如く話すのだと思へば間違ない。僕はさう信じてゐる。

あの事件なら其當時僕も聞かされた。しかも兩方から聞かされた。あれは誤解でも何でもない。兩方でさう信じてゐるので、さうして其信じ方に兩方とも無理がないのだから、極めて尤もな衝突と云はなければならない。從つて夫婦にならうが、友達として暮らさうが、あの衝突丈は到底免れる事の出來ない、まあ二人の持つて生れた、因果と見るより外に仕方がなからう。所が不幸にも二人は或意味で密接に引き附けられてゐる。しかも其引き附けられ方が又傍のものに何うする權威もない宿命の力で支配されてゐるんだから恐ろしい。取り澄ました警句を用ひると、彼等は離れる爲に合ひ、合ふ爲に離れると云つた風の氣の毒な一對を形つくつてゐる。斯う云つて君に解るか何うか知らないが、彼等が夫婦になると、不幸を醸

す目的で夫婦になつたと同樣の結果に陷るし、又夫婦にならないと不幸を續ける精神で夫婦にならないのと擇ぶ所のない不滿足を感ずるのである。だから二人の運命は唯成行に任せて、自然の手で直接に發展させて貰ふのが一番上策だと思ふ。君だの僕だのが何の蚊のと要らぬ世話を燒くのは却て當人達のために好くあるまい。僕は知つての通り、市藏から見ても千代子から見ても他人ではない。ことに須永の姉からは、二人の身分に就いて今迄頼まれたり相談を受けたりした例は何度もある。けれども天の手際で旨く行かないものを、何うして僕の力で纏める事が出來よう。つまり姉は無理な夢を自分一人で見てゐるのである。

須永の姉も田口の姉も、僕と市藏の性質が餘りよく似てゐるので驚いてゐる。僕自身も何うして斯んな變り者が親類に二人揃つて出來たのだらうかと考へては不思議に思ふ。須永の姉の料簡では、市藏の今日は全く僕の感化を受けた結果に過ぎないと見てゐるらしい。僕が姉の氣に入らない點を幾何でも有つてゐる内で、最も彼女を不愉快にするものは、不明なる僕のわが甥に及ぼしたと認められてゐる此惡い影響である。僕は僕の市藏に對する今日迄の態度に顧て、此非難を尤もだと肯ずる。それが爲に市藏を田口家から疎隔したといふ不服も序に承認して差支へない。たゞ彼等姉二人が僕と市藏とを、同じ型から出來上がつた偏窟人の樣に見傚して、同じ眉を僕等の上に等しく顰めるのは疑ひもなく誤つてゐる。

市藏といふ男は世の中と接觸する度に内へとぐろを捲き込む性質である。だから一つ刺激を受けると、其刺激が夫から夫へと廻轉して、段々深く細かく心の奥に喰ひ込んで行く。さうして何處迄も喰ひ込んで

行つても際限を知らない同じ作用が連續して、彼を苦しめる。仕舞には何うかして此内面の活動から逃れたいと祈る位に氣を惱ますのだけれども、自分の力では如何ともすべからざる呪ひの如くに引つ張られて行く。さうして何時か此努力の爲に斃れなければならない。たつた一人で斃れなければならないといふ怖れを抱くやうになる。さうして氣狂の樣に疲れる。是が市藏の命根に横たはる一大不幸である。この不幸を轉じて幸ひとするには、内へ内へと向く彼の命の方向を逆にして、外へとぐろを捲き出させるより外に仕方がない。外にある物を頭へ運び込むために眼を使ふ代りに、頭で外にある物を眺める心持で眼を使ふやうにしなければならない。天下にたつた一つで好いから、自分の心を奪ひ取るやうな偉いものか、美しいものか、優しいものか、を見出さなければならない。一口に云へば、もつと浮氣にならなければならない。市藏は始め浮氣を輕蔑して懸つた。今は其浮氣を渇望してゐる。彼は自己の幸福のために、何うかして翩々たる輕薄才子になりたいと心から神に念じてゐるのである。輕薄に浮かれ得るより外に彼を救ふ道は天下に一つもない事を、僕は、僕が彼に忠告する前に、既に承知してゐた。けれども實行は未だに出來ないで藻掻いてゐる。

二

僕は斯ういふ市藏を仕立て上げた責任者として親類の者から暗に恨まれてゐるが、僕自身も其點に就い

ては疚しい所が大いにあるのだから仕方がない。僕はつまり性格に應じて人を導く術を心得なかつたのである。唯自分の好尚を移せる丈市藏の上に移せば夫で充分だといふ無分別から、勝手次第に若いものの柔らかい精神を動かして來たのが、凡ての禍の本になつたらしい。僕が此過失に氣が附いたのは今から二三年前である。然し氣が附いた時はもう遲かつた。僕はたゞ爲す能力のない手を拱いて、心の中で嘆息した丈であつた。

事實を一言でいふと、僕の今遣つてるやうな生活は、僕に最も適當なので、市藏には決して向かないのである。僕は本來から氣の移り易く出來上がつた、極めて安價な批評をすれば、生れ附いての浮氣ものに過ぎない。僕の心は絕えず外に向つて流れてゐる。だから外部の刺激次第で何うにでもなる。と云つた丈ではよく腑に落ちないかも知れないが、市藏は在來の社會を敎育する爲に生れた男で、僕は通俗な世間から敎育されに出た人間なのである。僕が此位好い年をしながら、まだ大變若い所があるのに引き更へて、市藏は高等學校時代から旣に老成してゐた。彼は社會を考へる種に使ふけれども、僕は社會の考へに此方から乘り移つて行く丈である。其所に彼の長所があり、かねて彼の不幸が潛んでゐる。其所に僕の短所があり又僕の幸福が宿つてゐる。僕は茶の湯をやれば靜かな心持になり、骨董を捻くれば寂びた心持になる。其外寄席、芝居、相撲、凡て其時々の心持になれる。其結果あまり眼前の事物に心を奪はれ過ぎるので、自然に己なき空疎な感に打たれざるを得ない。だから斯んな超然生活を營んで强ひて自我を押し立てよう

とするのである。所が市藏は自我より外に當初から何物も有つてゐない男である。彼の缺點を補ふ——といふより、彼の不幸を切り詰める生活の徑路は、唯内に潜り込まないで外に應ずるより外に仕方がないのである。然るに彼を幸福にし得る其唯一の策を、僕は間接に彼から奪つて仕舞つた。親類が恨むのは尤もである。僕は本人から恨まれないのをまだしもの仕合せと思つてゐる位である。

今から僅か一年位前の話だと思ふ。何しろ市藏がまだ學校を出ない時の話だが、ある日偶然遣つて來て、一寸挨拶をしたぎり直ぐ何處かへ見えなくなつた事がある。其時僕はある人に頼まれて、書齋で日本の活花の歴史を調べてゐた。僕は調べものの方に氣を取られて、彼の顔を出した時、やあと唯振り返つた丈であつたが、夫でも彼の血色が甚だ勝れないのを苦にして仕事の區切りが付くや否や彼を探しに書齋を出た。彼は妻とも仲が善かつたので、或は奥の間で話しでもしてゐる事かと思つたら、其所にも姿は見えなかつた。妻に聞くと子供の部屋だらうといふので、縁側傳ひに戸を開けると、彼は咲子の机の前に坐つて、女の雜誌の口繪に出てゐる、ある美人の寫眞を眺めてゐた。其時彼は僕を顧て、今斯ういふ美人を發見して、先刻から一分時も繼續してゐる所だと告げた。彼は其寫眞が眼の前にある間、頭の中の苦痛を忘れて自ら愉快になるのださうである。僕は早速何處の何者の令孃かと尋ねた。すると不思議にも彼は寫眞の下に書いてある女の名前をまだ讀まずにゐた。僕は彼を迂闊だと云つた。それ程氣に入つた女なら何故名前から先に頭に入れないかと尋ねた。彼の答によれば、細君として申し受ける事も不可能でないと僕は思つたから

である。然るに彼は又何の必要があつて姓名や住所を記憶するかと云つた風の眼使ひをして僕の注意を怪しんだ。

つまり僕は飽く迄も寫眞を實物の代表として眺め、彼は寫眞をたゞの寫眞として眺めてゐたのである。若し寫眞の背後に、本當の位置や身分や教育や性情が附け加はつて、紙の上の肖像を活かしに掛かつたなら、彼は却て氣に入つた其顏迄併せて打ち棄てて仕舞つたかも知れない。是が市藏の僕と根本的に違ふ所である。

三

市藏の卒業する二三ヶ月前、たしか去年の四月頃だつたらうと思ふ。僕は彼の母から彼の結婚に關して、今迄にない長時間の相談を受けた。姉の意思は固より田口の姉娘を彼の嫁として迎へたいといふ單純にしてかつ頑固なものであつた。僕は女に理窟を聞かせるのを、男の恥の樣に思ふ癖があるので、六づかしい事は成るべく控へたが、何しろ斯ういふ問題に就いて、出來る丈本人の自由を許さないのは親の義務に背くのも同然だといふ意味を、昔風の彼女の腑に落ちるやうに砕いて説明した。姉は御承知の通り極めて穩やかな女ではあるが、いざとなると同じ意見を何度でも繰り返して憚らない婦人に共通な特性を一人前以上に具へてゐた。僕は彼女の執拗を惡むよりは、其根氣の好過ぎる所に却て妙な憐みを催した。それで、

今親類中に、市藏の尊敬してゐるものは僕より外にないのだから、兎も角も一遍呼び寄せて篤と話して見て呉れぬかといふ彼女の請を快く引受けた。

僕が此目的を果たすために市藏と此座敷で會見を遂げたのは、夫から四日目の日曜の朝だと記憶する。彼は卒業試驗間近の多忙を目の前に控へながら座に着いて、何試驗なんか何うなつたつて構やしませんがと冒頭した。彼の說明によると、かねて其話は僕の母から何度も聞かされて、何度も返答を繰り延ばした陳腐なものであつた。尤も彼のそれに對する態度は、問題の陳腐と反比例に頗る切なさうに見えた。彼に最後に母から口說かれた時、卒業の上、何うとも解決するから、夫迄待つて呉れろと母に賴んで置いたのださうである。夫をまだ試驗も濟まない先から僕に呼び附けられたので、多少迷惑らしく見えた許りか、年寄は氣が短かくつて困ると言葉に出して迄訴へた。僕も尤もだと思つた。

僕の觀測では、彼が學校を出る迄返答を延ばしたのは、そのうちに千代子の緣談が、自分よりは適當な候補者の上に纏ひ附くに違ひないと鑑定して、直接に母を失望させる代りに、周圍の事情が母の意思を翻へさせるため自然と彼女に壓迫を加へて來るのを待つ一種の遷延手段に過ぎないと思はれた。僕は市藏にさうぢや無いかと聞いた。市藏はさうだと答へた。僕は彼に何うしても母を滿足させる氣にはなれないかと尋ねた。彼は何事によらず母を滿足させたいのは山々であると答へた。けれども千代子を貰はうとは決して云はなかつた。意地づくで貰はないのかと聞いたら、或はさうかも知れないと云ひ切つた。もし田口が

遣つても好いと云ひ、千代子が來ても好いと云つたら何うだと念を押したら、市藏は返事をしずに默つて僕の顔を眺めてゐた。僕は彼の此顔を見ると、決して話しを先へ進める氣になれないのである。畏怖といふと仰山すぎるし、同情といふと丸で憐れつぽく聞こえるし、此顔から受ける僕の心持は、何と云つて可いか殆ど分らないが、永久に相手を諦めて仕舞はなければならない絶望に、ある凄味と優し味を附け加へた特殊の表情であつた。

市藏はしばらくして自分は何故斯う人に嫌はれるんだらうと突然意外な述懐をした。僕は其時ならないのと平生の市藏に似合はしからないのとで驚かされた。何故そんな愚痴を零すのかと窘める樣な調子で反問を加へた。

「愚痴ぢやありません。事實だから云ふのです」

「ぢや誰が御前を嫌つてゐるかい」

「現にさういふ叔父さんからして僕を嫌つてゐるぢやありませんか」

僕は再び驚かされた。あまり不思議だから二三度押し問答の末推測して見ると、僕が彼に特有な一種の表情に支配されて話しの進行を停止した時の態度を、全然彼に對する嫌惡の念から出たと受けてゐるらしかつた。僕は極力彼の誤解を打破しに掛かつた。

「おれが何で御前を惡む必要があるかね。子供の時からの關係でも知れてゐるぢやないか。馬鹿を云ひ

然しまあ一般に云へば、兄弟とか叔父甥とかの名で繋がれてゐる以上は、繋がつてゐる丈の親しみは何處かにあらうぢやないか。御前は相應の教育もあり、相應の頭もある癖に、何だか妙に一種の僻みがあるよ。夫が御前の弱點だ。是非直さなくつちや不可ない。傍から見てゐても不愉快だ」

「だから叔父さん迄僕を嫌つてゐると云ふのですよ」

僕は返事に窮した。自分で氣の附かない自分の矛盾を今市藏から指摘された樣な心持もした。

「僻みさへきらりと棄てて仕舞へば何でもないぢやないか」と僕は左も事もなげに云つて退けた。

「僕に僻みがあるでせうか」と市藏は落ち附いて聞いた。

「あるよ」と僕は考へずに答へた。

「何ういふ所が僻んでゐるでせう。判然聞かして下さい」

「何ういふ所がつて、――あるよ。あるから有ると云ふんだよ」

「ぢや左ういふ弱點があるとして、其弱點は何處から出たんでせう」

「そりや自分の事だから、少し自分で考へて見たら可からう」

「貴方は不親切だ」と市藏が思ひ切つた沈痛な調子で云つた。僕はまづ其調子に度を失つた。次に彼の眼の色を見て萎縮した。其眼は如何にも恨めしさうに僕の顏を見詰めてゐた。僕は彼の前に一言の挨拶さへする勇氣を振ひ起し得なかつた。

「僕は貴方に云はれない先から考へてゐたのです。仰しやる迄もなく自分の事だから考へてゐたのです。何も教へて呉れ手がないから獨りで考へてゐたのです。僕は毎日毎夜考へました。餘り考へ過ぎて頭も身體も續かなくなる迄考へたのです。夫でも分らないから貴方に聞いたのです。貴方は自分から僕の叔父だと明言して入らつしやる。それで叔父だから他人より親切だと云はれる。然し今の御言葉は貴方の口から出たにも拘らず、他人よりも冷刻なものとしか僕には聞こえませんでした」

僕は斯く云つて流れる彼の涙を見た。幼少の時から馴染んで今日に及んだ彼と僕との間に、こんな光景は未だ嘗て一回も起らなかつた事を僕は君に明言して置きたい。從つて此昂奮した青年を何う取り扱つて可いかの心得が、僕に丸で無かつた事も序に斷つて置きたい。僕は唯茫然として手を拱いてゐた。市藏は又僕の態度などを眼中に置いて、自分の言葉を調節する餘裕を有たなかつた。

「僕は僻んでゐるでせうか。慥かに僻んでゐるでせう。貴方が仰しやらないでも、よく知つてゐる積りです。僕は僻んでゐます。僕は貴方からそんな注意を受けないでも、よく知つてゐます。僕はたゞ何うして斯うなつたか其譯が知りたいのです。いゝえ母でも、田口の叔母でも、貴方でもみんな好く其譯を知つてゐるのです。唯僕丈が知らないのです。唯僕丈に知らせないのです。僕は世の中の人間の中で貴方を一番信用してゐるから聞いたのです。貴方はそれを殘酷に拒絶した。僕は是から生涯の敵として貴方を呪ひます」

市藏は立ち上がつた。僕は其咄嗟の際に決心をした。さうして彼を呼び留めた。

五

僕はかつて或學者の講演を聞いた事がある。其學者は現代の日本の開化を解剖して、かゝる開化の影響を受ける吾等は、上滑りにならなければ必ず神經衰弱に陷るに極まつてるといふ理由を、臆面なく聽衆の前に曝露した。さうして物の眞相は知らぬ内こそ知りたいものだが、いざ知つたとなると、却て知らぬが佛で濟ましてゐた昔が羨ましくつて、今の自分を後悔する場合も少なくはない。私の結論抔も或はそれに似たものかも知れませんと苦笑して壇を退いた。僕は其時市藏の事を思ひ出して、斯ういふ苦い眞理を承はらなければならない我々日本人も隨分氣の毒なものだが、彼の樣にたつた一人の秘密を、攫まうとしては恐れ、恐れては又攫まうとする青年は一層見慘に違ひあるまいと考へながら、腹の中で暗に同情の涙を彼のために灑いだ。

是は單に僕の一族内の事で、君とは全く利害の交渉を有たない話だから、君が市藏のために折角心配して呉れた親切に對する前からの行掛りさへなければ、打ち明けない筈だつたが、實を云ふと、市藏の太陽は彼の生れた日から既に曇つてゐるのである。

僕は誰にでも明言して憚らない通り、一切の秘密はそれを開放した時始めて自然に復る落着を見る事が

出來るといふ性質を抱いてゐるので、憐憫とか[illegible]とかいふ言葉には一般の人ほど重きを置いてゐない。僕だつて今日迄に自分から進んで、市藏の運命を生れた當時に溯つて、逆に照らしてやらなかつたのは僕としては寧ろ不思議な手落ちと云つても可い位である。今考へて見ると、僕が市藏に咒はれる因縁等、何故此事件を祕密にしてゐたものか、其意味が宿と分らない。僕は此祕密に風を入れた所で、彼等母子の間柄が險惡くならうとは夢にも想像し得なかつたからである。

　市藏、と[illegible]は彼の生れた日から既に祟つてゐたといふ僕の言葉の裏に、何んな事實が含まれてゐるかは、彼と交はりの深い君の耳で聞いたら、既に具體的な響となつて解つてゐるかも知れない。一口でいふと、彼等は本當の母子ではないのである。猶誤解のないやうに一言附け加へると、本當の母子よりも遙かに仲の好い繼母と繼子なのである。彼等は血を分けて始めて成立する通俗な親子關係を輕蔑しても差支へない位、情愛の絲で離れられないやうに、自然から確り括り附けられてゐる。何んな魔の振る斧の刃でも此絆を絶ち切る譯に行かないのだから、何んな祕密を打ち明けても怖がる必要は更にないのである。夫だのに姉は非常に恐れてゐた。市藏も非常に恐れてゐた。姉は祕密を手に握つた僕、市藏に祕密を手に握らせられるだらうと待ち受けた僕、二人して非常に恐れてゐた。僕はとう〳〵彼の恐れるものの正體を取り出して、彼の前に他意なく並べて遣つたのである。

　僕は其時の問答を一々繰り返して今君に告げる勇氣に乏しい。僕には固より夫程の大事件とも始めから

見せず、又成る可く平氣を裝ふ必要から、詰り何でもない事の樣に話したのだが、市藏は夫を命懸けの報知として、必死の緊張の下に受けたからである。唯前の續きとして、事實丈を一口に約めて云ふと、彼は姉の子でなくつて小間使の腹から生れたのである。僕自身の家に起つた事でない上に、二十五年以上も經つた昔の話だから、僕も詳しい顚末は知らう筈がないが、何しろ其小間使が須永の種を宿した時、姉は相當の金を遣つて彼女に暇を取らしたのださうである。夫から宿へ下がつた姙婦が男の子を生んだといふ報知を待つて、又子供丈引き取つて表向き自分の子として養育したのださうである。是は姉が須永に對する義理からでもあらうが、一つは自分に子の出來ないのを苦にしてゐた矢先だから、本氣に吾子として愛しむ考へも無論手傳つたに違ひない。實際彼等は君の見る如く、又吾々の見る如く、最も親しい親子として今日迄發展して來たのだから、御互に事情を明かし合つた所で毫も差支への起る譯がない。僕に云はせると、世間に有り勝ちな反りの合はない本當の親子よりも何の位肩身が廣いか分りやしない。二人だつて、さうと知つた上で、今迄の睦まじさを回顧した時の方が、何んなに愉快が多いだらう。少なくとも僕ならさうだ。それで僕は市藏のために特に此美しい點を力の有らん限り彩どる事を怠らなかつた。

六

「おれは左う思ふんだ。だから少しも隱す必要を認めてゐない。御前だつて健全な精神を持つてゐるな

ら、おれと同じ樣に思ふべき筈ぢやないか。もし左う思ふ事が出來ないといふなら、夫が即ち御前の僻みだ。解つたかな」

「解りました。善く解りました」と市藏が答へた。僕は「解つたら夫で好い、もう其問題に就いて彼是といふのは止しにしようよ」と云つた。

「もう止します。もう決して此事に就いて、貴方を煩はす日は來ないでせう。成程貴方の仰しやる通り僕は僻んだ解釋ばかりしてゐたのです。僕は貴方の御話を聞く迄は非常に怖かつたです。胸の肉が縮まる程怖かつたです。けれども御話を聞いて凡てが明白になつたら、却て安心して氣が樂になりました。もう怖い事も不安な事もありません。其代り何だか急に心細くなりました。淋しいです。世の中にたつた一人立つてゐる樣な氣がします」

「だつて御母さんは元の通りの御母さんなんだよ。おれだつて今迄のおれだよ。誰も御前に對して變るものはありやしないんだよ。神經を起しちや不可ない」

「神經は起さなくつても淋しいんだから仕方がありません。僕は是から宅へ歸つて母の顏を見ると屹度泣くに極まつてゐます。今から其時の涙を豫想しても淋しくつて堪りません」

「御母さんには默つてゐる方が可からう」

「無論話しやしません。話したら母が何んな苦しい顏をするか分りません」

二人は默然として相對した。僕は手持無沙汰に煙草盆の灰吹を叩いた。市藏は俯向いて袴の膝を見詰めてゐた。やがて彼は淋しい顔を上げた。

「もう一つ伺つて置きたい事がありますが、聞いて下さいますか」

「おれの知つてる事なら何でも話して上げる」

「僕を生んだ母は今何處に居るんです」

彼の實の母は、彼を生むと間もなく死んで仕舞つたのである。それは産後の肥立ちが悪かつた所爲だとも云ひ、又は別の病だとも聞いてゐるが、是も詳しい話を爲て遣る程の材料に缺乏した僕の記憶では、到底饑ゑた彼の眼を靜めるに足りなかつた。彼の生母の最後の運命に關する僕の話しは、僅か二三分で盡きて仕舞つた。彼は遺憾な顔をして彼女の名前を聞いた。幸ひにして僕はお弓といふ古風な名を忘れずにゐた。彼は次に死んだ時の彼女の年齡を問うた。僕は其點に關して、何といふ確とした知識も有つてゐなかつた。彼は最後に、彼の宅に奉公してゐた時分の彼女に會つた事があるかと尋ねた。僕はあると答へた。彼はどんな女だと聞き返した。氣の毒にも僕の記憶は頗る朦朧としてゐた。事實僕は其當時十五六の少年に過ぎなかつたのである。

「何でも島田に結つてた事がある」

此位より外に要領を得た返事は一つも出来ないので、僕も甚だ残念に思つた。市藏は漸く諦めたといふ

眼附をして、一番仕舞に、「ぢや切めて寺丈教へて呉れませんか。母が何處へ埋まつてゐるんだか、夫丈でも知つて置きたいと思ひますから」と云つた。けれどもお弓の菩提所を僕が知らう筈がなかつた。僕は呻吟しながら、已むを得なければ姉に聞くより外に仕方があるまいと答へた。

「御母さんより外に知つてるものは無いでせうか」

「まあ有るまいね」

「ぢや分らないでも宜ござんす」

僕は市藏に對して氣の毒なやうな又濟まないやうな心持がした。彼はしばらく庭の方を向いて、麗らかな日影の中に咲く大きな椿を眺めてゐたが、やがて視線を故に戻した。

「御母さんが是非千代ちやんを貰へといふのも、矢つ張り血統上の考へから、身縁のものを僕の嫁にしたいといふ意味なんでせうね」

「全く其所だ。外に何もないんだ」

市藏は夫では貰はうとも云はなかつた。僕も夫なら貰ふかとも聞かなかつた。

七

此會見は僕にとつて珍しい經驗の一つであつた。双方で腹藏なく凡てを打ち明け合ふ事が出來たといふ

點に於て、いまだに僕の貧しい過去を飾つてゐる。相手の市藏から見ても、或は生れて始めての慰藉ではなかつたかと思ふ。兎に角彼が歸つたあとの僕の頭には、善い功徳を施したといふ愉快な感じが殘つたのである。

「萬事おれが引き受けて遣るから心配しないがいゝ」

僕は彼を玄關に送り出しながら、最後に斯ういふ言葉を彼の背に暖かく掛けて遣つた。其代り姉に會見の結果を報告する時は甚だ不味かつた。已むを得ないから、卒業して頭に暇さへ出來れば、はつきり何うにか片を附けると云つてるから、夫迄待つが好からう、今彼是突つゝくのは試驗の邪魔になる丈だからと、姉が聞いても無理のない所で、一先宥めて置いた。

僕は同時に事情を田口に話して、成るべく市藏の卒業前に千代子の縁談が運ぶやうに工夫した。委細を聞いた田口の口振は平生の通り如才なく且無雜作であつた。彼は僕の注意がなくつても、其邊は心得てゐる積りだと答へた。

「けれども必竟は本人の爲に嫁入けるんで、（さう申しちや角が立つが、）姉さんや市藏の便宜のために、千代子の結婚を無理に繰り上げたり、繰り延べたりする譯にも行かないものだから」

「御尤もだ」と僕は承認せざるを得なかつた。僕は元來田口家と親類並の交際をしてゐるにはゐるが、其實彼等の娘の縁談に、進んで口を出したこともなければ、又向うから相談を受けた例も有たないのであ

ら、是で今日迄千代子に何んな候補者があつたのか、間接にさへ常に其噂を耳にしなかつた。たゞ前の年鎌倉の避暑地とかで市藏が會つて氣を悪くしたといふ高木丈は、市藏からも千代子からも名前を教へられて覺えてゐた。僕は突然ながら田口に其男は何うなつたかと尋ねた。田口は愛嬌らしく笑つて、高木は始めから候補者として打つて出たのではないと告げた。けれども相當の身分と教育があつて獨身の男なら、誰でも候補者になり得る權利は有つてゐるのだから、候補者でないとは決して斷言出來ないとも告げた。其曖昧な男の事を僕は猶委しく聞いて見て、彼が今上海にゐる事を確めた。上海にゐるけれども何時歸るか分らないといふ事も確めた。彼と千代子との間柄は其後何等の發展も見ないが、信書の往復は未だに絶えない、さうして其信書は一度叔母が眼を通した上で本人の手に落つるといふ條件附きの往復であるといふ事も慥めた。僕は一も二もなく、千代子には其男が好いぢやないかと云つた。田口にはまだ何處かに慾があるのか、又は別に考へを有つてゐるのか、さうする積りだとは明言しなかつた。高木の如何なる人物かを丸で解しない僕が、それ以上勸める權利もないから、僕はつひ其儘にして引き取つた。

僕と市藏とは其後久しく會はなかつた。久しくと云つた所で僅か一ヶ月半許りの時日に過ぎないのだが、僕には卒業試驗を眼の前に控へながら、家庭問題に屈託しなければならない彼の事が非常に氣に掛かつた。僕はそつと妹を訪ねてそれとなく彼の近況を探つて見た。妹は平氣で、何でも大分忙しさうだよ、卒業するんだから其筈さねと云つて澄ましてゐた。僕は夫でも不安心だつたから、或日一時間の夕を僕と會はす

る爲に割かせて、彼の家の近所の洋食店で共に晩餐を食ひながら、密かに彼の樣子を窺つた。彼は平生の通り落ち附いてゐた。なに試驗なんか何うにか斯うにか遣つ附けまさあと受け合つた所に、滿更の虛勢も見えなかつた。大丈夫かいと念を押した時、彼は急に情なさうな顏をして、人間の頭は思つたより堅固に出來てゐるもんですね、實は僕自身も怖くつて堪らないんですが、不思議にまだ壞れません、此樣子ならまだ當分は使へるでせうと云つた。冗談らしくもあり、又眞面目らしくもある此言葉が、妙に憐れ深い感じを僕に與へた。

八

若葉の時節が過ぎて、湯上りの單衣の胸に、團扇の風を入れたく思ふ或日、市藏が又ふらりと遣つて來た。彼の顏を見るや否や僕が第一に掛けた言葉は、試驗は何うだつたいといふ一語であつた。彼は昨日漸く濟んだと答へた。さうして明日から一寸旅行して來る積りだから暇乞に來たと告げた。僕は成績もまだ分らないのに、遠く走る彼の心理狀態を疑つて又多少の不安を感じた。彼は京都附近から須磨明石を經て、ことに因ると、廣島邊迄行きたいといふ希望を述べた。僕は其旅行の比較的大袈裟なのに驚いた。及第とさへ極まつてゐれば夫でも好からうがと間接に不贊成の意を仄めかして見ると、彼は試驗の結果などには存外冷淡な挨拶をした。そんな事に氣を遣ふ叔父さんこそ平生にも似合はしからんぢやありませんかと云

つて、滿足に相手にならなかつた。話してゐるうちに、僕は彼の思ひ立ちが及落の成績に關係のない別方面の動機から萌してゐるといふ事を發見した。

「實はあの事件以來妙に頭を使ふので、近頃では落ち附いて書齋に坐つてゐる事が困難になりましてね。何うしても旅行が必要なんですから、まあ試驗を中途で已めなかつたのが感心だ位に賞めて許して下さい」

「そりや御前の金で御前の行きたい所へ行くのだから少しも差支へはないさ。考へて見れば少しは飛び歩いて氣を換へるのも好からう。行つて來るがいゝ」

「えゝ」と云つて市藏はやゝ滿足らしい顏をしたが、「實は大きな聲で話すのも氣の毒で仕方ないんですが、叔父さんにあの話を聞いてから以後は、母の顏を見るたんびに、變な心持になつて堪らないんです」と附け足した。

「不愉快になるのか」と僕は寧ろ穩かに聞いた。

「いゝえ、只氣の毒なんです。始めは淋しくつて仕方がなかつたのが、段々段々氣の毒に變化して來たのです。實は此所丈の話しですけれども、近頃では母の顏を朝夕見るのが苦痛なんです。今度の旅行だつて、かねてから卒業したら母に京大阪と宮島を見物させて遣りたいと思つてゐたのだから、昔の僕なら供をする氣で留守を叔父さんにでも頼みに出掛けて來る所なんですが、今云つた樣な譯で、關係が丸で逆になつたもんだから、少しでも母の傍を離れたらといふ氣ばかりして」

「困るね、さう變になつちやあ」
「僕は離れたら又屹度母が戀しくなるだらうと思ふんですが、何うでせう。さう旨くは行かないもんでせうか」
市藏は左も懸念らしく斯ういふ問を掛けた。彼より經驗に富んだ年長者を以て自任する僕にも、此點に關する彼の未來は殆ど想像出來なかつた。僕はたゞ自分に信念がなくつて、わが心の事を他に尋ねて安心したいと願ふ彼の胸の裡を憐れに思つた。上部は如何にも優しさうに見えて、實際は極めて意地の強く出來上がつた彼が、こんな弱い音を出すのは、殆ど例のない事だつたからである。僕は僕の力の及ぶ限り彼の心に保證を與へた。
「そんな心配はする丈損だよ。おれが受け合つてやる。大丈夫だから遊んで來るが好い。御前の御母さんはおれの姉だ。しかもおれよりも學問をしない丈に、餘程純良に出來てゐる、誰からも敬愛されべき婦人だ。あの姉と君のやうな情愛のある子が何うして離れつ切りに離れられるものか。大丈夫だから安心するが好い」
市藏は僕の言葉を聞いて實際安心したらしく見えた。僕も稍安心した。けれども一方では、此位根のない慰藉の言葉が、明晰な頭腦を有つた市藏に、是程の影響を與へるとすれば、それは彼の神經が何處か調子を失つてゐる爲ではなからうかといふ疑ひも起つた。僕は突然極端の出來事を豫想して、一人身の旅行

[illegible]めた。

「おれも一所に行かうか」

「叔父さんと一所ぢや」と市蔵は苦笑した。

「不可ないかい」

「不可なら此方から誘つても行つて貰ひたいんだが、何しろ何時何処へ立つんだか分らない、云はば気の向き次第豫定の狂ふ旅行だから御気の毒でね。それに僕の方でも貴方がゐると束縛があつて面白くないから……」

「ぢや止さう」と僕はすぐ申し出を撤回した。

九

市蔵が帰つた後でも、しばらくは彼の事が妙に気に掛かつた。暗い秘密を彼の頭に判で押した以上、それから出る一切の責任に、当然僕が背負つて立たなければならない気がしたからである。僕は姉に会つて、彼女の様子を見もし、又市蔵の近況を聞きもしたくなつた。茶の間にゐた妻を呼んで、相談旁理由を話すと、例の物に動かない妻は、貴方があんまり余計な御饒舌をなさるからですよと云つて、始めは殆ど取り合はなかつたが、仕舞に、なんで市さんに間違ひがあるもんですか、市さんは年こそ若いが、貴方より

餘つ程分別のある人ですものと、獨りで受け合つてゐた。

「すると市藏の方で、却ておれの事を心配してゐる譯になるんだね」

「さうですとも、誰だつて貴方の懷手ばかりして、舶來のパイプを銜へてゐる所を見れば、心配になりますわ」

其内子供が學校から歸つて來て、家の中が急に賑やかになつたので、市藏の事はつい忘れた限り、夕方までとう〳〵思ひ出す暇がなかつた。其所へ姊が自分の方から突然尋ねて來た時は、僕も覺えず冷りとした。

姊は何時もの通り、家族の集まつてゐる眞中に坐つて、無沙汰の詫びやら、時候の挨拶やらを長々しく妻と交換してゐた。僕も其所に座を占めた儘動く機會を失つた。

「市藏が明日から旅行するつて云ふぢやありませんか」と僕は好い加減な時分に聞き出した。

「それに就いてね……」と姊は稍眞面目になつて僕の顏を見た。僕は姊の言葉を皆まで聞かずに、「なに行きたいなら行かして御遣んなさい。試驗で頭を散々使つた後だもの。少しは樂もさせないと身體の毒になるから」と恰も市藏の行動を辯護する樣に云つた。姊は固より同じ意見だと答へた。たゞ彼の健康狀態が旅行に堪へるか何うかを氣遣ふ丈だと告げた。最後に僕の見る所では大丈夫なのかと聞いた。僕は大丈夫だと答へた。妻も大丈夫だと答へた。姊は安心といふよりも、寧ろ物足りない顏をした。僕は姊の使ふ

なんだから、成るべく年寄に心配を掛けない様に、着いたら着いた所から、立つなら立つ所から、又逗留するなら逗留する所から、必ず音信を怠らない様にして、何時でも用が出來次第此方から呼び返す事の出來る注意をしたら好からうと云つた。市藏は其位の面倒なら僕に注意される迄もなく既に心得てゐると答へて、彼の母の顔を見ながら微笑した。

僕は是で幾分か姉の心を柔げ得たものと信じて十一時頃又電車で矢來へ歸つて來た。

僕を迎へに玄關に出た妻は、待ちかねたやうに、何うでしたと尋ねた。僕はまあ安心だらうよと答へた。實際僕は安心した樣な心持だつたのである。で、明くる日は新橋へ見送りにも行かなかつた。

十

約束の音信は到る所からあつた。勘定すると大抵日に一本位の割になつてゐる。其代り多くは旅先の繪端書に二三行の文句を書き込んだ簡略なものに過ぎなかつた。僕は其端書が着く度に、まづ安心したといふ顔附をして、妻からよく笑はれた。一度僕が此樣子なら大丈夫らしいね、何うも御前の豫言の方が適中したらしいと云つた時、妻は愛想もなく、當り前ですわ、三面記事や小説見たやうな事が、滅多にあつて堪るもんですかと答へた。僕の妻は小説と三面記事とを同じ物の如く見做す女であつた。さうして兩方とも嘘と信じて疑はない程浪漫斯に緣の遠い女であつた。

端書に滿足した僕は、彼の封筒入りの書翰に接し出した時更に眉を開いた。といふのは、僕の恐れを抱いてゐた彼の手が、陰鬱な色に巻紙を染めた痕迹が、其の何處にも見出だせなかつたからである。彼の状袋の中に巻き納めた文句が、彼の端書よりも如何に鮮やかに、彼の變化した氣分を示してゐるかは、實際それを讀んで見ないと分らない。此所に二三通取つてある。

彼の氣分を變化するに與つて效力のあつたものは京都の空氣だの宇治の水だの色々ある中に、上方地方の人の使ふ言葉が、東京に育つた彼に取つては最も興味の多い刺激になつたらしい。何處もあの邊を通過した經驗のあるものから云ふと馬鹿げてゐるか、市藏の當時の神經にはあゝ云ふ滑らかで靜かな調子が、鎭經劑以上に優しい影響を與へ得たのではなからうかと思ふ。なに若い女の？それは知らない。無論若い女の口から出れば猶耳に多いだらう。市藏も若い男の事だから、求めてさう云ふ所へ近附いたかも知れない。然し此所に書いてあるのは、不思議に御婆さんの例である。——

「僕は此地の人の言葉を聞くと微かな醉ひに身を任せた樣な氣分になります。ある人はべたついて厭だと云ひますが、僕は丸で反對です。厭なのは東京の言葉です。無暗に角度の多い金米糖のやうな調子を得意になつて出します。さうして聽手の心を粗暴にして威張ります。僕は昨日京都から大阪へ來ました。今日朝日新聞にゐる友人を尋ねたら、其友人が箕面といふ紅葉の名所へ案内して吳れました。時節が時節ですから、紅葉は無論見られませんでしたが、溪川があつて、山があつて、山の行き當りに瀧があつて、大

變好い所でした。友人は僕を休ませる爲に社の俱樂部とかいふ二階建の建物の中へ案内しました。其所へ這入つて見ると、幅の廣い長い土間が、竪に家の間口を貫いてゐました。さうして其が悉く敷瓦で敷き詰められてゐる模樣が、何だか支那の御寺へでも行つたやうな沈んだ心持を僕に與へました。此家は何でも誰かが始め別莊に拵へたのを、朝日新聞で買ひ取つて俱樂部用にしたのだとか聞きましたが、よし別莊にせよ、瓦を疊んで出來てゐる、此廣々とした土間は何の爲でせう。僕はあまり妙だから友人に尋ねて見ました。所が友人は知らんと云ひました。尤も是は何うでも構はない事です。たゞ叔父さんが斯う云ふ事に明らかだから、或は知つて御出でかも知れないと思つて、一寸蛇足に書き添へた丈です。僕の御報知したいのは實は此廣い土間ではなかつたのです。土間の上に下りてゐた御婆さんが問題だつたのです。御婆さんは二人ゐました。一人は立つて、一人は椅子に腰を掛けてゐました。但し兩方ともくり〳〵坊主です。其立つてゐる方が、僕等が這入るや否や、友人の顔を見て挨拶をしました。さうして『おや御免やす。今八十六の御婆さんの頭を剃つとる所だすよつて。――御婆さん凝として居なはれや、もう少しだけれ。――よう剃つたけれ毛は一本も有りやせんよつて、何も恐ろしい事ありやへん』と云ひました。椅子に腰を掛けた御婆さんは頭を撫でて『大きに』と禮を述べました。友人は僕を顧て野趣があると笑ひました。僕も笑ひました。唯笑つた丈ではありません。百年も昔の人に生れたやうな暢氣した心持がしました。僕は斯ういふ心持を御土産に東京へ持つて歸りたいと思ひます』

僕ら市藏が斯ういふ心持を、姉へ御土産として持つて來て呉れゝば可いがと思つた。

十一

次のは明石から來たもので、前に比べると多少陰鬱な丈に、市藏の性格をより鮮やかに現はしてゐる。

「今夜此所に來ました。月が出て庭は明らかですが、僕の部屋は陰になつて却て暗い心持がします。飯を食つて煙草を呑んで海の方を眺めてゐると、――海はつい庭先にあるのです。漣さへ打たない靜かな晩だから、河緣とも池の端とも片の附かない渚の景色なんですが、其所へ涼み船が一艘流れて來ました。其船の形好は夜でよく分らなかつたけれども、幅の廣い底の平たい、何うしても海に浮かぶものとは思へない穩やかな形を具へてゐました。屋根は確かあつた樣に覺えます。其軒から畫の具で染めた提灯が幾何もぶら下がつてゐました。薄い光の裏には無論人が坐つてゐる樣でした。三味線の音も聞こえました。けれど、[illegible]の[illegible]にも[illegible]聞いて、[illegible]る樣に樂しんで僕の前を流れて行きました。僕は靜かに其影を見送つて、御祖父さんの若い時分の話といふのを思ひ出しました。叔父さんは固より御存じでせう、御祖父さんが昔の通人のした月見の風流を實際に遣つた話を。僕は母から二三度聞かされた事があります。屋根船を綾瀬川迄漕ぎ上せて、靜かな月と靜かな波の映り合ふ眞中に立つて、用意してある銀扇を開いた儘、夜の光の遠くへ投げるのだと云ふぢやありませんか。扇の要がくるくる廻つて、地紙に塗つた銀泥をきらき

いさせながら水に落ちる景色は定めて美事だらうと思ひます。それも只の一本ならですが、衆のものが總掛りで、ひら／＼する光を投げ競ふ光景は想像しても凄艶です。御祖父さんは銅壺の中に酒を一杯入れて、其酒で徳利の燗をした後を悉く棄てさした位の豪奢な人だと云ふから、銀扇の百本位一度に水に流しても平氣なのでせう。さう云へば、遺傳だか何だか、叔父さんにも貧乏な割には、と云つては失禮ですが、何處かに贅澤な所がある樣ですし、あんな内氣な母にも、妙に陽氣な事の好きな方面が昔から見えてゐました。唯僕丈は、――斯ういふと又あの問題を持ち出したなと早合點なさるかも知れませんが、僕はもうあの事に就いて叔父さんの心配なさる程屈託して居ない積りですから安心して下さい。唯僕丈はと斷るのは決して苦い意味で云ふのではありません。僕は此點に於て、叔父さんとも母とも生れ附きが違つてゐると申したいのです。僕は比較的樂に育つた、物質的に幸福な子だから、贅澤と知らずに贅澤をして平氣で居ました。着物などでも、母の注意で、人前へ出て恥づかしくない位なものを身に着けたから、是が當然だと澄ましてゐました。けれども夫は永く習慣に養はれた結果、自分で知らない不明から出るので、一度其所に氣が附くと、急に不安になります。着物や食事はまあ何うでも可いとして、僕は此間ある富豪の無暗に金を使ふ樣子を聞いて恐ろしくなつた事があります。其男は藝者や幇間を大勢集めて、鞄の中から出した札の束を、其前でずた／＼に裂いて、それを御祝儀とか稱へて、みんなに遣るのださうです。だから立派な着物を着た儘湯に這入つて、あとは三助に呉れるのださうです。彼の亂行はまだ澤山ありましたが、何れ

も天を恐れない兇悍極まるもののみでした。僕は其話を聞いた時無論彼を悪みました。けれども氣の毒に感じ、僕は、憎むよりも寧ろ憐れみました。僕から彼の所行を見ると、強盗が白刃の拔身を疊に突き立てて良心を脅迫してゐるのと同じ樣な感じになるのです。僕は實に天とか、人道とか、若しくは神律とかに對して些も恥る所がないといふ、眞正に宗教的な意味に於て恐れたのです。僕は是程臆病な人間なのです。臆病者に追つかない先から、臆病者の絶頂に達して躍り狂ふ人の、一轉化の後を想像して、怖くて堪らないのであります。――僕は斯んな事を考へて、静かな流の上を流れて行く涼み船を見送りながら、此位な程度の慰みが人間として丁度手頃なんだらうと思ひました。僕も叔父さんから注意された樣に、段々浮氣になつて行きます。賞めて下さい。月の射す二階の客は、神戸から遊びに來たとかで、僕の厭な東京語ばかり使つて、頗る耳障りな言を遣ります。其中に艶かしい女の聲も交つてゐましたが、二三十分前から急に大人しくなりました。下女に聞いたらもう神戸へ歸つたのだらうです。夜も大分更けましたから、僕も休みます。

十二

一昨夜も手紙を書きましたが、今日も亦今朝以來の出來事を御報知します。斯う續けて叔父さんに計り手紙を上げたら、叔父さんは屹度皮肉な批評でもして、彼奴何處へも文を遣る所がないものだから、已むを得ず姉と己に對して丈、時間を費やして音信を怠らないんだと、腹の中で云ふでせう。僕も筆を執りな

から、一寸さういふ考へを起しました。然し僕にもしそんな愛人が出來たら、叔父さんはたとひ僕から手紙を貰はないでも、喜んで下さるでせう。僕も叔父さんに音信を怠つても、其方が幸福だと思ひます。僕は今朝起きて二階へ上がつて海を見下ろしてゐると、さういふ幸福な二人連れが、磯通ひに西の方へ行きました。是は事によると僕と同じ宿に泊つてゐる御客かも知れません。女がクリーム色の洋傘を翳して、素足に着物の裾を少し捲くりながら、淺い波の中を、男と並んで行く後姿を、僕は羨ましさうに眺めたのです。波は非常に澄んでゐるから高い所から見下ろすと、陸に近いあたり抔は、日の照る空氣の中と變りなく何でも透いて見えます。泳いでゐる海月さへ判切見えます。宿の客が二人出て來て泳ぎ廻つてゐますが、彼等の水中で遣る所作が、一擧一動悉く手に取る樣に見えるので、藝としての水泳の價値が、大分下落する樣です。（午前七時半）」

「今度は西洋人が一人水に浸かつてゐます。あとから若い女が出て來ました。其女が波の中に立つて、二階に殘つてゐるもう一人の西洋人を呼びます。「ユー、カム、ヒヤ」と云つた英語を使ひます。「イット、イズ、ヹリ、ナイス、イン、ウオーター」と云ふ樣な事を頻りに申します。其英語は中々達者で流暢で羨ましい位旨く出ます。僕は到底及ばないと思つて感心して聞いてゐました。けれども英語の達者な此女から呼ばれた西洋人は中々下りて來ませんでした。女は泳げないんだか、泳ぎたくないんだか、胸から下を水に浸けた儘波の中に立つてゐました。すると先へ下りた方の西洋人が女の手を牽つて、深い所へ連

でせう。然し是は旅行の御蔭で僕が改良した證據なのです。僕は自由な空氣と共に往來する事を始めて覺えたのです。こんな詰らない話を一々書く面倒を厭はなくなつたのも、つまりは考へずに觀るからではないでせうか。考へずに觀るのが、今の僕には一番藥だと思ひます。僅かの旅行で、僕の神經だか性癖だかが直つたと云つたら、直り方があまり安つぽくつて恥づかしい位です。が、僕は今より十層倍も安つぽく母が僕を生んで呉れた事を切望して已まないのです。明石が雲の如く霞んで淡路島の前を通ります。反對の側の松山の上に人丸の社があるさうです。人丸といふ人はよく知りませんが、閑があつたら降たから行つて見ようと思ひます」

結末

敬太郎の冒險は物語に始まつて物語に終つた。彼の知らうとする世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える。けれども彼は遂に其中に這入つて、何事も演じ得ない門外漢に似てゐた。彼の役割は絶えず受話器を耳にして「世間」を聽く一種の探訪に過ぎなかつた。

彼は森本の口を通して放浪生活の斷片を聞いた。けれども其斷片は輪廓と表面から成る極めて淺いものであつた。從つて罪のない面白味を、野性の好奇心に充ちた彼の頭に吹き込んだ丈である。けれども彼の細の中の斷面が、兒戲に類した冒險談で隱蔽した裏に、彼は人間としての森本の面影を、夢現の如く見る事を得た。さうして同じく人間としての彼に、知識以外の同情と反感を與へた。

彼は田口と云ふ實際家の口を通して、彼が社會を如何に眺めてゐるかを少し知つた。同時に高等遊民と自稱する松本といふ男から其人生觀の一部を聞かされた。彼は親しい社會的關係によつて繫がれてゐるながら、丸で毛色の異なつた此二人の對照を胸に据ゑて、幾分か己の世間的經驗が廣くなつた樣な心持がした。けれども其經驗は唯廣く面積の上に於て延びる丈で、深さは左程增したとも思へなかつた。

彼は千代子といふ女性の口を通して幼兒の死を聞いた。千代子によつて叙せられた「死」は、彼が世間

並に想像したものと違つて、美しい畫を見る樣な所に、彼の快感を惹いた。けれども其快感の中には涙が交つてゐた。苦痛を逃れるために已むを得ず流れるよりも、悲哀を出來る丈長く抱いてゐたい意味から出る涙が交つてゐた。彼は獨身ものであつた。小兒に對する同情は極めて乏しかつた。それでも美しいものが美しく死んで美しく葬られるのは憐れであつた。彼は雛祭の宵に生れた女の子の運命を、恰も御雛樣のそれの如く可憐に聞いた。

　彼は須永の口から一調子狂つた母子の關係を聞かされて驚いた。彼も國元に一人の母を有つ身であつた。けれども彼と彼の母との關係は、須永ほど親しくない代りに、須永ほどの因果に纏綿されてゐなかつた。彼は自分が子である以上、親子の間を解し得たものと信じて疑はなかつた。同時に親子の間は平凡なものと諦めてゐた。より込み入つた親子は、たとひ想像が出來るにしても、一向腹には應へなかつた。それが須永の爲に深く掘り下げられた樣な氣がした。

　彼は又須永から彼と千代子との間柄を聞いた。さうして彼等は必竟夫婦として作られたものか、朋友として存在すべきものか、もしくは敵として睨み合ふべきものかを疑つた。其疑ひの結果は、半分の好奇と半分の好意を驅つて彼を松本に走らしめた。彼は案外にも、松本をたゞ舶來のパイプを銜へて世の中を傍觀してゐる男でないと發見した。彼は松本が須永に對して何んな考へで何ういふ處置を取つたかを委しく聞いた。さうして松本のさういふ處置を取らなければならなくなつた事情を詳らかにした。

要するに、彼が學校を出て、始めて實際の世の中に接觸して見たいと志してから今日迄の經歷は、單に人の話を其所此所と聞き廻つて歩いた丈である。耳から知識なり感情なりを傳へられなかつた場合は、小川町の停留所で洋杖を大事さうに突いて、電車から下りる霜降りの外套を着た男が若い女と一所に洋食屋に這入ると後を跟けた位のものである。夫も今になつて記憶の臺に載せて眺めると、殆ど冒險とも探檢とも名の附けやうのない兒戲であつた。彼は夫がために位置に有り付く事は出來た。けれども人間の經驗としては滑稽の意味以外に通用しない、たゞ自分に丈眞面目な、行動に過ぎなかつた。

要するに人世に對して彼の有する最近の知識感情は悉く鼓膜の働きから來てゐる。森本に始まつて松本に終る幾席かの長話は、最初廣く薄く彼を動かしつゝ、漸々深く狹く彼を動かすに至つて突如として已んだ。けれども彼は遂に其中に這入れなかつたのである。其所が彼に物足らない所で、同時に彼の仕合せな所であつた。彼は物足らない意味で蛇の頭を呪ひ、仕合せな意味で蛇の頭を祝した。さうして、大きな空を仰いで、彼の前に突如として已んだ樣に見える此劇が、是から先何う永久に流轉して行くだらうかを考へた。

昭和三年十月一日印刷
昭和三年十月五日發行

漱石全集第七卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　漱石全集刊行會
東京市神田區南神保町十六番地

右代表者　岩波茂雄

印刷者　井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

（大東製本）大沼